東京帝國大學教授
文學博士 橋本進吉 述

改制新文典別記

文語篇

東京神田 冨山房

序言

上級用新文典の別記は、昭和十年はじめて刊行しましたが、一昨年教授要目が改定せられた結果、新に之に準據して改制新文典上級用を作りましたので、今回之に伴ふ別記を刊行しました。これは、前回の別記と同じく、新文典を教授せられる方々の參考に資する爲のものでありますが、他の方々で、閲讀を希望せられる向の爲に發售する事にしたのであります。

書名を「改制新文典別記文語篇」としたのは、初年級用改制新文典別記を口語篇と名づけたのに對するもので、既刊の上級用新文典別記と區別する爲であります。

この文語篇は、既刊の上級用別記に改訂を加へ、處々取扱をかへた所がありますが、唯それぱかりでなく、全體の組織内容に於て、之と違つた所があります。さうして、また既刊の別記にはこの文語篇に於て說き及ばなかつた方面に關する事項をも含んでをります。

新文典は教科書でありますから、現在の通説とあまり離れた説を立てる事を慎み、あまり必要でないと思はれるものも、世に行はれてゐるものは之を載せました。本書はその解説ですから、必ずしも全部私の主張する説ではなく、通説に妥協した所も少くありません。この事は特に御諒解を得たいと思ひます。

昭和十四年七月

橋本進吉

改制新文典別記（文語篇）凡例

一、この別記は昭和十三年刊行の「改制新文典（上級用）」を教授せられる方々の參考に供する爲、之を逐條解說し、且つ教授上注意すべき事項を擧げたものであります。

一、上級用「改制新文典」は、昭和十二年刊行の初年級用「改制新文典」に續くべきものとして編纂したもので、初年級用に於ては專ら口語の文法を說いたに對して、上級用では主として文語文法について說いたものですが、どちらも同じ組織によつた爲、初年級用に於けると同樣な事項や說明が、上級用にもあらはれてゐるものが甚だ多いのであります。それ故、この上級用の別記に於ける解說も、初年級用別記と同樣な部分が少くありません。のみならず、口語文法と對照する爲、態々口語法に關する說明を加へた所もあります。これ等は多くは初年級用の別記に讓つて省いてもよいのでありますが、この別記は、必ずしも初年級用別記を俟たず、それだけで役立つものとする爲にさうしたのであります。

一、新文典は、文法上の名目や分類など、大概、普通の文法教科書にあるものを用ひました

が、その取扱や考へ方は、從來のものと趣を異にした所があります。別記では、かやうな點に特に注意して說明しました。

一、この別記には、新文典の章節をそのまゝ用ひ、節には新に題目を設けましたが、同じ節の說明が多岐に亙る場合には、その中にまた節を分つて題目をつけました。さうして、これ等の節をも通じて、別記全體の節の番號を欄上にアラビヤ數字で標出して、前後參照の便に供しました。

一、この別記中に本書といふのは改制新文典の事です。別記をさす時は、この別記といひます。【 】の中にある數字は改制新文典の節をさし、1節25節などあるのは、別記の節をさしたものです。

改制新文典（上級用）編纂の趣旨及び方針

この書は昨年刊行した「改制新文典」（初年級用）に引續いて中學校第三學年用の國文法教科書として編したものであります。私は、現時の如き國語教育の實際と一般社會の實情に於て、最效果を擧げ得べき文法教科書の編纂を企て、その組織内容について種々考慮した結果、昭和六年はじめて「新文典」（初年級用）を刊行し、續いてその上級用をも印行しましたが、昨年、中學校教授要目が改正せられましたので、まづ初年級用を改編して「改制新文典」を公にしましたが、今年にいたつて、やうやく上級用の改編を終へて世に送る事となりました。

私は、前から、中等學校に於ける國文法は、口語文法からはじめて文語文法に進むのが正當な順序であり、又品詞論と文章論とは互に聯關したもので、全然はなしてしまふ事は出來ないものであつて、品詞の知識を徹底させるにも文章論に關する或程度の知識が必要であると考へてをりましたので、以前の新文典に於ても、教授要目の許す範圍内で右の方針を實現する事をつとめました。しかるに昨年の要目改正によつて、これ等の點について十分私の考

へる所を實行する事が出來るやうになりましたので、初年級用改制新文典に於ては、專ら口語文法を授ける事として、品詞法の大要と文章法の重要な部分とを說きましたが、この上級用「改制新文典」に於ては、口語文法の知識を基礎として、幾分之を委しくすると共に、主として文語の文法を授けて、國語の文法組織の大要を會得せしめるやうにしたのであります。隨つて、編纂の根本方針及び大體の組織は初年級用と同じでありますが、本書に於て特に注意したのは、左の諸點であります。

一　本書は初年級用と同一の組織により、主として文語について、品詞及び文章法の全體にわたつて國文法の大體を授ける事にしました。但し既習の口語文法の知識を整理し、且つ之を補ふにも意を用ひました。

一　第一篇に於ては、口語文語を通じて品詞論の根本たるべき事項を擧げ、各品詞について概說し、以て、口語文法で學んだ所を復習し整理すると共に、之と同じ原則によつて文語文法に進むべき緒を開きました。

一　第二篇に於ては、各品詞について補說し、口語文法の知識を土臺として文語文法に進むやうにしまし

たが、文語文法が口語文法と異なる點を主として述べました。

一　第三篇では、文語に於ける品詞の轉成を說いて品詞の知識を確實にし、又品詞の構造について述べて單語と單語以外のものとの別を知らしめるやうにしました。

一　第四篇では、文語に於ける文の成分と成分の位置及び省略について述べましたが、文の成分については、いかなる語が用ひられるかを、口語との相違に注意しつつ明かにしました。

一　第五篇では、文の構造と文の種類について述べました。この部分は、初年級用新文典に於て、口語について說き及ぶ暇がありませんでしたので、ここに口語文語を併せて概要を說きました。さうして從屬節の種類については、文の成分と同樣に、主語節、述語節、修飾節、獨立節の四種に分つて、理解し易いやうにしました。

一　本書は現代文語の文法を主としましたが、國語讀本にとられてゐるやうな古代語の文法も、重なものは之を加へて、解釋の場合に用立つやうにしました。

一　本書は國文法について出來るだけ明瞭な知識と徹底した理解を得させる事を目的とし、文法の根本たるべき事項について明確な觀念を與へて、之に基づいて學生自ら觀察し判斷する事が出來るやう心を用ひました。それ故、說明があまり簡單過ぎて明瞭を缺く事をおそれ、幾分說明を丁寧にし、又必要に應じて繰返すことを厭ひませんでした。その爲に、分量が多くなりましたが、分量の割合に多くの時間を要する事はなからうと思ひます。その上、この書の大半は、初年級用に於て口語に就いて述べたと略同樣のことですから、猶更のことです。しかし、時間の足りない場合をも顧慮して、文字の大小によつて輕重を區別し、便宜取捨する事が出來るやうにしました。猶、本書の中で第二篇と第四篇とは最大切な部分ですから、これを先にし、第三篇第五篇を後にして、萬一時間の不足した場合に備へるのも一法であらうと思ひます。第一篇は大部分は既習の事項ですから、學生の力に應じて便宜斟酌出來る事と思ひます。

要するに、我々の言語意識に基づいて、出來るだけ明瞭で徹底した文法の知識を與へたいといふのが、この書を編した目的であります。

しかしながら、本書がよく所期の目的を達する爲には、實際教授にあたられる方々が十分に本書の趣意を理解せられ、之を實地に施されるやうにしなければなりません。それ故、私は、本書の別記を作つて、本書を逐條解說し、私の趣旨のある所を說明する事にしました

が、なほ、御助言を得て、追々改善して行きたいと念じてをります。

昭和十三年十二月

橋本進吉

改制 新文典（上級用）使用上の注意

一、本書は全體の組織上、同じ事が後にまた繰返してある事があります。又初年級用に於て口語について述べたと同じやうな事が度々あらはれます。これ等は何れも大切な事ですから、循環的に進んで行つて、よくのみこませるやうにしたのでありますが、學生の理解の程度に應じて適當に取扱はれるやう希望します。

一、巻末の附表はよく利用される事を希望します。殊に、各種の動詞のあらゆる行の活用語尾や例語は、附表にしかありませんから、附表を參照し、又助詞や助動詞の接續の説明にも動詞・形容詞の活用表を參照するといふやうに。

一、本書に擧げた例の中、（　）の中に平假名のあるものは、その上の語の代りに（　）内の語を用ひてもよい事を示します。例へば「らむ（らん）」は、「らむ」又は「らん」の意味です。但し（　）内の語を加へてもよい事を示す場合もあります。例へば「靜かなら（ば）」は、「靜かなら」又は「靜かならば」の意味です。又（　）の上の語が無い場合には、その形は現代には普通に用ひられない事を意味します。（　）の中に片假名のあるのは、上の語に（　）内の語が接續する事を示します。「暑から（ム）」「暑かり（キ）」など。

一、本書は出來るだけ普通に行はれてゐる說に據るやうにしましたが、種々の說があつて、人によつて取扱のまち〳〵である點については、まだあまり廣く用ひられない說でも、說明上便宜と認めて之に據つたものや又新しい名目を用ひた所が一二あります。

それは左の諸點であります。

一、數詞を一品詞とせず名詞の中に收めた事

二、形容動詞を特別の形容詞と見た事

三、口語第二種の形容動詞「靜かだ」「靜かな」の類の活用語尾の「だ」系統のものと「な」系統のものとを二つにわけず、一つの活用として「だら」「だつ」「だ」「な」「なら」と活用するものと見た事

四、「今日」「昨日」「一つ」「三本」等の名詞が副詞的に用ひられたものを副詞とせず、名詞の副詞的用法とした事

五、形容詞の連用形が副詞的に用ひられたものを副詞とせず、形容詞連用形の副詞的用法と見た事

六、時の助動詞といふ名を廢して、過去及び完了の助動詞の名を存し、未來の助動詞は之を推量に併せた事

七、口語「やうだ」「やうです」「さうだ」「さうです」及び文語の動詞に附けて用ひる「給ふ」「奉る」「參らす」「候」「侍り」などを助動詞とせず、之に準ずるものとした事

八、口語「である」「てゐる」「てある」などを助動詞と認めず、助詞と動詞との合したものとした事

九、助動詞を用言とせず、他の語に助動詞の附いたものを、すべて活用連語とした事

十、口語「行つたり來たり」の「たり」、「あれなりこれなり」の「なり」を助動詞と見ず、助詞とした事

十一、文の成分として、主語・述語・修飾語以外のものは、すべて獨立語とした事

十二、修飾語の種類としては、形容詞的修飾語、副詞的修飾語のかはりに、連體修飾語・連用修飾語の名を用ひ、所謂客語及び補語と副詞的修飾語との區別を廢して、これ等をすべて連用修飾語とした事

十三、從屬節は主語節・述語節・修飾節・獨立節として、文の成分の種類と一致せしめた事

一、本書は授業時間數に對して、幾分分量が多過ぎる觀がないでもありません。それは、前述の如く、同じ事を繰返した處があるのと、說明を幾分丁寧にした爲でありますから、分量の割合に進行の速度は早からうと思ひます。しかし、時間の都合上止むを得ない場合には、小字で印刷した部分を簡略にし或は全く省くがよろしからうと思ひます。又、第三篇は後にして、時間があつたら授ける事にするのも便宜な方法でせう。

改制

新文典別記（文語篇）

目次

第一篇　品詞總說……一

〔本篇の要旨〕……一

第一章　總說……二

〔本章の目的〕（一）――**【一】**〔口語と文語〕（二）――〔言語と文章〕（四）――〔口語と方言〕（五）――**【二】**〔口語の文法と文語の文法〕（六）――〔文法の概念〕（六）――〔法則といふこと〕（八）――〔口語と文語との差異〕（九）――**【三】**〔文・語（單語）〕（一〇）――〔文の定義〕（一〇）――〔文と語（單語）〕（一一）――〔單語の概念〕（一二）――**【四】**〔連語〕（一七）――**【五】**〔獨立する語と附屬する語〕（一八）――**【六】**〔活用語〕（一九）――〔活用〕（二〇）――〔語幹と語尾〕（二一）――**【七】**〔主語と述語〕（二二）――**【八】**〔修飾語〕（二四）

第二章　品詞概說（一）……二五

〔本章の目的〕（二五）——**【九】**〔品詞の分類　九品詞〕（二六）——〔品詞の數〕（二六）——〔品詞分類の標準〕（二七）——〔品詞の分類法〕（二九）——**【一〇】**〔名詞〕（三一）——〔名詞の種類〕（三一）——〔數詞〕（三三）——〔順序數詞〕（三三）——〔不定疑問の數詞〕（三三）——**【一一】**〔代名詞〕（三四）——**【一二】**〔體言〕（三五）——**【一三】**〔動詞〕（三六）——**【一四】**〔形容詞〕（三七）——〔動詞と形容詞との別〕（三七）——**【一五】**〔形容動詞〕（三八）——**【一六】**〔用言〕（三九）

第三章　品詞概說（二）……四〇

【一七】〔副詞〕（四〇）——**【一八】**〔接續詞〕（四一）——**【一九】**〔感動詞〕（四三）——**【二〇】**〔助動詞〕（四五）——**【二一】**〔助詞〕（四七）——**【二二】**〔品詞と活用の有無〕（四八）——**【二三】**〔品詞と附屬する語・獨立する語〕（四八）——〔品詞と口語・文語の相違〕（四九）——〔品詞の判別について〕（四九）

第二篇　文語の品詞……五一

〔本篇の要旨〕(五一)——〔口語文法と文語文法との異同〕(五一)

第四章　文語の名詞・代名詞……五三

【二四】〔名詞・代名詞の文法上の性質〕(五三)——【二五】〔時や數を表はす名詞〕(五三)——【二六】〔人代名詞と指示代名詞〕(五四)——【二七】〔文語の代名詞〕(五五)——〔人代名詞の種類〕(五五)——〔一音節の人代名詞〕(五六)——〔指示代名詞の種類〕(五六)——〔一音節の指示代名詞〕(五七)——〔反照代名詞〕(五七)

第五章　文語動詞の活用（一）……五八

【二八】〔口語と文語との用言〕(五九)——【二九】〔文語動詞の活用形〕(五九)

第六章　文語動詞の活用（二）……六三

【三〇】〔文語動詞の種類〕(六三)——【三一】〔四段活用〕(六四)——〔四段活用の動詞の例〕(六五)——【三二】〔ナ行變格活用〕(六六)——【三三】〔ラ行變格活用〕(六六)——【三四】〔下一段活用〕(六七)

第七章　文語動詞の活用（三）……六八
【三五】〔上一段活用〕（六八）——【三六】〔上二段活用〕（六九）——〔上二段活用の動詞の例〕（七〇）——【三七】〔下二段活用〕（七一）——〔下二段活用の動詞の例〕（七一）
第八章　文語動詞の活用（四）……七三
【三八】〔カ行變格活用〕（七三）——【三九】〔サ行變格活用〕（七三）——【四〇】〔口語動詞と文語動詞との異同〕（七四）——〔文語動詞の活用の種類の見わけ方〕（七五）
第九章　文語形容詞と形容動詞の活用……七八
【四一】〔文語形容詞の活用形〕（七八）——【四二】〔文語形容詞の活用〕（七九）——〔ク活用〕（七九）——【四三】〔シク活用〕（八〇）——〔シク活用形容詞の語幹〕（八二）——【四四】〔文語形容動詞の種類〕（八三）——〔第一種の形容動詞〕（八四）——〔第二種の形容動詞〕（八四）——〔第三種の形容動詞〕（八四）——〔活用から見た文語の動詞・形容詞及び形容動詞の區別〕（八六）

第十章　文語用言の音便形……八七
【四五】〔文語動詞の音便形〕（八七）——【四六】〔文語形容詞の音便形〕（八八）——〔音便形と假名遣〕（八九）
第十一章　文語の副詞・接續詞・感動詞……九〇
【四七】〔口語・文語の副詞・接續詞・感動詞〕（九〇）——【四八】〔程度を表はす副詞〕（九〇）——【四九】〔一定の言ひ方を要求する副詞〕（九一）——〔修飾の種類から見た副詞の種類〕（九三）——〔語を隔てて修飾する副詞〕（九四）——【五〇】〔文語の接續詞〕（九四）——〔職能から見た接續詞の種類〕（九五）——〔他品詞と紛れ易い接續詞〕（九五）——【五一】〔文語の感動詞〕（九七）——〔感動詞と助詞〕（九八）
第十二章　文語助動詞の種類と活用（一）……九九
〔文語の助動詞と口語の助動詞〕（九九）——【五二】〔文語助動詞の種類〕（一〇〇）——【五三】〔文語助動詞の活用〕（一〇〇）——〔文語助動詞の活用形の見出し方〕（一〇三）——【五四】〔受身の「る」「らる」〕（一〇五）——〔受身の「る」「らる」の活用例〕（一

〇五)——〔「る」「らる」の接續〕(一〇六)——**【五五】**〔可能の「る」「らる」〕(一〇七)——〔可能の「る」「らる」の活用例〕(一〇七)——〔自發の「る」「らる」〕(一〇七)——〔可能のいひ方〕(一〇八)——**【五六】**〔使役の助動詞「す」「さす」「しむ」〕(一〇九)——〔「す」「さす」の活用例〕(一〇九)——〔「しむ」の活用例〕(一一〇)——**【五七】**〔打消の助動詞「ず」「ざり」〕(一一〇)——〔「ず」「ざり」の接續〕(一一一)——〔「ず」の活用例〕(一一一)——〔「ざり」の活用例〕(一一二)

第十三章　文語助動詞の種類と活用（二）……一一三

【五八】〔過去及び完了の助動詞「き」「けり」(以上過去)「ぬ」「つ」「たり」「り」(以上完了)〕(一一三)——〔過去の「き」「けり」〕(一一四)——〔咏歎の「けり」〕(一一四)——〔「き」「けり」の接續〕(一一五)——〔「き」の活用例〕(一一五)——〔「けり」の活用例〕(一一六)——〔完了の「ぬ」「つ」〕(一一六)——〔「つ」の連用形と助詞の「て」〕(一一七)——〔「ぬ」とナ變動詞〕(一一七)——〔「ぬ」の活用例〕(一一七)——〔「つ」の活用例〕(一一八)——〔完了の「たり」「り」〕(一一八)——〔「り」の接續〕(一二〇)——〔「たり」の活用例〕(一二〇)——〔「り」の活用例〕(一二二)——**【五九】**〔推量の「らし」「む(ん)」「むず(んず)」「らむ(らん)」「けむ(けん)」「べし」「まじ」「じ」「まし」「めり」〕(一二

ニ)――〔推量の助動詞の接續〕(一二二)――〔「らし」〕(一二二)……〔「む(ん)」〕(一二三)――〔「む」の活用〕(一二四)――〔「む」の活用例〕(一二四)――〔「むず(んず)」〕(一二五)――〔むず(んず)」の活用例〕(一二五)――〔「らむ(らん)」「けむ(けん)」〕(一二六)――〔「らむ」の活用例〕(一二六)――〔「けむ」の活用例〕(一二七)――〔「べし」「まじ」〕(一二七)――〔「べし」の活用例〕(一二九)――〔「まじ」の活用例〕(一三〇)――〔「べかり」「まじかり」〕(一三〇)――〔「べかり」「まじかり」の活用例〕(一三〇)――〔「じ」〕(一三一)――〔「まし」「めり」〕(一三二)――〔「めり」の活用例〕(一三三)――〔「まし」の活用例〕(一三三)――【六〇】〔希望の「たし」「まほし」〕(一三三)――〔「たかり」「まほしかり」〕(一三四)――〔「たし」「まほし」の活用例〕(一三四)

第十四章　文語助動詞の種類と活用(三)……一三五

【六一】〔敬譲の「る」「らる」「す」「さす」「しむ」〕(一三五)――〔敬譲の「る」「らる」〕(一三五)――〔敬譲の「る」「らる」の接續〕(一三六)――〔敬譲の「す」「さす」「しむ」の活用例〕(一三六)――【六二】〔敬譲の「給ふ」「奉る」「参らす」「候ふ」「侍り」〕(一三七)――【六三】〔指定の「なり」「たり」〕(一三八)――〔「なり」〕(一三九)――〔咏歎の「なり」〕(一四〇)――〔「なり」の活用例〕(一四一)――〔「たり」〕(一四一)――〔「たり」の

活用例〕(一四二)——〔指定の「なり」「たり」と第二種・第三種形容動詞の語尾〕(一四二)——**【六四】**〔比況の「ごとし」〕(一四三)——〔「ごとし」の活用形〕(一四四)——〔「ごとし」の接続〕(一四五)——〔「ごとし」の活用例〕(一四五)——〔指定・比況の助動詞の特性〕(一四六)

第十五章　文語の助詞（一）……一四七

〔本章及び次章の趣旨〕(一四七)——**【六五】**〔文語の助詞〕(一四八)——**【六六】**〔第一種の助詞〕(一四八)——〔が〕(一四九)——〔の〕(一四九)——〔に〕(一五〇)——〔へ〕(一五〇)——〔と〕(一五〇)——〔「とは」「とて」〕(一五二)——〔より〕(一五三)——〔にて〕(一五三)——**【六七】**〔第一種の助詞と同様に用ひられる連語〕(一五四)——**【六八】**〔第二種の助詞〕(一五六)——〔ば〕(一五六)——〔とも〕(一六〇)——〔ど・ども〕(一六〇)——〔が・に・を〕(一六四)——〔て〕(一六四)——〔副詞に附く「て」及び「とて」〕(一六五)——〔「して」〕(一六六)——〔で〕(一六六)——〔つゝ〕(一六六)——〔「ものを」「ものから」「ものゆゑ」〕(一六七)——〔第二種の助詞と同様に用ひられる連語〕(一六八)

第十六章　文語の助詞（二）……一六八

【六九】〔第三種の助詞〕（一六八）——〔ぞ・なむ（なん）・か・や〕（一六九）——〔こそ〕（一七〇）——〔係結の法則〕（一七〇）——〔だに・すら〕（一七一）——〔さへ〕（一七一）——〔し〕（一七一）——〔のみ〕（一七二）——〔な・な……そ〕（一七二）——〔ばや〕（一七三）——〔なむ（なん）〕（一七四）——〔がな〕（一七四）——〔かな〕（一七五）——〔かし〕（一七五）——〔や・な〕（一七五）——〔同形の助詞で種々の種類に屬するもの〕（一七六）——〔紛れ易い語〕（一七六）

第三篇　品詞の轉成と語の構造……一八一

〔本篇の要旨〕（一八一）

第十七章　品詞の轉成……一八二

〔本章の目的〕（一八二）——〔品詞の轉成に於ける文語と口語との差〕（一八二）——**【七〇】**〔品詞の轉成〕（一八二）——〔轉成したものと、しないものとの區別〕（一八四）——〔轉成した語〕（一八五）——〔（一）名詞になつたもの〕（一八六）——〔（二）代名詞になつたもの〕（一八九）——〔（三）動詞になつたもの〕（一八九）——〔（四）形容詞になつたもの〕（一九〇）——〔（五）副詞になつたもの〕（一九二）——〔（六）接續詞になつたもの〕（一

九二)——〔(七)感動詞になつたもの〕(一九四)

第十八章　複合語……一九五

〔本章の目的〕(一九五)——**【七一】**〔複合語の性質〕(一九六)——〔一、名詞〕(一九八)——〔二、代名詞〕(二〇〇)——〔三、動詞〕(二〇一)——〔四、形容詞〕(二〇三)——〔五、副詞〕(二〇三)——〔補充例〕(二〇三)——〔六、接續詞〕(二〇四)——〔補充例〕(二〇四)——〔疊語〕(二〇五)——**【七二】**〔複合語に於ける音の轉化〕(二〇五)

第十九章　接頭語・接尾語……二〇七

〔本章の目的〕(二〇七)——**【七三】**〔接頭語〕(二〇七)——**【七四】**〔接尾語〕(二〇八)**【七五】**〔接辭〕(二〇九)——**【七六】**〔接頭語と品詞〕(二〇九)——〔接頭語の主なもの〕(二〇九)——〔接頭語の附いた名詞〕(二一〇)——〔接頭語の附いた動詞〕(二一一)——〔接頭語の附いた形容詞〕(二一二)——**【七七】**〔接尾語と品詞〕(二一三)——〔接尾語の主なもの〕(二一四)——〔一、名詞又は代名詞を作るもの〕(二一四)——〔二、動詞を作るもの〕(二一七)——〔三、形容詞を作るもの〕(二一七)——〔四、副詞を作るもの〕(二一八)——〔語の構造と接頭語及び接尾語〕(二一九)——〔接頭語・接尾語と助詞・助動

詞〕（二二一）――〔複合語・合成語・熟語・疊語〕（二二二）

第四篇　文の成分……二二三

〔本篇の目的〕（二二三）――〔教授上の注意〕（二二四）

第二十章　文と文の成分……二二四

〔本章の目的〕（二二四）――**【七八】**〔文の概念〕（二二四）――〔連語〕（二二六）――〔連語の種類、活用連語〕（二二七）――**【七九】**〔文の成分〕（二二七）――〔文の成分と獨立する語・附屬する語〕（二三〇）――**【八〇】**〔文の成分の種類〕（二三一）

第二十一章　主語と述語……二三一

〔本章の目的〕（二三一）――**【八一】**〔主語・述語〕（二三一）――〔主語・述語と附屬する語〕（二三四）――〔何が何であるか〕の文の述語〕（二三五）――**【八二】**〔主語になる語〕（二三六）――〔（甲）體言〕（二三六）――〔（乙）用言又は活用連語の連體形〕（二三七）――〔（丙）對等の體言の重なつたもの〕（二三七）――**【八三】**〔述語になる語〕（二三九）――〔（甲）用言〕（二三九）――〔（乙）體言〕（二四〇）――〔（丙）種々の語に動詞・形容詞の

附いた連語」(二四一)——【八四】「同じ主語に對する述語が重なつたもの」(二四五)——「別の取扱方」(二四六)——「總括」(二四九)

第二十二章　修飾語……二五〇

「本章の目的」(二五〇)——【八五】「修飾語」(二五〇)——【八六】「修飾語の二種」(二五四)——「補語」(二五五)——「客語・補語と修飾語」(二五六)——【八七】「連體修飾語になる語」(二五九)——「(甲)體言その他の話に助詞「の」「が」の附いたもの」(二五九)——「(乙)用言又は活用連語の連體形」(二六三)——「(丙)對等の體言又は用言が重なつたもの」(二六四)——【八八】「連用修飾語になる語」(二六五)——「(甲)副詞」(二六五)——「(乙)形容詞の連用形」(二六五)——「(丙)體言」(二六七)——「(丁)用言又は活用連語」(二六九)——「(戊)對等の體言の重なつたもの」(二七〇)——【八九】「同じ語に二つ以上の修飾語の附く場合」(二七一)——【九〇】「修飾語に他の修飾語の附く場合」(二七三)——【九一】「修飾語が他の語と共に一の成分となるもの」(二七四)——「總括」(二八〇)

第二十三章　獨立語……二八〇

「本章の目的」(二八〇)——【九二】「獨立語の性質」(二八一)——【九三】「獨立語の種

類〕（二八二）——**【九四】**〔獨立語になるもの〕（二八二）——〔（甲）感動詞〕（二八二）——〔（乙）體言〕（二八三）——〔（丙）接續詞〕（二八五）——〔（丁）體言が重なつたもの〕（二八七）——**【九五】**〔修飾語の附いた獨立語〕（二八九）

第二十四章　文の成分の位置と省略……二九〇

〔本章の目的〕（二九〇）——**【九六】**〔文中の成分の順序〕（二九一）——〔主語・述語の位置〕（二九一）——〔修飾語と修飾せられる語との位置〕（二九二）——〔二つ以上の修飾語〕（二九二）——〔獨立語〕（二九四）——**【九七】**〔成分の倒置〕（二九五）——**【九八】**〔成分の省略〕（二九六）

第五篇　文の構造と文の種類……二九八

〔本篇の目的〕（二九八）

第二十五章　文の構造と節……二九九

〔本章の目的〕（二九九）——**【九九】**〔文の成分の種類〕（三〇〇）——〔主語と述語〕（三〇〇）——〔獨立語〕（三〇二）——〔修飾語〕（三〇二）——〔文の構成〕（三〇三）——**【一〇**

〇】〔主部・述部・獨立部〕（三〇四）——【一〇一】〔主語・述語を省略した文〕（三〇七）——【一〇二】〔節〕（三〇九）——〔節の定義〕（三〇九）——〔節の構成〕（三一〇）——【一〇三】〔主語節〕（三一一）——【一〇四】〔述語節〕（三一二）——【一〇五】〔連體修飾節〕（三一六）——【一〇六】〔連用修飾節〕（三一七）——【一〇七】〔獨立節〕（三二〇）——【一〇八】〔從屬節〕（三二一）——〔從屬節の種類に就いて〕（三二二）——【一〇九】〔對立節〕（三二四）——〔對立節の種類〕（三二五）——【一一〇】〔對立節の形〕（三二七）——〔總括〕（三三一）

第二十六章　文の種類……三三二

〔本章の目的〕（三三二）——【一一一】〔文の構造上の分類〕（三三三）——【一一二】〔單文〕（三三三）——〔單文に於ける主語と述語〕（三三三）——【一一三】〔複文〕（三三六）——【一一四】〔重文〕（三三八）——〔構造上から見た文の種類〕（三三八）——【一一五】〔文の性質上の分類〕（三四〇）——【一一六】〔平敍文〕（三四一）——【一一七】〔疑問文〕（三四一）——【一一八】〔命令文〕（三四三）——【一一九】〔感動文〕（三四五）——【一二〇】〔係結の法則〕（三四六）——〔餘論〕（三五〇）

附錄

文法上許容スベキ事項

附表

第一表　動詞活用表
第二表　形容詞活用表
　　形容動詞活用表
第三表　助動詞活用表
第四表　口語助動詞接續表
　　文語助動詞接續表
第五表　口語助詞接續表
　　文語助詞接續表

改制

新文典別記（文語篇）

橋本進吉述

第一篇　品詞總說

〔本篇の要旨〕

この篇では、文法學習の基礎になる事柄を述べました。その大部分は、初年級用の教科書で、口語について述べた事ですが、本書では更に文語の例をも擧げて、文語の文法もその原則に於ては口語の文法と同樣に說明出來る事を知らしめるやうにしました。ですから、實際教授に當つては、生徒が口語について既に學んだ事を、こゝに復習して記憶を喚び起し、それを文語にあてはめて考へる、といふ風に指導されたら宜しからうと思ひます。かやうにして、一方口語文法の復習をなし、既知の知識を整理するにも役立つことゝなります。

尤も、それは本篇に限つた事ではなく、本書全體に亘つて、初年級用の教科書と重複する事が少くありません。さういふ所は、すべて右のやうな取扱をすれば、口語と文語との異同も、はつ

きりさせる事が出來ようと思ひます。

本書の內容が右の通りですから、この別記も、初年級用の別記に述べてある事を、そのまゝ繰返したところもあり、その必要を認めないで全然省いたところもあり、又多少字句を變へて載せたところもあります。文語獨特の事項は勿論特に注意して說明してあります。

第一章　總　說

〔本章の目的〕

本章では、先づ口語・文語の別を說き、次に文・語・連語の概念を明かにして、文法學習の準備を整へさせ、〔五〕以下では、語をいろ〳〵な方面から見て、その性質を知らしめ、以て品詞分類の基礎知識を得させるやうにしました。

【一】口語と文語

國語卽ち日本語を委しく分ければ、次のやうになります。

（一）談話に用ひる言語、卽ち口に言ひ耳に聞く言語

（二）筆錄に用ひる言語、卽ち讀み書きする言語

(a)　現代の談話に用ひる言語に基づくもの

(b) 筆錄に用ひるものとして、以前から傳はつて來た特別の言語によるもの

（一）は「くちことば」「口頭語」などと名づける人がありますが、口語といつて差支なからうと思ひます。（二）は「もじことば」「記載語」などといふ人もありますが、文語といつて差支なからうと思ひます。さすれば、口語は音聲と意味とから成立つてゐるもの、文語は音聲と意味と文字とから成立つてゐるものです。（二）の中の(a)は所謂口語文であり、(b)は文語文であります。（二）を文語とすれば、口語文も文語文も共に文字に書くものでありますから、どちらも文語に屬します。ところが、世間では、文語文が文語であることは疑ふものはありませんが、口語文を文語といふには躊躇する人が少からぬことと思ひます。しかし、口語文は、文字に書くものである點から文語（上述の如き意味での）としなければならないのみならず、實際談話に用ひる口語と口語文とは、精密にいへば必ずしも同一ではなく、口語文には書いても、實際談話には用ひないやうないひ方やことばも少くありません。それ故、口語文は文語の一種と見るべきであります。とはいふものの、口語と口語文とは、文字に書く書かぬの點を別にすれば、言語として大部分一致したもので、その文法も、大抵は同一であり、之に對して、文語文は、言語としてよほど違つた點があり、文法も差異が多いのですから、口語と口語文とを一つにして、文語文に對照せしめるのが便利です。そこで、この書では便宜上、

口語＝＝口語と口語文

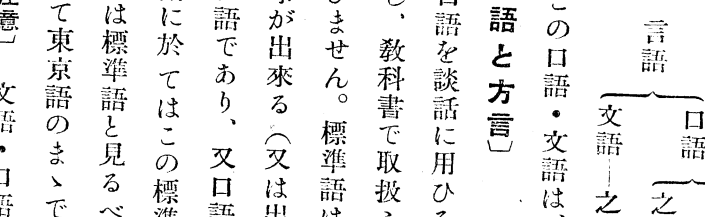
文語＝＝文語と文

と見做しました。さうして口語を「談話に用ひる言語」と說明しましたが、これは嚴格にいへば、純粹の口語だけの說明で、口語文を含みませんが、口語文は元來口語に基づいたものですから、口語を以て代表させておいても大した差支を生じませんし、あまり正確に口語文をも含ませるやうにしようとすると、說明が煩雜になる虞がありますから、わざと口語文には觸れなかつたのです。しかし、文語は「文字で書く時に用ひる特別の言語」と說明して、口語とは違つた特別の言語を用ひる文語文を、口語文から區別する事が出來るやうにしておきました。

〔言語と文章〕

世間には、言語と文章とを對照せしめて、思想を音聲によつて表はしたものを言語といひ、言語を文字に表はしたものを文章といふといふやうに考へるものもあります。さすれば、文章は、私のいふ文語（卽ち上述の(二)）にあたり、その中に口語文と文語文とを含むわけですが、果して口語文をも文章と考へるかどうかはわかりません。のみならず、文章といふ名は、文法上にいふ「文」の意味に用ひる人もありますから、この書にはこの名目を避けました。しかし、右の言語と文章との定義をそのまゝ適用し、且つ口語・文語を言語の別と考へるならば、恐らく次の如く

なりませう。



この口語・文語は、本書に用ひた口語・文語と一致します。

〔**口語と方言**〕

口語を談話に用ひる言語と考へれば、當然各地の方言もその中に含まれることになります。しかし、教科書で取扱ふのは、所謂正しい言語、即ち標準語であつて、地方地方に特殊な方言は取扱ひません。標準語は、これさへ知つて居れば、日本語の行はれるどの地方に於ても意志を通ずる事が出來る（又は出來るべき）言語として、國民教育に用ひる言語であつて、日本語を代表する口語であり、又口語文の基礎になるものであります。學校で正しい言語として教へる言語は、口語に於てはこの標準語の外にはありません。教科文典で說く口語の文法は、勿論この標準語（又は標準語と見るべき言語）の文法であります。この標準語は東京式の言語ですが、必ずしもすべて東京語のまゝではありません。それ故、東京の人でも、之を學ばなければなりません。

〔注意〕 文語・口語の名は小學校でも用ひてゐたでせうが、多分、それは讀本の文について、

いつてゐたとおもひます。さすれば、それは所謂口語文のことで、談話に用ひる言語ではありません。さうして、談話の言語としての口語については、ぼんやりした考しかもつてゐまいとおもひます。ことに地方に在つては、談話のことばといへば、自分どもの談話に用ひる方言だと考へ、口語文にあるやうな言語は、文字に書く時に用ひるだけで、談話に用ひるものだとは考へないかも知れません。もしさうならば、正しい言語、卽ち標準語は談話にも用ひるべきものである事を、よくのみこませる必要がありませう。

【二】口語の文法と文語の文法

口語には口語の文法があり、文語には文語の文法があります。本書には「その文法が違つてゐる」としておきましたが、勿論兩者が全然相違して相容れないといふ意味ではなく、共通する部分も少くありません。つまり口語・文語には、それ〳〵獨特の文法があるといふ意味なのです。

〔注意〕口語文法は、初年級に於て既に學んだ筈ですから、本書には主として文語の文法を說いたのです。けれども前にも述べた通り、口語に關する知識を基礎にして文語文法に入るといふ立て前にしましたので、口語文法に言及したところが少くありません。殊に第五篇は初年級用には全然出さなかつたので、本書には口語・文語を併せ說きました。

〔文法の概念〕

文法がどんなものであるかについては、初年級用改制新文典〔三〕に說きましたから、こゝには改めて出しませんでしたが、そこには

我々は言語によつて思ふ事を他人に通じるが、言語はそれ〴〵きまつた意味をもつてゐる一つの言葉によつて組立てられるものである。その組立て方には一定の法則がある。その法則をはづれては、全く意味を成さないか、又は思ふ事を正しく傳へる事が出來ない。その法則を文法といふ。

と說明しておきました。卽ち、私は「文法は意味を有する單位による言語構成の法則である」と見てよからうと考へてゐるのであります。

これを少し委しく說明しますと、すべて言語は、どんなものでも音聲と意義との結合したもので、卽ち音聲と意義との二つの要素から成立つてゐます。さうして、これ等の要素には、大小種々の單位があつて、大きな單位は、小さな單位から構成せられてゐます。音聲に於ては、最小の單位として單音（aiuktsなど）があり、單音によつて構成せられた他の單位である音節（アイカキケサシスキャチュショ）などがあります。意味の方からみれば、個々の思想を表はす單語や、單語から構成せられて或纏まつた思想を表はす文などが、それ〴〵その單位であります。言語は、かやうないろ〳〵の單位から構成せられてゐるものであります。その單位が言語を

構成するについては、一定の法則があります。我々は言語を分析して、その構成單位を見出し。その單位が如何に結合して言語になるかを調べて、言語構成の法則を知る事が出來ます。

かやうな種々の言語單位の中、單音や音節のやうな、音聲に關するものは、それ自身意味をもたないものでありますが、單語や文のやうなものは意味を有するものであります。さうして文は單語によつて構成せられ、又單語は語根・接頭語・接尾語など、意義を有する單位によつて構成せられるのであります。かやうに、意味をもつてゐる單位による言語構成の法則が卽ち文法であります。右に引用した初年級用改制新文典に「言語は、それ〴〵きまつた意味をもつてゐる一つ一つの言葉によつて組立てられるものである」といつたのは、右の如き、意味をもつてゐる單位によつて構成せられる事を說明したもので、單語や、語根・接頭語・接尾語その他のものを言葉といふ漠然たる語によつて引きくるめて示したつもりです。

〔**法則といふこと**〕

法則といふのは、きまりであります。しかし個々別々のきまりでなく、多くの場合に通じてのきまりです。通則・規則・法式などといふものです。例へば、日本語で、山岳といふ意味をヤマといふ語で表はすのも、日本語に於けるきまりでありますが、法則ではありません。「書かない」「讀まない」「知らない」「思はない」「取らない」のやうに「ない」が或種類に屬するいろ〳〵の

單語（文法上では四段活用動詞と名づけるもの）には、皆一樣にア段音に附くなどは法則であつて、文法上のきまりであります。又、これと同じ種類に屬する單語が命令の意味を表はす場合に、皆エ段音の語尾をとるのも、文法上のきまりであります。

法則といふにも、いろ〳〵の種類があります。物理・化學で研究する自然界の法則は、時と處とを問はぬ普遍的のものであつて、我々の力で之を破る事は出來ません。文法の如き言語上の法則は、社會の慣習によるきまりであります。それ故、社會の違ひによつて違ひ、又同じ言語でも時代によつて違ふものであります。しかし、或一定の時に於ける或一つの言語に於ては、きまつてゐるのであります（或部分に於ては多少動搖してゐる事もありますが）。これは、個人個人の言語が違つてゐては、互に思想を交換し、意志を通ずる事が出來ない故、自ら一定してゐるのであります。卽ちその法則はその言語の中に自然にそなはつて居り、我々がその言語を間違へず使ふのは、その法則に從つてゐるからですが、しかし、我々は之を十分に自覺しません。文法の學問は、その法則を見出して明かに我々の前に示すものです。

〔口語と文語との差異〕

兩者の差異は、文法に關するものと關しないものとがあります。單語の違ひの如きはその單語だけに關するもので、文法に關係しないものであります。活用の違ひのやうな、いくつかの場合に

通じてのきまりに關するものが文法上の差異であります。口語と文語とは單語の上に於ける相違もありますが、これは絶對的のものではありません。その根本的の相違は文法の相違にあります。

上述の如く口語と文語とは同じ日本語の中での違つた言語であり、その文法も違つて居りますから、口語の文法が必ずしも文語の文法にあてはまらないのは勿論、口語の文法に適當な說き方は、また必ずしも文語の文法に適當なものではありません。教科書では、それをなるべく同じ組織で說明しようとするのですから、多少の無理が生ずるのは止むを得ません。

【三】文・語（單語）

〔文の定義〕

纏まつた思想を言ひ表はすのが文であるとは、普通よく用ひられる文の定義です。「春が」「一寸」「あなたの」又は「あなたの御宅は」などを、「春が來た」「一寸いらつしやい」「あなたの御宅はどちらですか」にくらべて、前者はまだ纏まらない、缺けた所のある思想、後者は纏まつた、完備した思想と考へて、かやうに說明するのです。（「來た」「いらつしやい」のやうな語であつても、それだけで聞手にも話手にも意味が十分理解される場合には、思想から見て纏まつた完備したものとして文と見ます。）しかしこの定義は意味の方からばかり觀たもので、實はまだ完全なものではありません。それ故、初年級用には、なほ文の終では必ずことばが切れる事、卽ち

いひ切りになる事、及び文字で書く時は。をつける事をあげて、發音及び文字の上にあらはれる特徴によつても、辨別する事が出來るやうにしたのであります。その事は本書〔七八〕に於ける「文」の說明にも擧げておきましたが、こゝでは、語が個々の思想を表はすものであるのに對比して、文は纏まつた思想を表はすものである事だけを擧げたのです。「一つゞきの言葉」といふのは、必ずしも二語以上つゞけるといふ意味ではありません。「進め」や「起きろ」でも一つの文であります。必ずしも語がつゞくのでなく、音がつゞくと見て差支ありません。

ここで思想といふのは、言語によつて言ひ表はされる種々樣々の內容を引きくるめていつたものです。それ故、意味といつてもよいやうに思はれますが、意味といへば言語に附いたものであり、思想といへば言語を離れても存立し得るものですから、思想を言ひ表はす（卽ち言語によつて表はす）といふのが正しく、意味を言ひ表はすといふのは不正確です。但し、意味といつた方がわかり易いかも知れませんから、便宜上、さう說明してもよからうとおもひます。

〔文と語（單語）〕

語と單語とは同意味に用ひます。單語は意味をもつてゐる言語上の單位の一種で、之を以て文を構成するものであります。單語を一つ一つの思想を表はすものとしたのは、文を、纏まつた思想を表はすものとしたのに對するのでありまして、一つ一つとは個々別々の意味であります。た

だ一つの單語で出來た文もありますが、多くの文はいくつかの單語を文法に從つて連ねたもので、單語の表はす個々別々の意味が一つに纏まつて、欲する思想を言ひ表はしたものです。この場合には、一つ一つの單語はそれ〴〵文全體の表はす意味の或部分を表はします。「行け」「來い」の如き、唯一つの單語で成立つ文は、一つの纏まつた思想を一語で表はさせたものであります。しかし、單語として見れば、「行け」「來い」等は「あつちへ行け」「こつちへ來い」のやうな文にも用ひられ、その場合には纏まつた思想の中の或部分を表はします。

〔**單語の概念**〕

單語といふ事は、教科書的文法では、わかりきつたもののやうにして、無雜作に取扱つて居りますが、實際何が單語であるかをきめるのは非常にむづかしいものであります。その最大難關は、助動詞や助詞を一の單語とみとめる事であります。

單語は、文を意味にしたがつて分解して得た、一つの單位であります。それでは、文をその意味に從つて出來るだけ細かく分解すれば單語が得られるかといふに、必ずしもさうではありません。「本箱」「叔父さん」「お茶」などは一つの單語と見られてゐますが、意味からいへば、「本」「箱」「叔父」「さん」「お」「茶」といふやうに更にわける事が出來ます。その「さん」「お」などは接尾語・接頭語として取扱ひ、一の單語とはしません。「本箱」の「本」も「箱」ももと單語

であつたとしても、かうなつた以上は單語でなく、「本箱」といふ一の單語の成分だと考へられてゐます。かやうに意味の方からのみ考へたのでは、單語と、單語の成分である接頭語・接尾語その他のものと區別する事は出來ません。

それでは、意味ばかりを考へず、言語としての他の要素、卽ち音の方からも考へて見るとどうかといふと、單語はいつもそれだけ一つゞきに發音するもので、その中途で切つて發音する事はありません。ヤマ(山)は、きつとヤマとつゞけて發音し、ヤ・マと切つて發音しません。この點から見れば、「本箱」のやうなのは、意味からいへば「本」と「箱」と二つの要素から出來てゐますが、ことばとしては、ホン・バコと切つて發音する事なく、いつもホンバコと一つゞきに發音しますから、一つの單語である事がわかります。それでは「叔父さん」はどうかといふと、これもいつもヲヂサンとつゞけて發音し、ヲヂ・サンと切つて發音する事はありません。それ故、これも一つの單語とみるべきであります。ところが「叔父」はそれだけで一つの單語であります。それだけ離して用ひる事が出來ます(「叔父さん」の場合には離しませんが、他の場合には離します)。ところが、サンは決して離して用ひる事なく、常に他の語の後に附いてあらはれて來、それと一つゞきに發音されて一つの單語をつくります。それ故、之を接尾語と名づけ、單語とは見ず單語を作る成分と見るのであります。

かやうに、切らずに一つゞきに發音するものが單語であるときめる事が出來るならば、甚だ明瞭でありますが、實際はさう簡單に行きません。「私」はいつも一つゞきに發音するもので疑もなく單語でありますが、「私が」「私も」「私です」の場合も、いつもつゞけて發音します。「ワタクシ・ガ」「ワタクシ・モ」「ワタクシ・デス」といふやうに、ワタクシの下で一旦音をきつて、更にガ・モ・デスなど發音する事は、實際のことばにはありません。もし何時も一つゞきに發音するものを單語とすれば、「私が」「私も」「私です」もまた單語であつて、「が」「も」「です」は決してそれだけ離れては用ひられず、いつも他の語に附いて、その語と一つゞきに發音される事は、「さん」のやうな接尾語と少しも違ひません。助動詞や助詞はすべてかやうな性質のものであります。しかるに、普通、助詞や助動詞は單語であるとし、接尾語は單語でないとしてゐます。卽ち同じ性質のものを一は一つの單語とみとめ、一は二つの單語と見るのであります。それでは、どこにその區別を認むべきでありませうか。

單語に接尾語が附いて出來たものは、その文法上の性質は、純粹な單語と全く同じことです。「神」に「樣」のついた「神樣」は、あらゆる點に於て名詞としての性質をそなへ、その用法は名詞と同じ事です。それ故、之を一つの名詞として取扱つて差支ないのみならず、その方が便利です。名詞とすれば、それが卽ち一つの單語であるとしなければなりません。「私が」「私も」「私

さへ」などは、之を一語と見ても。その性質はどの品詞とも違つて居り、隨つてどの品詞にも入れる事が出來ません。それで之を一語とは見ないのであります。ところが、「私です」「思はない」「行つた」など單語に助動詞の附いたものは、全體として見て活用があります。その用法も用言と大抵同じです。それ故文法上の性質から見て、一の用言として取扱つてもよい筈で、現にさう取扱つてゐる人もありますが、普通は之を一つの單語と見ず、助動詞の附いたものとしてゐます。これは、助動詞がどんな動詞（語によつては名詞その他）にも自由につき、又いくつも重なる事があつて、比較的に獨立性が强く、その用法が規則的であるからであります。

つまるところ、いつも一つゞきに發音するものの中に、左の如き種類があります。

(a) やま。おもふ。しろい。さて。あゝ。
(b) やま かせ。ほん ばこ。手 輕い。
(c) お茶。私 ども。あなた 樣。春 めく。
(d) 私 です。思は ない。思つ た。
(e) 私が。私の。私も。

(a)は、意味からいつて、それ以上分解出來ないもので、これは疑もない單語です。(b)以下は、意味からはもつと分解出來るものですが、そのうち(b)は、「やま」と「かせ」、「手」と「輕い」のや

うに、(a)の種類の單語を合せて出來たものですが、出來上つた上は一つゞきに發音し、且つ、その文法上の性質が、(a)の單語の何れかと全く同じく、品詞の一つに屬するものとして取扱ふことが出來るので、これも單語とみとめます。(c)以下は、(a)の種類の單語に、單獨では用ひられないで「お」「ども」「です」「が」などが加はつたものでありますが、その中(c)は、品詞の一つに屬するものとして取扱ふことが出來る故、全體を一つの單語と認め、附屬したものは接頭語・接尾語と名づけます。(d)は、全體を品詞の一つに屬するものとして取扱ひ得るものでありますが、「です」「ない」などを單語とみとめ、他の單語に單語が加はつたものとします。(e)は、全體として或品詞に屬するものと見る事が出來ない故、一つの單語とせず、單語に單語の加はつたものと見るのであります。

これまで單語といはれてゐるものを、そのまゝ認めて、理論上から說明すれば、右のやうに煩雜なものとなります。卽ち、單に意味の上からのみ分解して、その最小の單位をもとめると、その單位は、(a)(d)(e)に於ては今いふ單語と一致しますが、(b)(c)に於ては一致しません。又いつも一つゞきに發音するものといふ事を標準にしてみれば、(a)(b)(c)に於ては今いふ單語と一致しますが、(d)(e)に於ては之と一致せず、助動詞や助詞が接尾語と同種のものとなります。つまり、今單語といつてゐるものは、不徹底なものだといふ事になります。之を徹底させるやうにするのは願

はしい事で、それには多少私案もありますが、さうすれば、單語の內容や取扱をかなり變へねばなりませんから、この書では普通に單語と認められてゐるものは、皆單語としておきました。實際單語といふ語は、學問上の檢討を經て作られた術語ではありません。これは西洋でも同樣で、その正確な定義はほとんど下し難い事になつて居ります。

右のやうに單語には正確な定義を下す事は甚だ困難であります。この書にあげた「一つ一つの思想を表はすことばを語又は單語といふ」といふやうな說明は、意味の方からばかり言つたもので、甚だ不完全なものである事はいふまでもありません。これでは「本箱」「叔父さん」を「本」「箱」「叔父」「さん」と分解して、各〻それが單語であるとせられても仕方がありません。といつて「本箱」「叔父さん」はいつも一つゞきに發音するから、一語であると說明しようものなら、「本で」「箱から」「父の」なども皆一語としなければならなくなります。之を本當に理解させようとするには、各品詞の概念や、複合語・接頭語・接尾語など、單語の構成に關する知識を必要としますから、到底ここでは不可能の事です。ここでは、文が語から成つて居り、個々の語の意味が文全體の意味に關聯する事がわかればよからうとおもひます。

【四】連語

連語については、初年級用改制新文典〔七一〕に既に述べてあり、本書の〔七八〕にも出して

ありますが、要するに、語が結合して一定の意味を表はしてゐるが、それだけではまだ文と見る事の出來ないものです。さうして、文は語から成立つが、語が集まつて直ちに文とはならず、連語となつて、それが文の成分を成してゐる事が多いのであります。

こゝに連語について說いたのは、一つゞきのことばは總べて文であると考へたり、或一つの意味を表はすことばは、總べて一つの語であると考へたりする事を、避けさせたい爲であります。

【五】　獨立する語と附屬する語

單語の中で、助動詞と助詞は、いつも他語に附屬して用ひられるもので、單獨にあらはれる事なく、その他の品詞は、それだけ單獨に用ひる事が出來るものであります。

附屬するといふのは、意味の方から見て、他の語に附屬して、はじめて意味が明かになるとも解せられませうが、それよりも、實際の言語に於て、いつも他の語に附着して、それと一つゞきに發音せられる事と見れば、判然とする事とおもひます。我々がことばを實際用ひる時は、この類のものは決して離して發音する事はありません。文法などで「は」「も」「です」「ます」などを附はなして說明するのは、無理に切りはなしたのです。之に反してその他の品詞は、その語だけ他と切りはなして發音する事が出來るものであります。獨立して用ひるといつたのは、主としてかやうな點をさしていつたのです。もつとも、いつでも獨立してゐるのでなく、その下に助詞や助

動詞がつく場合は、それと一つゞきに發音します。それ故、「獨立して用ひる事の出來る語」と説明しておきました。

又助詞や助動詞には、それだけでは意味がないと考へるものがあるかも知れませんが、それはいつも他に附いてあらはれるものを、切りはなして考へるから意味があらはれて來ないのです。「私」と「私は」との違ひが「は」の意味です。

〔注意〕 助動詞・助詞は前の語と一つゞきに發音しますから、之を切りはなして單語と見るのは、生徒の頭に入りにくい點がありませう。「咲きました」を「咲き」「まし」「た」とわけるのは多少不自然でせう。「咲く」と「ます」と「た」がついたものと説明すればよいでせう。

【六】 活用語

單語には、如何なる場合でも、その形の變らぬものがあります。たとへば「梅」は、次の例のやうに、どんなに用ひられても常に同じ形です。

うめ咲く。　うめも咲く。　うめを植う。
うめより美し。　うめの花。　これはうめなり。
庭のうめを賞す。　咲きたるうめの花。

然るに口語の「ある」、文語の「隱る」などは、本書に説いてある通り、用ひ方によつて、「あ

ら、あり、あれ」「隱れ、隱るる、隱るれ」のやうな變つた形となります。この「ある」「隱る」のやうに、場合に應じて語形の變化する語を活用語といひ、その語形變化を活用といふのです。

（活用語は、後にいふ動詞・形容詞（形容動詞も）・助動詞が之に屬します）

〔活　用〕

活用語を古くは活語といつた事がありますが、今はあまり用ひません。又之を用言といふ人もあるやうですが、用言は助動詞を含まないものと見る方がよからうとおもひます。

活用は右の通り語の形の變化することです。しかし語形が變化しても、その意味や役目に關係しないものがありますが（「いづこ」「いづく」など）、活用はその意味や役目に關係します。卽ちことばの切れつゞきを示し、又はいろ〳〵の語に附く爲に、語形が變化するのであります。（きれ・つゞきにも、いろ〳〵あります。「姉も行く」「姿もよい」は、たゞ意味が切れただけで、あり、「お前は行け」は命令の意味をもつてことばが切れます。「兄も行き」「聲もよく」などは、對等の資格の語につゞきます。）語形の變化は（一）母音のかはるものと（二）語尾の加はるものとがあります。行か・行き・行く・行けの如きは母音がかはり、「よく・よい・よけれ」や「附ける・附けれ」の如きは語尾が加はつて語形が變化します。後の種類のものは、變化といふ意味が多少曖昧かもしれませんが、「よく」と「よい」と「よけれ」と、又「附け」と「附ける」

と「附けれ」とを互にくらべて、語尾が同じでなく變化してゐるといふのです。（助動詞には語形が變化しないものがすこしありますが、これも活用があると見做して居ります。この事については後章に述べます。）

又、動詞の活用は六段にしますから、どんな動詞でも六つの違つた形をもつてゐるやうに誤解する事がありますが、六つ違つた形をもつてゐるのは、文語のカ變サ變ナ變だけで、文語では上下二段は五つ、四段・上下一段及びラ變は四つ、口語では大抵四つで、變格だけが五つです。

〔語幹と語尾〕

「ある」「隱る」が活用する場合を見ると、語の終の部分だけが「ら、り、る、れ」「れ、る、る、るれ」のやうに變化しますが、「あ」「隱」は常に同じ形を保つてゐます。その變化する部分を語尾、變化せぬ部分を語幹といひます。語幹を語根といふ人もありますが、本書は採りません。

語幹と語尾とを區別し得る動詞は、あらゆる動詞の大部分を占めますが、その區別のしにくいものがあります。卽ち、口語では一段動詞の中の或ものと變格活用の動詞、文語では上一段の大部分、下一段及びカ變・サ變の動詞にはこの區別がつきません（もつとも、これは假名で書いた場合です。ローマ字で書けば大概區別が出來ます）。

〔注意〕 活用を「語尾の變化する事」と說く人がありますが、さうすると右のやうに語幹・語

尾の區別のつかぬ語の活用が、說きにくくなります。それで本書では、「語形變化を活用といふ」としておきました。これなら本書に擧げた「こ、き、く、くる、くれ、こよ」「み、みる、みれ、みよ」の活用も、容易に理解し得るだらうと思ひます。

【七】主語と述語

主語は或事を述べる題目(又は主題)となる語であり、述語はその題目について述べ說明するものであるといふ定義が一般に行はれてゐます。これは無論西洋文法から來た考でありますが、「あれは川です」「日本は神國なり」といふやうな文は、「あれ」「日本」の何であるかを說明したものですから、あれ・日本を題目といつてよいのですが、「水が流れる」「花咲く」のやうな文に於ては、水や花は特に問題の中心になつてゐるのではありませんから、之を題目といふのはあたりません。又「二階には弟夫婦が住み、下には私共が住んでゐます。」のやうな文では、敍述の題目になつてゐるものは、主語よりもむしろ「二階」「下」であります。「水が流れる」「花咲く」などは或一つの事柄を敍述してゐるので、特に水や花がどうであるかを問題にしてゐるのではありません。それよりも水や花は「流れる」「咲く」といふ、敍述する語に對して、何が流れるか、何が咲くかを示してゐるものです。「あれは川です」「日本は神國なり」のあれ・日本も「川です」「神國なり」が述語で、あれ・日本は述語に對して「何が川であるか」「何が神國であるか」を示

すものである點は違ひません。それ故、述語があつてはじめて主語があると見て差支ないと思ひます。よつて、述語を先にし、主語を後にしました。又、實際、文中の主語・述語を見出す場合にも、まづ述語を見出して、それから之に對する主語を見出す方が便利であり、また間違も少からうと思ひます。

述語は、動詞的のもの（「どうする」）、形容詞的及び形容動詞的のもの（「どんなだ」）及び體言に「だ」「なり」のついたもの（「何だ」「何なり」）の三種が典型的のものですから、この三種をあげました。

主語には、體言又は之に準ずるものが用ひられます。ここで問題になるのは、「水が」「色が」「あれは」「日本は」を主語といふべきか、「水」「色」「あれ」「日本」を主語といふべきかといふ事です。實際「水」「色」「あれ」「日本」は、「が」「は」が附いた場合ばかりでなく、「水さへ」「色まで」「あれも」「日本こそ」など、いろ〳〵の助詞が附いて主語となる事がありますから、「水」「色」「あれ」「日本」が主語であると見てもよいのですが、文の成分としては、助詞や助動詞の附いたものは、それを含めて一の成分と見るのが普通であつて、さうしておかなければ、後の文の成分の條の說明と矛盾を生ずる虞がありますから、「水が」「色が」「あれは」「日本は」など助詞の附いたもの（連語）を主語として取扱ふ方がよいと思はれます。さうして「が」は主

語たる事を示す語ですから、主語を索める場合に、「何が流れる（咲く）か」「何がきれいである（青い）か」「何が川である（神國だ）か」といふやうに、述語に對して「何が」といふ關係に立つものを索めて主語を見出すのが便利ですから、本書に「何がさうする（さうである、何である）かを示す語を主語といふ」と説明しておきました。勿論「花咲く」「松青し」のやうに、「が」といふ助詞が無くても、又「は」「も」「さへ」「まで」「こそ」のやうな助詞があつても、その意味の上から見て、「何が」にあたるものは、皆主語であると説明すべきです。

【八】修飾語

修飾するといふ事は、一寸説明しにくい事です。もと modify の譯語ですが、原義は「性質・形・樣子などをかへる」事です。よく「限定する」といふ語を用ひますが、これは、適用範圍が狹くなる事を意味します。たとへば「水」といへばどんな水にでもあてはまりますが、本書の文語の例のやうに、「きれいな水」といへば、その意が委しく規定せられて、きれいな水以外の水には適用せられなくなります。「咲く」といへば、どんなに咲いたものについても適用出來ますが、「美しく咲く」は、意味が委しくなり狹くなつて、咲いた樣子が美しくないものにはあてはまりません。意味そのものからいへば特殊化せられるのであり、範圍からいへば限定せられるのであります。今わかりやすいやうに「意味を委しく定める事を修飾するといふ」と説明しておきで

ました。

修飾語は、性質や様子や程度や時や場所など、いろ〳〵な點で、修飾せられる語を委しく規定します。

修飾語に形容詞的修飾語と副詞的修飾語とがありますが、この區別は體言と用言とがわからなければわかりませんし、品詞分類には必要がありませんから省きました。

〔注意〕本書では、形容詞的修飾語を連體修飾語と名づけ、副詞的修飾語をすこし範圍をひろめて、連用修飾語と名づけました。(〔八六〕參照)

修飾語は、一つの單語である場合もありますが、また「花の」「我が」「中に」「庭で」のやうに、附屬する語(助詞)の附いた連語もあります。そんな語が附屬したものでも、右に述べた役目をするものは皆修飾語です。

第二章　品詞概說(一)

〔本章の目的〕

この章と次章とで、各品詞の概念を授けて、第二篇に於て各品詞について詳說する基礎としようとするのであります。この品詞の概念は、口語にも文語にもあてはまります。

22

【九】品詞の分類　九品詞

文法上で、單語を品詞に分類するのは、單語を文構成の單位として觀て、單語によつていかに文を組立てるかを說明するのに都合のよいやうにする爲です。單語は文の構成上にいろ〳〵の役目（職能）をします。語によつて、いろ〳〵違つた多くの役目をするものもあり、あまり多くの違つた役目をしないものもあります。又或役目は、或種の語だけにあつて、その他の語には無いものもあります。かやうな、語のつとめる役目の異同に從つて多くの語を分類する事は、文構成の說明上必要であります。又語によつては、活用があつて語形の變るものがありますが、そのいろいろな語形は、文構成上、それ〴〵の役目をつとめるもので、文の構成に關係します。さすれば、活用は單に語の外形のみに屬する事ではなく、文構成上のいろ〳〵な役目を示す爲のものであります。文法を前に述べた通り言語の構成上の法則とすれば、語を、その文構成上に於ける役目の相違によつて分けるのは、文法上の性質によつてわけるといつてよいわけです。それ故、「語を文法上の性質によつて分類したものを品詞といふ」と說明しておきました。

23

〔品詞の數〕

十品詞を立てるものもありますが、この書では、數詞を名詞の一種と見て、九種にしました。大槻博士は、更に代名詞をも名詞に入れて八品詞として居られます。猶、「いはゆる」「あらゆる」

「或」の如き語は、もと動詞から出たものであるとしても、右の形以外の活用形は用ひませんから、動詞とするのも不穩當です。又、口語の「この」「あの」「その」なども、口語では「こ」「そ」「あ」を單獨に代名詞として用ひる事がありませんので、代名詞に「の」の附いたものと説明する事が出來ませんから、全體を一語として取扱ふのが合理的です。（但し、文語では「こ」「そ」「か」などは比較的自由に用ひられますから、これ等を代名詞として取扱つてよからうと思ひます）。かやうなものは皆體言を修飾するものでありますが、現に認められてゐる如何なる品詞にも入れる事が出來ません。そこで、これ等は、連體詞とでもいふべき一品詞を設けて、之に收めるのが至當であつて、既にさう取扱つてゐる人もあります。けれども、これはまだ一般に認められませんし、之に屬する語も少數ですから、ここには省いておきました。實例に出會つて問題になつた場合には、根源に溯つて、古い動詞の連體形であるとか、もと獨立して用ひられた「こ」「そ」「あ」「か」などに「の」の附いたものであるとか説明しておくより外なからうとおもひます（文法の立場からいへば、語原的説明はよくありませんが、止むを得ません）。

〔品詞分類の標準〕

品詞を分類するのに、普通、三種の標準があげられてをります。（一）は語の意味によるもので、名詞は事物の名であるとか、動詞は動作・存在を示すとか、形容詞は狀態・性質を示すとか

いふのは、語の意味を考へて、それがどんな種類に屬するかによつて定めるものです。(二)は語の形によるものであつて、活用するとかしないとかいふのは、語形の變化の有無によつて分つものです。(三)は語の役目（職能、はたらき）によるものであつて、その語が文を構成する上に於て、いかなる役目をするかによつてきめるものです。(主語になるとか修飾語になるとかの類。)その役目は他の語に對する關係によるものが大部分を占めて居ります。(一)の語の意味によつて分類するときは、大體はわかるやうですが、一々の語について考へて見ると、まぎらはしいものが出て來ます。(二)の語の形による時、ことに活用の有無によつて分類する時は、甚だ明瞭な分類が出來ますが、活用の無いものは、更に之を細かく分ける事が出來ません。(三)の役目によるものは、前述の如く、品詞分類の目的が文構成の說明にあるとすれば、最も大切なことでありますが、純粹に文構成上に於ける役目のみによつて分けようとすると、文構成上に於て、どれほど違つた種類の役目があるかを明かにし、一つ一つの語について、どの語はそのうちのどの役目とどの役目をなすものであるかを調べて、その異同によつて分類しなければならないのであつて、手續や說明がかなり複雜になります。その上、いろ〳〵の役目は、また語の意味や、形にも密接な關係があります。それ故、役目ばかりでなく、意味や形などをも適宜に採り用ひて分類するのが便宜であり實際的であつて、さすれば比較的系統立つたはつきりした分類が得られます。語の

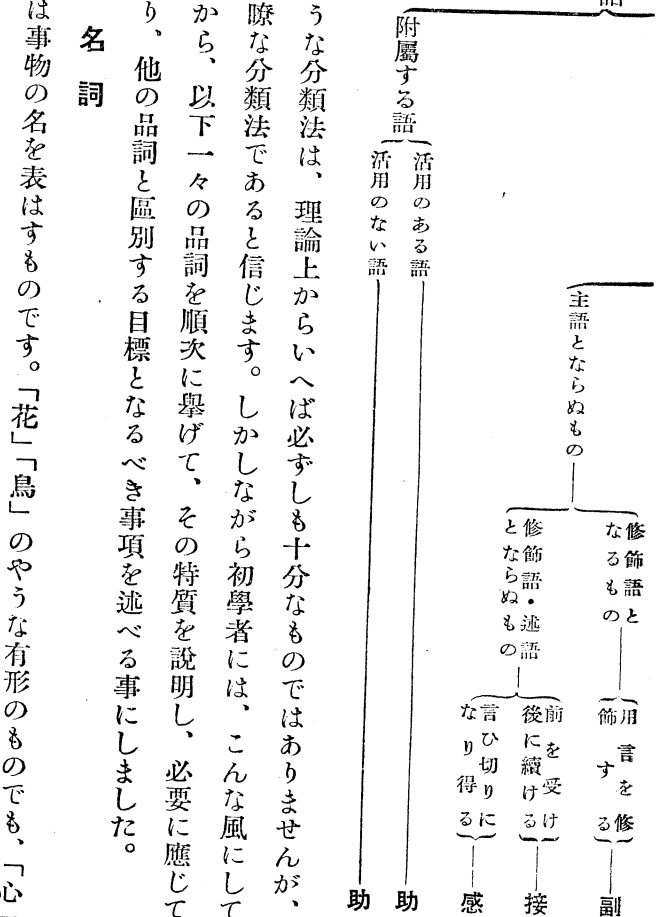
役目（又ははたらき）では常に他の語に附屬する事、獨立しうる事、主語や述語や修飾語になる事、形では活用のあるなしが、品詞分類の標準として最も大切なものと考へます。それ故、前章中にこれ等のものについて說いたのでありまず。

〔品詞の分類法〕

右に擧げたいろ〳〵の事項を標準にして分類するのですが、分類の手續としては、之によつて直に九品詞が得られるのではありません。すぐ九品詞に分けられない事はありませんが、それでは系統立つた分類は出來ません。一つづゝ違つた標準を以て順次にわけて行つて、遂に九品詞に到達するのです。まづ、あらゆる語を、獨立するか附屬するかによつて二つに大別します。さすれば、助動詞と助詞とが、常に他に附屬する語として、名詞以下の獨立して用ひる事が出來る品詞とわかれます。次に、活用のあるなしによつて、更にその各〻を二分します。さすれば附屬する語では、活用のあるのが助動詞、活用のないのが助詞となります。獨立する語では、活用のあるのが動詞及び形容詞で卽ち用言であり、活用の無いのは卽ち名詞・代名詞・副詞・接續詞・感動詞であります。次に、獨立する語のうちで、述語又は主語となる事について特徵をもとめると、活用する語卽ち用言は、單獨で述語となるものであります。活用しない語では、主語となり得るものと主語となり得ないものとがあります。前者は名詞・代名詞で卽ち體言であり、後者は

副詞・接續詞・感動詞であります。このうちで副詞は修飾語になりますが、接續詞と感動詞は修飾語になる事が出來ませんし、又述語にもなりません。用言は、更にその意味から、動作・存在を述べるもの即ち動詞と、性質・狀態を述べるもの即ち形容詞とにわかれます（精密な區別については後に述べます）。體言は事物の名を表はす語即ち名詞と、名をいふ代りに直接に指していふ語即ち代名詞とにわかれます。副詞は、前述の如く修飾語になりますが、これは用言を修飾するのが常です。接續詞と感動詞とは、修飾語にも述語にもなりませんが、接續詞は前のことばを受けて後のことばに續ける爲に用ひられるもので、意味が他の語につゞいて行きます。感動詞は接續詞とは反對に、それだけで言ひ切りになる事が出來るものです。かやうにして九品詞を區別する事が出來ます。之を表にすれば左の如くなります。

- 獨立する語
  - 活用のある語―單獨で述語となるもの―用言
    - 動作・存在を表はす ― 動詞
    - 性質・狀態を表はす ― 形容詞
  - 活用のない語
    - 主語となり得るもの―體言
      - 事物の名を表はす ― 名詞
      - 事物を直接に指し示す ― 代名詞



かやうな分類法は、理論上からいへば必ずしも十分なものではありませんが、實用的にみて比較的明瞭な分類法であると信じます。しかしながら初學者には、こんな風にしては却つて混雑しませうから、以下一々の品詞を順次に擧げて、その特質を説明し、必要に應じて、その分類の標準となり、他の品詞と區別する目標となるべき事項を述べる事にしました。

〔一〇〕名詞

名詞は事物の名を表はすものです。「花」「鳥」のやうな有形のものでも、「心」「春」「進歩」のやうな無形のものでも、「東京」や「楠正成」のやうな地名や人名でも、すべて事物の名を表はすものは皆名詞です。

〔名詞の種類〕

名詞を通例固有名詞と普通名詞とに分類します。東京・富士山・琵琶湖・楠正成・源頼朝・徳川家康などのやうに、或個體の有する一切の個性をすべて引きくるめて表はし、隨つて一の個體に限り、他の個體には通用しないものを固有名詞といひ、花・鳥・犬・石・心などのやうに、或定まつた性質を有するものを表はし、その性質を具へたものであれば、どの個體にも共通するものを普通名詞といひます。しかし、嚴格にいふと、國語では固有名詞と普通名詞との間に、文法上何等の相違がないのです。英語などでは、固有名詞は最初の文字を頭文字で書くとか、冠詞を用ひないとかいふやうな習慣がありますが、わが國語にはそんな事はありませんから、國語文法においては、固有名詞・普通名詞と分類する必要は、全然ないといはねばなりません。隨つて實際授業に當つては、この問題に全く觸れなくても差支はないのです。しかし、時間があれば、これを教へておくがよいと思ひます。それは次のやうな實用的效果があるからです。

一、普通の辭典には、固有名詞を取り容れてない。隨つて、固有名詞は、人名辭書とか地名辭書とか、特殊なものによらなければならない故、その區別を知つておくがよい。

二、英語・獨語など、外國語の文法を學ぶ際の豫備知識となり、且つそれ等の語と國語との文法上の差異の一端を知らしめる事が出來る。

右の外、外國語の文法では名詞を幾種にもわけますが、國語文法には不要です。

〔數　詞〕

「ひとつ」「三冊」「五疋」「八尾」など普通の數詞は數の名を表はすもので、數へて名づけた名であるといふ事が、その特徴であります。これ等は、文法上の性質は一般の名詞と何等異る所がありませんから、名詞の中に入れてよいものです。たゞこの類の語を別にいふ必要のある時に限つて、「數詞」の語を用ひるに過ぎません。

〔順序數詞〕

數詞の中に「序數」を表はすものがあります。「第一」「五號」「三つ目」「(午前)四時」などの類です。これを「順序を表はす語である」と說明するのが普通ですが、この說明は誤解を來す虞があります。といふのは、順序を表はす語でも、數詞でないものがいくらもあるからです。たとへば書物の卷冊の順序を上・中・下、甲・乙、乾・坤などで表はしますが、これ等の語は數詞ではありません。よつて本書には、「數によつて順序を表はす語」として、この意味を明かにしておきました。

〔不定疑問の數詞〕

ここに今一つ注意すべきことは、文法上では、不定な又は疑問な數をいふものをも數詞といふ事です。たとへば

いくつ　いくら　いく人　何百　何枚

などです。又數によつて順序を表はすにも同樣なものがあります。

いくつ目　何號　何番目

などです。

【一一】代名詞

代名詞は名詞の代りに用ひられるものと說明せられてゐましたが、實はさうではありません。名をいはないで、その人や事物を直接に指していふ語であります。話手が自分自身を指して「私」といひ、對手を指して「あなた」といひ、話手に近い處にあるものを指して「これ」といひ、對手に近い處にあるものを指して「それ」といひ、話手にも對手にも遠い處にあるものを指して「あれ」といひます。さうして、同じ語でも、指していふ基點の違ひに從つて、指されるものが違つて來ます。話手からいへば、話手が「私」で、對手は「あなた」ですが、對手からいへば、話手が「あなた」で、對手は「私」になります。又、話手のいふ「これ」が對手からいへば「それ」となります。又どんな人でも「私」となり「あなた」となる事が出來、どんなものでも「これ」となり「それ」となり「あれ」となる事が出來ます。又、「私」や「あなた」や「これ」や「それ」などいふ言葉を聞いただけでは、その指されたものが、どんな性質のものかわかりません。

卽ち、代名詞は、名詞と違ひ、事物自身に具はつてゐる性質（特性や共通性）によつて名づけたのでなく、話手を基點として見た、これ等のものに對する關係に基づいて、事物そのものを指していふ語であります。つまり、名詞と代名詞との違ひは、事物を、どういふ點から見て名づけたかの違ひにあります。いひかへれば、事物のいひ表はしやうの違ひに外ならぬものであります。これは、つまり言語の意味に關した事であります。それでは、名詞と代名詞とは、文を構成するはたらきの上では、どれほどの違ひがあるかといふに、ほとんど違ひがありません。それ故、兩者の區別は文法上あまり必要のない事です。

【二二】體言

名詞と代名詞とを合せて體言といひます。この體言こそ、その他の品詞に對して文法上著しい特徴をもつてゐます。卽ち、それは主語になり得る事であります。もつとも、いつも主語であるといふのではありませんが、主語となる事が出來るのであります。この點で、副詞・接續詞・感動詞と區別する事が出來ます（これ等はいづれも主語となる事はありません）。但し、ここに注意すべきは、あらゆる語は、その用ひ方によつて主語となる事がある事です。

この文の「けれども」が變だ。（口語）

「は」は助詞なり。

これ等は「けれども」といふいひ方、「は」といふ語、などいふ意味の場合に限りますから、例外として取扱ふべきであります。又、

來るがよい。（口語）

守るは難し。

のやうな場合には動詞が主語となりますが、しかし動詞は活用があるといふ點で體言と區別する事が出來ます。それ故、體言は「活用の無い語」とことわつておきました。卽ち、主語になり得る事と、活用がない事との二點で、體言を他のものから區別する事が出來ます。

【一三】動詞

動詞は「飛ぶ」「見る」「思ふ」のやうな動作や、「居る」「有り」のやうな存在を表はすもので す（「落ちる」（口語）、「流る」など故意の動作でないものを、作用と名づけて、動作と區別するものもあります）。しかし、さう說明しただけでは、「動き」「をどり」「はたらき」などの名詞と、「動く」「をどる」「はたらく」などの動詞とを區別し得ない處があります。それで、「動作。存在を述べる語」と說いておきました。「述べる」とは「―する」「―だ」と敍述し、說明する意味です。かやうな敍述する力をもつてゐる事が、動詞の特徵です。

動詞には活用があります。これは動詞が形容詞及び助動詞と共に、他品詞に對する一つの大き

な特徴となります。本書にはその活用例を出しておきましたが、文語については、ここで活用のしかたまで委しく立入る事が出來ず、又その必要がありません。ただ活用するといふ事を、はつきり認めさせる程度で滿足してよいと思ひます。これは次の形容詞・形容動詞についても同樣です。

【一四】形容詞

形容詞は、「堅い」「樂し」などのやうに、事物の性質や有樣（狀態）を表はす語ですが、これも「堅さ」「樂しさ」などのやうな、性質・狀態を表はす名詞と區別する爲に、「性質・有樣を述べる語」と說いておきました。「どんなだ」と敍述する事が、形容詞の特徵だからであります。

形容詞にも活用があり、本書にその活用例を出しておきました。これについては、前節で述べた通りです。

〔動詞と形容詞との別〕

前二節の說明によれば、動詞と形容詞との違ひは、一は動作・存在を表はし、一は性質・有樣を表はす點にあります。これでは、まだ十分明かな區別が出來かねる場合があるかも知れません。存在を述べる「有り」が動詞ならば、非存在を述べる「なし」も動詞だと考へる事は、ありがちの事でせう。實際、動詞と形容詞とは意味からばかりでは區別出來ない點があるのでありま

して、活用の形式の違ひを考へなければならないのですが、ここでは、まだそれに觸れる事が出來ません。

【一五】形容動詞

形容動詞は、形容詞と同性質の語であります。卽ちこれは形容詞のやうに、事物の性質・狀態を述べる語です。さうして本書に示した通り活用があります。併し、その活用のしかたが形容詞と違ふので、形容詞と區別されるのです。

然らば、形容動詞はどんな活用をするかといひますと、ここでは深く立入る事は出來ませんが、本書の例で分る通り、動詞の「有る」（口語）、「有り」（文語、〔一三〕の例參照）と似てゐます。つまり性質が形容詞に、活用のしかたが動詞に似てゐるので、之を形容動詞と名づけたのです。

形容動詞は、之を獨立の品詞として立てる人があり、又その活用のしかたから、動詞の一種とする人がありますが、本書では意味と用法の上から見て特別な形容詞と見做します。

〔注意〕　この形容動詞は、今日の多くの教科書では認められてゐるやうですが、もとは次の括弧の中に記したやうに、一々原形に還元して取扱つたものです。

面白からう（面白く　あらう）　面白かつた（面白く　あつた）（口語）

平かならむ（平かに あらむ）　平かなり（平かに あり）（文語）
堂々たる議論（堂々と ある議論）　堂々たれども（堂々と あれども）（文語）

併し、文法はそのまゝの形で說くべきものだといふ考から、「面白から」「平かなら」等を還元せずに、そのまゝの形を一語と見て、形容動詞と名づけるやうになつたのです。

【一六】用言

動詞と形容詞（形容動詞も）とを總稱して用言といひます（助動詞をもこめて、活用する語をすべて用言といふ事もないではありませんが、多くは動詞・形容詞にのみ用ひます）。この二つのものは、意味の上からみれば、上述の如く「述べる」意味をもつてゐる點が特徴でありますが、文構成上の役目（職能）から見れば、述語となるのが著しい點であります。述語になるのは、用言にかぎらず、體言でも、「これは本だ」「われは日本人なり」のやうに用ひられますが、しかし、單獨に體言だけ用ひられるのでなく、「だ」「なり」のやうな助動詞を加へるのが常であります。之に反して、用言は、他の語の力を借りず單獨で述語になる事が出來ます。述語になる力を自身にもつてゐます。それ故「單獨で述語になる事が出來るもの」と書いておきました。又用言には活用があります。この點で他の品詞と明かに區別出來ます。助動詞にも活用はありますが、用言は獨立する語、助動詞は附屬する語ですから、この點で區別出來ます。

第三章　品詞概說（二）

【一七】副詞

副詞は用言、卽ち動詞。形容詞（形容動詞も）を修飾する語です。修飾とは前に述べた通り委しく定める事で、副詞は、用言の表はす動作。狀態等の、樣子・程度・分量等を委しく定めます。たとへば「確かに言ひ渡す」（口語）、「細かに檢討す」「勇敢に突進す」などは樣子を委しく定め、「大層大きい」（口語）「甚美麗なり」「稍多し」「いと嬉し」などは、程度・分量を委しく定めてゐます。「丁度」「きつと」「多分」「蓋し」などは、多少趣が違つてゐるやうですが、これは用言の彼述の意味を委しくし明かにするものです。卽ち「色は丁度櫻のやうだ」「私もきつと參ります」「兄も多分參りませう」（口語）の「丁度」は、「櫻のやうだ」と比較說明する意味を、「きつと」は「參ります」と斷定する意味を、「多分」は「參りませう」と推量する意味を委しく明かに定めてゐます。又「蓋し然らん」の「蓋し」は、「然らん」と推測する意味を委しく明かに示してゐます。

程度や分量を示す副詞は、また他の副詞を修飾する事があり、（「大層きれいに」「すこしあたたかに」など）、又、名詞を修飾する事があります（「すこし前の方」「ずつと東」「たつた一人」な

ど。尤も、これは限られた語だけです)。しかし、これは或一種の副詞だけに限られた用法です し、これ等の副詞も、用言を修飾する事が出來るのですから、副詞の特徴は用言を修飾することにあると見てよいのであります。

用言を修飾する語は副詞に限るのではありません。「今日歸つた」「明日行く」(口語)、「朝夕行き來す」「一日雨降る」のやうに、名詞が用言を修飾する事があります。これ等は一寸見ては副詞と區別がつきませんが、これ等の語は「今日は十五日だ」「明日が運動日です」「朝夕は涼し」「その一日は休日なりき」のやうに、主語になる事が出來ますから體言であります。副詞は決して主語となる事は出來ません。この點で體言と區別出來ます。それ故、副詞は「主語にならない」と斷つておきました。卽ち、動詞・形容詞を修飾する事と、主語にならない事が副詞を見わける目標であります(無論活用はありません)。

又、「よく飛ぶ」(口語)、「たのしく通學す」の「よく」「たのしく」も、「飛ぶ」「通學す」を修飾してゐますから副詞と區別がありませんが、これは、「よい」「たのし」の活用した形で、形容詞です(用言を修飾する體言や形容詞を、副詞として取扱ふ人もありますが、これは贊成する事が出來ません)。

【一八】接續詞

接續詞は「前のことばを受けて後に結び附ける語」と說明しておきましたが、委しくいへば、前の語又は文の意味を受けて、下のことばへつづけるので、前後のことばの意味上の關係を示します。本書に擧げた語の用例を示すと、次の通りです。

甲組及び（並に）乙組は校庭に整列せよ。

皆が庭に出て、さうして嬉しさうに遊んでゐる。（口語）

急いで停車場に行つたが、しかし殘念ながら間に合はなかつた。（口語）

犬はよく人に馴る。されば古より人家に飼はる。

彼等は全力を盡せるなり。さるを（しかるに）之を非難するものあるは何故ぞ。

接續詞と同じ役目をするものに、「それは僕も讀んだが、面白い本ではない」（口語）、「予は早くより之を知りたれども、言はざりき」などに於ける「が」「ども」のやうな語がありますが、これ等は常に上の語に附屬するもので、助詞であります。然るに、接續詞は上の語とは離れて、獨立して用ひる語ですから、之と區別することが出來ます。もつとも「僕も讀んだ。が、面白い本ではない」（口語）のやうに、上の語を一旦切つた場合には、「が」はもはや助詞でなく、獨立して、接續詞になつたものです。この附屬するか、しないかは、一般に、助詞や助動詞を他の品詞から區別する最も重要な標準であります。

接續詞はほとんど皆他の語から轉じて來たものですから、他の品詞と混同する虞があります。しかし、よくその意味と用法とを考へて見れば、區別する事が出來ます。

接續詞は右の如く、ことばを接續するといふ獨特の役目をする爲にあるものです。活用の無い語であつて、主語・述語や修飾語になる事はなく、又他の語に修飾される事もありません。

【一九】感動詞

まづ本書に擧げた語の用例を示します。

あゝ、こまつた。（口語）

おや、何か倒れたやうだ。（口語）

あな、怖ろしの軍勢や。

あはれ、悲しきかな。

はい、さうです。（口語）

いゝえ、悲しくはございません。（口語）

否、予は知らず。

おい、ちよつと待つてくれ。（口語）

やよ、者共、われに續け。

感動詞は感歎詞といふこともあります。「あゝ」「おや」「あはれ」などは、感動した時發する語で、感情を直接に表はすものです。その意味は「困つた」「驚いた」「不思議だ」などの言葉で表はすのとほゞ同一である場合もありますが、これ等のいひ方は、その感じを考へて、分析していひ表はしたものです。感動詞は、感じをそのまゝ直接に、綜合的にいひ表はすものです。「はい」は應答の語で、これも內容からいへば、「さうです」「その通りです」「ここにゐます」「承知しました」「聞えました」などの語に當る事がありますが、これも內容を分析せず、そのまゝ綜合的にいひ表はすものです（「いゝえ」「否」も同樣です）。「おい」「やよ」は呼掛けの語で、その性質はやはり同樣です。

これ等の語は、他に續けずに「あゝ。」「あはれ。」「はい。」「否。」「おい。」「やよ。」などいひ切る事が出來ます。「あゝ、こまつた」「はい、さうです」のやうに、他の語と共に用ひる事がありますが、その場合でも、ここで一旦いひ切つたものと見ても、意味上大した違ひなく、「非常にこまつた」「私はこまつた」「それはさうです」「全くさうです」などのやうな語のつゞきやうとは全く違つて、下の語と緊密な結合を形づくるのではありません。かやうに他とは遊離し孤立するのがその特徵で、主語にも述語にも修飾語にもならず、又他の語に修飾される事もありません。無論、活用の無い語です。

なほ「あゝ、こまつた」「否、予は知らず」のやうに用ひられる感動詞を、下の語につゞくものと見て、之を副詞と同性質のものとする説がありますが、それは正しくないと思ひます。

【二〇】助動詞

助動詞は大部分は動詞のみに附き、他は體言その他に附きます。さうして動詞に附くものと、その他の語に附くものとは、その意味や職能に違ひがあります。

（一）動詞だけに附くのは、本書に擧げた「考へない」「歩いた」「思ふまい」（口語）、「讀みけり」「勤むべし」の「ない」「た」「まい」「けり」「べし」の類で、動詞が事物の動作・作用などを敍述するに當つて、いろ〳〵の意味を附け加へて、その敍述するのを補ひ助けるものです。受身・可能・使役・打消・過去及び完了・推量・希望・敬讓の助動詞が、これに屬します。（但し、口語の推量の「らしい」だけは別です。）

（二）體言その他に附くものは、本書に擧げた「これは花だ」（口語）、「花の如し」の「だ」「如し」の類で、助動詞自身に敍述する意味を持つて居り、體言のやうな、自身で敍述する力の無いものに附いて、之に敍述する意味を附與し、之と共に一の用言のやうなものとなり、之に述語となり得る力を與へるものであります。口語・文語の指定の助動詞（だ・です、なり・たり）、口語の推量の助動詞「らしい」、文語の比況の助動詞「如し」が、これに屬します。卽ち「あれは學校

です」「あれは父親らしい」（口語）や、「われは學生なり」「父は陸軍中將たり」のやうに用ひられます。處が「何もないのだ」「私もさう考へるのです」「あれも行くらしい」「この勝負は面白いらしい」（口語）や、「われも然思ふなり」「辯說流るゝ如し」などは、用言に附いたもので、用言にも敍述の力がありますが、しかし、この場合にも、助動詞自身に敍述の力がある事は明かであります。

要するに、（一）は敍述の力あるもの（動詞）に附いて、その敍述を補ひ助けるもの、（二）は敍述の力の無いものに附いて、敍述する意味を附與するものであります。どちらも、助動詞の附いたものが一つの用言のやうなものになる事は同じでありますが、助動詞自身の役目（職能）からみれば、かやうに違つてゐます。この二種類を混同して說明することは、意味を不明瞭にする虞がありますから、之を別々に說明しました。

助動詞は、また他の助動詞の下にも附きますが、これは、後に各品詞に就いて細說する處に讓りました。助動詞全體に通ずる特徵は、附屬する語である事と、活用がある事とであります。これによつて他の品詞と區別する事が出來ます。但し、助動詞の中には、語形の變化しないものも少しあります。口語の「う」「よう」「まい」、文語の「じ」及び「らし」がさうです。これは、その用法が、他の語形の變化あるものと同樣ですから、活用あるものと見做すのです。この事は

後章に說明します。（口語のは、初年級用の別記112節參照）

【二一】助詞

助詞は常に他の語に附いて用ひられるもの、卽ち附屬する語で、活用の無いものです。この點で他の品詞と明かに區別する事が出來ます、たゞ、接尾語との區別は問題になります。接尾語はいつも他の語に附いて用ひられるもので、活用するものもありますが、しないものもあります。その活用しないもの、卽ち「私ども」「君たち」「太郎等」「花やかに」などのども・たち・ら・やかになどは、助詞に似た點があります。しかし、接尾語は、他の語に附いて一語を形づくるもので、接尾語が附いて出來た語は、その性質が或單語と同じ事で、何れかの品詞に屬します（「私ども」「君たち」は代名詞で、「太郎等」は名詞、「花やかに」は副詞です）。然るに、助詞のついた「庭の」「菊も」等は、假に一つの語としてみても、性質はどの品詞とも同じでなく、何れの品詞に入れることも出來ません。この點で接尾語と區別出來ます（又助詞が轉じて接續詞となつたもののある事は〔一八〕の別記に述べました）。

助詞の意義や役目は甚だ多種多樣であります。之を正しくわければ、少くとも五六種になり。その各種類の間の性質の違ひは、體言・副詞・接續詞・感動詞などの各品詞の間の相違にも匹敵するほどです。その意味や、用法も、副詞に似たもの、接續詞に似たもの、感動詞に似たものな

どあつて、簡單に論ずる事は出來ません（これは後にいくらか委しく述べる機會があります）。それ故、ここでは、唯「他の語との關係を示し、又は之に或意味を添へる語」と說明しておきました。

助詞と助動詞とは、常に他の語に附屬する語であります。これは、その他の品詞と根本的に違つた性質であります。

【二二】品詞と活用の有無

第二・三章で、各品詞の性質を概說しましたが、ここでふりかへつて、品詞全體を見渡して、その文法上の最も重要な點から見ますと、第一に品詞の中には、活用のあるものと、活用のないものとあります。卽ち動詞・形容詞（形容動詞も）と助動詞とは、活用のある語ですが、それ以外の品詞には活用がありません。隨つてこれ等の活用語は、文の構成に當つて、他の語にない獨特の作用（職能）を發揮するのです。

【二三】品詞と附屬する語・獨立する語

品詞全體を見渡すと、品詞の中には、又附屬する語と獨立する語との別があります。助動詞。助詞は前者に屬し、その他の品詞は後者に屬します。これも文法上重要な差異を來します。卽ち助動詞。助詞は、それだけで主語。述語。修飾語等になる事が出來ませんが、他の語は單獨でそれ

等の語になる事が出來ます。

以上の二項は、既に〔五〕〔六〕で說いた事を繰返したに過ぎませんが、〔五〕〔六〕では品詞分類の基礎知識として述べたのであり、〔一二〕〔一三〕では、分類された品詞の最も著しい特徴として述べたのであります。何れにしても、この二項は文法上重要な事ですから、十分のみこませるやう、希望します。

〔品詞と口語・文語の相違〕

口語と文語との文法上の相違は品詞によつて違ひます。卽ち、活用のある語と附屬する語とに於ては、文法上かなり多くの差異があり、活用のない獨立する語に於てはあまり違ひはありません。從つて動詞・形容詞（及び形容動詞）・助動詞及び助詞に於て特に著しいのです。

〔品詞の判別について〕

以上のやうに、各品詞の性質を考へて置けば、實際に當つて、判斷に迷ふことが少からうと思ひます。しかし、ここに注意しなければならない事は、或語が何れの品詞に屬するかは、たゞ或一つの文に現れた實例だけではわからない場合がある事です。品詞には、いろ〳〵の用法があるものがありますから、違つた品詞でも同じ役目をしてゐる場合があります。例へば、「今日歸つた」「遲く歸つた」「さつき歸つた」は、皆「歸つた」を修飾してゐます。「今日」は名詞、「遲く」

は形容詞、「さつき」は副詞ですが、この實例だけでは、これ等が違つた品詞に屬する事はわかりません。同じ語が色々違つた文に用ひられた場合を考へて、「今日」は主語になり得る事、「遲く」は活用する事、「さつき」は活用なく主語になり得ない事がわかつて、はじめて區別する事が出來るのです。

第二篇　文語の品詞

〔本篇の要旨〕

既に第二・三章で、口語・文語に共通する各品詞の特徴について概説しましたが、本篇に於ては、既に學んだ口語の諸品詞の知識を基として文語の各品詞の性質を知らせようとするのです。

諸品詞の中、名詞・代名詞・副詞及び感動詞は、初年級用新文典で述べた口語の文法が、大抵文語にもあてはまりますので、幾分之を補ふだけに止め、口語の文法と著しい差のある動詞・形容詞（形容動詞も）・助動詞、及び助詞について、比較的委しく述べる事にしました。

〔口語文法と文語文法との異同〕

口語と文語との相違は文法にもあり、單語にもあります。もつとも、文法でも單語でも全然違つてゐるといふのではなく、違つてゐる處と違つてゐない處とあります。違つてゐるといふのは、口語・文語の一方にしか用ひないのであり、違つてゐないといふのは、どちらにも共通するのであります。單語についていへば、文語と口語との單語の相違は漢語に現れる場合が多いやうです。たとへば口語で「行くさき」「つかひみち」といふのを、文語で「前途」「用途」などいふ

類です。勿論これ等の漢語とて、口語で用ひない事はありませんが、口語には文語よりも漢語が少いのが普通です。それに文語は、口語に多く用ひない古語も現れます。今、主として文語に用ひられる副詞・接續詞・感動詞の二三を擧げると次の通りです。

副詞　げに　いかで　豈　やゝ　いと　揚々と　悄然と　確乎と

接續詞　はた　されば　然らば　されど　然れども　然るに

感動詞　あな　あはれ　あはや　すは　やよ　なう　いな

次に文法上の相違について見ると、名詞・代名詞・副詞・接續詞及び感動詞は、口語と文語とで、之に用ひる單語には違ひがある事が屢〻ありますが、その品詞として見た文法上の性質は、大體口語も文語も同樣だといへます。然るに、動詞・形容詞（形容動詞も）・助動詞及び助詞の四つの品詞は、勿論單語の違ひもありますが、又、品詞として見た文法上の相違も相當澤山あります。

第四章　文語の名詞・代名詞

【二四】 名詞・代名詞の文法上の性質

名詞と代名詞、卽ち體言に於ては、之に用ひる單語には相違がありますが、その文法上の性質は、口語と文語とであまり相違はありません。隨つて、初年級用の別記（第六・七章）で述べた事は、大抵文語の體言にも通用します。それで本章では一々詳しく繰返さずに、たゞ最も重要な二三の事項を擧げるに止めました。

【二五】 時や數を表はす名詞

名詞の中、時や數を表はす語は、動詞・形容詞を修飾して副詞のやうに用ひられる事があります。それは文語だけでなく、口語の名詞にもあるのですが、初年級用新文典には擧げませんでしたから、特に口語の例も擧げて置きましたが、次に文語の例を補ひます。

皇軍は今朝敵前上陸に成功せり。

大會は明春開催せらるゝ豫定なり。

夜中敵は退却を開始せり。

新道は舊道に比して一粁近し。

彼の苦學は七年間繼續せり。
日用品の價格は二割騰貴す。

なほ本書には出しませんでしたが、かやうな用法は、文語では時や數の外に、場所・方角を表はす名詞や代名詞にもあります。その例を少し擧げておきます。

山中曆日なし。
登山隊は途中濃霧に襲はれたり。
われ等は日本兵ぞ。眼前敵に遇つて退くを得べきか。
丘上に登つて東方兵火起るを見る。
彼はいづち行きけん、何人も知らず。

なほ、右のやうに用ひられた名詞・代名詞を、副詞に轉成したものと見る說がありますが、本書はそれを採らずに、名詞・代名詞の一用法として取扱ひます。口語に於ける副詞の右のやうな用法については、初年級用の別記28節及び39節に述べて置きました。

【二六】人代名詞と指示代名詞

代名詞を二つに分類し、人に關するものを人代名詞といひ、事物・場處・方角に關するものを一まとめにして指示代名詞といふ事は、口語文法と同樣であります。（初年級用別記41節參照）。

【二七】文語の代名詞

ここには、文語で普通に用ひる代名詞を擧げましたが、實際に現れる代名詞（特に人代名詞）は、まだ澤山あります。併し、それ等はその場〳〵で前後の關係から判斷し得るので、ここは代表的なものに限りました。

〔人代名詞の種類〕

代名詞の種類は、文語でも口語と同樣です（口語については初年級用の別記43節參照）。卽ち人代名詞のうち、話手が自己を指し示すのに用ひるのを自稱（又は第一人稱）といひ、話對手を指し示すのに用ひるのを對稱（又は第二人稱）といひ、話手・對手以外のものを指し示すのに用ひるのを他稱（又は第三人稱）といひます。また他稱はその指し方によつて四種に分れます。卽ち話手に近いものを近稱といひ、話對手に近いものを中稱といひ、話手にも話對手にも近くないものを遠稱といひます。又、話手にわからないもの、又は或一つのものと定めずに何でもよいものを指すのを不定稱と名づけます。これを本書に擧げた表に就いていへば、第一欄の「わ」「われ」は自稱で、第二欄の「汝」は對稱、以下の欄にあるのは全部他稱です。そのうち第三欄の「こ」「これ」は近稱、第四欄の「そ」「それ」は中稱、第五欄の「か」「あれ」「かれ」は遠稱、第六欄の「た」「たれ」は不定稱です。

〔**一音節の人代名詞**〕

一音節の人代名詞のうち、「わ」「た」は主として助詞「が」と共に用ひられます。

わが國　　たが宿

「こ」「そ」「か」は下に助詞「の」が附いて現れますが、意味はその下に來る體言を指し示すだけの意に用ひるのが普通です。

この人　　その子　　かの男

しかし、又他の助詞にも附いて、「これ」「それ」と同様の意味に用ひる事もあります。

こは某の子ならずや。

大將とその部下とは……

尙、「拙者」「小生」「妾（わらは）」「みづから」その他、すべて「私」「我」の意味に用ひるものは自稱の代名詞、「足下」「貴下」「貴殿」「そこ」「御身」など、すべて「汝」「あなた」の意味のものは對稱代名詞と見てよい事と思ひます。

〔**指示代名詞の種類**〕

指示代名詞は、全部廣い意味の他稱に屬するもので、近稱・中稱・遠稱・不定稱に分類される事も、口語の場合と同樣です。

また事物の代名詞「こ」「これ」等（「なに」を除く）が人代名詞の他稱に轉用される事も、口語の場合と同様です。

但し、口語の方角の代名詞は、人や事物を比較選擇する場合に用ひられる事がありますが、文語の方角の代名詞にはその用法がなく、さういふ場合には人代名詞や事物の代名詞を用ひます。

〔一音節の指示代名詞〕

一音節の事物代名詞「こ」「そ」「あ」「か」は、助詞「の」と一緒に、下なる體言を指し示すに用ひる事は、人代名詞と同樣です。「か」は「かの」と用ひる外に、「何かと忙し」「かやう」「かほど」など用ひます。方角の代名詞「こち」「そち」の類を、口語では「こつち」「そつち」のやうに促音にいふ事も注意すべきです。

〔注意〕人代名詞に用ひる語は、前にも述べた通り、文語でも非常に多いのですが、要するに、話手・話對手・第三者（不定のものをも含む）の何れかである事をのみ込ませておけば、實際上困る事はなからうと思ひます。指示代名詞は大體口語と共通ですから、あまり説明する事もないはずです。たゞ指示代名詞を人代名詞に轉用する事がある事を注意すれば宜しからうと思ひます。

〔反照代名詞〕

本書には出しませんでしたが、代名詞には、以上のものの外に、話手・話對手・第三者の何れに拘らず、そのもの自身（人にも物にも）を指す反照代名詞があります。口語では普通「自分」といふ語を用ひますが（初年級用の別記42節參照）、文語で本來の反照代名詞は「おのれ」だといはれてゐます。たとへば

予はおのれの一身を顧るに遑あらず。

汝等まづおのれの不德を恥ぢよ。

士はおのれを知る者の爲に死す。

「おの」はこれと同樣の語で、常に助詞「が」に連つて、「おのれの」と同樣に用ひられます。今普通「各」で表はす「おの〳〵」は、この「おの」を重ねて出來た語です。

又、人代名詞の「われ」、及び「わ」に助詞「が」の附いた「わが」を、右の「おのれ」「おのが」と同じ意に轉用します。それと同時に、「おのれ」を自稱や對稱の人代名詞に轉用する事も、普通の事です。

尙、反照代名詞には、「自己」「自身」などがあります。

第五章　文語動詞の活用（一）

【二八】口語と文語との用言

動詞・形容詞及び形容動詞、卽ち用言は、口語と文語とで文法上の差異がかなりあります。この章から第十章まで、文語の用言について述べるのですが、本書は口語文法の知識を基礎にして文語文法を知らせようとする趣旨なので、兩者を成るべく對照して進むやうにしました。但し、口語の事は大體わかつてゐるものとして、委しくは說きませんでしたから、實際教授に際しては、必要な程度で適宜に之を補はれるやう希望します。なほ口語に關しては、必要に應じて卷末の活用表を利用せられる事を望みます。

【二九】文語動詞の活用形

文語の動詞に活用があり、一つの語の活用した一つ一つの形を活用形といふ事は、口語動詞と同樣です。口語に未然、連用、終止、連體、假定、命令の六つの活用形を認めると同じく、文語でも六活用形を立てますが、口語のに比べると、活用形の名稱が違つたものがあり、各活用形に附く語に異同があつたり、同じ語が附いても用法が違つたりしますから、次に一通り說明します。

〔未然形〕　未然形は打消の意の「ず」に連り、推量の意の「む(ん)」にも連ります。それ故「ず」又は「む(ん)」を附けて見るが宜しい。また助詞の「ば」にも連りますが、これについては已然形のところで述べます。（未然形の形は、口語と文語と殆ど同一です。たゞサ變は、口

語には「せ」と「し」とありますが、文語は「せ」だけです。又「蹴る」は口語では「蹴ら」ですが、文語では「け」です。）

〔連用形〕　連用形は完了や過去の意の助動詞「たり」「き」「けり」、及び助詞「て」に連りまず。それ故、これ等の語を附けて見るがよろしい。尤も、「たり」「て」は音便形に附く事もあります。その方からの誤解を避けるには、口語の場合のやうに「ます」を附けて見ます。この「ます」は文語には用ひませんが、しかし動詞の連用形は、大抵口語も文語も同じ形ですから、この方法は大抵の場合安心して用ひられます（但し、「蹴る」だけは、口語は「蹴り」、文語は「蹴（け）」で、違つてゐます。）なほこの活用形は、「讀み始む」などのやうに、他の用言に連る形なので、連用形と名づけたのです。

〔終止形〕　いひ切る時に用ひる形である事は、口語と同じ事です。しかし、實際の形は口語と隨分違つたものがありますから注意を要します（口語四段の「ある」は文語ではラ變で「あり」、口語上一段の「生きる」「落ちる」等は文語は上二段で「生く」「落つ」等、口語下一段の「受ける」「失せる」等は文語は下二段で「受く」「失す」等、口語カ變「くる」は文語「く」、口語サ變「する」は文語「す」）

〔連體形〕　體言に連る形である事は口語と同様です。しかし、實際の形は口語と違つたものが

あります（口語四段の「死ぬ」は文語ナ變「死ぬる」、口語上一段の「生きる」「落ちる」等は文語上二段で「生くる」「落つる」等、口語下一段の「受ける」「失せる」等は文語下二段で「受くる」「失する」等）。

〔已然形〕　已然形は前後の一致しない意味を表はす「ど」又は「ども」に連ります。それ故「ども」を附けて見るのが、最もわかり易いのです。助詞の「ば」にも連りますが「ば」は文語では未然形にも附きますから、紛れ易いと思ひます（已然形は口語の假定形と同じですが、ナ變だけは「死ぬれ」で、違ひます）。尙、已然形に相當するものを、口語では假定形と呼びました。之については本書〔注意一〕に說いてありますが、要するに口語では、之に「ば」のついたものは假定の意味を示す故、假定形と名づけましたが、文語では、この形に「ど」「ども」「ば」の附いたのは、動作存在を既にきまつたものとして表はすので、それで已然形と命名したのです。さうして、本書〔注意二〕に述べたやうに、意味の上からみれば、口語の假定形と同じ意味を表はすのは、文語では未然形に「ば」を加へた「打たば」「降らば」の類です。かやうに文語の已然形は、口語の假定形とは意味は違ひますが、形からいへば、多くは一致します。しかし、形の違つたのもあります（口語四段の「死ね」に對する文語は「死ぬれ」となり、口語上下一段の「生きれ」「落ちれ」「受けれ」「失せれ」等は、文語では上下二段で「生くれ」

「落つれ」「受くれ」「失すれ」等になります）。

〔命令形〕　命令形は口語の場合と同じく、命令に用ひる形です。しかし、その語形は口語と違つたものがあります。卽ち口語の「ろ」をつけた形は用ひず、「よ」をつけた形だけです。又、口語の「來る」の命令形「こい」は文語では「こよ」となります。

〔注意〕　動詞の活用を敎授するに當つて、口語の場合と文語の場合と同樣に取扱ふのは恐らくは妥當であるまいと思はれます。口語の場合は、生徒は、大抵口語には習熟してをり、活用の形式は知らなくとも、同じ動詞をつかつた種々の言ひ方、例へば「讀まない」「讀みます」「讀む。」「讀む人」「讀めば」「讀め。」などは十分知つてゐる事とおもはれますから、かやうな實例を思ひ出させて「讀ま」「讀み」「讀む」「讀む」「讀め」「讀め」のやうな形を見出さしめる事はさほど困難でないとおもはれます。然るに、文語については、生徒は恐らくはさほど慣れてをらず、從つて、「讀まむ」「讀まず」「讀みたり」「讀む。」「讀む人」「讀めど」「讀め。」、又は「來ず」「來む」「來たり」「來。」「來る人」「來れど」「來よ。」などの種々の言ひ方からして、その各活用形を見出さしめることは、かなり困難であらうと思ひます。それ故、文語の場合は、出來るだけ口語の知識を土臺として、口語と文語とほゞ同樣なものは口語の知識を應用し、それと違つてゐる處は、特に注意してその差異を指摘して、よく記憶させるやうにするの

が必要であらうと思ひます。

かやうな譯ですから、この節には口語の場合と同樣に、文語動詞の各活用形の主な用法をあげて、それから活用を見出し得るやうにしましたが、これだけでは十分徹底させる事が出來にくいかも知れません。その爲に、この別記には、口語の各活用形との形の異同を明かにしておきましたが、實は、これでもまだ十分でないかと思ひます。それ故、次章以下で各種の活用を說明する時に、口語のと比較して、口語の種々の活用が、文語ではどうなつてゐるかを說明すると共に、それ〴〵の活用に於て、口語と文語とどの活用形は同じく、どの活用形は違ふかを明かにする爲、活用の表に口語と文語を並べ擧げ、互に違ふ活用形には○を附けておきました。この點に注意をさせたならば、文語動詞の活用も明かになるであらうと思はれます。

第六章　文語動詞の活用（二）

【三〇】文語動詞の種類

口語動詞の活用の種類は、四段・上一段・下一段・カ變・サ變の五種ですが、文語動詞の活用の種類は、本書に示した通り九種です。卽ち口語にない上二段活用・下二段活用・ナ行變格活用、及びラ行變格活用の四種が加はるのです。

以下文語の動詞の活用を說くにあたつて、口語の活用と比較し、その異る點に特に注意させるやうにしました。

以下文語の各種活用を說明するに當つて、各活用形の用例を擧げましたが、同じ活用形は各種の活用を通じて皆同じ用法のものを擧げ、下にはそれに相當する口語の活用形の例を出して對照させておきました。その場合に、文語も口語も、同じ活用形はなるべく同じ用法の例を擧げるやうにしましたが（未然形は打消の助動詞に附いたもの、終止形は言ひ切りに用ひたものなど）、連用形と已然形とは同じ用法のものを擧げる事は出來ませんでした（連用は文語は「たり」に連るもの、口語は「ます」に連るもの、已然形は文語は「ども」に連るもの、口語は「ば」に連るものを擧げました）。かやうな場合には、口語の活用形に連る語に・を附けて、活用形は同じであるが、用法は違ふ事を示しておきました。たとへば文語四段活用の連用形・已然形「字を書きたり」「字は書けども……」に對する口語の連用形・假定形には、「書きます」「書けば」を擧げたので、「書きます」「書けば」とした類です。

【三一】四段活用

口語で四段活用である動詞は大抵は文語でも四段です。その各活用形は口語と文語と同じことです。口語四段の動詞で文語でナ變・ラ變及び下一段に活用するものは、下に擧げる通りですが、

その外に議・賀・愛・譯・託などの漢語を動詞にしたものは、口語ではサ行四段にも活用させますが、文語では四段に活用することなく、必ず後に述べるサ變に活用させます。

猶、口語で上一段活用にも用ひる「借りる」「足りる」「飽きる」は、文語では「借る」「足る」「飽く」と四段にのみ活用します。

〔注意〕 文語の四段活用は、カガサタハバマラの八行にあつて、口語よりナ行だけ少いのです。これはナ行四段に活用する語が、文語ではナ行變格である爲です。

なほ右の各行の活用語尾はここには擧げませんでしたが、卷末の動詞活用表にありますから參照させられるやう希望します。

〔四段活用の動詞の例〕

練習題は章の終に一括して擧げましたが、各種活用を教へた後には、必ず同種の動詞に就いて、練習させるやうに希望します。よつてここに四段活用の動詞を、少し擧げておきます。

欺く　戴く　驚く　聞く　突く　裂く　泣く　引く　燒く　行く　吹く（以上カ行）

急ぐ　泳ぐ　騷ぐ　注ぐ　塞ぐ　繋ぐ　嗅ぐ（以上ガ行）

明かす　動かす　起す　貸す　隱す　返す　殺す　示す　殘す　施す　亂す　申す　放す（以上サ行）

打つ　勝つ　育つ　立つ　待つ　持つ　保つ（以上タ行）
洗ふ　爭ふ　祝ふ　歌ふ　疑ふ　奪ふ　敬ふ　追ふ　行ふ　買ふ　乞ふ　從ふ　吸ふ　使ふ
願ふ　拾ふ　迷ふ（以上ハ行）
遊ぶ　浮ぶ　叫ぶ　飛ぶ　並ぶ　運ぶ　結ぶ　呼ぶ　喜ぶ　學ぶ（以上バ行）
編む　勇む　痛む　營む　美む　圍む　刻む　賴む　積む　拜む　惜む（以上マ行）
集る　侮る　誤る　祈る　刈る　限る　飾る　歸る　濁る　光る　折る　知る　散る　取る
通る（以上ラ行）

【三二】　ナ行變格活用

口語四段の「死ぬ」が文語ではナ變になります。連體と假定（已然）のところが文語ではちがつてゐます。

ナ變に屬する動詞は「死ぬ」「往ぬ」の二語で、これ以外にはありません。これは記憶させておく必要があります。但し「死ぬ」は現代文としては口語のやうに四段に活用させる事が許容せられてゐます。「往ぬ」は古代語にはありますが、現代の文語としてはめつたに用ひられません。

【三三】　ラ行變格活用

口語四段「有る」は文語でラ變に活用します。卽ち終止の「る」が文語で「り」になるだけの

違ひです。

ラ變に活用するのは「有り」「居り」「侍り」の三語だけです。これは記憶させる必要があります。このラ變の「居り」と「居る」（ワ行上一段）との活用を混同する事がまゝあります。注意しなければなりません。但し「居り」は、現代文ではラ行四段に活用させる事が許容されてゐます。

〔注意一〕　口語の動詞はすべてウ段音で終ります。文語でも、終止形はウ段音で終ると考へてよいのですが、たゞラ行變格のみイ段音で終ります。これが唯一の例外です。

〔注意二〕　口語では「有る」は打消の助動詞には附きません。それ故、本書に擧げた活用形の例にも口語には「あらう」の形を出しました。文語では打消の助動詞にも附きます。

【三四】下一段活用

「蹴る」は、口語ではラ行四段活用と見るのが正當と思ひます。但し他の動詞に連る場合には、下一段活用の形を取ります（本書のこの節の終に述べてあります）。然るに、文語では口語のカ行下一段活用と殆ど同じやうに活用します。但し、口語のカ行下一段の命令形には、「けよ」「けろ」の二つの形がありますが、文語では「けよ」しか用ひません。卽ち文語と口語の差は、未然・連用・命令のところにあります。又この語の活用は、口語ではラ行であるのに、文語ではカ行であつて、行のかはる事も注意すべきです。

この活用に屬するのは「蹴る」の一語だけです。これも記憶させておく必要があります。

〔注意〕　口語で四段活用の「蹴る」は、文語で下一段活用になりますが、口語の下一段活用の動詞は文語ではかへつて下二段になります。

第七章　文語動詞の活用（三）

【三五】上一段活用

「着る」の活用を「口語と殆ど同一」といつたのは、命令形が口語には「きよ」「きろ」の二つあるのに對して、文語には「きよ」だけしか無いからです。

〔注意一〕　本書には、「着る」の一語だけを例として活用を說明しましたから、カ行上一段の語尾しか出てゐません。それ故、巻末の第一表を利用して、他の行に於ける實例と語尾とを示されるやう希望します。以下の諸活用に於ても同樣です。

〔注意二〕　文語の上一段活用に屬する動詞は本書に擧げてある通り數も少い事ゆゑ、是非とも諳記させる必要があります。幸に、これ等は「率ゐる」の外は皆一音節の動詞で、語幹と語尾との區別の無いものですから、イ段の音にル、レの語尾を附けて考へて見れば大抵思ひ出せませうから、非常な困難は無からうと思ひます。「率（ひき）る」も、もとは「引き率（ゐ）る」で、「率（ゐ）る」と

いふ上一段の動詞の上に「引く」といふ動詞の合して出來たものです。

〔注意三〕「用ふ」は、文語では後にいふハ行上二段活用にもなりますが、また「用ゐる」と、ワ行上一段にも用ひられます。

【三六】上二段活用

口語で上一段に用ひるものは、文語では〔三五〕に擧げた、上一段に活用するものの外は、大概上二段になります。文語の上二段は、口語の上一段と、終止形以下の四つの活用形が違つてをります。殊に終止形は非常に違つてをります。

口語の上一段の動詞は、右のやうに文語では上一段か上二段になりますが、その他の活用になるものもすこしあります。口語の「借りる」「足りる」などが文語で四段になることは、既に〔三一〕に述べましたが、その外にも次のやうなものがあります。

一、案・命・信・談などは、口語では「案じる」「命じる」のやうに、上一段にも用ひますが、文語では總べて「案ず」「命ず」のやうに、サ變に用ひます。

二、口語で「重んずる」「先んずる」の類を、「重んじる」「先んじる」のやうに、上一段にも用ひますが、文語では總べて「重んず」「先んず」のやうに、サ變に用ひます。

〔注意一〕「試る（こころみる）」は、マ行上一段ですが、又、之を「試む」として、マ行上二段にも活用させ

ます。

〔注意二〕「恨(怨)む」は口語ではマ行四段に用ひますが、文語ではマ行上二段に用ひるのが普通です。但し、現代の文語ではマ行四段に用ひる事も許容せられてゐます。

〔上二段活用の動詞の例〕

生く　起く　盡く　避く（以上、カ行）

過ぐ（ガ行）

落つ　朽つ（以上、タ行）

怖づ　閉づ　捻づ　恥づ　攀づ（以上、ダ行）

生ふ　戀ふ　強ふ　誣ふ　用ふ（以上、ハ行）

荒ぶ　帶ぶ　大人ぶ　媚ぶ　忍ぶ　煤ぶ　延ぶ　綻ぶ　亡ぶ　佗ぶ（以上、バ行）

恨む　試む（以上、マ行）

老ゆ　悔ゆ　報ゆ（以上、ヤ行）

下る　懲る（以上、ラ行）

〔注意〕　上二段活用の動詞の中、ヤ行に活用するものは「老ゆ」「悔ゆ」「報ゆ」の三つであり、それ等は口語では「老いる」「悔いる」「報いる」など語尾は「い」であつて、ア行かヤ行

かわかりませんから、特にヤ行である事を注意しておきました。

【三七】下二段活用

口語の下一段活用動詞は、ハ行下一段動詞「顋へる」が、文語では「ふるふ」と四段活用になりますが、その他は殆ど皆文語では下二段活用になります。文語の下二段と口語の下一段とは終止形以下四つの活用形がちがつてをり、殊に終止形は大層違つてをります。

〔注意一〕 口語では、下一段活用の動詞で、可能の意味を示すものがあります。

讀めない。　讀めます。　うまく讀める。　讀める人。

讀めればいゝが。（命令形は用ひられません。）

四段活用に屬する動詞は、口語では、大抵右のやうな動詞を成立させますが（「譯す」「略す」のやうな、漢語から來たものも同樣です）、文語にはこの種の動詞はありません。

〔注意二〕 文語の下一段に活用する動詞（「蹴る」）は、口語では四段に活用します。それ故、文語の下二段活用とは關係がありません。

〔下二段活用の動詞の例〕

得（う）　心得（以上、ア行）

明く　懸く　避く　授く　設く　向く　燒く　分く（以上、カ行）

擧ぐ　掲ぐ　妨ぐ　平ぐ　告ぐ　遂ぐ　投ぐ　逃ぐ（以上、ガ行）
馳す　失す　載す　伏す　似す　噎す　痩す　寄す（以上、サ行）
交（混）ず（ザ行）
當つ　企つ　捨つ　育つ　立つ　隔つ　周章つ（以上、タ行）
出づ　撫づ　秀づ　詣づ　愛づ（以上、ダ行）
兼ぬ　重ぬ　尋ぬ　束ぬ　委ぬ（以上、ナ行）
與ふ　誂ふ　訴ふ　憂ふ　押ふ　衰ふ　換ふ　數ふ　協ふ　構ふ　考ふ　加ふ　拵ふ　答ふ
支ふ　從ふ　添ふ　揃ふ　堪ふ　違ふ　貯ふ　湛ふ　稱ふ　携ふ　譬ふ　仕ふ　傳ふ　集ふ
唱ふ　捕ふ　准ふ　擬ふ　控ふ　迎ふ　辨ふ　終ふ　存生ふ　歷ふ（經）（以上、ハ行）
比ぶ　調ぶ　食ぶ　並ぶ　延ぶ　總ぶ（以上、バ行）
暖む　改む　諫む　醒む　占む　沈む　染む　慰む（以上、マ行）
癒ゆ　怯ゆ　覺ゆ　消ゆ　聞ゆ　肥ゆ　越ゆ　凍ゆ　冴ゆ　榮ゆ　聳ゆ　絶ゆ　生ゆ　冷ゆ
殖ゆ　吠ゆ　見ゆ　燃ゆ　萌ゆ（以上、ヤ行）
荒る　溢る　生る　後る　恐る　崩る　勝る　離る　觸る　紛る　亂る　別る（以上、ラ行）
植う　飢う　据う（以上、ワ行）

〔注意〕　ア行下二段とヤ行下二段とは、未然・連用・命令の語尾が、全く同一ですから紛れやすいのですが、ア行は「得」「心得」の二語だけで、他はヤ行です。それ故、ア行下二段動詞を記憶させておく必要があります。又、ワ行下二段の未然・連用・終止は、「ゑ」「ゑ」「ゑよ」で、字は違つてをりますが、音はア行ヤ行及びハ行下二段と同じで混じ易いのですが、ワ行は「植う」「飢う」「据う」の三語だけですから（上古には、なほ他にもありますが）、これだけ記憶させておけば、有益です。

第八章　文語動詞の活用（四）

【三八】　カ行變格活用

カ變の活用形で、文語と口語と違ふ所は、終止形と命令形とだけです。

カ變活用の特徴は、オ段の音が活用形（未然形及び命令形）にある事です。若しこれがキであれば、文語のカ變は、カ行上二段活用と同じやうな形になるのです。

文語カ變に屬する動詞は、「來（く）」の一語です（口語と同樣です）。

【三九】　サ行變格活用

文語のサ行變格活用が口語と違ふ所は未然・終止・命令の三形です。未然と命令は、口語では

「し」「しろ」を用ひる事がありますが、文語ではそれを用ひる事がないだけの違ひです。

文語サ變活用は、連用形を除けば、下二段活用と同じになり、未然形と命令形とを別にして見ると、上二段活用と同様になります。つまりこの兩活用をつきませたやうなのが、サ變活用だといふ事が出來ます。

サ變の動詞は「爲（す）」の一語ですが、本書に示した通り、名詞や漢語等を動詞にするには、この活用にするのが普通です。その場合に語尾がザ行になるものがあります。（「信ず」「論ず」「輕んず」など）そして口語では次のやうなサ變動詞を、またサ變以外に活用させる事がありますが文語はサ變にしか活用させません。

安んず　重んず　輕んず
先んず　諳（そら）んず

案ず　信ず　談ず　感ず　命ず　通ず　應ず　損ず
議す　熟す　察す　譯す　屈す　謝す　略す　祝す　辭す
害す　愛す　託す

【四〇】口語動詞と文語動詞との異同

本書に擧げた表は大體を示したもので、中にはこの表通りにならないもののある事は、既に述

べた通りです。

ここに擧げた文語の諸活用の順序は、口語との對照の便宜に從つたものですが、多くの場合には〔三〇〕に示したやうに、

四段　上一段　下一段　上二段　下二段

カ行變格　サ行變格　ナ行變格　ラ行變格

の順とし、又四段から下二段までを正格活用、カ變以下を變格活用と總稱する事があります。

〔文語動詞の活用の種類の見わけ方〕

一語一語の動詞の各活用形を判ずるには、〔二九〕に示した方法によるべきですが、全體から見て、活用の種類を知るには次の方法によるが宜しからうと思ひます。

一、上下一段及び變格はその所屬語が少い故諳記する。卽ち、

上一段　〔三五〕に示しました。

下一段　蹴る。

カ變　來(く)。

サ變　爲(す)。外に〔三九〕に擧げた類のもののある事。

ナ變　死ぬ・往ぬ。

ラ變　有り・居(を)り・侍り。

以上は常に記憶させておきます。

二、以上の外の活用の種類は、四段と上二段と下二段との三種だけであるが、その何れに屬するかは、打消の「ず」に連る形を見ればわかる。卽ち、「ず」が

讀まず　のやうにア列音につくものは四段活用

恥ぢず　のやうにイ列音につくものは上二段活用

捨てず　のやうにエ列音につくものは下二段活用

と判定するのです。

三、四段・上二段・下二段の何れかである事がわかつても、活用の行(ぎやう)の不明なものがあります。それは違つた行に屬する語尾が同じ發音である場合で、假名遣の問題と關係します。それを區別する方法は

（甲）四段で未然形が「ワ」の音で終るものは、すべてハ行活用。（從つて語尾は「は」「ひ」「ふ」「へ」）

（乙）上二段で

（一）未然形が「イ」の音で終るものの中、

「老い」「悔い」「報い」の三語だけはヤ行、

他はすべてハ行活用（語尾は「ひ」「ふ」「ふる」等）

（二）未然形が「ジ」音で終るものは皆ダ行活用（語尾は「ぢ」「づ」「づる」等）

（丙）下二段で

（一）未然形が「エ」の音で終るものは、ア行・ハ行・ヤ行・ワ行の四種あるが、その中、

「得」「心得」の二語はア行（語尾は「え」「うる」等）

「植ゑ」「飢ゑ」「据ゑ」の三語はワ行（語尾は「ゑ」「う」「うる」等）

ヤ行は終止・連體では「ゆ」「ゆる」となつて、他と區別がある。

以上の外は、ハ行活用（語尾は「へ」「ふ」「ふる」等）

（二）ザ行とダ行は未然形では區別があるが、終止形以下の三活用形では混同する。

「混ぜ」だけはザ行（語尾は「せ」「ず」「ずる」等）

他はすべてダ行活用（語尾は「で」「づ」「づる」等）

第九章　文語形容詞と形容動詞の活用

【四一】文語形容詞の活用形

口語形容詞の活用形は、連用・終止・連體・假定の四つですが、文語形容詞の活用形は、口語に無い未然形が加はつて、五つとなります。

〔未然形〕　未然形は「ば」を附けて假定の意味になります。卽ち「高く（新しく）ば」は、口語の「高い（新しい）ならば」又は「高かつ（新しかつ）たら」の意味になります。意味からいへば、口語の「高（新し）ければ」と同じですが、さればといつて文語の未然形はこれに相當するものだと說くと、却つて混亂を來すと思ひますから、「ば」が附いて、口語で、なら（ば）か、たらで表はす意味になるのが、未然形だ」と敎へるのが、わかり易いだらうと思ひます。口語では、この「く（ゞ）」「しく（ゞ）」といふ未然形は用ひず、假定の意味は「けれ（ゞ）」のやうに假定形を用ひて表はします。

〔連用形〕　連用形は動詞「なる」に連ねて見るとわかりますが、「なる」は音便形に附く事もありますから、助詞「とも」を附けて見るのが安全だらうと思ひます。（連用形の形は口語と同じ事です。）

〔終止形〕　ことばをいひ切る時用ひられる形である事は口語と違ひませんが、形は口語と違ひます（口語「高い」文語「高し」。口語「新しい」文語「新し」。）

〔連體形〕　體言に連る形である事は口語と同様です。しかし形は違つてゐます（口語「高い」文語「高き」。口語「新しい」文語「新しき」。）

〔已然形〕　文語動詞の場合と同じく、「ど」「ども」に連る形で、口語の假定形と全く同じ形です。また「ば」にも連ります。ここに注意すべきは、文語で「新しけれど（も）」といふのに對して、口語では「新しいけれど（も）」といふ言ひ方があります。これは文語では已然形の「新しけれ」に助詞「ど（も）」が附いたもの、口語では、終止形の「新しい」に助詞「けれど（も）」が附いたものと説明せねばならぬのです。「新しいけれ」のやうな活用形はないからです。

〔四二〕 文語形容詞の活用

口語形容詞の活用は唯一種と見られますが、文語はク活用、シク活用の二種に分れます。

〔ク活用〕

文語のク活用は、口語のとくらべると、未然形がある外に、終止と連體のところが違つてゐます。卽ち、口語は、どちらも語尾が「い」の形であるに對して、文語では終止が「し」、連體が

「き」であります。

どんな語が、文語でク活用に屬するかといふと、口語の形容詞の中、語幹が「し」で終らないものが、ク活用に屬すると見てよいと思ひます（この種のものを、口語でも、時としてク活用と呼ぶといふことは、初年級用新文典の〔三四〕の最後に注意しておきました。）

〔注意〕　古くク活用に、「靜けし」「明けし」のやうに、語幹の末に「け」のある形容詞が行はれましたが、それ等には已然形がありません。

【四三】シク活用

文語のシク活用を口語の形容詞と較べると、あらゆる活用形が違つてをります。活用語尾ばかりでなく、語幹までも違つてをります（文語「新（あたら）」、口語「新（あたら）し」）。ところが、之を語全體として文語と口語と較べて見ると、次の通りで、文語には未然形がある外は、終止と連體が違つてゐるだけで、連用と已然とは同じであります。

（文）	新しく	新しく	新し	新しき	新しけれ
（口）		新しく	新しい	新しい	新しけれ

かやうに、口語と文語と全く同じ活用形があるのに、活用語尾を較べて見ると、すべての活用形に亙つて違つてゐるのはどうした譯かといひますと、文語と口語とで、語幹と語尾とのわけ方が

違ふからで、同じ「新しく」を口語では「新し」と「く」とにわけ、文語では「新」と「しく」とにわけるからです。

それでは、どうして文語と口語とでそんなに分け方が違ふのでせうか。もし「新しく」を文語に於ても口語と同じやうに「新し・く」とわけるとすれば、この活用は

(新し) く　く　〇　き　けれ

となつて、その語尾は、ク活用の語尾

(高) く　く　し　き　けれ

とほとんど一致しますが、唯終止形のところには全く語尾がない事になります。それでは終止形は實際無いのかといふと、さうでなく、「新し」といふ形（語幹と同形）が終止形の役目をします。活用語尾がなくて、しかもその活用形の役目をするものがある事は認められませぬ故、自然「新し」を終止形とし、終の「し」を終止形語尾として、「新」を語幹としなければならなくなります。從つて、文語では

(新) しく　しく　し　しき　しけれ

と活用するといふ事になり、どの活用形に於ても口語の活用語尾と一致するものがない事になつたのです。

さうして、口語形容詞の中、語幹が「し」音で終るものが文語ではシク活用になるといつてよいのです。（かやうなものを口語でもシク活用と呼ぶことがある事は、既に初年級用の〔三四〕の終に述べておきました。）

〔注意〕「すさまじ」「いみじ」「おなじ」などは、語尾の「し」が「じ」となりますが、やはりシク活用といひます。

〔シク活用形容詞の語幹〕

右に述べた通り、文語シク活用に屬する語は、文語と口語とでその語幹が違つてゐます。卽ち口語に於ては「新しい」の類の「し」を語幹に屬するものと見ますが、文語では之を語尾と認めますから、自然、口語と文語とで語幹が違ひ、文語の語幹は口語のより「し」だけが少い事となります。

處が、右のやうに見るのは、實は便宜上の事で、「高し」の類の語幹「たか」と同性質のものは、「新し」の類に於ては、「あたら」でなく、やはり「し」のある「あたらし」の形（終止形と同形）であります。例へば、「高橋」「高さ」「高げ」「高からず」に對するのは、「新し橋」「新しさ」「新しげ」「新しからず」です。それ故、やはり「新し」を語幹とし、終止形は語尾が無いものとする說もありますが、前述の如く、語尾がなくて、終止形の役目をするのは異例ですから、

今はこの説を取らなかつたのです。

【四四】 文語の形容動詞の種類

口語の形容動詞は第一種（「面白から（ウ）」「面白かつ（タ）」）、第二種（「靜かだら（ウ）」「靜かだつ（タ）」「靜かだ」「靜かな」「靜かなら」）の二種でしたが、文語のは、口語にない第三種が加はつて、三種あります。表には形容動詞の各活用形の次に、それに附く助動詞・助詞を記して、理解し易からしめました。括弧の中の片假名は、その語です。又活用形に括弧を加へたのは、現代では普通に用ひないものです。

本書の本文に「活用は何れもラ行變格活用に準ずる」といつて、「ラ行變格活用である」と說かなかつたのは、ラ變ならば活用語尾がラ・リ・ル・レだけであるべきですが、形容動詞の語尾は、カラ・カリ・カル・カレ、ナラ・ナリ・ナル・ナレ、タラ・タリ・タル・タレのやうに、その上に他の音が附いてゐるからです。これ等も實際活用するのはラ・リ・ル・レだけですから、これを純粹のラ行變格として、それ以外のものはすべて語幹と見るべきだといふ說があります。この說は理論上甚だ正當であります。しかし、口語と對照する時、第二種の連體形など、口語は「な」であり、文語は「る」であつて、全く違つたもののやうに見えて不便ですから、便宜上、カラ・カリ、ナラ・ナリ、タラ・タリなどを語尾と見ました。さすればその活用語尾はラ變と全

く同一といふ事は出來ませんから、ラ變に準ずるといつたのです。

〔第一種の形容動詞〕

口語のは未然、連用以外の形はありませんが、文語では、あらゆる活用形があります。但し終止の「かり」と已然の「かれ」は古文には用ひた事もありますが、今は普通は用ひません。連體の「かる」は體言に連る時は現代の文語では殆ど用ひませんが、「暑かるべし」のやうに、助動詞に連る時は常に用ひます。

この種類のものは形容詞から出たものである事、口語と同様です。

〔第二種の形詞動詞〕

口語のは「だら」「だつ」「だ」のやうな「だ」の系統のものと、「な」「なら」のやうな「な」の系統のものとが混じてゐましたが、文語のは、すべて「な」系統のものばかりです。さうしてあらゆる活用形を具へてをります。

この種類のものは「に」で終る副詞から出たものである事、口語と同様です。

〔第三種の形容動詞〕

第三種のにあたる形容動詞は口語にはありません。口語では「洋々たり」「泰然たり」を「洋洋としてゐる」「泰然としてゐる」、又「洋々たる」「泰然たる」を「洋々とした」「泰然とした」

のやうに、「洋々と」「泰然と」といふ副詞と「する」といふ動詞とで言ひ表はします。

この種類のものは、「と」で終る副詞から出たものです。

〔注意一〕　文語形容動詞の種類を、その終止形によつて、次のやうに命名する人があります。

第一種　を　カリ活用。
第二種　を　ナリ活用。
第三種　を　タリ活用。

〔注意二〕　形容動詞の取扱方に、原の形に直して、たとへば「暑からず」を「暑くあらず」に還元した上で、文法上の説明を與へるやり方があります。しかし、それは不自然で、ありのままの形で取扱ふのが至當と思はれます。

〔注意三〕　「異り」は元來は第二種の形容動詞ですが、現代文ではラ行四段活用としても用ひます。隨つて「異れり」「異りて」「異りたり」といふ言ひ方も許容されます。（これ等の「り」「て」「たり」は、形容動詞には附かない語です）

〔注意四〕　第二種及び第三種の形容動詞の語尾「なり」「たり」は、指定の助動詞「なり」「たり」と同形で、之と混同しやすいのですが、兩者を區別する方法は、助動詞のところで述べます。（この別記165節參照）

〔活用から見た文語の動詞・形容詞及び形容動詞の區別〕

動詞・形容詞・形容動詞のそれ〴〵の一般的性質は、口語でも文語でも相違はありません。しかし、これ等の間の區別を、その活用の形に於ける相違にもとめる事も大切であるといふ事は、既に口語に就いて述べました（初年級用別記91節及び86節）。然るに、活用の形は口語と文語で違つてをりますから、口語に就いて述べた事は必ずしもそのまゝ文語にはあてはまりません。そこで文語について考へると、文語動詞の終止形は大抵はウ段音で終る事口語と同様ですが、只、文語ラ行變格だけは「り」であつて、イ段の音で終ります。次に形容詞は、終止形は「し」で終り、イ段音です。たゞし、之をイ段音と考へると、ラ變もイ段音で終りますから、之と區別が出來ませんが、幸に文語形容詞の終止形には「し」以外の語尾はありません。又ラ變も「り」以外の語尾はありませんから、次のやうにすれば、その區別が出來ます。

文語動詞——ウ段音又は「り」で終る。

文語形容詞——「し」で終る。

ところが文語の形容動詞は、その活用はラ變と同じで、終止形は「り」で終ります。それ故これはラ變動詞と區別が出來ません。卽ち文語の形容動詞は、活用の形から見れば、ラ變と區別の出來ないものです。之を區別するには、その語の表はす意味とか、もつと委しい各活用形の用法と

かの點まで立ち入らなければならないのです。（殊にその意味は明かに形容詞的のもので、動詞とは區別があります。）かやうなのが文語形容動詞の特質であると考へるより、しかたがありません。

以上を逆にいへば次のやうになります。

終止形がウ段音で終るもの } 動詞
〃 「り」で終るもの } 形容動詞
〃 「し」で終るもの ―― 形容詞

第十章　文語用言の音便形

【四五】 文語動詞の音便形

音便形の形は文語と口語と殆ど同じですが、その現れ方は大きな違があります。卽ち口語では「て」「た」が、たとへば「聞く」「運ぶ」に附くと、必ず音便形をとつて、「聞いて（た）」「運んで（だ）」となりますが、文語では連用形に附いて、「聞きて」「運びて」となるのが普通であつて、たゞ時として音便形に附くといふ有様です。（「たり」も音便形に附きますが「て」ほど屢

は附きません)。要するに文語では、「て」が四段・ナ變・ラ變に附く時には、或は連用形に附きますが、口語では「て」「た」は、いつも音便形に附くといふ事になります。或は音便形に附きますが、口語では「なさいます」などのやうに、音便形とさうでない形と兩樣にいふもの(口語で「なさります」「なさいます」が少しあるのは、口語としては異例です。)それ故、口語では例へば「飛ぶ」が「て」「た」につらなる時の形「飛ん」が音便形といふ事になりますが、文語では「飛びて」と「飛んで」の形がありますから、「飛びて」のやうな連用形からつゞくのを原の形とし、その「び」から「ん」になつて音便形が出來たと考へるのです。以下の説明に「カ行四段のキから」などあるのは、さういふ意味です。

〔注意一〕「ハ四」の動詞にウ音便形・促音便形のある事も、口語と同樣です。

〔注意二〕「サ四」のイ音便形は、文語でも普通ではありません。口語では方言にありますが、標準的なものと認められません。

【四六】文語形容詞の音便形

口語でも「ございます」「存じます」は、形容詞の音便形に附く事は初年級用新文典〔三七〕に述べました。しかし「高うなる」「烈しう降る」のやうな言ひ方は、文語では認められますが、口語では標準的なものと認めない事も、既に述べた通りです。形容詞の音便形も文語では連用形

又は連體形から出來たものとして取扱ふことは、動詞の場合と同樣です。

なほ、文語形容詞のイ音便形は、本書に擧げたやうに、助詞「かな」に連る時に現れるのが普通であります。

〔音便形と假名遣〕

音便形には、促音になつたもの、ンになつたもの、イになつたもの、ウになつたものがあります。これ等は皆發音通り書くのが假名遣上のきまりです。それ故、音便形である事がわかれば、すべて、ン・イ・ウを用ひるべきで、その他の假名を用ひてならない事がわかります（勿論口語の場合も同樣ですが）。次に具體的に二三の例を擧げます。

「死んで」「飛んで」「踏んで」などは、「死にて」「飛びて」「踏みて」などから來た撥音便形ですから、「ん」の代りに「む」などを書いては誤です。

「書いて」「脫いで」などは、「書きて」「脫ぎて」などから來たイ音便形ですから、「い」の代りに「ひ」や「ゐ」を書くと、誤になります。

「言うて」「沿うて」などは、「言ひて」「沿ひて」などから來たウ音便形ですから、「う」の代りに「ふ」を書いては誤です。之を誤る者は少くないやうですから、特に注意を要します。

「深う見ゆ」「烈しう降る」「辱うす」などは、「深く……」「烈しく……」「辱くす」などから出

たウ音便形ですから、之を「深ふ……」「烈しふ……」「辱ふす」、又は「烈しゆう……」など書くと、誤になります。

「悲しいかな」「甚しいかな」などは、「悲しきかな」「甚しきかな」などから來たイ音便形ですから、その「い」を「ひ」や「ゐ」と書くと誤になります。

第十一章　文語の副詞・接續詞・感動詞

【四七】　口語・文語の副詞・接續詞・感動詞

この三つの品詞の文法上の性質は、口語と文語とで、著しい相違がありません。ですから、初年級用新文典で述べた事は、大抵文語の場合にもあてはまります。

ここには、副詞のやゝ特別な用法について、多少補足して述べたのであります。これは勿論口語にも文語にもあてはまります。

【四八】　程度を表はす副詞

副詞の中、程度を表はすもの（必要ある時は「程度の副詞」と呼びます）は、勿論用言を修飾しますが、その外に他の副詞や、或種の名詞を修飾する事があります。本書の（甲）は他の副詞を、（乙）は名詞を修飾した例ですが、なほ文語の數例を補つておきます。

（甲）最も明快に答へたるは甲氏なり。
頗る嚴格に教育せり。
やゝ明かに見ゆ。
極めて懇に教へ諭す。
甚だ穩かに日を過す。

（乙）はるか奥に小池あり。
やゝ東方を指して進む。
建物の最も上は七階にて、ここに食堂あり。
いさゝか三分の遲刻にて、入場を拒絶せられたり。
たゞ一人の力にて、この大事業を完成せり。

（乙）のやうな場合に、副詞に修飾される語は、位置・方角や、數を表はす名詞などに限られてゐます。

【四九】 一定の言ひ方を要求する副詞

副詞の中には、之を受ける用言に、一定の言ひ方を要求するものがあります。一定の言ひ方とは、斷定（肯定・否定）・推量・假定・比況等の敍述の種類をいふのです。本書に擧げたものの

外にも、なほいろ〳〵あります。その主なものは左の通りです。

（一）打消の語を要求するもの

到底　決して　毫も　一（イツ）も　絶えて　をさ〳〵

いまだ　斷じて　いさ　つや〳〵　さら〳〵

（二）推量の語を要求するもの

恐らく（は）　蓋し

（三）打消推量の語を要求するもの

よも（「よも知らじ」）　よもや（口語）（「よもやわかるまい」）

（四）禁止の語を要求するもの

ゆめ

（五）假定の語（「ば」又は「とも」）を要求するもの

たとひ　よし（や）

苟くも　若し

（六）反語を要求するもの

豈（「然らむや」）

（七）比況の語を要求するもの

恰も　さながら　さも

（八）「べし」を要求するもの

すべからく　宜しく

これ等の副詞は、それの修飾する用言の實質（動作、存在、性質、狀態）を修飾するものではなく、その用言の敍述のしかたを委しくし明かにするものです。かやうな副詞を「敍述の副詞」と名づけて、他と區別することがあります。

敍述の副詞には、なほ「誠に」「實に」「必ず」などもあります。

〔**修飾の種類から見た副詞の種類**〕

修飾のしかたから見ると、副詞は以上に述べた程度の副詞・敍述の副詞の外に、今一種あります。それは

靜かに言ふ。　鮮かに飛ぶ。　新たに造る。　明白に答ふ。　切に請ふ。　急に去る。

ふと見る。　につこと笑ふ。　ひらりと飛び上る。　着々と進行す。　悄然と去る。

得々然と語る。

の類であります。これ等は狀態を委しくし定めるものですから、必要のある時には「狀態の副詞」

と呼びます。更に之を細かに見ると、「直ちに」「やがて」のやうに、時に關するものや、「遙かに」のやうに場處に關するものもありますが、狀態の副詞の中に含ませておいて、これ以上分類する必要はありません。（「遙かに」は程度の副詞ともなります。）

〔語を隔てて修飾する副詞〕

文語の副詞も、口語の場合と同じく、修飾される語との間に、他の語の來る事があります。それは敍述の副詞の場合に殊に多く、その例は、本書〔四九〕にも出てゐます。

【五〇】文語の接續詞

本書には、普通に用ひられる文語の接續詞を擧げておきましたが、それは接續詞を意義の上から分類したのです。卽ち

第一の「並に」以下は、並列又は附加する意を表はすもので、その外に「しかして」「しかうして」「しかも」「なほ」などがあります。

第二の「さらば」の類は、前に述べた事から當然の結果として起る事を表はすもので、その外に、「然らば」「然れば」「故に」などがあります。

第三の「或は」の類は、どれか一つを擇び取る意味を表はすもので、その外に「將」なども用ひられます。

第四の「但し」の類は、前に述べた事から當然豫想し得べき結果に反した事、又は前に述べた事に反する事を導くものであります。

〔職能から見た接續詞の種類〕

接續詞はまた職能の上から分類する事が出來ます。卽ち、次のやうな種類があります。

A　一つの文の中の、前の言葉（單語・連語・節）と後の言葉とをつゞけるもの。この場合には、接續詞は兩方の言葉の間に在るのが常です。

東京及び大阪は東西に對立す。

友はスキーを好み、またスケートに巧なり。

事多くして、隨つて身に寸暇なし。

B　前の文の意味を受けて、後の文へつゞけ、形の上に連絡のない二つの文を意味の上で接續するもの。この場合には、接續詞は後の文の最初に來るのが普通です。

快速部隊は猛然突擊せり。されば敵は陣地を捨てゝ退却を始む。

敵は多大の損害を受けたり。されど皇軍は一兵をも失はざりき。

〔他品詞と紛れ易い接續詞〕

接續詞は殆ど皆他の品詞から轉じたものですが、これ等は、用ひ方によつて接續詞となります

が、また、もとの品詞のまゝの資格で用ひられる事があります。これは注意して區別しなければなりません。その主な例は次の通りです。

昨日渉りし河の上流を、今日また越ゆ。（副詞）
進んで河を渡り、また山を越ゆ。（接續詞）

駒の跡はかつ降る雪に埋もれて、後るゝ人や路惑ふらむ（千載集、六）（副詞）
池は水多くして、かつ清し。（接續詞）

八合目より九合目までの道はもつとも峻し。（副詞）
山道は頗る急峻なり。もつとも中腹までは馬背の便あり。（接續詞）

彼の言は或は眞ならん。（副詞）
當時の青年は、劍道或は柔道に熱心なりき。（接續詞）

我が國の首府とは、すなはち東京なり。（副詞）
家に孝子あれば、すなはちその家安し。（接續詞）

期限までにはなほ三日あり。（副詞）
總會は五時に終れり。なほ次の總會は明春開催の筈なり。（接續詞）

つく〴〵思ふに、これはた惡しくはあらざりけり。（副詞）

歸らんか、はた留らんか。（接續詞）

午後舊友と語りて、夜に及びたり。（動詞）

土曜日の午後及び日曜日は、家に在り。（接續詞）

汝等は人によつて事を成す者なり。（動詞の音便形と助詞）

事頗る重大なり。よつて更に考慮すべし。（接續詞）

名匠にしたがつて技を練る。（動詞の音便形と助詞）

社會の進轉は一時も休止する事なし。したがつて絶えずこれに注意せざるべからず。（接續詞）

以上のものが、接續詞になつてゐるかどうかは、意味と用法によつて判斷するより外ありません。なほ、本書第七六頁の終に擧げましたが、名詞「處」「間」などが、接續詞のやうに用ひられる事があります。これは「處」「間」などの名詞が、時としてかやうに（副詞的に）用ひられるものとして取扱つて、接續詞とは見ません。その外、第二種の助詞には、その意味から見れば接續詞と紛れ易いものがありますが、助詞は常に他の語に附屬する語であるに對して、接續詞は獨立し得る語である故、區別出來ます。

【五一】 文語の感動詞

感動詞の文法上の性質は、文語でも口語と全く同一です。つまり感動詞の最も重要な性質は、次の例のやうに、それだけで言ひ切りになり得る事です。

「汝もまた然るか。ああ。」

「然らば尋常に勝負せよ。いざ。」「いざ。」

「汝之を他に告げたるか。」「いな。」

尤も、感動詞は、言ひ切りになり、それだけで一文になる事が出來るものですが、しかし實際では、文の最初に來て、その下に他の語が來る事があります。それも口語と同様です。

〔感動詞と助詞〕

助詞の中には、感動の意を表はすものがあります。

いと安らかなる御振舞なりや。

蟬の聲、聞けば悲しな。

よくも參りけるよ。

この「や」「な」「よ」の類をも感動詞とする説がありますが、從ふ事は出來ません。といふのは、これ等は、いつも上の語に附屬して之と一つゞきに發音されるからです。しかし、これ等も用ひ方によつて感動詞となる事があります。卽ち

や、殿は此處を何處とか思召さるる。

海賊、「や」といひて、扇を投げ捨てゝ、のけざまに倒れぬ。

人の召す御いらへに、男は「よ」と申し、女は「お」と申すなり。（著聞集、八）

この場合に「や」「よ」は獨立して、他の語と離して用ひられます。それ故、感動詞と見るべきです。

第十二章　文語助動詞の種類と活用（一）

〔文語の助動詞と口語の助動詞〕

文語の助動詞は口語よりもその數が多く、口語とは違つた語もあり、その意義用法も口語と同じくないものが少くありません。

口語の助動詞には、語として直接に文語の助動詞から出たものもあり、又意味は文語のと同樣であつても、語として文語のと關係の無い、別の語であるものもあります。文語の助動詞から直接に出たものは、その形（音）の上にも一致又は類似する點があるのが普通です。（意味や用法は、いくらか違つた所もありますが）かやうなものは、本書では、「文語の……は口語の……に當る。」又は「相當する」と說明し、只意味だけが同じで、語としては關係の無いものと區別しておきました。

【五二】 文語助動詞の種類

助動詞の種類は、口語の場合と同じく、その助動詞の意味によつて分類したものですが、分類に當つては、各語の主な代表的な意味だけにより、その他の意味を無視して、一語をばなるべく二種以上にわけないやうにし、且つ出來るだけ口語のと一致させたのであります。口語の助動詞は、受身・可能・使役・打消・過去及び完了・推量・希望・敬讓・指定の九種類ですが、文語には「ごとし」を比況の助動詞として數へるので、口語よりも一種增して十種となるのです。

時の助動詞を設けて、その中に過去、完了、未來を收める說もありますが、その說をとらず、過去及び完了の助動詞を置き、未來の助動詞は推量の中に收めました。その理由は初年級用別記で、口語助動詞について述べたと同樣で（126節134節參照）所謂未來の助動詞は未來を表はすのが、その本質ではないからであります。過去及び完了は、文語では過去と完了との二つにしてもよいのですが、口語ではわける事が出來ませんから、口語と同樣に一つにしました。

【五三】 文語助動詞の活用

文語の助動詞を、活用のしかたによつて分類すると、次の通りになります。（中には、或活用形の缺けたものがあります）

一、動詞と同活用のもの

（a）下二段活用

る	れ	れ	る	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らるれ	られよ
る	れ	れ	る	るれ	○
らる	られ	られ	らる	らるれ	○
す	せ	せ	す	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむれ	しめよ
つ	て	て	つ	つれ	（てよ）

（b）ラ行變格

ざり	ざら	ざり	（ざり）	ざる	ざれ	ざれ
けり	（けら）	○	けり	ける	けれ	○
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	（たれ）
り	（ら）	（り）	り	る	（れ）	（れ）
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ

たり	たら	たり	たる	たれ	たれ
めり	○	（めり）	めり	める	めれ	○

（c）ナ行變格

ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	（ね）

（d）四段活用

む（ん）	○	○	む（ん）	む（ん）	め	○
らむ（らん）	○	○	らむ（らん）	らむ（らん）	らめ	○
けむ（けん）	○	○	けむ（けん）	けむ（けん）	けめ	○

（e）サ行變格

む（ん）**ず**	○	○	む（ん）ず	む（ん）ずる	む（ん）ずれ	○

二、形容詞と同活用のもの

（a）ク活用

べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	○
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	○

（b）シク活用

まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ　○
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ　○

三、特殊の活用をなすもの

ず	ず	ず	ず	ぬ	ね　○
き	○	○	き	し	しか　○
まし	（ませ）	○	まし	まし	ましか　○

四、語形の變化せぬもの

らし	○	○	らし	（らし）	（らし）　○
じ	○	○	じ	（じ）	（じ）　○

右の語形の變化せぬものをも活用があるとみとめたのは、同じ語形ながら、他の語の、終止形と連體形と已然形とに相當する場合に用ひられるからです。この別記「らし」（133節）及び「じ」（147節）參照。

〔文語助動詞の活用形の見出し方〕

文語の助動詞も口語の助動詞と同じく、動詞的に活用するものと形容詞的に活用するものと、

その何れとも違つた活用をするものとあつて、或助動詞の活用がわからない時、その一つ一つの活用形を見出すのに、動詞の活用の見出し方によるべきか、形容詞の活用の見出し方によるべきかを豫めきめる事は出來ません。又助動詞は、その活用形の用法が限られたものがあつて、同じ活用形であつても、あらゆる助動詞に亙つてその活用形に同じ語が附くとも限りません。それ故、一つの活用形を見出すのにも、いくつかの基準を設けておいて、順次に之にあてはめて見て、はじめて目的を達する場合が少くありません。それ故、動詞・形容詞の場合とは幾分複雑になりますが、次のやうにして見出せばよからうと思ひます。

未然形。打消の「ず」又は推量の「む(ん)」又は假定の「ば」に連る形。

連用形。完了の「たり」又は過去の「き」又は動詞「なる」に連る形。

〔注意〕　この中、「なる」に連るものは形容詞的活用の助動詞である。それがまた「き」に連る事があるが、それはその助動詞本來の活用でなく、それに「あり」が加はつて出來た活用（形容動詞第一種と同樣のもの）の連用形である。例へば「死ぬべくなりぬ」の「べく」は「べし」の連用形、「死ぬべかりき」は「べかり」の連用形。

終止形。言ひ切る形。

連體形。「時」「事」「もの」に連る形。

已然形。「ども」に連る形、又は「こそ」を受けて言ひ切る形。

命令形。命令の意味を表はす形。

【五四】 受身の「る」「らる」

口語の「れる」「られる」にあたります。口語では下一段に活用するに對して、文語のは下二段に活用します。表には口語のは擧げませんでしたが、口語のと形の違つた活用形には○を附けて注意させるやうにしました。以下の助動詞も、すべて同樣であります。

〔注意一〕「人知れず苦勞す」の「知れ」（下二段動詞「知る」の未然形）や、「助かる」「授かる」なども意味は受身に取られますが、受身の助動詞の附いたものではありません。活用がかはつて意味がかはつたものです。

〔注意二〕漢文直譯體には、「人の笑ふ所となる」のやうに、「の……所となる」で、「に……る（らる）」の意を示す言ひ方がありますが、助動詞には關係ありません。

〔受身の「る」「らる」の活用例〕

本書には各助動詞は終止形を擧げただけで、他の活用形の例は出しませんでしたから、左に二三の例を擧げておきます。

（未然）○平手政秀は信長を諫めたれども聽かれざるによりて自殺せり。

○一藝あるものは必ず擧げ用ひられん。
○吉宗の將軍となりたる時は、武藝は殆どかへりみられざりき。

（連用）○春は堂宇霞につゝまれて、さながら夢の如し。
○大方は、やにはに斬倒されたり。
○然らばかくの如き新聞は如何にして編輯せられ、印刷せられ、讀者に配布せらるるか。

（連體）○林藏の怪しみもてあそばるること、此處にては更に甚しかりき。
○當時の御庭などは、今もそのまゝ保存せらるるなりとぞ。

（已然）○人にそしらるれども顧みず。
○橋桁を渡ればこそ射らるれ。

（命令）○友には賴みがひのある者と思はれよ。

〔「る」「らる」の接續〕

活用の違ひによつて「る」に接するものと「らる」に接するものとありますが、動詞の活用の種類はこの接續の關係によつて二類にわける事が出來ます。「る」に附くのは、四段・ナ變・ラ變で、その未然形は、ア段の音であり、「らる」に附くのはその他の活用で、その未然形はイ・エ・オ段の音であります。使役の「す」と「さす」とに接續する時もこれと同樣です。右のやうに未

然形の形によつて區別しておけば、記憶に便でせう。

サ變動詞には「らる」が附いて、例へば「賞讃せらる」となるのですが、口語の場合と同じく「賞讃さる」といふ事が現代文語には許容せられてゐます。

〔注意〕以下助動詞の接續は、本書巻末の第一表（動詞活用表）を利用して、あらゆる種類の動詞に附いた形をいはせてみるがよからうと思ひます。

【五五】可能の「る」「らる」

口語の「れる」「られる」にあたります。活用も、動詞への附き方も受身の「る」「らる」と同じですが、唯命令形の無いだけが違つてゐます。

〔可能の「る」「らる」の活用例〕

（未然）○兩がはに木立すき間もなく茂りて、新しき宮の境内とは思はれず。
○こはたやすく得られざるものなり。

（連用）○平生御質素にわたらせられし御有様、一つ〳〵の御品の上にうかゞはれて、無量の感に打たれたり。

（連體）○千年の昔の事も知らるるは古き書あればなり。

（已然）○同じ物にても意の如くに得らるれば價なし。

〔自發の「る」「らる」〕

「る」「らる」は口語の「れる」「られる」と同じく、動作の自然に發する意にも用ひられます。之を自發の助動詞として別の種類にするものもありますが、形は可能のと全く同じで、意味が違つてゐるだけですから、可能の助動詞の一の用法と見做しました。

〔**可能のいひ方**〕

「る」「らる」以外の助動詞で可能の意味を表はすものがあります。「べし」「べかり」はその例です。

思ふ一念、岩をもとほすべし。

その妙技には何人も追隨すべからず。

但し「べし」「べかり」のこの用ひ方は、漢籍讀から來たもので、固有のものではありません。

助動詞以外のもので、可能を表はす言ひ方として、

見るを得たり。讀み得ず。

見る（こと）能はず。

え行かず。　え讀まじ。

のやうなものがあります。この「得」「能ふ」は動詞であり、「え」は普通に副詞と見られてゐます。但し「能ふ」「え」は打消の文の外には用ひません。又「能ふ」は普通「ず」「ざり」に連る外は用ひません。「能ふかぎり……」などの言ひ方を用ひる人がありますが、勿論一般的なもの

ではありません。

【五六】 使役の助動詞「す」「さす」「しむ」

「す」「さす」は口語の「せる」「させる」に當ります。口語では下一段に活用しますが、文語では下二段に活用します。「す」と「さす」との動詞への接續は、「る」と「らる」との場合と同樣です。「しむ」は下二段に活用し、通常文語にのみ用ひられます。演說や口語文に時々用ひられる「しめる」（マ行下一段）は、文語の「しむ」から出たものです。

「さす」がサ變に附く時は「せさす」となるのが正式ですが、現代文には唯「さす」といふ事が許容されてゐます。

〔「す」「さす」の活用例〕

（未然）○日本に小早川隆景ありと知らせんは、また愉快ならずや。

○かりそめにも贅澤の品を用ひさせず。

（連用）○行く〳〵百姓をつのり、かゞり火をたかせ、糧食の用意をなさしむ。

○所持品を途に棄てさせたり。

（連體）○父の在處を何處と知らする者だにあらず。

○有用の材を野に朽ちさするを惜みて、之を擧用す。

（已然）○絶えず習はすれども上達せず。
○源氏三十騎を出して三十の鏑を射さすれば、平家も三十騎出して三十の鏑を射返さす。
（命令）○言はむ者には言はせよ。
○われを都の中にて住みはてさせよ。

〔「しむ」の活用例〕

（未然）○敵將は如何にもして張世傑を降らしめんと欲し、文天祥をして之に書をおくらしむ。
（連用）○大神は大國主命の爲に壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。
○信長、義昭を奉じて京都に入り、將軍の職につかしめたり。
（連體）○直に物見の兵を出してうかゞはしむるに、こは如何に、降つてわいたる敵の大軍。
○民をして飢に泣かしむることなかれ。
（已然）○人を悦ばしむれば、おのれも亦悦ばしめらる。
（命令）○予をして言はんと欲する所を言はしめよ。

【五七】　打消の助動詞「ず」「ざり」

「ず」は口語では「ぬ(ん)」となつて居ます。その活用のし方は口語も文語も、他に類の無いものです。共に命令形がありません。

「ざり」はラ變に活用します。しかしその終止形は現代文には殆ど用ひません。この語は口語には用ひません。

口語には、〔ぬ(ん)〕の外に打消の助動詞として「ない」及び「なから(ウ)」「なかつ(タ)」などがありますが、文語にはそれに相當する語はありません。かやうな場合に文語では「ず」又は「ざり」を用ひます。

〔「ず」「ざり」の接續〕

「ず」「ざり」は動詞及び形容動詞の未然形につきます。口語では、打消の「ぬ(ん)」「ない」は動詞「あり」には附きませんが、文語の「ず」「ざり」は「あり」にも附きます（「あらず」「あらざりき」）

〔「ず」の活用例〕

（未然）○君若し之を止め給はずば、臣切腹せんのみ。

○たとひ勇力ありとも、人和せずば終に勝つことを得じ。

（連用）○文天祥、友の諫をきかずして曰く……

○照りもせず曇りもはてずなか空に光ぞ霞む春の夜の月（本居春庭）

（終止）○病あつければ、治療につとむるは人情の常にあらずや。

（連體）○思ひもよらぬ敵の一隊。
○行き過ぎたる僧は、聞えぬにや、ふりかへらず。
（已然）○桃李物いはねば、誰と共にか昔を語らん。

〔「ざり」の活用例〕

（未然）○人をして低徊去る能はざらしむ。
○その馬の賣れざらんことを恐れて爭ひて價を下ぐ。
（連用）○はからざりき、今日また太平の樣を見んとは。
○かぶとの緒をしめざりし油斷を悔いたり。
○其勢僅に千騎に過ぎざりけり。
（連體）○松は產地廣くして、國中之を見ざる處なし。
○一島未だ去らざるに一鳥更にあらはる。
○義を見てせざるは勇なきなり。
（已然）○ゆききの車馬の絕えざれば、老婆は向ふの側に行きかねたり。
○信長の兵は二千に足らざれど、急に義元の本陣にうち入る。
（命令）○高きに登りて驕らざれ。賤しきをそしり笑はざれ。

第十三章　文語助動詞の種類と活用（二）

【五八】　過去及び完了の助動詞　「き」「けり」〔以上過去〕「ぬ」「つ」「たり」「り」〔以上完了〕

口語の過去及び完了の助動詞は「た」だけでしたが、文語では過去と完了とを分ち、「き」「けり」を過去、「ぬ」「つ」「たり」「り」を完了として取扱ふのが普通です。古文には「き」「けり」と「ぬ」「つ」「たり」「り」との間に、かなりはつきりした區別がありましたが、後世及び現代の文語では、過去のところへ「ぬ」「つ」「たり」「り」を用ひたり、完了のところへ「き」「けり」を用ひたりする事も往々あつて、嚴格に遣ひわけられてゐない上に、口語ではこれらの助動詞に相當する助動詞は「た」一つでありますから、今は過去と完了とを一緒にして、過去及び完了の助動詞としたのであります。但し、文語に於ては、互に流用する事はあつても、大體過去と完了とを語によつてわける事が出來ますから、その中の小區分として完了と過去とをわかち、「き」「けり」を過去、「ぬ」「つ」「たり」「り」を完了とする事としました。ここでいふ過去と完了の意味は、口語の「た」の場合に述べたのと同樣で（初年級用別記126節參照）、口語の「た」にあたる場合が多いのですが、文語の場合には、もつと違つた意味を有するものもあつて、いつでも口語の「た」にあたるのではありません。それは以下個々の助動詞の說明によつて明かになりま

す。

右に擧げた諸語の中「けり」と「つ」とは、現代の普通文にはあまり多くは用ひません。小學校の國語讀本にも、この二語の用ひられた例は、極めて少いやうです。

〔注意〕第五五頁の表の中、括弧の中にあるのは、現代文では、めつたに用ひられない活用形です。

過去と完了とは、屢〻時の助動詞中の小區分として取扱はれてゐますが、過去はたしかに時をあらはしますが、完了は普通いふ「時」とは性質のちがつたものであり、存在態や繼續態(127節)は動作自身の行はれる狀態に關するものですから、時の助動詞の名を廢して、過去及び完了の助動詞としたのです。

〔過去の「き」「けり」〕

この二つは過去の意味を表はすのが常であつて、口語の「た」にあたります。「き」の活用は他に例のない形で、終止形以下三つの活用形しかありません。「けり」はラ變と同活用ですが、やはり終止形以下三つの形だけが用ひられます。唯、甚古く「過ぎにけらずや」の如く未然形「けら」の例がありますが、後には用ひられません。

〔咏歎の「けり」〕

「けり」は過去の外に咏歎の意味にも用ひられます。文法家によつては、咏歎の助動詞といふのを一種立てて、かやうな「けり」と終止形に附く「なり」とを屬せしめますが、本書では「けり」は、過去の「けり」の一用法と見、「なり」はその性質についていろ〳〵議論があり、果して咏歎であるかどうか疑はしく、且つ現代の文語には殆ど用ひませんから、姑く除きました。それで咏歎の助動詞といふものを立てません（161節參照）。

〔「き」「けり」の接續〕

「き」「けり」は連用形に附くのが例ですが、本書に擧げた通り「き」がカ變・サ變の動詞に附く時は特例があります。終止形「き」はカ變動詞には全く附かず、連體・已然兩形は、カ變の未然形又は連用形に附きます。サ變には、「き」は規則通りに連用形に附きますが「し」「しか」は未然形に附きます。かやうな事は他に類例の無い事です。

〔「き」の活用例〕

（連體）○不意を討たれし清秀は遂に討死したり。
○遠くヨーロッパに起りし事件も、數時間にして讀者に報道せらる。
○村の社の掃除や終へし。（連體「上ニやノ係アリ」）はうき手に〳〵此方をさして、語りつゝ來る若き人々。

（已然）○戰亂止むことなかりしかば、孔子大に之をうれへ……。

○大に治績を擧げしかども、その職に居ること能はざりき。

〔「けり」の活用例〕

（連體）○あはれ女の身ほど心うかりけるものはなし。
○左兵衞督なりける在原行平といふ人ありけり。
○形見に一部の法華經をぞ留めける。

（已然）○心ある者ども何れも同意しければ、さらばとて舟坂山に行幸を待ち奉れり。
○しばし待てといひけれども、耳を傾くる者なかりき。

〔完了の「ぬ」「つ」〕

これ等は完了の意味、卽ち動作又は事件が濟み完結するのを表はすのがその本來の意味です。多くは口語で「た」といふ場合に用ひますが、又「てしまふ」「やうになる」「てしまつた」「やうになつた」といふ場合に用ひる事があり、時として轉じて、確めていふ意味になつたものもあります。後には轉じて過去を表はす場合に用ひる事もあります。

「ぬ」はナ行變格に、「つ」はタ行下二段に活用し、すべての活用形が具はつてゐます。「ぬ」「つ」の未然形は、主として「ば」「む」に連り、「なば」「てば」「なむ」「てむ」と用ひます。又連用形は「き」「けり」に連り、「にき」「てき」「にけり」「てけり」となります。

〔「つ」の連用形と助詞の「て」〕

「春は過ぎて夏は來れり」「行きて問ふ」「讀みて聞かす」の類の「て」を、「つ」の連用形と見て、助動詞として取扱ふ人があります。成程起源からいへば、この取扱ももつともですが、本書では「て」の實際の用法から見て、之を助詞としました。たゞ「き」「けり」に連る場合の「て」だけを、「つ」の連用形と見るのです。

〔「ぬ」とナ變動詞〕

完了の「ぬ」は、ナ變動詞には附かない事になつてゐます。卽ち「死にぬ」「往にぬる人」などの言ひ方はしないといふ事です。但し近古以後のものには、「にけり」が「死ぬ」に附いて、「死ににけり」となつた例などが見えます。

〔「ぬ」の活用例〕

(未然) ○此の事江戸に聞えなば必ず惡しかりなん。

(連用) ○朱雀門まで一夜が間に灰燼となりにき。

○年を經し絲の亂れのくるしさにころものたてはほころびにけり。

(終止) ○鎌倉宮にまうでては、盡きせぬ親王のみうらみに、悲憤の淚わきぬべし。

(連體) ○色は匂へど散りぬるを、わが世誰ぞ常ならむ。

○あわてて船に乗つて、内裏を焼かせぬる事こそ口惜しけれ。

（已然）○御年三十にならせ給ひぬれども未だ親王の宣旨をだに蒙らせ給はず。

（命令）○はや船出してこの浦を去りねと宣はす。

〔「つ」の活用例〕

（未然）○只今敵を滅してん。

（連用）○平家の兵ども十四五騎落ち重つて、つひに兼綱を討つてけり。

（終止）○天をもはかりつべく、地をも度りつべし。たゞ人のみ防ぐべからず。

（連體）○ほと〳〵ぎす鳴きつる方を眺むれば……。

○かたち正していひいでぬ。此の方面の戦闘に、二子を失ひ給ひつる、閣下の心如何にぞと。

（已然）○酒飲ませつれば、忽ち狂人となりて……。

○さればこそ汝を遣しつれ。

（命令）○其の君我に得させ給ひてよ。（今昔物語、巻二六　第七）

〔完了の「たり」「り」〕

「たり」と「り」は本來は（一）動作が濟んでその結果が狀態として存在する有樣（存在態又は既然態。初年級用別記126節參照）か、又は（二）動作が持續し繼續する有樣（進行態又は繼續

態）をあらはし、（一）の場合は今の口語の「てゐる」又は「てある」、（二）の場合は口語の「てゐる」とほゞ同じ意味のものとおもはれます。

（一）存在態

その翁、頭に雪を戴けり（戴いてゐる）

戸毎に國旗を掲げたり（掲げてある）

紙に書ける文字（書いてある文字。書いた文字）

洋服着たる人（着てゐる人。着た人）

（二）進行態

時計は絶えず時を刻めり（刻んでゐる）

美名を今に傳へたり（傳へてゐる）

（一）の場合で體言に連る時は、口語でも「た」を用ひます（初年級用別記126節）。後になると、これ等の助動詞で過去や完了をも表はすやうになりました（その時は大抵口語の「た」にあたります）。

「たり」も「り」も共にラ變に活用します。すべての活用形が具はつてゐますが、現代の文語では「たり」の命令形は殆ど用ひません。又「り」も終止・連體の二つの外はめつたに用ひません。

〔「り」の接續〕

「り」は四段動詞の已然形と、サ變動詞の未然形に限つて附きます。

讀めり。　勉強せる時。

隨つて「有れり」「受けり」のやうな言ひ方は、誤謬となります。この誤は、下二段動詞に於て殊に多いやうですから、特に注意を要します。

但し「死ぬ」（ナ變）「恨む」（上二段）「居（を）り」（ラ變）、及び形容動詞の「異り」は、現代文では四段に活用させてもよい事になつてゐますから、他の四段動詞のやうに「死ねり」「恨めり」「居れり」「異れり」とつゞけても差支ない事になつてゐます。

〔「たり」の活用例〕

（未然）○人は形・ありさまの勝れたらんこそあらまほしかるべけれ。

（連用）○よしと思ひたらば、直ちに行ふべきなり。

○やがて兵を高地に引きまとめたりしが、時すでに遲かりき。

（連體）○黑・白・赤の三色を横に染分けたるものはドイツの國旗なり。

（已然）○敵の引足になりたるを見て銃火をあびせかけたれば、敵は見る間にばた〳〵と倒れたり。

○樺太が離れ島なることは、此の探檢によりて略知ることを得たれども、更に之を確めんとせり。

〇年こそ老いたれ、心は若人に劣らず。

（命令）〇その修行者をば暫く然て置きたれ。（今昔物語、巻三一　第一四）

〔「り」の活用例〕

（未然）〇大方幸おはしまさむ人の、和歌の道おくれ給へらむは、ことのはえなくや侍らまし。

〇臨幸の嚴重なることも侍らんに參りあへらば、その時の進退いかが侍るべからん。

（連用）〇牛車雜色の裝束なんどいそぎ獻り給へりければ……。

（連體）〇めぐらせる青垣山にこもれる大和うるはし。

〇頂上に達せるは午後三時なりき。

〇あらゆるものは闇といふ黑きとばりに覆はれて安き眠に入れるなり。

（已然）〇早く思ひ立てれば、こたびこそ出で立ためと、その急ぎに心あわたゞし。

（命令）〇此に暫く居給へれ。（今昔物語、巻一六　第一五）

【五九】推量の「らし」「む(ん)」「むず(んず)」「らむ(らん)」「けむ（けん）」「べし」「まじ」「じ」「まし」「めり」

何れも推量を表はす事は勿論ですが、その間に多少意味の違ひがあります。

口語の推量の助動詞は「らしい」「う」「よう」「まい」の四つで、文語のは、之とくらべて、

語も多く、意義・用法も之と異る所が少くありません。

〔注意〕推量の助動詞の中「じ」「まじ」は推量に打消の意を兼ねた語ですから、之を打消の助動詞として取扱ふ人もあります。しかし推量に入れた方がよい事は、口語の「まい」の場合と同様です（初年級用別記125節）。

〔推量の助動詞の接續〕

終止形につく「らし」「らむ」「べし」「まじ」「めり」がラ變及び形容動詞に限つて連體形に附くのが、この類の助動詞に於ける接續上の著しい特例です。

〔らし〕

口語の「らしい」にあたり、根據ある推定です。終止形に附き、ラ變及び形容動詞にかぎつて連體形に附きます。語形は變化しませんが、その用法から見れば、終止・連體・已然の三つに當りますから、この三つの形があるものと見るのです、但し、その連體形及び已然形は、左例のやうな「ぞ」「こそ」に對する結び（〔六九〕〔一二〇〕參照）として用ひられるだけで、連體形といつても體言には連らず、已然形といつても「ど」にも「ば」にも連りません。

雪消の水ぞ今まさるらし（古今卷六）（連體形）

ぬき亂（みだ）る人こそあるらし白玉の間なくも散るか袖の狹きに（古今卷十七）（已然形）

近世には之を、

(連用)	(終止)	(連體)
らしく	らし	らしき

と活用させるやうになり、又、動詞にしか附かなかつたのを、名詞其他にも附けるやうになりました。現代の文語では、大方この用ひ方に從ふ事になりました。

尙、「男らし」「學者らし」のやうに、名詞に附く「らし」は、普通、接尾語として取扱はれます。

「む（ん）」

口語の「う」「よう」に當る助動詞です。「う」「よう」と同じく、推測し推定する意味の外に、自己の決意をあらはす事があります。

千萬人といふとも我往かむ。

未來の事を豫想していふ場合が多い爲、普通に未來の助動詞として取扱はれてゐますが、いつも未來の場合に用ひるとは限りません。又、未來の事に用ひても、たゞ未來の事である事を示すのではなく、やはり推測決意を示すのですから、未來の助動詞といふ名は、この語の意味を誤解せしめる虞があります。それ故、これを推量の助動詞とする事にしました（「む」を推量の助動詞

として取扱ふのは、從來いくらも例があります。しかし、それは大抵、未來と推量とに兩屬するものとしてゐるのであります）。

〔「む」の活用〕

「む」はマ行四段に活用しますが、終止形以下の三つの形しかありません、その終止形・連體形はンと發音し、發音のまゝに「ん」と書く事が少くありません。口語の「う」「よう」は普通、體言に連りませんが、「む」の連體形は、いろ〳〵の體言に連ります。

あらざらむこの世の外の思出に……。

思はむ子を法師になし……。

我なからむ後は……。

又、「む」の已然形「め」は、「こそ」に對する結び（〔六九〕〔一二〇〕の係結參照）になる外には、「ど（ども）」に連るだけで、他の已然形と違つて「ば」には連りません。

〔「む」の活用例〕

（終止）○やがて友も訪ね來ん。

（連體）○神々しさたとへん方なし。

○誰か知らん、この事あるべしとは。

（已然）○よき人は自ら心を動かさざらんやうこそあらめど、重宗それまでの事は叶ひ難し。

○さらば關白殿御一所こそ如何なる御目にも逢はせ給はめ、四十餘人迄の人々の、事に逢ふべしやは。

「「むず（んず）」」

「むず」は「む・と・す」から出たといはれ、主として近古に行はれました。發音に從つて「んず」とも書かれます。

「むず」はサ變に活用しますが、終止・連體・已然の三形の外、普通に用ひられません。各動詞の未然形に附きます。意味は「む」に似て、大抵口語の「う」「よう」と同樣の場合に用ひられますが、「む」よりも強く響きます。

「「むず（んず）」」の活用例」

（終止）○若し此事もれぬることならば、行綱先に失はれなんず。

○城氏は義仲を安う討つて參らせてんず。

（連體）○身の只今滅びんずる事をも顧みず。

○一門の運命既に盡きんずるにこそ。

（已然）○義宗をば副將軍をせさせんずればとて、名をば副將と附けたりき。

○父の素意を達したらんこそ孝子の則にてもあらむずれ。

「う」「よう」と同じく、推測にも、話手の決意を表はすにも用ひられます。又體言に連る事の珍しくないのは、「む」と同様です。

我と思はむずる者共は、物の具して急ぎ參れ。

なほ、この語は、近古では推量の「らむ（らん）」に連ねて、一語のやうに用ひる事が珍しくなかつたのです。

命ばかりは、さりとも乞ひうけ給はんずらん。

終に如何なる目にか逢はんずらん。

〔**「らむ（らん）」「けむ（けん）」**〕

「らむ」は現在の事實に就き、「けむ」は過去の事實に就いて想像する語です。その意味からいへば「らむ」は口語の「だらう」に、「けむ」は口語の「ただらう」又は「たであらう」に當ります。「らむ」は終止形に（ラ變及び形容動詞だけは連體形に）、「けむ」は連用形に附きます。共にマ行四段に活用し、終止形以下三つの形しかありません。その終止形及び連體形は、發音通りに「らん」「けん」とも書きます。

〔**「らむ」の活用例**〕

（連體）○親の科に當り給ふらむこそ淺ましけれ。

○「責一人に」といふらむことにやとあぢきなし。
○小僧は乘りぬ自轉車に。國に母をや殘すらん。

（已然）○こは大技術家の手にこそなりつらめ。
○水練の者多くあるらめども河の面を見ざる故に、河へ入らんとする者もなかりけり。

〔「けむ」の活用例〕

（連體）○婦人は氣の毒とや思ひけん、僧をば待たせ置き、おのれは主人の迎へにとて外に出行きけり。
○そのかみ此處にいかめしく向ひあひけん英雄の姿、今まのあたり見るが如し。

（已然）○其も最後のありきとは後にこそ思ひ合せ給ひけめと哀なり。
○人々の心の中、さこそは嬉しうも又あはれにもありけめ。

〔「べし」「まじ」〕

「べし」は、口語では正しく之に當る語はありません。その推量の意味は、多少理論上から推していふやうな心持があります。「む」を推量に用ひたものよりも、いくらか語氣が緩かです。

「べし」はいろ〳〵の意味で用ひられます。

（一）推量（「だらう」）

明日も晴天なるべし。

（二）義務（「なければならない」）又は「當然爲すべき筈」、もしくは、「さうあるべき筈」

國民として盡すべき道

（三）命令（「せよ」）

汝、明日再び此處に來るべし。

（四）可能（「ことが出來る」）

一念は岩をもとほすべし。

猶「む」と同じく、決意をあらはす事もあります。

今日より斷然禁酒すべし。

「まじ」は、口語「まい」に當ります。意味用法は、大體「べし」に同じく、「べし」の打消と見てよいと思ひます。卽ち

（一）推量（「ないだらう」）

世にかほどの愚者はあるまじ。

（二）義務（「してはならない」）

言ふまじき事を言ひ、行ふまじき事を行ふ。

（三）禁止（「するな」）

ゆめ怠るまじきぞ。

（四）決意（「まい」）

我は再び彼に逢ふまじと決心せり。

「べし」「まじ」は終止形に附きますが、ラ變及び形容動詞には連體形に附きます。それ故「す（爲）べし（まじ）」「く（來）べし（まじ）」「ふ（經）べし（まじ）」「盡くべし（まじ）」「する べし（まじ）」「來る べし（まじ）」「盡くる べし（まじ）」などは誤です。

「べし」はク活用に、「まじ」はシク活用に活用します。

口語の「まい」は「まじ」から出た語ですが、「まい」は體言に連る事は殆どありませんが、文語の「まじ」は體言に連ります（「あるまじき事」「持つまじき望」など）。

〔「べし」の活用例〕

（未然）○法華問答講あるべくば三年が命を延べて奉らん。

（連用）○何時までもかく單純なるものに滿足すべくもあらず。

○大極殿の跡はるかに指點すべく、羅城門の跡今も殘れりといふ。

（連體）○わが國の新聞は、數十年の間に驚くべき發達を遂げたり。

○枯れ損ずる樹木の多かるべきに、殆ど皆勢よく根づきたり。

（已然）○小勢の方はおのづから決心堅く、隊も整ふべければ、必ず勝たん。
○紫宸殿にてこそ御即位はあるべけれ。

〔「まじ」の活用例〕

（未然）○何とて、ともかうも返事をば申さぬぞ。参るまじきか。参るまじくばそのやうを申せ。浄海はからふ旨あり。

（連用）○さることあるまじく覚えければ……。

（連體）○全く人づてにては申すまじきことなりといふ。
○いかにも叶ふまじき由答へたり。

（已然）○冬がれの景色こそ秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。

〔「べかり」「まじかり」〕

もと「べし」「まじ」に「あり」の附いて出來たもので、丁度、形容詞の連用形に「あり」が附いて出來た第一種形容動詞と同性質のもので、その活用も第一種形容動詞と同様であります。しかし普通は、「べからず」「べからざる」「べかりき（けり）」「まじかりき（けり）」の外、あまり用ひられません。

〔「べかり」「まじかり」の活用例〕

（未然）○我等は外國の國旗に對しても、常に敬意を表せざるべからず。
○然るべからざる由を申し送る。
（連用）○平治にも既に誅せらるべかりしを、御恩を以て頸をつがれ參らせたり。
○去んぬる七日の大地震も、かゝるべかりける前表にや。
○人には言ふまじかりけり。

〔「じ」〕

「む」に對する打消で、意味は口語の「まい」にあたります。卽ち「む」と同じく、推測や決意を示します。推量の時は、また口語の「ないだらう」と同義になりますが、

予は誤を重ねじと誓ひぬ。

などは決意を示すものです。

「じ」は未然形に附きます。語形變化はありませんが、用法上から見て、終止以下三つの形があるものと認められます。

「じ」の連體形としては、古くは「幾世しもあらじ我身を」（古今、卷十八）、「出離得脫を願はんにはしかじものを」、「人に見知られじが爲に」など現れ、今も用ひる成語に「負けじ魂」などがありますが、一般に廢れました。

その已然形は、古い歌には

人はなど訪はですぐらむ風にこそ知られじと思ふ宿の櫻を（新續古今）

のやうに、「こそ」に對する結びとして用ひられた事がありますが、しかし、稀な例であり、又「ど（ども）」「ば」に連つて用ひられる事もありません。

〔「まし」「めり」〕

この二語は中古に多く用ひられ、江戸時代に入つてからも擬古文に現れますが、現代文にはめつたに用ひられません。

「まし」は未然形に附き、

頼朝といふ人もなく泰時といふ者も無からましかば、この日本國の人民はいかゞなりなまし。

のやうに、本來は實際さうでない事を假にさうだと想定していふ語ですが、又「む」と同樣の意味でも種々の場合に用ひられます。上代には、「ませ」といふ未然形があつて、「ば」に附いて「ませば」と用ひられ、中古にも歌には引續いて用ひられましたが、中古に新に「ましか」といふ已然形が出來て「ましかば」が「ませば」に代つて用ひられたのです。

「めり」は終止形に附き（但し、ラ變及び形容動詞には連體形に附く）、

立田川紅葉みだれて流るめり。

のやうに用ひられます。卽ち口語の「……ノ様ニ見エル」「……様子ダ」に當ります。その連用形に「めり」があり、「めりき」と用ひた例がありますが、めつたに用ひられません。

〔「めり」の活用例〕

（連用）○建保二年九月の頃、（歌ノ）勝れたる限りぬき出で給ふめりしかば、いづれかおろかならん。（しかはきの已然形）。

（終止）○翁は、幾歳（いくつ）といふこと覺えずといふめり。

（連體）○三郎君と聞えしは、この春なむ大夫といふめる。

（已然）○この頃も、九十、百の人、おのづから聞え侍るめれど、この翁どもの命は稀なる事、甚深々々希有

希有なりとは、之を申すべきなり。

〔「まし」の活用例〕

（終止）○かゝるべしと知りたらば今井を勢田へはやらざらまし。

（連體）○とやせましかくやあらましと僉議する處に。

○思ふことなくてぞ見ましほの〳〵と有明の月の志賀の浦波。

（已然）○まのあたり立交りて見ましかば、如何に心憂からん。

【六〇】希望の「たし」「まほし」

「たし」に當る口語は「たい」ですが、「まほし」は口語には廢れました。口語の「たがる」にあたる文語助動詞はありません。「たし」は文語のク活用に、「まほし」はシク活用に活用します。

「たし」は動詞の連用形に、「まほし」は未然形に附きます。

〔「たかり」「まほしかり」〕

「たし」及び「まほし」が動詞「あり」と合體して一語になつたものは、第一種形容動詞と同じ活用をしますが、未然形と連用形と連體形の外は用ひられません。

逢ひたからむ（ず）。

御見參に入りたかりつれども……。

さほど見まほしからず。

行かまほしかりしかど……。

〔「たし」「まほし」の活用例〕

（未然）○人にほめられたくば、ほめられんやうにふるまへかし。

（連用）○一日も早く御目にかかりたく存じ候。

（連體）○家にありたき木は松櫻。

（已然）○いづくへ行き分れたりとも、死は一所にてこそ死にたけれ。

○母の御許へ御文參らせたけれども、筆の立てども覺えず。

（連用）○下つ方は、如何にもして一日も世に在らまほしく思ふがならひなり。

（連體）○さし昇る朝日の如くさわやかにもたまほしきは心なりけり。

○少しの事にも先達はあらまほしきものなり。

（已然）○愛敬有りて詞多からぬこそ厭かず向はまほしけれ。

○弓箭に携らん者の謀は、尤もかくこそあらまほしけれ。

第十四章　文語助動詞の種類と活用（三）

【六一】敬讓の「る」「らる」「す」「さす」「しむ」

〔敬讓の「る」「らる」〕

これに相當する口語は「れる」「られる」です。活用は口語のは下一段ですが、文語のは下二段です。但し、口語では命令形を用ひませんが、文語では普通に用ひます。その各活用の例は次の通りです。

（未然）○殿下、これを夢にもしろし召されず。

○これほどの事を、などか今まで告げ知らせられざるらん。

（連用）○主家に御暇をぞ乞はれける。
○建御雷命が大國主命と會見せられしは此處なりといふ。
（連體）○かたゝ〳〵の驚かるるやうに己も驚き居るなり。
○重ねて御使を派遣せらるるより外あるべからず。
（已然）○殿は疾くしろし召さるれども、仰せ出されず。
○大將は固く止められるれど、若武者共は進んで戰を挑む。
（命令）○疾く參られよ。
○必ず心せられよ。

〔敬讓の「る」「らる」の接續〕

「る」「らる」の動詞への附き方は、受身の「る」「らる」と同樣ですから、サ變動詞に附くと「せ・らる」となるのです。しかし、受身の場合と違つて、「勉强さる」「周旋さる」のやうな言ひ方は、文語には用ひられません。

〔敬讓の「す」「さす」「しむ」の活用例〕

この三語は、活用も、動詞への附き方も、文語の使役の「す」「さす」「しむ」と同じですが、敬讓の意の時は、未然形が敬讓の助動詞「らる」に連るか、連用形が敬讓の意を表はす動詞「給

ふ」「ましまする」「おはしまする」などに連るか、この二つの場合の外、現代文には殆ど現れません。

未然形

臨ませ（しめ）らる。　教を垂れさせらる。

連用形

臨ませ（しめ）給ふ。　定めさせ給ふ。　寸陰を惜ませましまする。

【六二】 敬譲の「給ふ」「奉る」「参らす」「候ふ」「侍り」

「給ふ」「奉る」「参らす」「候ふ」は敬譲の動詞で、助動詞でありませんが、動詞としての本義を捨て、他の動詞に附いて、敬譲の意を添へるだけに用ひられる事があります。そのうち「給ふ」は、被敬者の動作につけ、「奉る」「参らす」は被敬者に對する動作につけ、「候ふ」は口語の「まする」のやうに、自他の動作にわたつて廣く用ひられます。

君も快げに笑み給ふ。

君の御心を安んじ奉る。

幼主を扶け参らす。

城は早攻め落され候ふ。

古くは動詞の「侍り」も、

いかでさる事を知りはべらん。
きたなき所の焼けはべりしかば……。

のやうに丁寧の意味を添へるに用ひられましたが、「候ふ」や口語の「ます」と違つて、被敬者の動作・存在を表はす語に附けて用ひる事はありません。

右の「給ふ」「奉る」「参らす」「候ふ」及び「侍り」の類は、多くの文典に於て助動詞として取扱はれてゐます。しかるに助動詞は決して獨立して用ひられる事がないのに對して、右の諸語は「御衣を給ふ」「歌を奉る」「文を参らす」「某も候ふ」「こゝに侍り」など獨立した動詞としても用ひられます。それ故、之を助動詞と同様に見るのは不穏當で、少くとも助動詞に準ずるものとしなければなりません。私は、むしろ、これ等を獨立し得べき動詞が從屬的に用ひられて他の語を補助するものと見、かやうに用ひられた場合は、之を補助動詞とでも呼ぶがよからうと考へてをります。

【六三】　指定の「なり」「たり」

これは口語の指定の「だ」と同じ意味です。これまで擧げた各種の助動詞は、動詞以外のものには附きませんが（但し推量の「らし」には多少例外があります。133節參照）、指定と比況の助動詞は、動詞以外のものに附くので、それが著しい特徴になつてゐます。

〔なり〕

これは口語の「だ」にあたります。口語の「だ」の活用には「だ」「だら」「だつ」のやうな「だ」の系統のものと、「な」「なら」のやうな「な」の系統のものと二種のものが混じてゐますが、文語の「なり」は「な」の系統のものに正しく相當するもので、ラ變に活用します。本來は助詞「に」と動詞「あり」との合體したものです。(「花なり」は「花にあり」)

「なり」は體言の外、用言の連體形にも附きますが、もと〳〵その連體形は、下に體言があるやうな意味に解されますから、體言の資格をもつもので、「なり」は體言に附くのが本來の用法だといふ事になります。

「なり」は又左例のやうに、助詞に附く事があります。

友の庭球を始めしは、「中學三年生の時より」なり。

競技の行はるるは、「午後五時頃まで」ならん。

賛成せる主なる者は、「甲氏・乙氏など」なりしが、公然反對せるは、「丙氏のみ」なりき。

これ等は、「　」の中の語全體が一體言の資格に立つもので、「なり」は形の上では「より」「まで」等に附いてゐますが、實は一まとめにした「　」の中の語句に附いたのです。この種のものの中には、

予の苦言を呈するは、「君の將來を思へば」なり。
彼の反對せるは、「大なる理由あるによりて」ならん。
友の贊成せるも、「その理由にて」なりき。

のやうに、意味の上から言へば、「　」の中の語に或意味を補つて考へなければならないものはありますが、しかし「なり」が助詞そのものに附いたのでない點では、何等異る所がありません。

「咏歎の「なり」」

指定の「なり」は連體形に附きますが、また古く終止形に附くものがありました。

男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり（土佐日記）
秋の野に人まつ蟲の聲すなりわれかと行きていざとぶらはむ（古今集、四）

これ等の「なり」を咏歎の意に解して、咏歎の意味の「けり」（118節參照）と共に咏歎の助動詞の中に入れる說もありますが、この「なり」については色々異說もあり、私自身としても、之を咏歎の意味に解するのは誤で、「なり」は本來の指定の「なり」と同じものであらうと考へてをりますし、又、これは中古の語法で、現代文には現れませんから、本書には省きました。しかし、この種の「なり」が指定の「なり」と同じものであるとしても、終止形に附く事は之と違つてゐますから、さういふ意味で別に出すことも理由はありますが、之を咏歎の助動詞とするのは贊成

出來ません。

〔「なり」の活用例〕

（未然）○これ海神のたゝりならん。
○こは誠に驚くべき事ならずや。
○畢竟、皆之を大切に取扱ひたるによるならん。
○近き處ならば早速上り候て御世話致すべく候へども……。

（連用）○缺點なき電燈の出現は、當時の人の最も希望する所なりき。
○器にはしたがひながらいはがねもとほすは水の力なりけり。

（連體）○七十五尺の大鳥居とは、これなるべし。
○われ等は寸時も日本人なることを忘るべからず。

（已然）○孝養の心なきものも、子持ちてこそ親の志は思ひ知るなれ。
○余は生れながらの將軍なれば、此の後は諸君を家臣として待遇せん。
○大石良金は、年僅かに十五歳なれど、智勇人にすぐれて事を共にしたり。

〔「たり」〕

これはいつも體言に附き、それ以外の用法はありません。ラ變に活用します。本來は助詞「と」

と動詞「あり」との合體したものです。

〔「たり」の活用例〕

（未然）○君君たらずとも、臣は臣たらざるべからず。
○しなかたちこそ生れつきたらめ、心はなどか賢きより賢きにもうつさばうつらざらん。

（連用）○韓信は高祖の忠臣たりしかども、小人の讒に依りて身を亡せり。
○島原半島及び天草島は、キリスト教の中心たりき。

（連體）○人の友たるものは、信をもととせざるべからず。
○汝この剣を以て朝家の御かためたるべし。

（已然）○身は三軍に將たれども、常に士卒と寢食を共にす。

（命令）○従者としては従順なる従者たれ。

〔指定の「なり」「たり」と第二種・第三種形容動詞の語尾〕

指定の「なり」「たり」は形容動詞の語尾「なり」及び「たり」と混同され易いのですが、それを區別する方法は次の通りです。

形容動詞の語尾と混同され易いのは、名詞に「なり」「たり」の附いたものですが、「なり」「たり」を除いた部分が主語になる事が出來る時は、それは名詞であつて、「なり」「たり」は助動詞

です。（形容動詞「遙かなり」「美麗なり」「堂々たり」の「遙か」「美麗」「堂々」は主語となる事は出來ません。）しかし、漢語の名詞は、時として、「なり」といふ語尾を附けて形容動詞となる事が出來ます（「勤勉なり」「節儉なり」など）、それ故、更に、その上に、「かくの如き」のやうな連體（形容詞的）修飾語をつけて見ます。名詞ならば附きますが（「かくの如き朋友なり（たり）」と云ひます）、形容動詞ならば附きません（「かくの如き遙かなり」、「かくの如き美麗なり」「かくの如き堂々たり」とは言ひません）。これによつて形容動詞の語尾と區別する事が出來ます。（「勤勉なり」「節儉なり」も「奬勵すべきは勤勉なり（又は）節儉なり」の場合には「奬勵すべきはかくの如き勤勉なり（又は）節儉なり」といふ事が出來るから、名詞に助動詞のついたものであり、「彼は勤勉なり（又は）節儉なり」の場合には「彼はかくの如き勤勉なり（又は）節儉なり」といふ事が出來ないから、形容動詞であると區別する事が出來ます。）

【六四】 比況の「ごとし」

比況といふのは、くらべたとへる意味であります。「ごとし」は、同樣、類似を表はすのですが、その外に、

被害は輕からざるがごとし。

のやうに、不確な斷定を表はす事もあり、又、左例のやうに、例示に用ひられる事もあります。

某畫伯は動物を描くに妙にして、殊にその虎の如きは、堂に入れりと稱せらる。

尙、口語では「ごとし」を用ひず、「やうだ」を用ひます。

〔**「ごとし」の活用形**〕

「ごとし」の活用はク活用ですが、已然形が缺けてをります。その他に次の如くク活用とは違つた點があります。

「ごとし」の連用形は「ごとく」ですが、古くは語尾の無い「ごと」といふ形を「ごとく」のやうに用ひ、今も歌などにはさう用ひる例があります。

月のごと、日輪ほのかに浮ぶ。

又「ごとく」に「に」「にて」「にして」を附けても用ひます。

軍兵雲霞の如くに馳せ集まる。

頭は猿の如くにて（にして）、尾は蛇に似たり。

次に「ごとくに」と「あり」と合した「ごとくなり」といふ語があつて、形容動詞第二種と同じに活用します。「ごとし」に缺けて居る已然形は、この語が代用します。

嶮坂を攀づるに、平地を行くが如くなり。

禍福は糾へる繩の如くなれば、逆境に立てりとて深く歎くべきにあらず。

尙、この「ごとくなり」は一語と見るべきものであります。之を一語とせず「ごとく」に、指定の助動詞「なり」が附いたものとすると、「なり」は活用語の連體形に附きますから、「ごとき、なり」となるべきで、「ごとくなり」とはならぬ筈です。

本書に「ごとく」に「なり」が附いたと書いておきましたが、その「なり」は助動詞ではなく、語尾なのです。

〔注意〕 形容詞と同活用の助動詞は「たう」「まほしう」「べう」「まじう」の音便形を有する事は、形容詞と變りませんが、「ごとし」に限つて音便形が有りません。

〔「ごとし」の接續〕

「ごとし」は、動詞の連體形、又はその下に助詞「が」の附いたもの、又は體言の下に「の」の附いたものに附きます。その、他の語への附き方は體言と同じことです。

猶、「效無きが如し」「我が如き」のやうに、形容詞の連體形に「が」の附いたもの、又、代名詞に「が」の附いたものにも附きます。

〔「ごとし」の活用例〕

(未然) ○果して君の言の如くん)ば、予は默すること能はず。

(連用) ○空飛ぶ鳩は雀の如く見ゆ。

○大鳥居は巨人の如く我がゆくてに立てり。

（連體）○松江を發したる汽車は、風光繪の如き宍道湖畔を走る。

○町の兩側をながめてゆる〳〵歩くが如き者なし。

〔**指定・比況の助動詞の特性**〕

指定の「なり」「たり」、比況の「ごとし」が、他語への附き方に於て、一般助動詞と異る事は前に述べた通りです。「なり」「ごとし」の用法の中には、

我は無益と思ふなり。

光陰は流るるごとし。

のやうに、他の助動詞と同じく動詞に附くものがありますが、次のやうな例になると、助動詞としては、他に比類がありません。中にも「たり」にはこの用ひ方しかないのです。

當時友の父は、陸軍中將たりき。

彼は、英雄なり。

落花、雪の如し。

卽ちこれ等の文に於ける「たり」「なり」「如し」は、述語を作る要素として、重要な役目をしてゐます。卽ち、これが附いた語をして述語たらしめるものです。これは、他の、動詞にのみ附く

助動詞と違つた點です。それで學者によつてはこれ等を助動詞とせず、「たり」「なり」を動詞とし、「ごとし」を形容詞として取扱ふ人があります。そしてこれ等の語は、一般の用言と違つて、それ自身で一定の實質を有するものでなく、その職能だけが用言と同じだといふので、一般の用言と區別して、形式動詞・形式形容詞と呼ぶのです。しかし本書では、普通の説に從つて、これ等を助動詞として取扱ふ事にしました。

第十五章　文語の助詞（一）

〔**本章及び次章の趣旨**〕

この章と次の章とで、文語の主なる助詞について述べます。

一體助詞は、助動詞と同じく附屬する語ですから、單獨で用ひられる事なく、いつも他の獨立する語に伴つて用ひられます。卽ちそれだけでは、主語・述語・修飾語の類、卽ち文を構成する要素といふべき「成分」（〔七九〕參照）となる事は出來ません。要するにこれは、他の語に伴つて、之に種々の附屬的の意味を加へ、又は語と他の語との關係を示すものであります。

助詞がこのやうに附屬的なものであるといふ事は、それが文を構成する上に重きを成さないといふ事ではありません。若し助詞が無かつたならば、語と語との關係が不確になり、精密な思考

や、微妙な感情は表はされなくなります。若しその用法を誤れば、言ひ表はさうとする意味が分らなくなるか、又は意外の誤解を來す虞があります。

右の如く、助詞は附屬する語ではありますが、文を構成する上から見て、甚だ大切な役目をなすものですから、この點に十分注意して適當な指導をされるやう希望します。

【六五】 文語の助詞

口語と文語との助詞を比べて見ますと、意味は同じでも違つた語を用ゐるものもあり、又同じ語でも、意味や用法に相違のあるのもあります。

この章と次の章とで、文語の助詞の主なるものについて、その意義・用法を略述しますが、口語と同じものは簡略にし、違つたもの、又は違つた所のあるものを主として說明しました。なほ、助詞の分類は、口語の場合と同様に、どんな語につくかによつて三つにしました。

【六六】 第一種の助詞

これは主として體言に附く助詞で、之を格助詞など稱する人もあります。その體言が、同じ文中の他の語に對して、如何なる關係に立つかを示すものです。

第一種の助詞として普通なものには、「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「より」「にて」などがあります。その中、「にて」は口語の「で」にあたりますが、文語では「で」は用ひません。

又口語の「から」も文語にはめつたに用ひません。

〔が〕

主語を示すに用ひられる事は、口語と同様ですが、その外に、本書に擧げた例のやうに、體言に連る修飾語をつくる爲にも用ひられます。卽ち、「誰(た)が宿」の例では、「が」は代名詞の「誰(た)」に附いて、名詞「宿」に對する修飾語をつくつてゐます。但し、かやうな「が」が附くのは、特殊の語に限られてゐます。なほ二三の例を補つておきます。

我が國　誰(た)が袖　松(え)が枝

〔の〕

口語に於けると同じく、體言に連る修飾語をつくるに用ひるのが最も普通ですが、その外に、主語を表はす爲に用ひる事も少くありません。

本書には、主語に附いた例だけ擧げておきましたが、それに對する述語は、「月の明かなる夜」「色の美しきを賞す」のやうに、連體形であつて、下に續くのが普通です。これは口語でも大體同樣です。

最後の例の「さを鹿の鳴く」のやうに、述語が其處で終る用法は、口語には有りません。この「鳴く」は連體形であつて「鳴くよ」のやうな感動の意味が含まれてゐるものです。

〔に〕

「東京に住む」「客に會ふ」のやうに、用言に連る修飾語をつくるのは文語・口語共に普通ですが、文語では、その外に動詞「あり」に連つて之と共に、指定の助動詞「なり」(口語「だ」)のやうな意味になる事があります。之と同じ意味(指定)で、そこで言ひ切らず、下に續く場合には、「に」から「して」に連つて「にして」の形となります。本書にはそれ等の例を出しておきました。

なほ、敬讓の意味を表はす爲に、右の「あり」の代りに、之と同じ意味であつて敬讓の意を含む動詞(「おはす」「侍り」「候ふ」など)を用ひる事があります。

この大臣(藤原基經)は、長良の中納言の三郎におはす。

この三島の社の額と、この寺(六波羅密寺)のとは、同じ御手に侍り。

これは珍しからぬものに候へども、御目にかけ申候。

〔へ〕

「へ」は方角を示しますから、「京都へ去る」といへば、「京都の方へ」「京都方面へ」の意となります。口語の「へ」が、場處を表はすにも用ひられるのと混じてはいけません。尤も文語といつても、現代文では、「へ」を口語のやうに用ひる事もあります。

〔と〕

「と」の用法は、文語でも、大抵口語と同様ですが、特に注意すべき二點だけを擧げました。

(一)「み空の花を星といふ」のやうな「と」には、また次のやうに用ひられるものがあります。

「失敗の原因はここにあり」と指摘す。

「これに比すべきものなし」といふ。

「敵はすでに進軍を始めたり」と報じ來る。

右のやうな「と」を、普通には活用語の終止形を受けるものだと說きますが、終止形に限らぬ事は、左の諸例で明かです。卽ちこの「と」は、意義の上では一旦完結して、形の上で獨立したもの(卽ち文)に附くと說くべきものです。

「誰かある」と問ふ。

「時こそ來れ」と思ひて勇み立つ。

「急ぎ行け」と命ず。

然るに現代文では、「と」の上の活用語が、終止形であるべきところを、連體形にする事が少くないのです。たとへば次の通りです。

月出づると見えて。

人に嘲弄せらるると思ひて。

これ等は本格的の言ひ方ではありませんが、許容すべきものと認められてゐます。但し次にいふ並列の「と」は、活用語に附く時には、その連體形の下にあるのが普通です。

月の出づると日の入るとは、殆ど同時なりき。

嘲弄せらるると賞讃せらるるとは、予の關知する所にあらず。

(二)　並列に用ひる「と」は、各語の下に附いて、「甲と乙とに逢ふ」のやうにするのが本格ですが、誤解を來さぬ以上は、最後の「と」を略して「甲と乙に逢ふ」のやうにいふ事が許容せられてゐます。

但し左例のやうに、誤解を生ずべきものは、一々「と」を附けなければなりません。

甲と乙との弟に逢ふ。

甲と乙の弟とに逢ふ。

〔「とは」「とて」〕

「と」に第三種の助詞「は」の附いた「とは」は、「といふは」の意味に用ひられる事があります。

南都とは奈良をさしていふ。

烏兎とは月日のことなり。

又、「と」に第三種の助詞「て」が附いた「とて」は、「と思ひて」「と言ひて」などの意味に用ひられます。

今は罷らんとて歸りけり。

昔弘法大師とて名高き僧ありき。

この「とて」は、便宜上第一種の助詞に準ずるものとして取扱つてもよからうと思ひます。

〔より〕

比較の意味に用ひるのは文語も口語と同様ですが、文語には出自を示すものがあります。口語にはその場合には「から」を用ひます。本書に擧げたのは、その「から」の意味で場處・時に用ひた例ですが、又「武家政治は頼朝よりはじまる」「失敗は多く不注意より生ず」などのやうに、いろ〳〵の場合に用ひます。

〔にて〕

口語には用ひぬ助詞で、口語では「で」にあたります。本書に擧げた例の中最初の三例は、場處・手段・原因を表はすもので、後の二例の「にて」はこれとは性質が違ひます。今別の類例で述べますと、

父は畫家にて、子は彫刻家なり。

この「にて」は口語の「で」と同じく「であつて」の意味で、「畫家」と共に述語をつくつて、下へ意味がつづいて行きます。然るに「風穏かにて波立たず」のやうな「にて」は、意味も形も、殆ど之と同一と見られますが、これは副詞「穏かに」に助詞「て」が附いたものです。卽ち「畫家にて」は「畫家・にて」と分解されますが、「穏かにて」は「穏かに・て」となります。混同してはなりませぬ。

なほ、本書には擧げませんでしたが、「にて」は「に」と同じく、「あり」の意味を有する語と共に、指定の助動詞のやうな意味に用ひられる事があります。

これは名高き歌枕にて候。

道眞公は、右大臣にておはす。

〔注意一〕　以上の外、古代語には第一種の助詞として、「から」「つ」などが用ひられましたが、現代文には殆ど現れません。（「つ」については、〔八七〕に述べてあります）。

〔注意二〕　第一種の助詞「を」は、口語と文語とで格別の違がありませんから、特に述べません。

【六七】　第一種の助詞と同様に用ひられる連語

助詞と他の語との連語で、第一種の助詞と同様に用ひられるものがあります。こゝにはその普

通なものを擧げました。

（一）「をして」は、使役の意味の敍述において、使役されるものを表はすのに用ひます。この語に對しては、「搜らしむ」のやうに、助動詞「しむ」を用ひるのが普通です。「を」は第一種の助詞、「て」は第二種の助詞で、「し」はサ變動詞「す」の連用形ですが、「をして」は多くの場合、「に」と言ひ換へられます。

（二）「を以て」は、多くの場合、口語の「で」と同じに用ひられます。漢字の「以」を用ひるのが普通ですが、元來は「を・もっ（もつの音便形）・て」です。

（三）「について」は、普通「に就て」と書き、成立から見れば、「に・つい（つくの音便形）・て」で、「に」「て」は助詞です。「に關して」と言ひ換へられます。

（四）「によつて」は、「に・よっ（よるの促音便形）・て」の連語です。

（五）「において」は、普通「に於て」と書きますが、元來は「に・おい（置くの音便形）・て」で、文語の「にて」、口語の「で」と同じ場合に用ひられます。

（六）「における」は、助詞「に」に「おけ」（置くの已然形）と「る」（完了の助動詞「り」の連體形）の附いたものです。多く口語の「での」と同じ場合に用ひられます。

【六八】第二種の助詞

これは主として用言に附いて、接續詞のやうな役目をするものです。之を接續助詞といふ人もあります。之に屬する語は「ば」「とも」「ど」「ども」「が」「に」「を」「て」「で」「つつ」などで、口語と語や用法の違ふものが少くありません。

〔注意〕この種の助詞は一定の活用形に附きます。それは一々の助詞の條にことわつてありますが、また卷末の第三表にも擧げてあります。さうして第一表を利用して各種の活用に附いた形を言はせて見ると一層明かになりませう。

〔ば〕

「ば」は、口語では假定形にしか附きませんが、文語では、活用語の未然形に附く場合と已然形に附く場合とあります。この用法に就いては、誤解を抱くものが多いやうですから、次にやゝ詳しく述べます。

（甲）活用語の未然形に附く「ば」。

これは不定な事、又は事實と反對な事を假に事實と想定して、之を條件とする場合に用ひます。

われ若しその座に在らば、恐らくは彼と衝突せしならん。

彼行かば、我も行かん。

價安くば、買ふべし。

行きたくば、行け。

これは又未來の或場合を豫想して、條件とするにも用ひます。

夜明けば、やがて出發せん。

九月に入らば、夜學を始めよ。

右のやうな場合に、口語では、「ば」（假定形に附く）・「と」（終止形に附く）・「なら（ば）」・「たら（ば）」を用ひます。但し未來の場合を豫想するものには、「なら（ば）」は附きません。

（乙）活用語の已然形に附く「ば」。

これは次のやうな用ひ方があります。

（一）一般的に或事實の起るべき場合（條件）を示すに用ひられます。

風吹けば、波立つ。

心正しければ、物に恐れず。

この「風吹けば」「心正しければ」は、過去の何時かに風の吹いた事を言つてゐるのでもなければ、今現に心が正しい事を表はしてゐるのでもありません。過去・現在・未來を通じて、いつでも、風が吹くといふ條件がそなはれば波が立ち、心が正しいといふ事實がある場合には物に恐れ

ないといふのです。卽ち、時にかゝはらぬ一般的眞理を表はすのです。處が未然形に「ば」の附いたものは、或特定の場合についていふのです。これがその間の相違です。猶、已然形に「ば」の附いたもの、數例を擧げませう。

人をうやまへば、人にうやまはる。

國に諫むる臣あれば、その國必ず安し。

水至つて清ければ、魚すまず。

命長ければ、恥多し。

遠き慮なければ、近き憂あり。

水はせかるれば、却つて激す。

右のやうな場合には、口語でも文語と同じ形（卽ち口語の假定形に「ば」を附けたもの）を用ひますが、口語ではまた「と」「たら」も用ひます。

ここに述べたものをも、普通には「確定（又は既定）條件」を示すものとして、次に述べる（二）（三）と同一に取扱つて居ますが、（二）（三）では現實に起つた特殊の事實に就いて述べるのですから。ここのと明かに區別すべきものです。

（二）　事實を述べる用言（下に助動詞の附く事もある）に附いて、下に述べる事件の理由・原因

を示します。

今日は雨降れば、外出せず。

この花は美しければ、人に折らるるおそれあり。

抑止せられたれば、止むなく中止せり。

この上努力すともかひあるまじければ、予は成行に任せん。

右のやうな場合に、口語では普通「ば」を用ひず、「から」「ので」を用ひます。尤も口語でも、「ば」の下に「こそ」といふ助詞を附けて、文語と同じ意味に用ひる事がありますが、一般的ではありません。

勉強すればこそあんなになれたのだ。　面白ければこそ今まで見て居たのです。

(三)　事實を述べる動詞（助動詞の附く事もある）に附いて、次に述べる事件の起つた場合、又は之に氣のついた場合を示します。

見渡せば、花も紅葉もなかりけり。

顧れば、友は我を追うて馳せ來るなりき。

靜かに考ふれば、當方にもまた非難せらるべき點なきにあらず。

部下をしてうかゞはしむれば、敵は既に退却して隻影なしといふ。

右のやうな場合に、口語では「と」「たら(ば)」を用ひます。

〔注意〕　この（三）の用法の例は本書には擧げませんでした。

〔とも〕

或事柄を假定して、それから豫想せられる結果に反した事實が起る事を表はす助詞で、「ば」の（甲）に對應するものです。動詞の終止形と形容詞の連用形とに附きます。

又、文語で「とも」といふ所を「と」といふ事があります。

繪にかくと、筆も及ばじ。

文語で「とも」といふ所には、口語では普通「ても」を用ひます。

〔注意一〕　「とも」は動詞の終止形に附くのですから、「過ぐるとも」「尋ぬるとも」「來るとも」「するとも」「あるとも」など連體形に附けるのは正しくありません。しかし現代の文語では、「數百年を經るとも」「如何に批評せらるるとも」「強ひて之を遵奉せしむるとも」の如く、習慣あるものは、連體形に附けても差支ない事となつてゐます。

〔注意二〕　「とも」は形容詞には連用形から附くのですから、之を終止形につけて、「苦しとも」「よしとも」などいふのは誤です。

〔ど・ども〕

これも反對の結果の起る事を表はし、活用語の已然形に附きます。その用ひ方は次の通りです。

（一）　或條件の存する場合に於ても、その條件から豫期されるに反した事の起る事を示します。「とも」と似てゐますが、これは一般的にいふに用ひられます。たとへば、

散りぬれば、戀ふれどしるし無きものを、今日こそ櫻折らば折りてめ（古今集、一）

の「戀ふれど」は、戀ふるにもかゝはらず「しるし無き」事を表はしてゐます。しかしその戀ふる事は、過去の或時にしたのでもなく、今現にしてゐるのでもありません。現在・過去・未來にかゝはらず、戀ふる事があつても、その「しるし無し」と一般的眞理をいつてゐるのです。

「ど」「とも」のこの用法は、「ば」の（乙）の（一）に對應するものです。

尙、次に數例を擧げます。

心ここにあらざれば、視れども見えず、聽けども聞えず。

樹靜ならんと欲すれども、風止まず、子養はんと欲すれども、親待たず。

君子は交はり絶ゆれども、惡聲を出さず。

兄弟牆に鬩げども、外其の侮を禦ぐ。

すべてみめよく品高けれども、あやしく賤しきが能あるに立ち並ぶ折は、その品そのみめも、必ず思ひけたるるものなり。（十訓抄、第十）

日頃いかなる高名候へども、最後に不覺しぬれば、長ききずに候ふなり。（平家、九）

右のやうな場合に、口語では連用形又は音便形に「ても」を附けて用ひます。

〔注意〕　かやうな用法のものは、本書には擧げませんでした。

（二）　事實を述べる用言（助動詞の附く事もある）に附いて、左樣な事實が存するに拘らず、之と一致しない事柄が起り又は起つた事を表はすに用ひます。卽ち「ば」の（乙）の（二）に對應するものです。

友は絶えず努力すれど（も）、その成績擧らず。

彼は世人に嘲笑せらるれど（も）、毫も關心する所なし。

手を分ちて探りたれど（も）、終に發見し得ざりき。

戸をたゝけど（も）、應ふる者なかりき。

六畜は主といふことを辨へねども、あはれを知りてむつる。（十訓抄、第一）

これ等は、特定の或は一般に承認せられた事實を言ひ表はして居ますから、「友は絶えず努力す。然れども……」のやうに、いひかへの出來るものです。

右のやうな場合に、口語では、終　形に「けれども」又は「が」を附けていふのが普通です。

〔注意一〕　細かに分類すれば、次の諸例などは、（二）から分立すべきですが、ここには一種に

包括しておきます。

兄は酒を飲めども、煙草は好まず。

父母は常に子を念ずれども、子は父母を念せず。

この地は、夏暑けれども、冬はまた寒し。

某は身賤しけれども、心の正しきものなり。

これ等は共に事實を述べてゐますが、前の諸例と違つて、前後兩件の間に、必然的な關係のあるものではありません。卽ち、第一例でいへば、酒を飲むと飲まないとは、煙草の好惡を規定するものではないのです。ですから、趣の異る二事を單に對照的に並べたまでのことで、「ば」でいへば、口語の「犬も飼へば、猫も飼ふ」の言ひ方に、對應するものだと見るべきでせう。

〔注意二〕現代文では、「も」を活用語の連體形に附けて、「とも」「ども」と同じやうに用ひる事があります。

何等の事由あるも（ありとも）、場内に入るを許さず。

矢は當らざりしも（しかども）、痛手は負ひぬ。

けれども「とも」「ども」何れの意か曖昧な場合には、用ひるべきではありません。

〔が・に・を〕

これ等は、共に事實を述べる用言（助動詞の附く事もある）の連體形に附いて、口語第二種の助詞「が」「のに」のやうに用ひられます。

保己一は五歳の時めくらとなりしが、後には名高き學者となれり。

未だ一月もたゝざるに、かの畫師は突然歸り來れり。

かくまでとは思はざりしを、さてもおびたゞしき軍勢かな。

但しこの「に」には、左例のやうに、或事件の起つた場合、又はそれに氣の着いた場合を示す用法があります。

物見の兵を出してうかゞはしむるに、敵の大軍、木之本の邊に滿ち〳〵たりと報じ來る。

ふと東南の方を望み見るに、たいまつの光おびたゞし。

これ等は、口語では「うかゞはせると」「見たら」などいひます。

〔て〕

口語では四段動詞には、サ行四段の外はいつも音便形に附くのがきまりですが、文語では、四段動詞にも連用形に附くのが普通で、時として音便形に附くのです。卽ち、文語では連用形と音便形とが、どちらも用ひられるのが口語と違つた點です。「て」は動詞の音便形に附く時「で」

となる事があります（「進んで」「勇んで」など）。これを次條の「で」と混同してはなりません。

〔副詞に附く「て」及び「とて」〕

文語の「て」は、用言及び助動詞に附く外に、副詞や助詞に附く事もあります。「遙かにて」「靜かにて」「我も行かむとて出て來る」などの類です。これは「遙かにありて」「靜かにありて」「行かむと云ひて」などのやうな意を含んで居ります。「彼は軍人にて且つ政治家なり」の「にて」や「紙にて作る」「東京にて會議を開く」などの「にて」の「て」も、その本源に於ては之と同じものであつたでせうが、これ等は「にて」が口語の「で」にあたりますから、一つの助詞と見ました。（「遙かにて」「靜かにて」の「にて」も口語の「で」に當りますが、「遙か」「靜か」を一語とせず、「遙かに」「靜かに」を一語としましたから、「遙かにて」「靜かにて」は「遙かに・て」「靜かに・て」のやうに、副詞に「て」の附いたものとするのです。）

〔注意〕「とて」は、前述の如く第一種の助詞に第二種の助詞が附いたものですが、便宜上、合して一語とし、第一種の助詞に準ずるものとして取扱つてもよからうと思ひます。これには、

國に歸らんとて出發せり。　心地惡しとて早く歸宅せり。

のやうに、用言（又は之に助動詞の附いたもの）に附いた例もありますが、この場合には、「國に歸らんと言ふ」の場合と同じく、上の語全體が名詞に準せられたものと見るべきです。

〔「して」〕

サ變動詞「す（爲）」に助詞「て」の附いた「して」は、次のやうに用ひられる事があります。

水清くして、底なる石も數ふべし。
海洋々として、際涯を知らず。
氣候温和にして、健康に宜し。
彼はこの事を思はずして、遂に大局を謬るに至れり。

かやうな場合には、その意味も用法も大體「て」と同樣です。それ故、便宜上、第二種の助詞に準ずるものとして取扱つてもよからうと思ひます。

〔「で」〕

これは前節で述べた助詞「て」に打消の意味が加はつたもので、口語の「ないで」の義となります。すべての動詞の未然形に附きます。

世の苦しさを知らで育つ。
待つ友は來で、日は空しく暮れんとす。

〔「つゝ」〕

これは動詞の連用形に附いて、口語の「ながら」のやうに用ひられます。

泣きつゝ語る。
讀みつゝ書く。

但し、口語の「體は小さいながらよく働く」のやうに、形容詞に附く事はありません。尙、「つゝ」は、古代には「富士の高ねに雪はふりつゝ」のやうに、動作を繰返す意にも用ひられてゐます。

〔注意一〕 口語で用ひる第二種の助詞「ても」「けれど（も）」「のに」「から」「ので」「し」などは、文語には用ひません。

〔注意二〕 本書のこの章の終に擧げた「處」「間」などを、接續詞と見る人がありますが、これ等はその性質は寧ろ第二種の助詞に近いものです。けれども本書では、特別の體言が副詞的に用ひられたものと見て、接續詞とも助詞ともしません。（95節參照）

〔「ものを」「ものから」「ものゆゑ」〕

「ものを」「ものから」「ものゆゑ」を連語として各二語と見る說がありますが、これ等は一語とみて、第二種の助詞とした方がよいでせう。これらは連體形に附きます。その中、「ものを」の外は、現代文には普通用ひません。次にその用例を擧げておきます。

都出でゝ君に逢はんと來しものを、來しかひもなく別れぬるかな。

待つ人にあらぬものから初雁の今朝鳴く聲のめづらしきかな。
終に遁るまじきものゆゑに、かゝる憂き目を見るこそ口惜しけれ。

〔第二種の助詞と同樣に用ひられる連語〕

「して」「といへども」「といふとも」は共に連語です。「して」はサ變動詞「す（爲）」に第二種助詞「て」の附いたもの、「といへども」は、第一種助詞「と」にハ行四段動詞「言ふ」と第二種助詞「ども」が附いたもの、「といふとも」は、第一種助詞「と」にハ行四段動詞「言ふ」と第二種助詞「とも」の附いたものです。これ等は、第二種助詞と同じやうに用ひられる事があります。その場合には、便宜第二種助詞に準ずるものとして取扱つて宜しからうと思ひます。「して」の例はあげましたから（190節）他の二つの例を擧げます。

未だ相見ずといへども久しく盛名を聞けり。
たとひ幾多の歳月を經といふとも變らざるべし。

第十六章　文語の助詞（二）

【六九】 第三種の助詞

第三種の助詞は、以上の二種以外のものを全部包括したものです。隨つて更に之を幾つかに細分する事が出來ますが、中等教育の程度では、これ以上分類すると、却つて生徒の頭を混亂させる虞があらうかと思ひますから、口語の場合と同樣に、之を一種に包括しておきます。

第三種に屬する助詞は本書に擧げた通り相當に數多く、口語とくらべて見ると、語の違つたものや意味や用法の違つたものが少くありません。

〔ぞ・なむ（なん）・か・や〕

「ぞ」「なむ」は强く指定する意、「か」「や」は疑問の意を表はします。「なむ」は發音通り「なん」とも書きます。

「ぞ」「か」「や」は、文の中にも終にも用ひられ、「なむ」は主として文の中に用ひられます。

「や」が活用語に附く時は、本書にある通り、その終止形に附くのが本格ですが、現代文としては、「か」と同じく連體形に附けて、「あるやなきや」のやうにいふ事が、許容されてゐます。

又「何處に行きたるか」「缺席者は幾名なるか」のやうに、上に疑問の語があつて、下に疑問の助詞を用ひる場合には、「か」を用ひるのが本格ですが、現代文では「何處に行きたり（たる）や」「幾名なり（なる）や」のやうに、「や」を用ひる事が許容されてゐます。

次に「ぞ」「なむ」「や」「か」が用ひられた場合に、係結の法則が行はれる事がありますが、

それは後に197節に一纏めにして述べます。

〔こそ〕

これは主として文の中に用ひられ、特に事物を取り立てていふに用ひられます。これも係結の法則を成立させる事があります。

〔係結の法則〕

これについては、本書〔一二〇〕にも述べてありますが、「ぞ」「なむ」「や」「か」又は「こそ」が文中にあり、活用語が、之をうけて文を終止する時は、終止形以外の一定の形をとるといふきまりです。たとへば、「山ほとゝぎす今ぞ鳴くなる」に於ては、「今ぞ」をうけて「鳴くなる」が、連體形で文を終止し、「誰かある」に於ては、連體形の「ある」が「誰か。」を受けて文を終止します。

右の通りですから、文中にこれ等の助詞があつても、之を受ける語が活用語でないか、活用語であつても文を終止してゐない場合には、係結の法則は適用されません。例へば

此處はいづこと問へば、これこそ音羽の里と答ふ。

に於ては、「これこそ」を受けるのは「音羽の里」であつて、活用しない語ですから係結の法則は成立しません。文を終止する「答ふ」は「これこそ」を受けませんから已然形とはならないの

です。又

うき世には長らへじとぞ思へども……。

古は、車もたげよ、火かゝげよとこそいひしを……。

の「思へども」は「ぞ」を受け、「いひしを」は「こそ」を受けますが、文を終止しませんから、係結の法則は行はれません。

尚、口語には、右のやうな係結の法則はありません。

〔だに・すら〕

「だに」「すら」は、文の中に在つて、輕いものを擧げて他を類推させるに用ひられます。大體「だに」は口語の「さへ」「さへも」に當り、「すら」は口語の「でも」に當ります。但し「すら」は確かにそれときまつて居る所に用ひられる語ですから、次のやうな假定の文には現れません。

彼だに來らば……。實力だにあらば……。

〔さへ〕

「さへ」は更に加はる意の助詞で、口語の「までも」に當ります。文の中に用ひられます。

鬼の如き將軍さへ涙を流せり。

〔し〕

これは文の中にあつて、意味を強めるのに用ひます。現代の文語では、多く「も」と一緒に現れます。口語には用ひません。

事實は必ずしも然らじ。
疑なきにしもあらず。

〔のみ〕

これは文の中に用ひるのが普通ですが、文の終に來ることもあります。「それだけ」と限る意味で、口語ではこの場合に「だけ」「ばかり」を用ひます。

今更何をかいはん。たゞ默せんのみ。

〔な・な…そ〕

共に文の終に用ひられ、禁止の意を表はします。「な」は動詞及び助動詞「る」「らる」「す」「さす」等の終止形に附きます。

忘るな。　す（爲）な。
打たるな。　捨てらるな。　聞かすな。　受けさすな。

それ故、文語では「忘るるな」「するな」「打たるるな」などは誤です。

但し「な」は、ラ變動詞にはその連體形に附きます。

あるな。

「な…そ」の「そ」は、動詞及び助動詞「る」「らる」「す」「さす」等の連用形に附きます。

な忘れそ。　な閉ぢそ。　な打たれそ。　な捨てられそ。

な聞かせそ。　な受けさせそ。

但し「そ」は、カ變・サ變の動詞には、その未然形に附きます。

なこ（來）そ。　なせ（爲）そ。

又「な」は、引きつゞいてあるべき二動詞の間に入る事があります。

もみぢ葉を吹きな散らしそ山おろしの風。

〔注意〕「な」及び「な…そ」の「そ」は、動詞・助動詞以外のものに附きませんが、これ等を第二種に入れないのは、第二種のは接續詞のやうな性質をもつてゐるものに限つた爲で、口語の第三種の「な」について述べたと同じ理由からです。（初年級用の別記188節參照）次の「ばや」「なむ」も同樣です。

〔ばや〕

文の終にあつて、自己の希望を表はします。動詞及び助動詞「る」「らる」「す」「さす」等の未然形に附きます。もと、假定を表はす「ば」に感動の意味の助詞「や」の附いたもので「……し

たらなあ」といふ義であつたので、今でも、その趣が多分に殘つてゐます。

行きて取らばや。　語らはればや。　答へさせばや。

〔なむ（なん）〕

「なむ」は文の終にあつて、他に對して希望する意味を表はします。それで之を「願望のなむ」「誂へのなむ」など稱して、係（かゝり）の「なむ」と區別します。動詞の未然形に附きます。又之を發音に從つて「なん」とも書きます。

庭の櫻よ、早も咲かなん。

〔がな〕

「がな」はたゞ「が」ともいひ、助詞「も」に附く例が多く現れますが、又次のやうに過去完了の助動詞「に・き」「て・き」の連體形に附く事もあります。常に文の終に用ひられます。

伊勢の海に遊ぶ海士（あま）ともなりにしが。

いかで此のかぐや姫を得てしがな、見てしがなと音に聞きてめで惑ふ。

この「にしが」「てしがな」及び「もがな」は實際教授に當つては、便宜上一語として取扱つても宜しからうと思ひます。

〔かな〕

「かな」はいつも文の終に用ひられ、體言又は活用語の連體形に附いて、感動の意を表はします。但し形容詞には、次のやうに音便形にも附く事は、既に述べた通りです。

あゝよいかな、言や。

〔かし〕

「かし」はいつも文の終にあり、いひ切つた形に附いて、意味を強め念をおしていふのに用ひます。ですから「かし」の直上は、活用語の終止形・命令形・助詞「ぞ」である場合が最も多いのです。終止形に附いた例は、次の通りです。

さは思ひつかし。

さても君忘れけりかし。

口語では「かな」も「かし」も用ひません。但し「かし」は「さぞかし」といふ副詞の中にその殘骸を止めてゐます。また「聞えよがしに高くいふ」「見てくれがしに振舞ふ」などの「がし」は、「かし」の變化したものと考へられます。

〔や・な〕

共に文の終に用ひて、感動の意を表はします。但し、「や」は文の中にも用ひられます。文の

終では、文を終止した形の下に附くのが普通であります。

〔同形の助詞で種々の種類に屬するもの〕

以上助詞を三種に分けましたが、同じ形で違つた種類に屬するものがあります。これは紛れやすいやうですが、その用法から見ても、意味から見ても互に相違があつて、明かに區別出來ます。之を左に擧げませう。

が　（第一種）我が身。　冬に花の咲くが面白きなり。
　　（第二種）捜したるが、見えざりき。
を　（第一種）花を折る。　空を飛ぶ。
　　（第二種）年猶若きを、いかでさる任に堪へむ。
に　（第一種）山に登る。　親に似る。　いはぬはいふに勝る。
　　（第二種）わざ〳〵訪ひしに不在なりき。
と　（第一種）筆とペンと。　花と見る。　嬉しと思ふ。
　　（第二種）繪にかくと筆も及ばじ。（185節參照）

〔紛れ易い語〕

活用語尾や、助動詞や、助詞などには、語の形が同じであり、又は非常に類似して紛れ易いも

のが少くありません。その中、接續詞に關するもの、及び助詞相互の間で誤られ易いものは、既に述べましたが（95節210節參照）こゝにそれ以外のものを擧げておきます。

き
- 波は高かりき。（過去の助動詞きの終止形。高カッタ。）
- いづれか高き。（ク活用の形容詞高しの連體形の語尾。上のかに對して連體形で結んだのである。）

けれ
- 波こそ高けれ。（ク活用の形容詞高しの已然形の語尾。上のこそに對して已然形で結んだのである。高イ。）
- 波こそ高かりけれ。（過去の助動詞けりの已然形。こその結び。高カッタ。）

し
- さる事は無し。（ク活用の形容詞無しの終止形の語尾。無イ。）
- さる事の無かりし時。（過去の助動詞きの連體形。無カッタ時。）
- さる事は無きにしもあらず。（第三種の助詞。）

しか
- 人多かりしかども、友は見えざりき。（過去の助動詞きの已然形。多カッタガ。）
- 友は見えざりしか。（過去の助動詞きの連體形と、第三種の助詞。見エナカッタカ。）

つ
- 見るべきものは見つ。（完了の助動詞つの終止形。見タ。見テシマッタ。）
- 所持品を捨つ。（タ下二の動詞捨つの終止形の語尾。）

つる
- 時鳥の鳴きつるは、いづかたぞ。（完了の助動詞つの連體形。鳴イタノハ。）
- 捨つる神あれば助くる神あり。（タ下二の動詞捨つの連體形の語尾。捨テル神。）

ぬ

日は沒しぬ。（完了の助動詞ぬの終止形。沒シタ。沒シテシマッタ。）
見ぬ古は知らず。（打消の助動詞ずの連體形。見ヌ昔。見ナイ昔。）
文と武とを兼ぬ。（ナ下二の動詞兼ぬの終止形の語尾。兼ネル。）

ね

はや歸りね。（完了の助動詞ぬの命令形。歸ッテシマヘ。）
古は見ねば知らず。（打消の助動詞ぬの已然形。見ナイカラ。見ナイノデ。）
早く寢ねて早く起くべし。（ナ下二の動詞寢ぬの連用形の語尾。ネテ。）

たり

衣食たりて禮節を知る。（ラ四の動詞足るの連用形。タリテ。十分ニナッテ。）
日本は神國たり。（指定の助動詞たりの終止形。神國ダ。神國デアル。）
塀は倒れたり。（完了の助動詞たりの終止形。倒レタ。倒レテヰル。）

めり

船は水中に沈めり。（マ四の動詞沈むの已然形の語尾と、完了の助動詞りの終止形。沈ンダ。沈ンデヰル。）
船は次第に沈むめり。（推量の助動詞めりの終止形。沈ムヤウダ。）

む

靜かに歩む。（マ四の動詞歩むの終止形の語尾。）
授業はやがて終らむ。（推量の助動詞むの終止形。終ラウ。終ルダラウ。）

らむ

途中には旅店あらむ。（ラ變動詞ありの未然形の語尾と、推量の助動詞むの終止形。アラウ。アルダラウ。）
旅店は有らざらむ。（打消の助動詞ざりの未然形の語尾と、推量の助動詞むの終止形。無カラウ。無イダラウ。）

などか然(しか)いふらむ。（推量の助動詞らむの連體形。イフダラウ。）

けむ
何事か有りけむ。（推量の助動詞けむの連體形。有ツタラウ。有ツタダラウカ。）
當つて碎けむ。（カ下二の動詞碎くの未然形の語尾と、推量の助動詞むの終止形。碎ケヨウ。）

なむ
皆人はかくあらなむ。（第三種の助詞。他に對する希望を表はす。カウアツテホシイ。カウシテ貰ヒタイ。）
花なむ散りける。（第三種の助詞。强める意で、係(かゝり)となる。）
花は散りなむ。（完了の助動詞ぬの未然形と、推量の助動詞むの終止形。散ツテシマフダラウ。）

を
夜の更けたるを知らずして語る。（第一種の助詞。更ケタコト（ノ）ヲ。）
夜も更けたるを、ひとり出で行きたり。（第二種の助詞。更ケタノニ。）

に
人の多きに驚けり。（第一種の助詞。多イノニ。）
人多きに、賴むべき者なし。（第二種の助詞。多イノニ。）
人は去りにき。（完了の助動詞ぬの連用形。去ツテシマツタ。）

が
水の流るゝが面白きなり。（主語に附く第一種の助詞。流レルノガ。）
我が國。（體言に附いて、下の體言に對する修飾語をつくる第一種の助詞。）
雨も降りしが、烈しからざりき。（第二種の助詞。降ツタガ。降ツタケレドモ。）

らる
兩岸は激流に削らる。（ラ四の動詞削るの未然形の語尾と、受身の助動詞るの終止形。削ラレル。）

萬年筆は廣く用ひらる。（受身の助動詞らるの終止形。用ヒラレル。）

させ

部下に義務を果させたり。（サ四の動詞果すの未然形の語尾さと、使役の助動詞すの連用形。果サセタ。）

部下に本望を遂げさせたり。（使役の助動詞さすの連用形。遂ゲサセタ。）

まじ

雨は降るまじ。（推量の助動詞まじの終止形。降ルマイ。）

まし

これ無からましかば、いとよからまし。（推量の助動詞ましの終止形。ヨカラウ。ヨイダラウ。なほ上のましかはましの已然形。）

なり

氷はやがて水となりぬ。（ラ四の動詞なるの連用形。ナッタ。）

水は液體なり。（指定の助動詞なりの終止形。液體ダ。液體デアル。）

氷は冷かなり。（第二種の形容動詞冷かなりの終止形の語尾。冷カダ。ツメタイ。）

第三篇　品詞の轉成と語の構造

〔本篇の要旨〕

語を文法上の性質によつて分類したのが品詞ですが、併し語によつては、その形が變らないでその文法上の性質が變つて他の品詞になつたものが少くありません。この事を知らなければ、品詞の知識は徹底せず、實際にあたつて惑ふ事があります。

次に、品詞の別を離れて、語をその構造の上から見ますと、それ以上分解出來ない單純なものや、二つ以上の語が合して新しく一語となつたものや、語根・接頭語・接尾語など、意義を有する單位から成立つたものなど、いろ〳〵あります。「意味を有する單位による言語構成の法則」が文法である（7節參照）とする以上、これ等の語の構造も、また文法に屬する事項ですが、普通の教科書では委しく說く必要はありません。しかし單語が、一の語の成分となつたものは、獨立した單語と混同する虞がありますから、かやうな事を防ぐに必要な範圍に於て、語の構造を說く事が必要であると考へます。さういふ趣旨から本篇を敎授されるやう希望します。

第十七章　品詞の轉成

〔本章の目的〕

單語には、その意味や性質が變じた爲、一の品詞から他の品詞に轉じたものがあります。然るに、かやうな變化があつても、その語の形の上には何の變化もないのが常ですから、かやうなものは、時としてその所屬の品詞を定めるに惑ふ事があります。それ故、各品詞の特質に就いて述べたに引きつゞいて、ここに品詞の轉成を說いて、品詞の知識を徹底させ、實際に應用するにあたつて誤らないやうにしました。

〔品詞の轉成に於ける文語と口語との差〕

品詞轉成については口語と文語との間に大した相違はありません。唯、文語には用ひても、口語に用ひない語がある爲、いくらか趣のちがつた所があるだけです。

【七〇】品詞の轉成

本書に擧げた（甲）例の「親切に敎へたり」の「敎へ」は、「敎ふ」といふはたらきの行はれる事を述べるのですから、動詞とするより外ありませんが、（乙）例の「親切なる敎へに……」の「敎へ」は、敎へる事、敎へ方といふやうな意味であつて、その意味から見て、名詞の特徴をも

つてをりますし、（甲）の「教へ」の上には「親切に」「懇に」「詳しく」のやうな修飾語が附き、下には助動詞「たり」「けり」「ぬ」などが附く事動詞と同様であるに反して、（乙）の「教へ」にはそれ等の語が附かず、名詞と同じく上には「親切なる」「懇なる」「詳しき」のやうな修飾語が附き、下には「に」「を」のやうな語が附くこと名詞と同様です。卽ち、意味から見ても性質から見ても、（乙）の例の「教へ」は動詞が名詞になつたのです。かやうなのが品詞の轉成です。

右の例によつて明かな通り、品詞の轉成には、

（一）語の形がもとのまゝである事

（二）もとの品詞の特徴たる、意味や性質上の特質が無くなる事

（三）他の品詞の特徴たる、意味や性質上の特質をもつやうになる事

が必要であることが知られます。もつとも「形がもとのまゝである」といつても、アクセントがかはる事もありますし、活用のない語が活用語になつた場合には、語尾が變化し、又は活用の爲に必要な語尾が加はる事もあります。それだけは、除外例と見なければなりません。つまり或單語が大體そのまゝの形で、その屬する品詞がかはる事を品詞の轉成といふので、動詞の「至る」と助詞の「て」とが合して、「至つて」といふ副詞となるやうな、單語と單語と合して何れとも違つた品詞になるものは、この中には含めません。

品詞の轉成の場合には、上に述べた通り、意味と性質とがかはるのが普通ですが、意味の變化だけで品詞がかはる事もあります。たとへば、名詞の「僕」が本來の意味を失つて、話手自身を指す爲に用ひられると、代名詞に轉成する類であります。これは、名詞と代名詞とは、本來文法上の性質は違はないのを、唯意味によつてわけたものであるからであります。（31節參照）

〔**轉成したものと、しないものとの區別**〕

品詞にはいろ〳〵の用法があります。例へば、「昔」といふ名詞には、

昔しのばる。　　昔をおもひ出づ。
昔の人。　　昔より今にいたる。
昔ここに大きなる城ありき。

のやうな種々の用法がある中、最後のは、「昔」が副詞と同樣に用言を修飾してゐます。「昨日」も、

昨日は冬至なりき。　昨日を記念日とす。
昨日の會。　　雨は昨日より降りつゞく。

など名詞として樣々に用ひられますが、

昨日雷鳴ありき。

の場合には、副詞と同じく「ありき」を修飾します。これ等の場合に於ても、「昔」「昨日」の意味は、他の場合とかはりませんから、之を副詞に轉じたものと見るのは不當であつて、名詞の一用法として、副詞のやうに用ひられる事があると見るべきです。しかるに、「つゆ（露）」は疑なき名詞でありますが、

つゆ知らず。

といふ時には、副詞的に用ひられてゐるばかりでなく、意味も名詞の「つゆ」とは違ひ、「少しも」のやうな意味になつてをり、かやうな意味では、名詞と同じやうに用ひられる事はありませんから、副詞に轉成したものと見るべきであります。

又「厚く御禮申上げ候」「烈しく戰へり」の「厚く」「烈しく」は、下の用言を修飾してゐます。それ故これ等を副詞に轉成したものと見る人があります。けれども、この場合の「厚く」「烈しく」は、「厚し」「烈し」と言ふ形容詞本來の意味を保つてゐるばかりでなく、かやうな用法はどの形容詞の連用形にも共通にあり、かつ形容詞の連用形は、この外にもいろ〳〵の用法をもつてゐます。故に、右の「厚く」「烈しく」は、副詞に轉成したものでなく、形容詞の一用法と見るのが至當だと思ひます。

〔轉成した語〕

ここには轉成した主な例を、如何なる品詞になつたか、いかなる品詞から轉成したかによつて類別して擧げました。ここに擧げたのは、極普通なものだけで、まだこの外に多くの種類があります。

〔注意一〕　動詞から轉成したものは、文語を標準とした場合と口語を標準とした場合とで、說明のし方の違ふのがあります。「流（ながれ）」は文語ならば下二段活用からの轉用、口語ならば下一段活用からの轉用となります。ここでは文語を本位とし、口語のを附記しました。

〔注意二〕　次のやうないろ〳〵の轉成の種類は、一々生徒に覺えさせる必要はなく、唯實際の場合に當つて、何から轉成したかがわかれば十分だとおもひます。

（一）　名詞になつたもの

〔動詞の連用形から〕　この種類のものは、最普通であります。次の例の括弧の中は、動詞の終止形と、その活用名です（活用は文語のを擧げ、口語と違ふものはそれも擧げます）。

舞（まふ、ハ四）　　悟（さとる、ラ四）
流（ながる、ラ下二、口語はラ下一）　　恥（はづ、ダ上二、口語はダ上一）
とめ（とむ、マ下二、口語はマ下一）　　そめ（そむ、マ下二、口語はマ下一）

祝（いはふ、ハ四）　響（ひゞく、バ四）
亂（みだる、ラ下二、口語はラ下一）　助（たすく、カ下二、口語はカ下一）
帶（おぶ、バ上二、口語はバ上一）　覺（おぼゆ、ヤ下二、口語はヤ下一）

〔動詞の終止形から〕　この種類のものは、極めて少數です。

相撲　これは爭ふ意味の文語動詞（ハ四）の終止形が名詞になつたのです。技の名にも、またその技をする人（すまふとり）の名にも用ひます。古くはこの動詞の連用形「すまひ」をも、技の名に用ひました。

陽炎　これは光などのほのめく意の文語動詞（ハ四）から出て、陽炎卽ち空中にちらちらと立上つて見える氣に用ひます。蟲の名の「かげろふ」も、これから出たといはれます。またこの動詞の連用形「かげろひ」を、陽炎の意の名詞にも用ひます。

向ふの山　「向ふ」は、（ハ四）の動詞「むかふ」の終止形から轉じたもので、「の」の外にも「を」「へ」などの第一種の助詞が附きます。（口語では「が」「から」も附きます。）またこの動詞の連用形「むかひ」も名詞に轉じてこれと同樣に用ひます。

勉（人名）（マ下二）の動詞の轉じたものです。この外に、「務」「努」「力」「勤」などの字を用ひるのも同樣です。

透（人名）　ラ四の動詞の轉じたものです。「徹」「融」「亨」などの字を用ひるのも同樣です。

この外人名では昇（ラ四）・至（ラ四）・茂（ラ四）・進（マ四）などがあります。

〔注意〕　名詞の「相撲」「向ふ」は、「すまひ」「むかひ」の「ひ」が「う」に轉じたものであると見て、「すまう」「むかう」の假名が正しいといふ説もありますが、從ふことは出來ません。

〔形容詞の連用形から〕　これはあまり多くの例はありません。

近く・遠く　　この二語には、第一種助詞「を」「の」「に」「へ」などが附きます。（口語では「が」も附きます）

多く　　これには第一種助詞「の」「を」などが附きます。やはり名詞になつたものと見るべきです。

この外「幼くより…」「若くより…」など用ひるものがあります。

〔形容詞の終止形から〕　これも數は多くありません。

からし（辛）　　からい意の形容詞から、芥菜の實を粉にしたものの名に轉じたものです。

すし（鮨）　　すつぱい意の形容詞から、食物の名に轉じたものです。

おもし（重鎭）　　重い意味の形容詞から重鎭の意味の名詞に轉じて、「國のおもしたりき」などのやうに用ひられます。

正・尊（人名）　この外、人名には、次のやうなものがあります。

清・厚（敦）　廣（宏）　安（泰）　猛（毅・剛）　智・久（壽）

なほ「あかし」（燈）　明るい意の形容詞から、「ともしび」の意の名詞になりました。但し、これは「あかるくする」といふ意味の動詞「あかす」の連用形とも見られます。

〔感動詞から〕「あはれ」の外にはありません。これは口語では殆ど用ひられません。

（二）代名詞になつたもの

名詞以外の品詞から轉成するものはありません。

君　長たる人・主たる人を意味する名詞が人代名詞に。

僕　「しもべ」の意味の名詞が人代名詞に。

わらは（文語）「子供」の意の名詞から、女の人代名詞に。

（三）動詞になつたもの

名詞から成つた普通のものには、次のやうなのがあります。

てきたふ（ハ四）　「敵對」から動詞に。

さいしく（カ四）　「彩色」から動詞に。

さうぞく（カ四）　「裝束」から動詞に。

この外、「繋ぐ」（綱から）、「股ぐ」（股から）、「孕む」（腹から）などありますが、これ等は一般に語源も忘れてゐますし、ここで觸れる必要はないでせう。口語では、「れうる」（料理から）、「彌次る」（人名の彌次から）などがありますが、文語では用ひません。

（四）形容詞になつたもの

〔名詞から〕

大人し　名詞「おとな」に形容詞の語尾の附いたもの。

まことし　名詞「まこと」に形容詞の語尾の附いたもの。

この外「しふねし」（執念から）などもあります。口語では「黄色い」（黄色から）、「四角い」（四角から）などがありますが、文語では用ひません。

〔動詞から〕

いさましい　（マ四）の未然形「いさま」に形容詞の語尾の附いたもの。

煩はし　（ハ四）の未然形「煩は」に形容詞の語尾の附いたもの。

願はし　（ハ四）の未然形「願は」に形容詞の語尾の附いたもの。

この類には、なほ

懐かし　騒がし　疑はし　狂はし　ふさはし　喜ばし　羨まし　睦し
疚し

などがあります。

うらめし　「うらむ」の轉じたものです。

「うらむ」は文語では「マ上二」の動詞です。

たのもしい　「頼む」の轉じたものです。「たのま」となるべきものが「たのも」となつたものでせう。類例には「おそろし」があります（「恐る」は上古には四段に活用しました）。

〔副詞から〕

甚し（文）　副詞の「はなはだ」に形容詞の語尾の附いたものです。類例には「未だし」があります。

のどけし・静けし（文）　副詞「のどかに」「しづかに」から「に」を取去つたものの「か」が「け」に轉じ、之に、形容詞の語尾が附いたのです。類例には「明けし」「安らけし」「平けし」「豊けし」「遙けし」などがあります。

なほ、副詞の終の「に」を去つた形に形容詞の語尾の附いたものには、次のやうな例があります。

暖し　愚し　正し（ただし）

（五）副詞になつたもの

〔名詞から〕

つゆ・ゆめ（文）　名詞から轉成したものでは、この二語が普通です。「今起きたり」「萬年筆を一本買ひたり」の「今」「一本」などは、副詞のやうに用ひられてゐますが、意味に變化なく、他に名詞としてのいろ〳〵な用法がありますから、これ等は副詞になつたのではなく、やはり名詞で、名詞の用法の一として、副詞と同樣に用ひられる事があると見るべきであります。

〔動詞から〕

たとひ　「たとへ」ともいひますが、これは古く四段活用の動詞に「たとふ」といふのがあつて、その連用形から轉成したものであらうといはれてゐます。

この外、口語には次のやうな語がありますが、文語では多く用ひません。

あまり　ラ行四段動詞「餘る」の連用形から轉成したものです。

つまり　ラ行四段動詞「つまる」の連用形から轉成したものです。

（六）接續詞になつたもの

〔動詞から〕

及び　ハ行四段動詞「及ぶ」の連用形から轉成したものです。動詞から轉成したものは、外にありません。

〔副詞から〕

また・はた・もつとも　この外になほ、次のやうなものがあります。

かつ　なほ　すなはち

なほ、「すなはち」の轉成したものは、口語でも用ひます。

〔注意〕　文語にはありませんが、口語では助詞が接續詞に轉ずることがあります。即ち「が」「で」「けれども」は本來助詞ですが、次のやうに用ひられると、接續詞になります。即ち、助詞は附屬する語で、それの附く語とつづけて發音するものですが、上の語で切つて、助詞だけを離して發音すると、それだけで獨立する語となつて、接續詞になるのです。

滯在日數は少かつた。が（けれども）名所舊蹟はたいてい見た。

友達がしきりに忠告した。が（けれども）彼は何うしても聞き容れなかつた。

いろ〳〵やつて見たが、うまくいかない。で私共は思ひ切つてしまつた。

なほ、「と」も次のやうに用ひたものは、接續詞となつたものです。

やがて國歌の合唱となりました。（何うです、滿場水を打つたやうに靜かになりました。）

（七）感動詞になつたもの

〔代名詞から〕

おのれ　これは元來反照代名詞で、人代名詞にも用ひられますが、本書に擧げたやうに用ひられると、その意味が轉じて、感動詞になつたと見るべきです。口語には類例に次のやうなのがあります。（その時は、また括弧の中に示したやうにもいひます。）

これ（こら）、何をするか。

あれ、あんな事をして。

それ（そら）、いつたぞ。

どれ（どりや）、見せて御覽。

なに、かまひはしない。

〔副詞から〕

いかに（文）　「いかに、辨慶、之を何とか見る」「いかに、與一、あの扇の眞中射て敵に見物せさせよかし」のやうな場合には、唯、呼び掛けるだけの語で、「どうだ」といふ意味ではありません。これは感動詞に轉じたのです。

口語では、なほ「ちよつと」「さて」も、次のやうに用ひられると感動詞に轉成します。

ちよつと、此處は何といふ村でせう。

さて、出かけませうか。

第十八章　複合語

〔本章の目的〕

我々が、新しい事物や思想を言ひ表はす場合に、これまであつた單語を組合せて、新しい語を作る事があります。たとへば「山」と「道」とを組合せて、「山」でもなく、またただの道でもない、山にある道を表はす「山道」といふ語を作る類であります。かやうにして出來た語は甚だ多いのでありますが、かやうな語はその用法の上から見ると一つの單語と少しも異るところがありません。隨つて「山道」といふことばは、成立の上から見れば二つの單語を組合せたものでありますが、一つの名稱を表はすところの、一つの單語であると解すべきものであります。この點に關する知識がありませんと、形の上から之を「山」と「道」とに分解して、二つの單語として別々に取扱ふ憂があります。

本章は、かやうな誤つた取扱を避けしめる爲に、この種の單語の構造の一般を知らしめて、單

語に對する知識を正確にし、詳密にする爲に設けたのであります。

【七一】 複合語の性質

複合語は、二つ以上の單語が合して、一つの單語となつたものであります。隨つて、必ず何れかの品詞に屬すべきものであつて、文法上の性質に於ては、複合しない單純な單語と、何等異るところのないものであります。

さうして單語が合して複合語となつた以上は、もとの單語は、新しい單語の（卽ち複合語の）成分になつたもので、單語としての獨立を失つたものです。それは、形の上からも言ひ得る事であつて、「山」と「道」とを別々の單語として發音した場合と、「山道」といふ一つの語として發音した場合と、その音調（アクセント）に於て、たしかに違ひがあります。その上、複合語の或ものには、音調ばかりでなく、音そのものが變化するものさへあります。「いたど」（板戸）、「みづがめ」（水甕）、「かなもの」（金物）などその例です（これは〔七二〕に述べます）、かやうな譯で、複合語は、單語を合せて出來たものですが、それをそのまゝ切り離しても、必ずしも、もと通りの單語となるものではありません。

形ばかりでありません。意味に於ても、複合語はそれを組立てた單語の意味だけでなく更に或意味が加はり、或ものは、その上に更に變化した意味をもつものです。例へば「山道」は「山に

ある道」、「板戸」は「板で作つた戸」、「水甕」は「水を入れる甕」、「金物」は「金でこしらへた物」の意です。又、「菰冠」（コモカブリ）は「菰をかぶつたもの」といふ意味からして、菰でつつんだ酒樽を表はし、「酒盛」（サカモリ）は「酒を盛る事」の意味から、酒宴を表はします。

複合語は比較的新しく出來たものもありますが、また古く出來たものもあります。古く出來たものの中には、之を作る爲に用ひられた單語が、後世になつて單語としては用ひられなくなつたものがあります。例へば「をけ」（桶）は「を」（麻）と「け」（笥）とから出來た複合語ですが、後になつて「け」（笥）といふ語は單語としては用ひられなくなつた爲、「をけ」が二つの單語を合せて出來たものである事は普通の人にはわからなくなつてゐます。無論「をけ」といふ語の歷史をしらべ、その起源を研究すれば、複合語である事はわかりますが、かやうなものは、獨立した單語と複合語の成分になつたものとを混同する虞はありませんし、複合語の性質については他の例でよくわかりますから、本書のやうな初步の文典に於ては、かやうなところまで立入つて說く必要はあるまいと思ひます。

なほ、「複合語」を、本書より廣い意味で用ひる人もあり、また「複合語」の代りに「複合詞」「合成語」「熟語」などの名を用ひるものもあつて、いろ〳〵まち〳〵ですが、これ等に就いては第十九章の終に一まとめにして述べます（253節參照）。

一、名詞

複合して名詞となるものは、非常に多いのですが、本書には、各四五例を擧げて、主な種類を示しました。引例は說明する必要を認めませんから、左に補充の例を記しておきませう。

川底　鳥籠　石橋　煙草屋　マッチ箱　縞ズボン　一本松（名詞と名詞）
花見　日照（ひでり）　火消（ひけし）　神參（まゐり）　煉瓦造　インキ消（けし）　カルタ遊（名詞と動詞）
建物（たてもの）　釣橋　沸湯（にえ）　負軍（まけいくさ）　貸金（かしきん）　冷しコーヒー（動詞と名詞）
請取　書置　割合　立話（動詞と動詞）
たゞ事　また從兄弟（いとこ）　そゞろ言（ごと）（副詞と名詞）
山々　木々　月々　一日々々（同じ名詞と名詞）

右の通り、動詞が複合語を造るには、連用形を用ひるのが原則ですが、形容詞はその語幹を用ひて、

近目　薄墨　廣緣（えん）　夜寒　裾濃（すそ）　丈長（たけ）〔女兒の髮飾〕
古着　高笑　遲蒔　長追（おひ）

のやうになるのが普通であります。ですから、語幹のまゝでは直ちに單語と見ることは出來ませんが、この場合は單語と同樣に取扱はなければなりません。

形容詞は語幹を用ひるといひましたが、シク活用の形容詞では、語幹に「シ」の附いた形（口語の形容詞の語幹）を用ひます（「嬉し涙」「悔し涙」の類）。以下、この章に於て形容詞の語幹といふのは皆この意です。

〔注意一〕　語の末に「に」「と」の附く副詞も、複合する場合には、それ等の無い形を用ひるのが普通です。これ等の形は、口語では「だ」、文語では「なり」の語尾を附けて第二種の形容動詞となりますから、形容動詞の語幹といつてもよろしいのです。

あだ名　おぼろ夜　まれ人　なほざりごと

副詞はまた動詞と複合して、名詞をつくることがあります。

そゞろ歩（あるき）　あだ臥（ぶし）　かりそめ臥　ちよつと見（口語）　たゞ使（口語）

ぶら〳〵歩（あるき）（口語）

〔注意二〕　形容詞の或ものは、文語の終止形を用ひて複合することがあります。

袖無（なし）　裏無〔草履の名〕　仲好（よし）

〔注意三〕　以上は普通の場合を挙げたのですが、左例のやうな複雑なものもあります。

三つ・目・小僧　名　名　名

人・さし・指　名　動　名

蚊・遣・火　名　動　名

人・騒が・せ　名　動　助動

負け・じ・魂　ゴム・裏・草履　聞か・ん・氣（口語）
動　助動　名　名　名　動　助動　名

鐵筋・コンクリート・造り　わ・が・もの・顔
名　名　動　代　助　名　名

二、代名詞

これは多くありません。次に例を少し補つておきます。

わ主（ぬし）　わ僧　わ御前（ごぜ）（代名詞と名詞）

たれかれ　（代名詞と代名詞）

この類のものは、口語には「あれこれ」「かれこれ」「あつちこつち」「あちらこちら」などあります。

なほ、本書には擧げませんでしたが、次のやうなのもあります。

われ〳〵　たれ〳〵　なに〳〵　（同じ代名詞と代名詞）

口語の「これ〳〵」「どれ〳〵」「どこ〳〵」なども、同様の例です。

〔注意一〕「わ殿」「わ僧」などは對手をさしていふ語です。その「わ」に「和」の字などを宛てますが、それは音を表はすだけであつて、意味には關係がありません。「わ」は人代名詞です。

〔注意二〕　口語では「こやつ」「そやつ」などを、「こいつ」「そいつ」のやうに、「や」を「い」に轉じたのも、普通に用ひます。

三、動詞

左に、例を補充しておきます。

ひき裂く　落しいる　書き取る　聞き入る　取り上ぐ　攻め敗る　消え失す

おもん〔ひ〕ばかる（慮）　（動詞と動詞）

心得（う）　名づく　爪（つま）づく（蹶）　指（ゆび）さす　つちかふ（培）　（名詞と動詞）

近寄る　遠のく　短過ぐ　優し過ぐ　（形容詞と動詞）

「心す」「運動す」「任ず」「命ず」「ストップす」なども、名詞や漢語や西洋語と、サ變の動詞「す」とが複合した動詞であります。

〔注意〕　「重んず」「輕んず」「安んず」「甘んず」などを、形容詞の連用形「―く」が、サ變の動詞「す」と複合して音が轉じたものと說く人がありますが、これ等は形容詞の語幹に「み」の附いた「重み」「安み」などが、「す」と複合したものであります。現に、その「み」のままで用ひる「な（無）みす」「よ（善）みす」などは、今でも文語文に用ひられます。また、これ等と似てゐますが、文語「先んず」「諳（そら）んず」の起源は別であつて、これ等は「先

にす」「そらにす」から出たものであります。

四、形容詞

補充例を擧げておきます。

息苦し　心地よし　目ざとし　耳新し　物珍し　物憂し（名詞と形容詞）

見にくし（醜）　聞きにくし　讀みがたし　寢苦し（動詞と形容詞）

痛がゆし　薄赤し　（形容詞と形容詞）

本書には出しませんでしたが、なほ次のやうなのが有ります。

重々し　輕々し　長々し　弱々し　猛々し　若々し　淺々し　荒々し（同じ形容詞と形容詞）

〔注意〕「重々し」「輕々し」のやうに、同じ形容詞の語幹を重ねると、ク活用がシク活用になります。

五、副詞

複合語の副詞には種々の語に助詞又は助動詞が附いたものが多いのですが、これ等は、いつも副詞であるのでなく、一つ一つの語が普通の意味に用ひられた場合は、唯、一つの語に助詞・助動詞の附いたもので、それが合して複合語となつたのではありません。それ全體として、特別の

意味を持つ場合には、全體が一語となつて複合詞となるのです。例へば、「家にかへつてまた考ふ」といふ場合の「かへつて」は、「かへる」といふ動詞に「て」といふ助詞が附いてゐるだけで、「かへつて」が一語となつたものではありません。「好意はかへつて害となれり」の「かへつて」は意味が轉じて、全體で「反對に」といふやうな意味になりますから、之を一語と見て副詞とし、それが「かへる」と「て」とから成立つたものであるところから、複合詞と見るのです。本書に舉げた例は皆さうです。それ故、これは機械的にはきめられないのであつて、その意味用法を考へて、一つの副詞となつてゐるかどうかを判斷しなければなりません。

〔補充例〕

時に　幸に　よに（名詞と助詞）

なにぞ（なんぞ）　何か　何かは（代名詞と助詞）

決して　極めて　敢へて　あまりに　たがひに　みだりに（動詞と助詞）

〔注意〕　右の二三語に就いて述べておきます。

敢へ（下二段動詞「あふ」の連用形）て（第二種助詞）

みだり（古代の四段動詞「みだる」の連用形）に（第一種助詞）

たがひ（四段動詞「たがふ」の連用形）に（第一種助詞）

又本書に擧げた「しきりに」は、次の通りです。

しきり（文語四段動詞「しきる」の連用形）に（第一種助詞）

さばかり　いかばかり（副詞と助詞）

なほ、本書に擧げなかつた種類のものとして、左の如きものがあります。

時をり　をり〳〵（名詞と名詞）

をりかへし　繰返し　とりわけ　とりわき（動詞と動詞）

かへす〴〵　ます〳〵　かはる〴〵　重ね〴〵　しみ〴〵（同じ動詞）

なが〳〵と　やす〳〵と　深々（ふかぶか）と　近々（ちかぢか）に（同じ形容詞と助詞）

六、接續詞

副詞の場合と同じく、助詞が附いて出來たものが多いのですが、「故に」「爲に」「よつて」などは、接續詞と見るべき場合と、「故」「爲」「よる」などに助詞が附いただけで、一語になつてゐないと見るべき場合とがあります。これは、その意味用法を考へて判斷すべきです。

〔補充例〕

然れども　さらば　されば　隨つて（動詞と助詞）

口語では類例に「すると」「して」などがあります。

なほ口語には、次のやうなものが用ひられます。

それで　それでも　それとも　それから　そこで（代名詞と助詞）

だが　だけれども　ですが　ですけれども　だから　ですから（助動詞と助詞）

〔注意〕　複合した接續詞は、本書に擧げた外に、もつと複雜なものがあります。

しか・し・て　（副詞と動詞と助詞）

口語の「さう・し・て」「さう・する・と」なども、同じ成立です。

〔疊語〕

複合語のうちに、同じ語を重ねて出來たもの、たとへば

人々　一つ〳〵　たれ〳〵　時々　返す〴〵　かね〴〵　また〳〵

いざ〳〵

のやうなものを、特に疊語といふことがあります。また、複合語を二つに分け、違つた語の複合したのを熟語と稱して、この疊語と對立させる人もありますが、本書では疊語を特別に取扱ふ必要を認めませんので、一般の複合語の中に含めておきます。

【七二】　複合語に於ける音の轉化

前にも述べました通り、單語が合して複合語になる場合には、形の上に變化を來すのが普通で

す。その形の變化には、アクセントの變化がありますが、それは文字の上には現れませんから、ここでは最著しいものとして音の變ずるものだけを擧げました。

「かね」（金）と「もの」（物）が合して「かなもの」となり、「こゑ」（聲）と「いろ」（色）が合して「こわいろ」となるのは前の語の最後の母音が變化するのです。之を「轉韻」などいふ人があります。

次に補充例を出しておきます。

さけ（酒）―をけ（桶）　さかをけ（酒桶）
さけ（酒）―や（屋）　さかや（酒屋）
ふね（船）―やど（宿）　ふなやど（船宿）
なへ（苗）―しろ（代）　なはしろ（苗代）
しろ（白）―ほ（帆）　しらほ（白帆）

次に下の語の最初の音が變る事があります。「はる」（春）と「あめ」（雨）で「はるさめ」（春雨）となるのは下の語の最初の音に子音が加はつたのです。この類は多くありません。併し、連濁、卽ち「ほん」（本）、「たな」（棚）が「ほんだな」となるやうに、下の語の最初の音が濁音となる例は、少くありません。それを次に少し補つておきます。

春ごま（駒）　人じち（質）　すけだち（助太刀）　つけび（放火）
見ぐるし（苦）　讀みがたし（難）　きぎ（木々）

右のやうな二種の變化が、共に現れる場合があります。

かなぐつ（金靴）　ふなばし（船橋）　あまごひ（雨乞）
つまづく（爪突）　むなぐるし（胸苦）

第十九章　接頭語・接尾語

〔本章の目的〕

本章は、前章に引續いて、單語の構造について述べます。卽ち單語にそれ自身では獨立し得ない接辭が附いて、合して一語となつたものについて述べます。

この種のものは、複合語の場合と同じく、一つの單語が、新しく出來た單語の成分となるのであつて、やゝもすればその單語の取扱を誤る事がありますし、又接辭を助動詞や助詞と混同する虞もありますから、ここにその構造を明かにして、單語や品詞に對する知識を正確にしようとするのです。

【七三】接頭語

「小松」「初荷」「さまよふ」の「小」「初」「さ」は、「小山」「小粒」、「初花」「初雪」「初旅」「さ渡る」のやうに、いつも他の語の上に附いて、之に何かの意味を加へます。かやうなものを接頭語といひます。そして、それが附いて出來た語「小松」「初荷」「さまよふ」などは、皆一語であります。

【七四】接尾語

「時めく」「神さぶ」「海邊」の「めく」「さぶ」「邊」は、「春めく」、「翁さぶ」、「山邊」のやうにいつも他の語の下に附いて、之に何かの意味を加へます。かやうなものを接尾語といひます。そして、それが附いて出來た語「時めく」「神さぶ」「海邊」などは皆一語であります。

〔注意〕接頭語が附くと、複合語の場合のやうに、下の語の最初の音が濁音となる（卽ち連濁になる）ことがあります。

を―かは	をがは（小川）
た―はかる	たばかる（誑）
いち　しるし	いちじるし（著）

なほ、形容詞や形容動詞の語幹に接尾語が附くことがあります。それ等は次に一々ことわらないで、形容詞や副詞に接尾語が附いた例として擧げます。

【七五】 接辭

接頭語及び接尾語は、決して單獨に用ひられる事なく、必ず他の語に附いて現れるものであります。かやうなものを接辭といひます。さうして、接頭語や接尾語の附いて出來たものは、その成立からいふと、二つの成分から成るものですが、語としての用法の上に於て、卽ち文法上の性質に於て、單純な單語と何等異る所がないもので、何れも、一つの單語として取扱ふべきものであります。かやうに接辭は、それが單語に附いても、やはり一の單語を形作るものであります。卽ち接辭は、いつも單語の成分としてのみ用ひられるものであります。

【七六】 接頭語と品詞

接頭語の附いて出來たものは、一つの單語でありますから、文法上何かの品詞に屬する筈です。それでは接頭語と品詞との關係はどうかといふと、或單語に接頭語が附いても、新しく出來た語の品詞は、もとの單語の品詞と變りません。「松」「荷」が名詞ならば、「小松」「初荷」も同樣に名詞であり、「まよふ」が動詞ならば、「さまよふ」も同樣に動詞であります。卽ち接頭語は、それの附いた語の品詞を變へません。

〔接頭語の主なもの〕

本書には主な例だけを擧げました。左に語例を補ひ、又本書に擧げなかつたものも、少し擧げ

ます。その中には、文語に限つて用ひられるものと、口語にも用ひられるものとあります。

〔接頭語の附いた名詞〕

はつ〔初〕音（聲・穗・花・雁）
おほみ〔大御〕心（歌・位・代）
おん〔御〕顏（机・文・思・捉）
ご〔御〕同伴（紋章・盡力・出征・卒業・出發・門）
を〔小〕川（車・山田）
こ〔小〕松（屋・粒・柄）
み〔御〕位（心・代・親・雪・空）
き〔生〕絲（蕎麥・醬油）
す〔素〕足（面・顏・肌）
さ〔小・狹〕夜（霧）

次に本書に擧げなかつた接頭語を擧げます。

うひ〔初〕孫（學・冠）
えせ〔似而非〕者（法師・歌・學者）

かた〔片〕手（足・腕・言（こと）・時・田舎・山里）
くせ〔曲〕者（事）
こと〔異〕國（人）
にひ〔新〕參（まゐり）學（まなび）
ひが〔僻〕目（耳・事・讀（よみ））
ま〔眞〕心（晝・夜中・事）
まつ〔眞〕直中（たゞなか）（最中（さいちゆう））
もろ〔諸〕双（手・人・聲）

漢語の「第一」「數年」「諸國」「各縣」なども、同じ性質のものであります。

又次のやうな「お」は、口語には普通ですが、文語ではあまり用ひません。

お〔御〕手（屋敷・家（うち）・菓子・はたらき）

〔**接頭語の附いた動詞**〕

ほ〔ほ〕の見る（聞く）
た比ぶ（走る）

この別記の238節に「さまよふ」「さ渡る」の例を挙げましたが、これ等の外に、なほ次のやう

なものがあります。

い行く（坐す・向ふ）

け劣る

〔注意〕「取り扱ふ」「さし控へる」（口）「うち見る」などを、前章で述べた複合語と見るか、或は「取り」「さし」「うち」などを接頭語と見なすかは、人によつて違ひます。成程これ等「取り」「さし」「うち」等は、かなり本義から遠ざかつて接頭語の性質に近いものですが、しかし一方においては、動詞として用ひられますから、「取る」「さす」「うつ」の特別な用法と見るのが穩當だらうと思ひます。殊に「あふ」の連用形は、「相」の漢字を用ひて、「相成候」など表はすので、一層接頭語らしく思はせますが、やはり同様に取扱つてよいと思ひます。

實は實用的の文法では、これ等を接頭語と見るか否かは、さほど大きな問題ではなく、これ等の附いたものを一單語と見ることが、最も重要な點であります。

〔接頭語の附いた形容詞〕

こ〔小〕ざかし

か細し（黑し）

た弱し

本書に出した以外にも、次のやうなものがあります。

いち早し（著し）　いや〔彌〕高し（遠し）

け近し（長し）

なほ、口語では次の例のやうに、「お」の附いた形容詞を用ひますが、文語ではあまり用ひません。

おやすい（寒い・近い・珍しい・優しい）

〔注意〕口語ではなほ次のやうに、接頭語の附いた副詞があります。

こざつぱりと（ぎれいに）

おたひらに（まめに・立派に・丈夫に）

ご〔御〕丁寧に（快活に・活潑に・ゆつくり・ゆるりと）

この中「ご快活に（活潑に）」のやうに、漢語から成るものに「ご」の附いたのは、文語にも用ひる事があります。

【七七】接尾語と品詞

接尾語の附いて出來た語の品詞は、接尾語によつてきまります。一々の接尾語は、それ〴〵或

一定の品詞を作るもので、それがどんな品詞の語に附いても、出來上つた語の品詞は同じことです。例へば、「等（ら）」の附いたものは、いつも名詞又は代名詞であり、「めく」「さぶ」の附いたものは、いつも動詞であります。隨つて、或語に接尾語が附いて出來た語の品詞は、もとの語の品詞と同じである場合と（例へば、「大尉」も「大尉殿」も名詞）、同じでない場合とあります（例へば「春」は名詞、「春めく」は動詞）

〔**接尾語の主なもの**〕

語例の中には、口語に用ひられるものもあります。

一、名詞又は代名詞を作るもの

A　體言に附くもの。これは敬讓の意や複數を表はします。また數詞に附くものは、數へられる事物の性質や順番を表はします。正しくはこれは體言を作るといふべきもので、名詞に附けば名詞になり、代名詞に附けば代名詞になります。

中佐（上等兵・課長・齋藤）殿
太郎（井上次郎）君（くん）
親（兄弟・社員）たち
女（娘・兄弟・職工・者・舟・木）ども

法師（女）ばら

少女（生徒・社員・君・僕・これ・それ・かれ）等

本書には擧げませんでしたが、なほ次のやうなのがあります。

露（鹽・雨・風邪）け

大人（雪）げ

又、本書の「二枚」「三疋」「五番」の類の普通なものを補ふと、次の通りであります。

一羽　二艘　三軒　四本　五箇　七つ目　八號　九回　十回目

なほ、口語には次のやうなものが有りますが、文語には普通用ひません。

井上（太郎・校長・社長・叔父・お花）さん

佛（宮・お日・お月・井上）様

〔注意一〕「友だち」「子ども」は、共に複數を表はす語でありますが、その意味が稀薄になつて、今では一人の友・子をも「友達」「子供」といふやうになりました。代名詞の「われ等」「わたくしども」（口語）も、いくらか、へり下る意味で、單數の自稱にも用ひます。

B　體言以外のものに附くもの。これは形容詞・形容動詞の語幹に附く場合が最も普通であります。

甘（强・弱・厚）み
深（重・廣・樂し・をかし・重々し）さ
眠（ねぶ）け

本書に擧げた外に、「―げ」があります。

かはゆ（惡（にく）・あぶな・惜し）げ

これは、「惡氣無し」「惜しげ無く」など用ひます。

〔注意二〕　本書には擧げませんでしたが「愚かさ」「しづかさ」などは、副詞「愚かに」「しづかに」の「に」を取去つた部分、卽ち形容動詞の語幹に、「さ」の附いたもので、又「しづけさ」は形容詞「しづけし」の語幹に「さ」の附いたものです。「のどかさ」「のどけさ」の成立も、これに準じて容易に判じられます。

右の「―さ」に「に」が附いたものは、副詞的な性質を帶びて、下の語を修飾するに用ひられる場合が少くありません。

あまりの悲しさに、うちかづき伏し給ふ。

〔注意三〕　「重み」「强み」などの「み」は近來は名詞にも附いて、「人間み」「人情み」なども用ひられます。これに「味」の字を宛てますが、「味」は音を表はすだけのものです。

二、動詞を作るもの

これは名詞や形容詞・形容動詞の語幹などに附いて、動詞になります。

荷（音）なふ〔ハ四〕
今（時）めかす〔サ四〕
鄙（翁）ぶ〔バ上二〕
高（上品）ぶる〔ラ四〕
氣色（黄・由）ばむ〔マ四〕
今めく〔カ四〕
翁さぶ〔バ上二〕
寒（うるさ・ねむた・あぶな・嬉し・恥かし・をかし）がる〔ラ四〕
若やぐ〔ガ四〕

〔注意〕　本書には擧げませんでしたが、「迷惑がる」「面倒がる」などは、「がる」が形容動詞の語幹に附いた例です。これは口語では助動詞「たい」にも附いて、「見たがる」「行きたがつた」のやうに用ひられます。隨つて初年級用の文典では「たがる」を助動詞として取扱ひました。

三、形容詞を作るもの

女（子供・男）らし
隔（さし出）がまし

本書に出した以外の例には、次のやうなものがあります。

はした（荒け）なし
古（今・なま）めかし

なほ、口語には次のやうなものがあります。

油（脂・ねばり）こい
際（灰汁）どい
煙（口はばつ）たい
子供（ぐち・忘れ・怒り）ぽい。

〔注意〕「らし」は文語助動詞にもありますが、助動詞の「らし」は語形變化がなくて、動詞の終止形（ラ變は連體形）に附き、推量の意味を表はしますが（〔五九〕參照）、接尾語の「らし」はシク活用で、體言に附くが、動詞には附きません。これで區別されるのです。

四、副詞を作るもの

自（おの）づから

花（まめ・しのび）やかに
清（寒・悲し・寂し・苦々（にがにが）し）げに

〔注意一〕 以上の「―やか」「―げ」は、そのまゝ語幹となつて、第二種の形容動詞となることがあります。

花やかなり　　まめやかなり　　清げなり　　寂しげなり

〔注意二〕 「げ」は「かはゆげなし」「あぶなげのなき男なり」のやうに、形容詞の語幹に附いて、名詞をつくることがあります。（この節の「一、名詞又は代名詞を作るもの」のB参照）。然るにここに擧げた「―げに」は、「に」なしで名詞に用ひられることはありません。それで「げに」を接尾語として、「副詞となるもの」の中に入れたのであります。

〔語の構造と接頭語及び接尾語〕

この章で述べたのは接頭語・接尾語が單語に附いたものばかりですが、接頭語・接尾語は單語にのみ附くものでなく、「ひらめく」「ほのめかす」、「いづら」のやうに、單語として獨立し得ないものにも附きます。この「ひら」「ほの」「いづ」の類は、單獨には用ひられませんが、接尾語又は接頭語を附けて單語を構成し、その單語の中心たる意味を表はすもので、之を語根と呼びます。この語根は、重ねて用ひられ（「ひら〳〵」、「ほの〴〵」など）又は他の語根と合して一語を作

るなどの用をなし、單語の構成上には最大切なものですが、これを論ずる事になると、語源研究に入らなくてはならなくなつて、かなり難解になり、且つ實用上には、必ずしも是非なくてはならないものでもありませんから、今は之に觸れず、唯、單語に接頭語・接尾語の附いたもののみについて述べました。

かやうに語根といふものに觸れず、唯、單語と接頭語及び接尾語とに就いて考へた結果、實際は語根であるものを、接頭語又は接尾語と認めなければならなかつたものもあります。例へば「ほの」は「ほのめく」「ほのめかす」「ほのぼの」「ほのかに」の諸語の中心になる部分で、語根であり、「ほのぐらし」は、その語根と「くらし」といふ形容詞とが合して一語となつたものですが、語根を認めないとすれば「ほのぐらし」は「くらし」といふ單語に「ほの」が附いて出來た單語で、「ほの」は他の單語の上に附いて意味を添へるもので、單獨に用ひられる事が無いものですから、接頭語であるとしなければならなくなります。

かやうなわけで、今普通に接頭語といはれてゐるものの中に、實は語根であるものも含まれてをります。これは純正な學問の上からいへば不都合ですが、本書の如き初等の教科書には、一般の説に從つておいてよろしからうと思ひます。卽ち、かやうな事を述べるのは、語の構成法の全般を説くのが目的でなく、單語と單語でないものとの別を明かにして、單語や品詞の取扱に誤な

からしめるのが、その大なる目的であるからであります。

〔接頭語・接尾語と助詞・助動詞〕

接頭語や接尾語は、決して單獨で用ひられる事なく、必ず他の語に附くものです。然るに、單語の中でも、助詞や助動詞は、決してそれだけ用ひられる事なく、必ず他の語に伴なつて用ひられるものであります。それでは、この兩者の間にどんな區別があるかといひますと、接頭語・接尾語が附いたものは、それで一つの單語となり、文法上何れかの品詞に屬します。然るに、助詞や助動詞は、これが附いても一つの單語とはなりません。例へば、「花を」「花の」「花は」「花ばかり」「花なり」などは、一つの單語ではなく、どんな品詞にも屬しません。もつとも、助動詞の多くのものは動詞に附き、助動詞が附いたもの（例へば、「書かむ」「書かる」「書かす」など）が全體として動詞と同樣に用ひられる故、之を動詞であると見る事も出來ないではありません。（現にさう見る學者もあります）これに對しては、猶他の點から、兩者の區別をする事が出來ます。卽ち、接頭語・接尾語は、それが附く語は限られてをり、從來慣用のあるものにしか附きません。助動詞や助詞は、自由に規則的にどんな語にも附く事が出來ます（無論、或ものは體言にのみ、或ものは用言にのみ附くといふやうな制限はありますが、體言ならば原則としてどんな體言にも、又用言ならば、どんな用言にも附きます）。この點が兩者の違ひであります。以上二つ

の點から考へれば、混同する事はあるまいと思ひます。

〔**複合語・合成語・熟語・疊語**〕

これ等の術語の用ひ方が、人によつてまち〳〵であることは、前にも述べましたが、中には接辭の附いて成つた語をさへ、複合語または熟語など稱する文典があります。ですから、名稱によつてその内容を速斷することは出來ません。本書では既に上に述べた通り、單語と單語とが合して成つたものを複合語と稱し、その一部分の、同じ語を重ねたものは特に必要ある場合に限つて疊語と呼ぶことにしました。

次に接辭の附いて出來た語には、特別の名稱を與へませんが、複合語の中に入れないで別の種類として取扱ふ事にしました。かくして、合成語・熟語といふ名は全く用ひません。ここに他の文典との異同を考慮して、特にことわつておきます。

第四篇　文の成分

〔本篇の目的〕

上の第二篇及び第三篇では、品詞論に關する事を述べましたが、この篇及び第五篇では文章論に關する事を述べます。文章論としては、文の成分や、節のこと、構造上及び意味上から見た文の種類などが主な問題でありますが、その中、文の成分の論は、文の中に於ける語相互の聯關を明かにするもので、國語の構造を知らしめるのにも有用であり、文の意味を明瞭に理解し、又語脈の整つた文を綴る爲にも有效であつて、文章論中、最大切な、又最效用の多い部分であります。

文の成分に就いては、既に初年級用改制新文典にも口語について說き、又本書にも第一篇の中に、口語と文語の例を擧げて主語・述語・修飾語に就いて說明を加へましたが、これは品詞分類の基礎となるものである爲でありますから、品詞分類に必要な限りに於て略述したのであります。この篇に於ては、文構造の要素としての文の諸成分の如何なるものであるかを說き、且つその成分が如何なる語で成立つかを明かにして、品詞論との連絡を保たしめるやうにしました。また成分の倒置と省略を述べたのは、諸成分によつて文が組立てられる場合のきまりを明かにして、文構造の知識を完からしめる爲であります。

〔教授上の注意〕

この篇に述べた事は、大部分は口語に於ても同様であります。唯、種々の成分を表はす形の上に口語と文語との差異があります。

この篇に說いた事は皆必要な事でありますから、出來るだけ全部を授ける事を希望しますが、もし時間の都合上、この篇を早く終る必要があるならば、各成分がいかなる語から成るかといふ部分だけは、之を簡略にし、又止むを得ない場合には、之を省いても宜しからうと思ひます。

第二十章　文と文の成分

〔本章の目的〕

ここでは「文」と「文の成分」とに就いて、基礎的概念を與へるのを目的とするのであります。その成分には如何なる種類があるか、各成分の構造はどうかなどいふ事は、後に述べる事として、これら成分の全體に宛てはまる事を教へようとするのであります。

【七八】文の概念

「文」に就いては、既に〔三〕で述べましたし、また一層具體的には後の〔八一〕に申しますが、「文」の概念を明確にしておく事は、最も重要な事であります。本書には普通の說明に從つて、

「一つの纏まつた思想を言ひ表はす一つゞきのことば」を文といふと、主として内容（意味）から見た文の特質を擧げると共に、又「文の終では必ずことばが切れる。文字で書く時は○を附ける」（〔三〕參照）と、形の上から見た特質をもあげて、理解し易いやうにしました。

「纏まつた思想」といふのは、「月は昇れり」を「月は」や「昇れり」にくらべ、「庭の櫻も美しく咲きたり」を「庭の櫻も」や「咲きたり」にくらべて、後者の意味が、まだ纏まらない、不十分な、落着しないものであるに對して、前者は、纏まつた、完備した思想を表はすといふのです。「思想」といふかはりに「意味」といふ語を用ひて、「纏まつた意味をもつ」といつた方が一層わかり易いかも知れません。（もつとも、「昇れり」「咲きたり」のやうな語だけでも、場合によつては、その主語が言ひ表はされてゐないものと解せられて、聞手に十分意味を傳へる事が出來る事があります。その場合には、纏まつた完備した思想を表はしたものとして、文と觀てよいのです。しかし、ここではそこまで説明する必要はあるまいと思ひます。）さうして一方に於て、文の終では言葉が切れてそこで音が終る事、書く時には○を附ける事を説明すれば、大抵、文の概念は得られようと思ひます。又「一つづきのことば」といふのは、多くの場合には、二つ以上の單語の結合したものですが、時には「進め」や「來よ」のやうに只一語から出來た文もありますが、音としてはつゞきますから、「一つゞきのことば」といつて差支無いとおもひます。

〔注意〕「雨降る時は外出せず。」に於ける「雨降る」の類は、意味の上からいふと、それで纏まつたものとも見られますが、しかしこの場合の「降る」は、そこで言ひ切つたのでなく、下の「時」につゞいてゐます。このやうに纏まつた思想を表はしてゐても、言ひ切りになつてゐないものは「文」ではありません。（これは文法上でいふ「節」であります）このやうに、文は、意味ばかりでなく形の上からも決定されるものであることを、忘れてはなりません。

〔連語〕

文は單語で出來るものであります。唯一つの單語で出來たものもありますが（「進め」「來よ」など）、多くの場合は二つ以上の單語から成り立つてゐるもので、文を分解すれば單語となります。その場合には、文は單語の結合したものでありますが、單語の結合したものは、必ずしもすべて文ではありません。本書に擧げた「庭の櫻も」「美しく咲きたり」は共に單語が結合したもので、たゞ個々の單語が集まつたばかりでなく、すべてが合して或意味を表はしてゐますが、しかしまだ文にはなつてゐません。文になるには、全體の意味が纏まつて或事柄を言ひ表はし、それで完結したものにならなければなりません。かやうに單語の結合で、まだ文にならないものを連語と云ひます。ここに連語の事を出したのは、文の成分が、單語でなく、連語から成り立つ

たものが少くないからです。

〔連語の種類、活用連語〕

連語はいろ〳〵あります。「庭の」も連語であれば「庭の櫻」も連語であり、「庭の櫻も」も連語であります。「咲きたり」も「咲きけむ」も「美しく咲きたり」も皆連語であります。それ故、連語の種類としては、見方が違ふに從つていろ〳〵のものが出來ます。その中、助動詞が他の語に附屬して出來た連語を特に活用連語と名づけたのは、それが全體として一つの用言と同樣に用ひられますから、これに名を與へて置くのが、いろ〳〵の場合に便利であるからです。

活用連語の名は、多分芳賀矢一博士が用ひられたのが最初であらうと思ひますが、博士は、用言に助動詞の附いたもののみを指す事とせられましたが、今は用言にかぎらず、他の品詞に助動詞が附いたものをすべて活用連語といふ事にしました。

【七九】文の成分

文の成分は、一つの文を組立てる各の部分であつて、主語・述語・修飾語等であります。その最も簡單なものは文語の

風（主語）　烈しく（修飾語）　吹く（述語）

のやうに、一成分が一語で出來たものであります。然るに、

風は（主語）　烈しくも（修飾語）　吹かざりき（述語）

のやうに「は」「も」「ざりき」のやうな語が他の語に附加したものも、やはり文の成分となります。かやうな語の附いたものを、一の成分として取扱ふ事は從來實際に於て行はれた事でありますが、從來の文法では、この事を明かに述べたものはありませんから、ここにこの事を明かにしたのであります。

さて、「風は」は二語、「烈しくも」も二語、「吹かざりき」は三語、何れも連語であります。卽ち、これ等は連語で出來た成分であります。しかるに、「烈しく吹く」は二語から出來た連語でありますが、これは一つの成分ではなく、各一語で出來た二つの成分です。これをどうして區別するかといふと、「風は」「烈しくも」「吹かざりき」のやうに、連語で一成分を成してゐるものは、その中一つづつ獨立する語（「風」「烈しく」「吹か」）を含んで居り、之に附屬する語が附いたものです。又「風」「烈しく」「吹く」は何れも獨立する語で出來て居ります。卽ち成分には必ず獨立する語が必要であり、附屬する語は獨立する語に附いて始めて成分の一部分を成すものです。それ故、文の成分を考へるには、必ず獨立する語を標準にすべきであつて、附屬する語は之に附加したものとして取扱ふべきである事がわかります。

〔注意一〕　右の例及び本書に擧げた例は、すべて一つの成分に一つの獨立する語を含んだもの

です。文の成分がいつもかやうなものばかりであるならば、獨立する語の數だけ成分の數がある事となり、文をその成分に分けるには、その中にある獨立する語を目當てにして分ければよく、甚簡單明瞭でありますが、實際に於ては例外があります。それは、一つの成分の中に、獨立する語二つ又は二つ以上を含むものがあるからでありまして、卽ち次のやうな場合であります。

（一）日本と英國と米國は（主語）　世界の三大海軍國なり。

兄は、今日又は明日（修飾語）　神戸に着くべし。

かやうに獨立する語が重なつて一つの成分になる時で、この場合には、その獨立する語（「日本」「英國」「米國」及び「今日」「明日」）は對等の資格で並立してゐるものです。又、この際に並立する語を接續する接續詞があれば、それもその成分の中に入ります。

鐵及び石炭は（主語）　重要なる工業の資料なり。

（二）鯨は　魚にあらず（述語）

御心も　優にましまします（述語）

これは　鏡にて候（述語）

このやうに、「あり」「ましまします」「候」のやうな獨立する語が、他の語に附いて附屬的の意味

を加へるだけの時は、他の獨立する語と共に一つの成分となります。かやうな例外はありますが、それでも、一つの成分に一つの獨立する語があるものが多數を占めてをりますから、多くの場合に獨立する語を目當てにして、成分を分ける事が出來るのであります。この事は、本書には說きませんでしたが、敎授者諸氏は心得ておかれる事を望みます。

〔注意二〕　右に述べた通りですから、文の成分は（一）獨立する語一つで出來たもの、（二）獨立する語一つに附屬する語が附いたもの、（三）獨立する語二つ以上又は之に附屬する語の附いたもので出來たものの三種となります。卽ち（一）のみは單語であり、（二）（三）は連語であります。主語・述語・修飾語などの名から、文の成分は單語であるやうに考へる虞がありますが、連語もありますから、注意を要します。

〔文の成分と獨立する語・附屬する語〕

前項で述べたやうに、文の成分には、必ず獨立する語が必要であります。しかもたとへば

日は　西に　沒したり。
月　山より　出づ。
蟲が　鳴く。（口語）
これも　よい。（口語）

私　齋藤です。（口語）

の――の部分のやうに、一つの獨立する語だけで成分となる事があり、また――の部分のやうに、附屬する語が附いて成分となることがあるのは、既に述べた通りです。

附屬する語は、決して單獨に用ひられる事なく、必ず獨立する語に伴つて之に或意味を附加するものですから、それだけでは文の成分とならず、獨立する語と共に成分となるものであります。

【八〇】 文の成分の種類

文の成分の種類として主語・述語・修飾語、及び獨立語を立てました。この外に補語・客語などを立てるのが普通ですが、本書ではそれ等はすべて修飾語の中に含めました。これに就いては、後の修飾語の部で述べます。

第二十一章　主語と述語

〔本章の目的〕

本章では、主語・述語とは如何なるものか、また如何なる語が主語・述語となるかを教へるのが、目的であります。

【八一】 主語・述語

本書では、主語・述語を抽象的な説明を避けて、代表的な實際の文によつて知らせる方法をとりました。卽ち

「何が、どうするか」を表はす「花咲く。」は、動詞が述語になつた文。

「何が、どんなであるか」を表はす「波高し。」は、形容詞が述語になつた文（形容動詞が述語になつた文も、この種類に屬します）。

「何が、何であるか」を表はす「我は日本人なり。」は、體言に指定の助動詞の附いたものが述語になつた文です。

文法でいふ文の中には、右の三種の外にまだありますが、しかし文の代表的なものとしては、右の三種を擧げることが出來ます。これによつて主語・述語の概念を得させるやうにしました。

卽ち、右の文の「どうするか」「どんなであるか」「何であるか」を表はす「咲く」「高し」「日本人なり」が「述語」であつて、「何が」に相當する「花」「波」「我は」が「主語」であると說くのであります。

右の「どうするか」「どんなであるか」「何であるか」を表はす語は、つまり何かを述べ又は說明する語です。それ故、文の中でまづ何かを述べ又は說明する語をもとめて述語を得、次に、その述語に對して、「何がさうするか」「何がさうであるか」を考へて、その「何が」に相當する語

をもとめて主語を得るのが、比較的にわかりやすく、又間違ひの少い方法であらうと思ひます。もつとも、この方法で、いつでもきつと正しく主語・述語をさぐり出す事が出來るとは限りません。例へば「流るゝ水」「赤き花」に於ても、「流るゝ」「赤き」は述べ説明する語と考へられ、「何が流るゝか」「何が赤いか」といへば「水」及び「花」ですから、それが主語のやうに考へられますが、ここでは、「流るゝ」「赤き」は述語でなく、「水」「花」は主語ではありません。卽ち、これ等の場合には一つ一つの語の意味上の關係は主語・述語の關係と見得るとしても、全體として或事柄を述べ又は説明する文を成すのではなく、「水」「花」に修飾語が加はつた連語を成すに過ぎません。それ故、之を主語及び述語とは見ないのであります。かやうな場合だけは、右の方法は適用する事が出來ませんから、注意を要します。

主語は主題又は題目を表はす語であるといふやうな説明が世間に多く行はれてゐます。これは

鶯は鳴く。

鐵は黑し。

これは水牛なり。

のやうな「鶯は鳴くものだ」「鐵は黑いものだ」「これは水牛といふものだ」と説明するやうな文に於ては當つて居りますが、

あゝ、鶯は鳴く。
鶯も鳴きたり。
雨しと〳〵と降る。
風もやゝ烈しかりき。

のやうな文は、或出來事を述べるだけで、特に「鶯」や「雨」や「風」が問題になつてゐるのではありませんから、その主語を主題又は題目を表はすと説明するのは不當であります。それ故、前述の如く、述語に對して、「何がさうするか」「何がさうであるか」を表はすものが主語であると説明すればよからうとおもひます（無論「何が」の「が」は主語たる事を表はす助詞で、主語たる資格を有するものは「何」にあたるものですから、「が」といふ助詞は無くともよく、又「は」「も」その他の助詞があつてもよいのです）。

とにかく、あらゆる場合にあてはまる主語・述語の説明を理論的にしようとすると、あまり抽象的で難解になりますから、それよりも寧ろ本書のやうに、實際の文に就いて具體的に説くのがよからうと思ひます。

〔**主語・述語と附屬する語**〕

日は　出でたり。

右の文は、獨立する語の「日」「出づ」が根幹となつて、主語・述語を成す文です。附屬する語の「は」「たり」は、「日」及び「出づ」がこの文に於て主語及び述語たるに必要な意味を附け加へてゐるに過ぎず、實際、主語及び述語たり得る資格をもつてゐるのは「日」及び「出づ」ですから、理論上右の主語は「日」、述語は「出づ」であるといふ事が出來ます。けれどもこの文を組立てるに就いては、附屬する語もその成立に參加してゐるに違ひがありませんから、文の成分としてはこれ等附屬する語を含めた「日は」「出でたり」を、主語・述語と見るべきであります。（〔七〕及び〔七九〕參照）但し、口語「日が出た」のやうな文の主語の場合には、「日が」の「が」は主語たる事を表はす語ですが、これは必ずしも必要でなく、「日は」「日も」でも主語たる事がありますし、又まれですが「私、井上です」の如く、助詞なくして主語たる事もありますから（文語では「日出づ」のやうに、助詞の附かない場合が少くありません）、口語でも文語でも附屬する語を除外したものを主語とする方が、理解させる上にも、取扱の上にも便利な事があります。さういふ場合には勿論その取扱をして差支ありません。

〔「何が何であるか」の文の述語〕

日本は神國なり。

首謀者は汝ならむ。

あれは巡洋艦です。（口語）

私は學生だ。（口語）

右の各例は、獨立する語である體言に、附屬する語である助動詞の附いたものを述語とする文であります。人によつては、この場合、助動詞を述語とし、それの附いた體言を述語外のものと見て補語など名づける說があります。しかし附屬する語は單獨で成分となる事は出來ず、それが成分となるには、必ず獨立する語に伴はなければならない筈です（一七九）參照）。それ故、本書では右の各例の傍線を施した部分、卽ち體言と助動詞とを合せたものを述語と見ます。また

光陰は流るゝ如し。

も、獨立する語である用言に、附屬する語である助動詞「如し」が附いて、何が「どんなであるか」を表はしてゐますが、同樣に、合せたものを述語と見るべきであります。

【八二】主語になる語

〔（甲）體言〕

體言が主語になるのが最も普通でありまして、體言だけで主語になつてゐる場合が少くありません。その場合に、口語では體言の下に第一種助詞「が」が附きます。また文語・口語ともに、特別の意味を加へる爲に、第三種助詞「は」「も」「まで」「さへ」などを附けることも珍しくあ

りません。

授業はじまる。

風さへ吹き出でぬ。　秋ぞ悲しき。

誰か喜ぶべき。

ここも涼しい。（口語）　子供までをかしがる。（口語）　級長は井上です。（口語）

〔（乙）　用言又は活用連語の連體形〕

用言もまた主語になることがあります。この場合には、この用言の連體形に助詞の附くのが普通です。（口語では第三種助詞「の」が附いてその下に他の助詞が附きます）。又用言に助動詞が附いたもの（活用連語）は、その助動詞の連體形に助詞が附きます。

怠るは罪惡なり。　長閑なるが春の特長なり。

善きは採られ、惡しきは捨てらる。　出發せるもあり。

寒いのも困る。（口語）　小さいのまで一緒に行つた。（口語）

笑はれるのもよからう。（口語）　歌つたのは誰ですか。（口語）

〔（丙）　對等の體言の重なつたもの〕

米・生絲・杉材はこの地方の重要產物なり。

右の「米」と「生絲」と「杉材」とは、互に修飾・被修飾の關係にあるものでなく、勿論主語・述語の關係に立つものでもなく、互に同等の資格を以て對立し、それが重なつて主語となつてゐます。このやうに對等の體言が重なつて主語となることがあります。

對等の體言の主語となる場合には、左例のやうに、たゞ並列するか、又は助詞・接續詞を用ひて結合させるのが通例です。

奈良・京都は舊都なり。

勇氣と粗暴とは相似たり。

代數並びに幾何は難解なり。

小學校または寺院はあるべし。

一日・十五日は休日だ。（口語）　太郎や次郎が登山した。（口語）

筆と紙が入用だ。（口語）　父か母かが參ります。（口語）

なほ、本書には略しましたが、用言または活用連語が、對等の資格で重なつて、主語となることがあります。その場合の並べ方も、大體體言と同樣であります。

與ふると受くるとは共に難し。

採る採らざるは任意なり。

古きと珍しきとがよきなり。

儉約なると吝嗇なるとは天地の差なり。

行く・行かないは隨意だ。（口語）

よい・わるいが問題となる。（口語）

泣くのやわめくのが居た。（口語）

練習したのと練習しないのとまじつてゐる。（口語）

〔注意〕　本書には、普通に主語となる語に就いて述べましたが、その外、どんな語でも、用ひ方によつては主語となる事が出來ます。

「ゆるやかに」は副詞なり。

「れる」は「る」の轉ぜるなり。

「あゝ」は感動の意味を表はします。（口語）

の類です。しかしこれ等は、「ゆるやかにといふ言葉は」「れるといふ語は」などの意味ですから、結局體言が主語となつたと同樣です。

【八三】　述語になる語

〔（甲）　用言〕

用言が述語になる場合が最も普通であります。その場合、助動詞・助詞が附く事があります。本書の「終れり」「清からん」は、動詞・形容動詞に助動詞の附いた例で、「なかれかし」は形容動詞に助詞の附いた例です。

この場合に特に注意すべきは、形容詞が動詞と同じく、單獨で述語となり得る事で、これは國語の特色であります。

波高し。　見物人も多し

此處は涼し。　松青く、砂白し。

庭が廣い。（口語）　私も嬉しい。（口語）

〔（乙）體言〕

體言も述語となることがあります。その場合には、體言に指定の助動詞、又は第三種の助詞の附くのが通例です。

これは教科書なり。

清正の軍は先鋒たり。

會場はいづこなりや。

大將は小松殿ぞ。

あれこそ富士山よ。
あれも山だ（です）。（口語）
これはにせものさ。（口語）
殘つたのは三人だけか。（口語）

〔注意〕體言に助詞が附いて述語となつた例として右に擧げた類のものを、次のやうに體言の下に指定の助動詞が略されたものとして、一々それを補つて文法的説明を與へる人があります。

大將は　小松殿（なる）ぞ。
あれこそ　富士山（なる）よ。
これは　にせもの（だ）さ。（口語）
殘つたのは　三人だけ（だ）か。（口語）

しかし本書では、體言に助詞の附いたのを、ありのまゝの形で直ちに述語と見ます。

〔（丙）　種々の語に動詞・形容詞の附いた連語〕

用言が附屬的の意味を添へる爲に他の種々の語に附いて出來た連語が、述語となる場合があります。

これには大體四種類あります。

（一）　動詞「あり」または之と同様の意味を表はす語が、體言に附いたもの。本書に擧げた最初の二例がそれです。（口語では形容詞「ない」も用ひられます。）

人は木石にあらず。
建禮門院は國母にてましませり。
これは小松殿にて候。
これはかたみの文に侍り。
定員は五十人である。（口語）　これは學校でございません。（口語）
鯨は魚でない。（口語）　今は時機でない。（口語）

右のやうに、この場合には體言に、文語では「に」「にて」、口語では「で」が附くのが普通です。

なほ、右の「にあらず」「である」などの代りに、「ならず」、「だ」「です」などいへば（乙）の例になります。

（二）　動詞「あり」または之と同様の意味を表はす語、及び形容詞「なし」が、形容詞の連用形又はウ音便形に附いたもの。本書に擧げた「優しうまします」「戀しくもなし」はその例

ですが、次に類例を補つておきます。

道は峻しくもあらざりき。　君もかしこうおはしけり。　公達は未だ幼うまします。

何か苦しう候ふべき。

故郷は懐かしくもなし。

これはよくありません。（口語）　道は悪うございます。（口語）

建物も古くはない。（口語）

右の例にある通り、この場合に、間に第三種助詞「も」「は」などの入る事があります。

〔注意〕「なし」を右のやうに用ひる事は、古い時代にはありませんが、やゝ後世の文語には見えてをります。

（三）動詞「あり」または之と同様の意味を表はす語が（口語では形容詞「ない」も）、副詞に附いたもの。

本書の「快活にはあらず」はその例ですが、次に補例を挙げておきます。

心もすなほにあらず。

御性質は頗る御明朗に渡らせらる。

御振舞もしとやかにまします。

警戒もさまで嚴重には候はず。

事實はさうではありません。（口語）　お待ち申したのはちよつとでございます。（口語）

海上は穩かでございます。（口語）　論旨は適切である。（口語）

建物は立派でもない。（口語）

右の例にもある通り、この場合、間に第三種の助詞「は」「も」などの入る事があります。

（四）　動詞「給ふ」「奉る」「まゐらす」等が、他の動詞又は活用連語に附いたもの。

本書には「給ふ」「奉る」「まゐらす」の例を擧げておきましたが、次に補例を擧げておきます。文語には、尊敬又は謙譲の意味を含む動詞に附くものだけですが、口語には單に尊敬・謙譲の意味を有する場合だけには限りませんから、その主なる例も擧げておきます。

院も御幸し給ふ。　法皇もゑつぼに入らせおはします。

まめやかに宮仕へ申す。　粟津まで送りまゐらす。

會期もはや過ぎ候。

浴衣がほしてある。（ほしてない。）（口語）

浴衣がかわいてゐる。（かわいてゐない。）（口語）

私も叱られてしまつた。（口語）　しばらく待つて下さい。（口語）
しばらく御待ち下さい。（口語）　此處で御休みなさるか。（口語）
私が行つてあげませう。（口語）　も少し待つていたゞきませう。（口語）

〔注意〕（丙）に擧げたものは、すべて一つの成分の中に、二つ又は二つ以上の獨立する語を含むものです（〔七九〕の別記の〔注意一〕參照）。

【八四】 同じ主語に對する述語が重なつたもの

二つ以上の述語が對等の資格で重なつて、同一の主語に對する事があります。本書の例では、

稻は發育し、みのれり。

の「發育し」は「稻」に對する述語であり、「みのれり」も「稻」に對する述語であつて、同じ「稻」に對する二つの述語が、對等の資格で、「發育し、みのれり」と重なつて居ります。その場合に、

花は　赤く美し。
彼は溫良にして恭謙なり。
我等は疲れかつ飢ゑたり。

のやうに、上の述語が連用形となり、又は助詞を附けるのが普通で、その上二つの述語の間に接

續詞を用ひる事があります。猶、本書以外の例を擧げておきます。

櫻は美しく、潔し。　汝等よく學び、かつ習ふべし。

山は高峻にして、秀麗なり。　汝は敵か、はた味方か。

彼は畫家にして、詩人なり。

將士は喜び、かつ勇んだ。（口語）　聲が高くて、朗かだ。（口語）

金は美しくて、その上錆びない。（口語）　某は醫者で、歌人だ。（口語）

〔別の取扱方〕

この類のものを、本書では右のやうに說明しましたが、また別な見方をする事も出來ます。卽ち、右のやうに、「發育し」と「みのれり」とを、それ〴〵一つの述語とは見ず、「發育しみのれり」を一つの述語とし、その述語が對等の關係に立つ「發育し」と「みのれり」といふ語（連語）から成ると見る見方です。同樣に「廣くして、美し」（本書〔八四〕の例）も、「廣くして」と「美し」と二つの述語が重なつたものと見ず、「廣くして」と「美し」と對等の資格の語が重なつてそれが一つの述語となると見るのです。この見方は〔八二〕の（丙）に擧げた米・生絲・杉材はこの地方の重要產物なり。

に於て、「米」と「生絲」と「杉材」とを三つの主語と見ず、「米」と「生絲」と「杉材」とが合

した「米・生絲・杉材」を、一つの主語と見たのと同様な取扱方です。

かやうな取扱方は決して誤でなく、或場合には却つて都合のよい事もあります。しかるに、本書でかやうな取扱をしなかつたのは、次の如き理由によるのです。

一、「稻は發育しみのれり」といふ文で、「稻は發育し」で既に「發育する」事を理解し、「みのれり」で、更に稻が「みのつた」事を理解します。それ故「發育し」を一つの述語と見る方が、我々の言語意識に適したやうに思はれます。殊に「稻は發育し、麥もみのれり」といふ文に於ては、「發育し」を述語と見る事は一般に行はれてゐる事で、その「發育し」は、その形も意味も、上例の「發育し」と同一であります。それ故「發育し」を一つの述語と見る方が、便宜と思はれます。

二、右のやうな述語が、それ〴〵從屬する成分をもつ場合があります。

稻は順當に發育し、よくみのれり。

園内は甚だ廣くして、頗る美し。

この場合に「發育し、みのれり」を一つの述語とし、「廣くして、美し」を一つの述語とする時は、「順當に」「よく」「甚だ」「頗る」などの修飾語の取扱が、複雜になります。それよりも一つ一つ別の述語とすれば、次に記すやうに、その各の述語に修飾語が附いた事になつ

て、成分の説明も簡單に出來ます。

修飾語　述語　修飾語　述語
順當に　發育し、　よく　みのれり。

修飾語　述語　修飾語　述語
甚だ　廣く、　頗る　美し。

かやうな理由から、この種のものを、語が重なつて出來た述語とせず、二つの述語の重なつたものとして取扱ひました。しかし、實は、この取扱も萬全なものでない事は、

發育しみのれる稻は……

廣くして美しき園内

のやうに、前と同じ語が修飾語として用ひられる事がありますが、その場合には、之を二つの別の修飾語としてでなく、合せて一つの修飾語として取扱はなければならないのによつても明かであります。（「廣くして美しき園内」は、「廣き、美しき園内」と比べると、どうしても「廣くして美しき」を一つの修飾語と見なければなりません。）

かやうなわけで、實際、對等の資格の語の取扱は、かなり困難で、これを解決する爲には、多少私案もありますが、從來の取扱方とあまり違つてはどうかと考へましたので、右のやうに取扱つておきました。卽ち、右のやうに二つの成分が重なつたものと見るのは、述語になつた場合に

限つた事と御承知願ひたいのであります。

〔注意一〕　この節に擧げた諸例は、前述の如く、二つの語（又は連語）が重なつて述語になつたものと見てもよいのでありますから、都合によつて、さう取扱つて差支ありません。その場合に、その各に從屬する成分の取扱に就いては、この別記の296節に述べます。

〔注意二〕　前述の如く、この節の諸例を、述語がいくつも重なつたものと見れば、これは述語がどんな語で出來るかの問題でなく、出來た述語が、どうつゞくかの問題です。それは理論上から云へば、ここへ擧げるのは不合理ですが、これは、一方から見れば、對等の語が重なつて述語が出來たものと見られるものですし、又、述語の重なる時の語形も注意を要しますから、ここに附載したのです。（述語以外の成分ですと、同じ成分がいくら重なつても、單獨に用ひられた場合と形はかはりません。）

〔總　括〕

主語・述語がどんな語で出來るかは、大體上述の通りです。之を簡單に表示すると、次の如くであります。

主語 ｛（甲）體　言（又は體言に助詞の附いたもの。）
　　｛（乙）用　言（又は活用連語）の連體形。

述語
- （甲）用言（又は用言に助動詞・助詞の附いたもの）
- （乙）體言に助動詞・助詞の附いたもの。
- （丙）種々の語に動詞・形容詞の附いたもの。
- （丁）述語が重なるもの。

第二十二章　修飾語

〔本章の目的〕

本章は修飾語に就いて説明したものです。本書では、客語・補語などをも修飾語として取扱ひましたから、修飾語は、いつも意味上附屬的のもので、「他の語に係る語」です。それ故、文の中から、まづ主語・述語を見出し、次に、それらに「係る語」をもとめれば、多くの場合、修飾語を得る事が出來ます。かやうにして文の構造をしらべて行く事は、正確な解釋力を養ふ爲にも、語脈の整つた文を作る爲にも、有益なことと考へられます。

【八五】修飾語

文法上で「修飾」といふのは、細かに見るといろ〳〵の種類がありますが、ここには最も普通

であり、隨つて代表的なものと見るべきものに就いて述べました。卽ち修飾される語の意味を委しくし、定めることと說明しました。

「意味を委しくする」とは、換言すれば意味の增加であります。たとへば

二人の旅人はいたく驚けり。

に於て、「二人の」「いたく」は、「旅人」「驚けり」に「二人」「いたく」といふ意味を加へてゐます。さうして單に「旅人」「驚けり」が表はすよりも、もつと委しい意味を表はしてゐます。

次に「意味を定める」といふのは、意味の漠然たる點を、どんなであると決定して、はつきりさせる事であります。

前記の例で申しますと、たゞ「旅人は驚けり」と言つただけでは、幾人の旅人が、どれぐらゐ驚いたかは言ひ表はされず、その點で意味が漠然としてゐますが、「二人の旅人はいたく驚けり」といふと、幾人の旅人であるか、どれぐらゐの驚きやうであつたかが決定されて、意味がよほど明かになります。かやうな譯で「委しく定める」と說明したのであります。

修飾するといふ事を「限定する」事と說明する人があります。「旅人は驚けり」といふ時は、幾人のどんな旅人が、どんな驚き方をした場合にも適用出來ますが、之に修飾語を加へて「二人の旅人はいたく驚けり」といふと、二人以外の旅人、ひどい驚き方以外の驚き方には當てはまら

ぬ事になります。即ち、修飾語によつて修飾される語の適用範圍を狹める事になりますから、修飾を「限定」といふのです。

この說明は、大抵の場合にはあてはまりますが、時には不適當な事があります。

事實は恐らく然らん。

さる事實は決して無し。

これ等の「恐らく」「決して」は無論修飾語ですが、「恐らく」によつて「然らん」の意味が限定せられ、「決して」によつて「無し」の意味が限定せられたとは見られません。「然らん」でも、「恐らく」といふやうな意味は含んでゐるのですが、それを「恐らく」といふ語を加へてはつきりさせ、「無し」でも、否定する意味がありますが、「決して」でその否定を強めて、明かにしたのです。かやうな、修飾される語の意味を強くし明かにしたものは、「委しく定める」といふ說明の中には含ませる事は出來ませうが、「限定する」といふ說明にはあてはまらないと思はれます。さすれば、「限定する」といふよりも、「委しく定める」とした方がよからうとおもひます。

次に、「蠶は繭をつくる」「蛹は蛾となる」の「繭を」「蛾と」の類は普通、客語・補語として取扱ひ、修飾語とは認めませんが、本書では之を修飾語の中に入れました。その理由は後に論ずる事として、ここでは、之を修飾語としても說明する事が出來るといふ事だけを述べませう。

言葉のつゞきやうから見て、右の例の「繭を」が述語「つくる」に係る語であり、「蛾と」が述語「なる」に係る語である事は、「二人の旅人はいたく驚けり」の「いたく」が述語「驚けり」に係るのと同様である事はいふまでもありません。次に意味から見ると「つくる」はどんなものをつくる場合にも用ひられ、「なる」はどんなになる場合にも用ひられ、その點に於て意味が漠然としてゐる事は、「驚けり」が、どんな驚きやうの場合にも用ひられると同様であります。その漠然たる點が「繭をつくる」「蛾となる」の「繭を」「蛾と」の語によつて定められ明かにせられ、委しく示される事は、「いたく」によつて「驚けり」の意味が委しく定められるのと同様であると見られます。かやうに修飾といふ事を前述の如く「修飾される語の意味を委しく定める事」と解釋すれば、右の客語又は補語とせられたものも、亦修飾語であるとする事が出來ます。（それでは、何故に、さう取扱つた方がよいかは下に述べます）

〔注意一〕　修飾といふ意味を右のやうに解すれば、「旅人は驚けり」の「旅人は」も、「驚けり」では何が驚いたか漠然としてゐるのを委しく定めるもので、やはり修飾語ではないかといふ論が出るかも知れません。それは誠に道理であります。實をいへば私も、主語と、客語・補語や修飾語との間に、下の語に係る關係に於て根本的の相違があるとは考へないのであります。それ故、右のやうに考へられるものであつても、前に述べた標準に照して、述語に對す

る主語と認められるものは、修飾語とは見ず、主語とするのであると考へておけばよからうと思ひます。

〔注意二〕　右に述べたやうに、本書では客語・補語の類を修飾語とした爲に「繭をつくる」の「つくる」、「蛾となる」の「なる」も修飾される語となりました。これは普通と違つてゐますから注意を要します。

【八六】　修飾語の二種

修飾語は、如何なる語を修飾するかによつて、二種に分けます。即ち體言を修飾するものを「連體修飾語」、用言を修飾するものを「連用修飾語」と名づけます。

今普通は、これ等を「形容詞的修飾語」「副詞的修飾語」と呼んでをります。これは西洋語の文典から來た名目で、西洋では形容詞は名詞・代名詞を修飾するのがその特質であり、副詞は動詞又は他の副詞を修飾するのがその特質でありますから、その意味で、形容詞的・副詞的といふ名を用ひるのですが、日本の形容詞は、西洋語のと違ひ、そのまゝ述語となり得る點で動詞と同じ事ですし、又、名詞・代名詞を修飾するのは、形容詞だけでなく動詞にもある事ですから、之を形容詞の特質と認める事は出來ません。かやうに、形容詞的修飾語といふ名は國語には適當でなく、誤解を來さしめる虞があります。それ故、これを連體修飾語と改めました。また副詞的修飾語

は、その名としては必ずしも不當でありませんが、本書では、所謂客語・補語をも含めましたので、西洋語の副詞的修飾語よりも範圍が廣くなつてをりますから、これも改めた方が間違が少なからうと考へて、連用修飾語と名づけました。しかし、「形容詞的修飾語」「副詞的修飾語」の名が廣く行はれてゐますから、本書には、その名だけは出しておきました。

〔注意〕　修飾語の中には副詞を修飾するものもあります。これは連用修飾語とみとめます。

〔補　語〕

連用修飾語の中には、用言の意味の缺けた所を補ふものであると見做すべきものがあります。前に擧げた、

蠶は繭をつくる。　　蛹は蛾となる。

の類の「繭を」「蛾と」の類がそれであります。卽ち、「つくる」といふ語、「なる」といふ語は、その意味上、何かをつくり、何かとなる事を豫想させるもので、もしその何かに當るものが無い場合には、缺けた所がある事を感せしめるものであります。その何かに當るもの、卽ち缺けた所を補ふものが「繭を」「蛾と」の語であります。さういふ意味で、之を補語といふのであります（又之を補足語といふ事があります）。本書では、かやうなものも亦修飾語（連用修飾語）の中に入れましたが、その他の修飾語は、修飾される語の意味上、これがある事を豫想させるといふ性

質のものではありません（例へば、「二人の」は「旅人」といふ語の意味から、かやうな修飾語があるべき事を豫想させるのではありません）。さういふ點から補語の類は、他の修飾語と違つて居ります。けれども補語を區別する事は文法上必ずしも必要ではありません。それ故、本書では實際の取扱としては之を修飾語の中に入れて、特別に區別しませんが、他書には補語といふ事が見えてをりますから、その名目だけを知らしめる爲に、ここに説いたに過ぎません。それ故、連用修飾語の中にはこんな性質のものもあると、輕く取扱つておいてよい事とおもひます。

〔客語・補語と修飾語〕

従來の文典では、客語・補語・修飾語の三つを別々に立てましたが、近來は客語を補語に併せて、補語と修飾語とを認めるものが多いやうです（又、補語を客語に併せて、客語と修飾語としたものもあります）。然るに、それ等の間の區別は、實際に當つては明確に立て難いものが少くなく、同じ例を或人は補語と認め、或人は修飾語と認めるなど、歸着する所を知らないものがあります。

元來、客語・補語・修飾語等の名は西洋語の文典から得て、之を日本語に適用したものです。西洋語で、これ等の區別を立てるのは、それが言語の形の上の區別に相當するからであつて、單に意味の上からのみの區別ではありません。それでは日本語でも、これ等の區別が言語の形の上

に認められるでせうか。

客語は、動作の目的たるもの（對象）を表はす語であるといはれてゐます。國語では、之を表はす爲に「を」の助詞を用ひるのが常です（「花を見る」「字を書く」「筆を執る」「煙草を好む」など）。それでは、「を」の助詞を用ひるのは、いつも客語であるかといふとさうではなく、「道を通る」「空を飛ぶ」「家を出づ」「國を離る」などの場合は、大抵修飾語と見られてゐるやうです。さすれば、客語と修飾語とを區別する標準は、唯意味だけであつて、之に相當する區別を、言語そのものの上に見出す事は出來ません。

又、補語と修飾語との區別も、言語の形の上からは出來ない場合が少くありません。例へば、「風烈しくなる」の「烈しく」は補語、「風烈しく吹く」の「烈しく」は修飾語、「日暖かになる」の「暖かに」は補語、「日暖かに照る」の「暖かに」は修飾語で、その間に何等形の上の區別はありません。或人は體言に助詞の附いたものをすべて補語とし、その他のものを修飾語として、兩者を品詞の相違から區別しますが、さすれば「湯水になる」の「水に」は補語であり、「湯冷くなる」の「冷く」は修飾語となつて、意味の方からの區別は立たない事になります。

かやうに、客語・補語と修飾語との區別は、思想の上では出來ても、實際に當つて之を區別する事が困難であるのは、畢竟、唯、意味の上だけの區別であつて、言語の形の上に之に應ずる差

異が無いからであると思はれます。言語の上にあらはれない意味だけでの區別は、文法上からは、全く必要の無いものであります。卽ち、これ等の區別を撤廢して一つのものとして取扱つては差支ない筈であります。さうして、これ等を合はせたものが、すべて修飾語として說明し得られるものである事は、前述の通りでありますし、これ等はすべて用言又は之に準ずべき語に係るものですから、之を連用修飾語と名づける事としたのであります（これ等のものを一括して、修飾語と名づけたのは、吉澤義則氏の中等新文典に既に先例があります。杉敏介氏も之を一括して客語と呼んでゐられます。ただ名が違ふだけです）。

從來の文法では、修飾語は用言や體言の意味を修飾するに對して、客語・補語は述語の意味の足らない所を補ふもののやうに說いてゐるのでありまして、修飾語と客語・補語とはその係る所の語の性質が違ふやうでありますから（卽ち、修飾語は品詞たる用言・體言にかかり、客語・補語は文の成分たる述語にかかる）、之を一つにして取扱ふのは不當なやうに見えますが、しかし、これは從來の文法の誤であつて、客語や補語も、述語にかぎらず、用言又は之に準ずるものに係るのであります。卽ち、「繭を」「蛾と」は

蠶は繭をつくる　　蛹は蛾となる

の場合には、述語にかゝりますが、

繭をつくる蠶。　蛾となる蛹。

の場合には、連體修飾語たる「つくる」「なる」に係るのであります。かやうに、「繭を」「蛾と」は、「つくる」「なる」が述語たる場合にも修飾語になつた場合にも、同樣に「つくる」「なる」に係るもので、卽ち、用言に係るのですから、之を連用修飾語として少しも差支ありません。

【八七】　連體修飾語になる語

〔（甲）　體言その他の語に助詞「の」「が」の附いたもの〕

本書に擧げた例の順に從つて說明しますと、第一に第一種助詞「の」の附くもので、これにいろ〳〵あります。

（一）「北の風」「いづこの人」のやうに、「の」が體言に附く場合は極めて普通であつて、次のやうに一音の代名詞に附いたのも、この類です。

この國　その家　かの時

（二）「今までの成績」「友よりの電話」は、體言に第三種や第一種の助詞の附いたものに更に「の」が附いて、それが連體修飾語となつたのです。次のやうな例もあります。

學校への途中。　公會堂にての演說。

われ等のみの會合。　三尺ばかりの蛇。

誰かの歌。　通行人などの聲。
途中での出來事。（口語）　學校からの知らせ。（口語）

（三）「しばしの別」「たま〳〵の面會」は、副詞に「の」が附いて連體修飾語になつたのです。

次の例も同樣です。

專らの噂。　若しの事。
ひたすらの願。
萬一の不幸。（口語）　ちよつとの間。（口語）

本書には擧げませんでしたが、「に」で終る副詞の「に」の代りに「の」を附けて連體修飾語にする事もあります（これは第二種の形容動詞の語幹に「の」が附いたと見ても宜しいのです）。

愚かの振舞。　斜の線。
稀の細道。
適切の言。　激烈の戰鬪。
嚴重の警戒。　獨斷的の議論。

（四）「面白の景色」「美しの風情」は、形容詞の語幹（文語シク活用では終止形）に「の」が附いて、それが連體修飾語になつたのです。これは口語には普通用ひません。

はかなの命。　有りがたの仰。
あやしの輿。　恥かしの心。

次に、第一種の助詞「が」が附いて、連體修飾語となる事があります。これはどの名詞・代名詞にも附くのではなく、用法が局限されてゐます。本書に四例を擧げましたが次に二三補つておきます。

汝が主。　予が父。
二三十人が聲。　義朝が父。
義仲が首。

なほ、古代語では、「つ」が體言に附いて連體修飾語となる事があります。この「つ」は第一種助詞と認むべきものです。

上つ世。　晝つかた。

〔注意一〕　本書〔四八〕に述べたやうに程度の副詞は、そのまゝの形で體言の修飾語になる事があります。（この別記の89節參照）但し、これは、特殊の體言にのみ限られてゐます。

やゝ右。　最も前。　たゞ三人。

〔注意二〕　專ら連體修飾語にのみ用ひられる少數の語があります。その中

（甲）ある（或）人　さる處　あらゆる會員　いはゆる紳士

のやうなものは、語源的説明を與へるより外なからうと思ひます。卽ち「ある」「さる」は、動詞「有り」「然り」の連體形であり、「あらゆる」「いはゆる」は、動詞「有り」「言ふ」の未然形に、古い助動詞「ゆ」（ヤ行下二段活用。後世の受身の「る」に相當するもの）の連體形が附いたものと説くのです。

次に（乙）下のやうなものは一音の代名詞に、第一種助詞「が」の附いたものと説明するのがよからうと思ひます。

汝が里。　誰が筆ずさび。

我が國。

口語の「この」「その」なども、次のやうに體言に連るだけにしか用ひられませんが、それ等を收容する品詞がありませんから、やはり代名詞に「の」が附いたものと説明するより外ありません。

この國。　その人。　あの日。　どの札。

文語の「こ」「そ」は、「こは…」「こを…」「そは…」「そも…」のやうに、「の」以外の助詞も附いて、比較的自由に用ひられます。

（丙）口語には次のやうな特有な語が用ひられます。

こんな草　そんな話　あんな成績　どんな時

これ等は語源的説明を與へようとしても、語源そのものに異説がありますし、むしろ「に」が附いて副詞に用ひられる語の、その「に」の略されたものと説くのがわかり易からうと思ひます。

〔（乙）用言又は活用連語の連體形〕

動詞でも形容詞でも、形容動詞でも活用連語でも、連體形のものは皆連體修飾語になります。英語などでは、かやうな場合に形容詞が用ひられ、之を日本語に譯すると「良き」（口語「良い」）「面白き」（口語「面白い」）など形容詞の連體形になりますから、生徒は、どうかすると、國語でも形容詞しか用ひられぬやうに考へます。それで、國語では決して形容詞に限るものではない事を、明確に會得させたいと思ひます。

〔注意一〕　形容動詞の第三種の連體形も連體修飾語となりますが、口語にはその第三種はありません。もつとも口語も記述の文では、「堂々たる態度」「斷乎たる處置」など用ひますが、對話ではこれ等を「堂々としてゐる態度」「斷乎とした處置」のやうにいふのが普通です。

〔注意二〕　本書には擧げませんが、用言に助詞が附いて、連體修飾語となることがあります。

たとへば

見ての上　　起きてよりの仕事
仕上ぐるまでの苦心　　出發せよとの命令
行くだけの事（口語）　　出來るまでの間（口語）

の類であります。

〔（丙）　對等の體言又は用言が重なつたもの〕

對等の語が重なつて連體修飾語となる事がありますが、その場合の形は次の通りであります。

（A）　體言が重なつた場合

終の體言の形は、（甲）で述べた通りであり、その上の體言の形及び重ね方は、〔八二〕の（丙）に準じて知る事が出來ます（卽ち、たゞそのまゝ重ねるか、助詞又は接續詞を附けます。）

國語・漢文の復習　　兎と龜との競爭
父及び母の恩　　陸軍並びに海軍の威力

（B）　用言が重なつた場合

最後の用言の形は（乙）で述べたやうに連體形であり、その上の用言の形及び重ね方は、〔八四〕に準じて知る事が出來ます（卽ち、連用形であるか、助詞・接續詞が附きます）。

赤く、美しき花
疲れ、かつ飢ゑたる城兵
質實にして剛健なる氣風
やすくてよい品（口語）

新しくして、珍しき品
細く、しかも強き紐
渺茫として際涯なき湖水
新しくてその上丈夫な洋服（口語）

〔注意〕「赤き美しき花」の場合は、「赤き」も「美しき」も直接に「花」を修飾します。「赤き」と「美しき」とが一體となつて「花」を修飾するのではありません。それで此處に擧げた例と區別せられます。

【八八】 連用修飾語になる語

〔甲〕 副詞

副詞が連用修飾語になるのは、次に述べる形容詞の連用形と共に、最も普通な場合で、その用法も兩者殆ど同じですから、次に兩者を一緒にして說明します。

〔乙〕 形容詞の連用形

形容詞の連用形が連用修飾語となつたものは、副詞と同じやうに用ひられます。それで、この用法に立つた形容詞を、そのまゝ副詞と見なす人もありますが、本書ではそれを形容詞の連用形の一用法と見ます。

次に形の上で申しますと、副詞も形容詞の連用形も、そのまゝの形で連用修飾語となりますが、また第三種助詞が附くこともあります。

次に補例を擧げておきます。

長閑にぞ過されける。
君はいかにかせられし。
平素も壯健には見えざりき。
しばらくは待ちたり。
たまにしか行かない。（口語）
わづかばかり聞きかぢつた。（口語）〔以上副詞〕
よくも知らず。
悲しくや思ひけん。
怖ろしくのみ覺ゆ。
口惜しくぞ敗れける。
つらくなど思ひません。（口語）
顏色がにくくさへ見えた。（口語）

大人しくばかりしてゐられない。（口語）〔以上形容詞〕

〔注意〕副詞及び形容詞の連用形が、連用修飾語に用ひられた場合にも、補語と見るべきものがあります。

「性質溫和に見ゆ」「氣分が朗かになつた」（口語）や、「擧動あら〳〵しくなる」「顏がやさしく寫つた」（口語）の類であります。これ等の文は「溫和な性質に見える」「朗かな氣分になつた」「あら〳〵しい擧動になる」「やさしい顏に寫つた」の意味で、「見ゆ」「なる」「うつる」などの語に意味上缺けてゐて、すぐ連想せられる「何に」又は「どんなに」にあたるものですから、補語と見るべきものです（無論、補語も連用修飾語の一種として取扱ひます）。

〔（丙）體言〕

體言が連用修飾語になるには形の上から見て、大體二つの場合があります。

第一は、本書に擧げた初の三例のやうに、體言が單獨に用ひられるものです。この場合の體言は、大抵時や場所や數量を表はすものに限られてゐます。次に補例を擧げておきます。

予も一昨年之を聞けり。　例會は毎月催さる。

歸途舊友に逢ふ。　車中雜誌を讀む。

事務員を五十名募集す。　甲は乙より二百メートル後れたり。

父は昨夜歸宅いたしました。（口語）　出征軍は明日出發する。（口語）

犬が三匹ゐる。（口語）　私は葡萄酒を一口飲んだ。（口語）

第二は、本書に擧げた第四例以下のやうに、體言に助詞が附いて用ひられるものです。その助詞は第一種か第三種か、またはその兩種を重ねて附けます。（その中に補語として取扱ふ事が出來るものがあります）

弟は小學校に入學せり。

弟は軍人となれり。

友遠方より來る。　某は幼兒にだに如かず。

忠度は三刀までぞ突き給ふ。

船は何處にかある。　山の奥にも道はありけり。

彼をこそ達人といふべけれ。　池は此處には在らず。

弟は繪をかいてゐる。（口語）　學校は圖書館に近い。（口語）

血は水より濃い。（口語）　私は今日は缺席する。（口語）

弟は小鳥も飼つてゐる。（口語）　あれは本ばかり讀んでゐる。（口語）

病院は此處にはありません。（口語）　私は子供にさへかなはない。（口語）

公園は學校からも遠い。（口語）　名古屋市は大阪市よりは小さい。（口語）

〔注意〕口語で「花を見る人」「山を越えて」など助詞「を」を用ひるところを、文語では、助詞を附けずに「花見る人」「山越えて」などいふことがあります。但し口語でも、方言では助詞を附けないものもあります。

〔(丁)　用言又は活用連語〕

これには次の通り二種あります。

(A)　用言の連體形に第一種助詞が附くもの。この場合の用言は、「―であるもの」「―する事（者）」などの意味を表はします。口語では、連體形の用言の下に大抵第三種助詞「の」を附けますが、文語では之を附けません。

學ぶは習ふに如かず。　　予は弱きに與せん。

何人もすなほなるを喜ぶ。　　彼は怠惰なるを排斥す。

私は丈夫なのにきめよう。（口語）　　君は高いのを買ふのか。（口語）

守るのは攻めるのにかなはない。（口語）　叱るのは叱られるよりもつらい。（口語）

(B)　用言に第二種の助詞が附いて、理由・原因・條件、その場の事情などを表はすもの。

余等は疲れて進み得ざりき。

汝等快からずば此處を去るべし。
彼は醉はざればうたはず。　彼は富めども驕らず。
水はありとも清からじ。
某は創作家なれども學者にはあらず。
某は幼けれども物に恐れず。
私はをかしいので笑ひました。（口語）　君は笑つたから叱られたのだ。（口語）
あれは醉ふとうたひ出す。（口語）　君も見たのに忘れたのか。（口語）

〔注意〕　このB種のものに、その用言に對する別の主語があれば、それは節（連用修飾節）となります。（330節の（丙）參照）

大人物は、家富むとも驕らじ。　私は、話がをかしいので笑ひました。（口語）

〔（戊）　對等の體言が重なつたもの〕

この場合の體言の重なり方は、大體〔八二〕の（丙）の場合と同樣で、その間に助詞や接續詞の入る事があります。

大會は東京・大阪にて開催せらる。
餘興は午前十時と午後三時にあり。

某は國史及び東洋史を研究せり。

颱風は今夕或は明朝襲來すべし。

私はペンと萬年筆を買ひました。（口語）

歴史の試驗は水曜日か金曜日にあるらしい。（口語）

【八九】 同じ語に二つ以上の修飾語の附く場合

二つ以上の修飾語が、一つの語を別々に修飾することがあります。本書の最初の二例は、二つ以上の連體修飾語の用ひられたもの、後の二例は、二つ又は二つ以上の連用修飾語の用ひられたものです。

〔注意〕 ここの連體修飾語の類を〔八七〕の（丙）の類と比較してその異同を知らせる事が大切です。卽ち、ここのは

赤き、小さき花。　やすい、面白い本。（口語）

のやうに、二つ（又は二つ以上）の修飾語がそれ〳〵同じ語に附いてをり、〔八七〕の（丙）のは、

赤く小さき花。　やすくて面白い本。

のやうに、「赤く」「小さき」の二語が重なつて「赤く小さき」といふ一つの修飾語になり、

「やすく」「面白い」といふ二語が重なつて「やすくて面白い」といふ一つの修飾語となつてそれ〴〵「花」や「本」を修飾してゐます。その間の相違は明かに言葉の形の上にあらはれてゐます。（287節參照）

なほ次に數例を補つて置きませう。

（二つ以上の連體修飾語が用ひられたもの）

爲朝は數人の何れの兄よりも強かりき。

強き正しき朗かなる男子あり。

彼はいづこのいかなる者ぞ。

錆びぬ鋭利なる刃物を求む。

例のむづかしい事件は解決したか。（口語）

まじめな正直な人を探してゐる。（口語）

やさしい落ちついた若者が居ます。（口語）

（二つ以上の連用修飾語が用ひられたもの）

庭は廣く美しく見ゆ。

飛行機は高く空中に昇れり。

飛行機は忽ちあざやかに着陸せり。
富士山は右に白くかうがうしく立てり。
町も立派に賑かになつた。（口語）
今朝私は途で齋藤に逢つた。（口語）　東京には自動車が澤山ある。（口語）
お互に身體を丈夫にしませう。（口語）　私も父にひどく叱られた。（口語）

【九〇】 修飾語に他の修飾語の附く場合

本書に擧げた第一例でいへば、「東にやゝ高き山あり」の「高き」は、「山」に對する修飾語ですが、その「高き」に更に「やゝ」といふ修飾語が附いたのです。かやうにして文はますます複雑になります。次に試に「梅は咲きたり」「鐘が鳴る」（口語）に、次から次と修飾語の附く例を出して見ます。

梅は　庭の梅は　友人の庭の梅は
　わが友人の庭の梅は
咲きたり　美しく咲きたり　頗る美しく咲きたり
鐘が　お寺の鐘が　山のお寺の鐘が　向ふの山のお寺の鐘が
　はるか向ふの山のお寺の鐘が

鳴る　かすかに鳴る　ごくかすかに鳴る

【九一】修飾語が他の語と共に一の成分となるもの

修飾語は勿論文の成分の名ですが、それが成分そのものとならずに、他の語と共に一の成分となる（即ち他の成分の中の一部分となる）事があります。本書に擧げた例について說明します。

第一例、木の間に高き塔と大なる屋根見ゆ。

では、對等の體言の重なつた「塔と屋根」が主語であります。さすればその各〻の體言に修飾語の附いた「高き塔と大なる屋根」もまた一成分（この場合では主語）と見るべきものであります。

第二例、春の花と秋の月との優劣を論ず。

では、對等の體言の重なつた「花と月との」が連體修飾語であります。すると各〻の體言に修飾語の附いた「春の花と秋の月との」もまた一成分（この場合は連體修飾語）と見るべきであります。

第三例、峯を攀ぢ谷を涉る險路

は、對等の用言の重なつた、「攀ぢ、涉る」は「險路」を修飾する連體修飾語であります。しかしてその各〻の用言に修飾語の附いた「峯を攀ぢ谷を涉る」もまた一成分（この場合では連體修飾語と見るべきものであります。次の諸例も同樣であります。

主語
大和の奈良と山城の京都は舊都なり。

連體修飾語
右に現れ、左に見ゆる島々。

連體修飾語
國を思ひ、民を愛する大政治家。

連用修飾語
一枚の紙・一本の筆をも棄てず。

主語
話で聞くのと實際見るのとは一致しない。（口語）

連用修飾語
正しい心と丈夫な身體を養成する。（口語）

又

彼は有名なる學者にして、又すぐれたる文章家なり。

小犬は飢ゑれば吠え、食べれば跳ねまはる。（口語）

のやうな例は、〔八四〕に

稻は發育し、みのれり。

園內は廣くして美し。

を同じ主語に對する述語が二つ重なつたものと說明したによれば、「學者にして」「文章家なり」が、「彼は」に對する二つの述語であり、「吠え」「跳ねまはる」が、「小犬は」に對する二つの述語であつて、述語が重なつてゐるものであり、その述語に對して「有名なる」「すぐれたる」、又「飢ゑれば」「食べれば」が、修飾語となつてゐるものと、說明出來るのであります。卽ち

彼は有名なる（修飾語）學者にして（述語）、又すぐれたる（修飾語）文章家なり（述語）。

小犬は飢ゑれば（修飾語）吠え（述語）、食べれば（修飾語）跳ねまはる（述語）。（口語）

となります。

然るにこれ等の例は、右の如く二つの述語が重なつたものと見る事が出來ると共に、また「發育しみのれり」「廣くして美し」を、それ〳〵對等の語が合して一つの述語となつたものと見る事も出來るのでありますが（277節參照）、さすれば右の例は

彼は有名なる學者にして、又すぐれたる文章家なり。
（修飾語）　（述語）　（修飾語）

小犬は飢ゑれば吠え、食べれば跳ねまはる。（口語）
（修飾語）　（述語）　（修飾語）

となつて修飾語が述語の一部となつてしまひます。

以上述べたやうに、修飾語の中には、他の成分中に入つてしまふものがあります。その場合には、修飾語は文の成分ではなく、文の成分の一部分を成すに過ぎません。元來、修飾語は、文の成分を修飾するとは限らず、成分中の語を修飾してゐるのが普通です。それ故、

庭の　梅は　美しく　咲きたり。

の例に於て、「庭の」は「梅」といふ語を修飾しますが、「梅は」といふ主語を修飾しません。又「美しく」は「咲く」といふ語を修飾しますが、「咲きたり」といふ述語全體を修飾しないと考へる事も出來ます。その結果「庭の梅は」は、「庭の梅」に「は」が附いたもの、「美しく咲きたり」は、「美しく咲く」に「たり」が附いたものとも見られます。さうすると、「庭の梅は」全體が主語となり、「美しく咲きたり」全體が述語になつて、その中に「庭の」「美しく」の修飾語が含まれる事となります。隨つてこれ等の修飾語もまた文の成分ではなく、その一部分となり、文の成分は主語と述語とだけになつてしまひます。

わが家の庭の梅は

も、全體が一つの主語となり、その中に三つの修飾語を含む事となりますし、

頗る美しく咲きたり。

も一つの述語で、中に二つの修飾語を含む事になります。

右のやうな見方は決して誤ではありません。かやうに、互に關聯し結合した成分をまとめて見る事も必要であり、その方が却つて我々の感じに近い事もあります。しかしながら、かやうにすれば、修飾語はいつも他の語に從屬するものですから、修飾語以外の成分の中に隱れて、文の成分の一つとして認められなくなるでせう。さすれば、從來の說とかなり大きな違ひが出來るばかりでなく、又他の方面から見ても必ずしも正しい取扱とはいはれません。

元來、文の成分とは、文を組てる各部分であつて、文を分解して見出す事が出來るものですがこれは分解しやうで大きくも小さくもなります。大きくすれば、全文が、主部・述部の二部又は之に獨立部を加へた三部になります。(〔一〇〇〕參照)　最も小さくすれば、個々の單語にならない事もありませんが、單語の中、附屬する語は獨立性がありませんから、獨立する語を中心とし必要に應じて之に附屬する語の加はつたものを成分とみとめるのが適當であらうと思ひます(〔七九〕參照)。かやうなものは文の成分としての最も小さな單位で、大きなものは、つまりこれが幾つか集まり結合して出來てゐるのです。

全體、文法は言語の構造を明かにするものですが、文の構造を明かにするには、之をその成分に分つて、更にその成分がいかに組立てられてゐるかを明かにすべきです。それには、まづ最小

の單位からその組立を明かにし、次にそれ等の結合した大きな成分に及ぶのが順序であらうと思ひます。それ故、まづ第一に右に述べたやうな文の成分としての最小單位についてその組立を考へるのが至當であつて、之に成分としての名を與へておくのが便利と考へます。

さすれば

わが家の庭の梅は

は、三つの修飾語と一つの主語と四つの成分から成るとし、これがつぎ〳〵に結合して、主語部といふべきものとなると考へるのがよい事となります。本書に於ては、大體この方針で成分を認め、止むを得ない場合だけ、それを二つ又は三つ合せたものを一つの成分としました（例へば「太郎と次郎は」を一つの主語とし、「兄弟に候」を一つの述語としました）。かやうにすれば、いろ〳〵の成分が順々につづいて行つて、取扱に都合がよいのですが、しかし時としては、どうしても、かやうに行かないものに出會ひます。卽ち、ここに出したやうな例でありまして、對等の語が重なつて一つの成分を成したものの、その各語を修飾する時は、その成分中に含まれたものと見るより外ありません。（之を脫却する方法は無いではありませんが、それは他の方面にも影響を及ぼしますから、差控へておきました）。

〔總　括〕

修飾語の成立は、大體以上の通りですが、之を簡單に表示すれば次の如くであります。

連體修飾語
- （甲）體言その他の語に助詞「の」「が」の附いたもの
- （乙）用言又は活用連語の連體形
- （丙）對等の體言又は用言が重なつたもの

連用修飾語
- （甲）副　詞
- （乙）形容詞の連用形
- （丙）體　言（又は之に助詞の附いたもの）
- （丁）用言又は活用連語
- （戊）對等の體言が重なつたもの

第二十三章　獨　立　語

〔本章の目的〕

前章までで、主語・述語・修飾語について述べましたから、本章には、それ以外の成分たる獨立語に就いて說き、文の成分に關する知識を完からしめたいと思ひます。從來の文典では獨立語

を成分として認めないものもあり、認めても、その意味やその含む範圍は人によつてまち〳〵であります。本書では獨立語を文の成分として立て、主語・述語・修飾語以外のものを皆その中に含めました。それ故、獨立語は、主語・述語及び修飾語を明確に會得してゐなければ、正しく了解出來ません。故に本章に入るに先立つて、前章までの事を徹底的にのみこませておかなければなりません。

【九二】 獨立語の性質

獨立語とは、主語・述語・修飾語の何れにも屬しない成分であつて、他の成分と直接の關係無く、比較的獨立したものをいふのであります。卽ち述語は主語に對し、主語は述語に對して、互に述べ、述べられるといふ關係に立ち、修飾語は修飾せられる語に對して、修飾する、修飾されるといふ關係に立つて、何れも、他の成分との間の關係が直接で且つ緊密でありますが、獨立語は意味上、その文の他の部分と連絡はありますが、主語・述語又は修飾語など一つの成分に直接に係つて行くといふやうな、直接な、緊密な關係は成立ちません。比較的他の部分から獨立したものといふべきです（獨立したといつても、絶對的に離れたものではなく、比較的のものであります。さうして同じ獨立語の中にも、その程度の差があります）。

獨立語は他の成分と直接の關係が無いといひましたが、唯、後に述べる通り獨立語にも修飾語

が附く事がありまして、その場合には、その修飾語によつて修飾せられ、その間に修飾・被修飾といふ直接關係を生じます。これだけは例外です。（この場合は、實は獨立語を組み立ててゐる體言・用言等に修飾語が附くので、獨立語そのものに修飾語が附くのではありません）。

〔注意〕　第一篇第一章〔五〕に於て、あらゆる語を獨立する語と附屬する語とに分けましたが、その獨立する語と、ここにいふ文の成分としての獨立語とは、全く別のものです。名稱の類似から混同する事のないやうに、注意を要します。

【九三】　獨立語の種類

獨立語をその意味の上から分けると本書に示したやうに（一）感動又は應答、（二）呼び掛け、（三）提示、（四）接續の四つになります。その違ひに從つて、之に用ひる語の種類も違ふ事は次に述べる通りです。

【九四】　獨立語になるもの

この〔九四〕に獨立語の各種を網羅してありますから、それに從つて述べます。

〔（甲）感動詞〕

感動詞は感動を表はす語として、又呼掛・應答の語として獨立語になります。

あな、嬉しや。

すはや、敵軍寄せ來る。

いかに、梶原殿、腹帶の延びて見え候ぞ、しめ給へ。

いな、さも候はず。

まあ、そんな事があつたんですか。（口語）

おい、此處へ來てはいけないよ。（口語）

はい、さう致しませう。（口語）

いゝえ、それはいけません。（口語）

〔（乙）體言〕

體言が獨立語になるのは大體二つの場合があります。

（一）呼掛の語　呼掛に用ひる名詞・代名詞が獨立語になります。この場合に助詞の附く事があります。

やゝ、中納言殿、軍のさまはいかにや、いかに。

花よ、とく咲けかし。

いかに、旅人よ、しばし御待ち候へ。

汝等、惡魔のさゝやきに耳を傾くるなかれ。

佐藤さん、どうぞこちらへ。（口語）

先生、これは何でございます。（口語）

君、ちよつと此處へ來て呉れ給へ。（口語）

花子や、窓をあけておくれ。（口語）

（二）提示する語　特に重要な事物をまづ文の首に擧げておき、それから之に關した事を述べる事があります。この場合、提示する語が獨立語になります。今本書の

昭和十二年七月七日、國民は永くこの日を忘るべからず。

に就いてみますと、まづ「昭和十二年七月七日」と提示して、次に之に就いて「國民は永くこの日を忘るべからず」と述べてありますが、「國民は」以下は、主語・述語及び修飾語を具へた完全な文であります。上の「昭和十二年七月七日」は、下の文の何れの成分にも直接係つてをらず、主語とも述語とも修飾語ともする事は出來ません。とはいへ、下の文と無關係ではなく、むしろ意味は下の文全體に連絡してゐると見るべきでせう。（下の文の「この日」は上の「昭和十二年七月七日」を受けてゐるのであつて、その點から「昭和十二年七月七日」と「この日」との間に直接の關係があるとも見られますが、しかしそれは「昭和十二年七月七日」といふ語を中心として考へれば、必ずしも、下に「この日」といふ語が來る事を豫想しませんから、比較

的獨立したものといふ事が出來ます。）すべてこの「昭和十二年七月七日」のやうに、提示する爲に用ひられ、主語・述語・修飾語とも見られない語は、獨立語になります。なほ次に二三の例を擧げておきませう。

五月三十日、東郷元帥はこの日に薨去せられたり。

第二中隊は、佐藤大尉之を指揮せり。

平家は、重盛その柱石たりき。

藪蚊、私共はこれには閉口しました。（口語）

鎌倉、此處にはいろ〳〵の史蹟があります。（口語）

右のやうに、獨立語として取扱はれる提示の語には、體言が用ひられ、又之に助詞の附く事があります。また下の文には、「これ」「ここ」「この」のやうに、意味の上で之を承ける語がある場合が多いのです。

〔（丙）　接續詞〕

これも獨立語となります。けれども接續詞は如何なる場合でも獨立語となるとは言はれません。たとへば

連用修飾語
國史又は國文學を研究す。

連體修飾語
陸軍及び海軍の將軍。

主語
酒並びに煙草は健康を害す。

に於ける接續詞「又は」「及び」「並びに」は、前後の語を結合させて之と共に修飾語・主語などの成分をなすものでありまして、獨立語ではありません。獨立語は、本書に擧げた例のやうに、形の上に全く連絡のない前後の二文を結び附けるものや、又次の諸例のやうに、主語・述語を具有するが、言ひ切りになつてゐないもの（卽ち「節」といはれるもの）と、下の語句とを結び附けるものであります。

爭子あれば、則ち身不義に陷らず。
家貧なれども、しかも心賤しからず。
私も寢たいが、しかしまだ用がある。（口語）　山は高いし、それに道も惡い。（口語）

〔注意〕

富も榮譽もはた權力も彼を動かすこと能はざりき。
彼は驚き且つ怪しめり。

のやうに、いくつかの主語、又は述語の重なつたものを結び附ける爲に用ひられた接續詞は。

寧ろ「國史又は國文學を研究す」「陸軍及び海軍の將軍」のやうに、前後の語を結び附けて之と共に文の一つの成分をなすものに近いもので、之を獨立語と見るのはあまり適當でありませんが、之を主語又は述語の一部と見る事は出來ませんから、主語・述語・修飾語以外の成分をすべて獨立語とするならば、獨立語としておく外ありません。

〔(丁) 體言が重なつたもの〕

對等の體言が重なつて獨立語となる事があります。次にその例を二三補つておきます。

正成。正行は、その名天下に知られたり。

空氣及び水、これ無くしてわれ等は一日も生くべからず。

進取と退守、汝その何れを採らんとするか。

松島・宮島・天橋立、これが日本三景です。(口語)

太郎と次郎は、どちらも正直だ。(口語)

〔注意一〕 獨立語の中には、他の成分と紛れ易いものがあります。それは(乙)の提示する語です。卽ち提示する語はすべて獨立語であると考へてはいけません。度々繰返したやうに、獨立語は主語・述語・修飾語の何れにも屬せぬ成分であります。故に意味や形の上で、それだけとして見れば獨立語と見られるものであつても、その文に於ける他の成分との關係上、

獨立語以外の成分と見得るものは、獨立語とはしないのであります。この事は、本書の〔九四〕の終にも記しておきましたが、本書に擧げた例では

日曜日は訪問者多し。

の「日曜日は」は獨立語のやうですが、下の語との關係上「日曜日には」の意味にとる事が出來ますから、之を連用修飾語と見ます。

東門は大將守り、西門は副將固めたり。

の「東門は」「西門は」は、「守り」「固めたり」に對して、「東門をば」「西門をば」の意味でつゞくものと見られますから、共に連用修飾語と見るのです。猶他の例をあげれば、

時局は、豫測し得る者なし。

酒は、予は好まず。

それは、私は知りません。（口語）

松島は見たが、宮島はまだ行かない。（口語）

卽ちこれ等は「時局をば」「酒をば」「それをば」「松島をば」「宮島には」の意と解し得られますから、連用修飾語とするのです。なほ

日本は神國なり。　鯨は魚でない。（口語）

の「日本は」「鯨は」も、その形及び意味から見れば獨立語とも見られますが、「神國なり」「魚でない」に對して主語と見られますから、獨立語とは見ないのです。

〔注意二〕 獨立語には、右に述べたやうに種々の種類のものがあります。その中には、感動詞や呼掛の語のやうに、それだけで言ひ切りになり得るものもあり、又接續詞や、第三種助詞を附けた提示の語（「大日本帝國は」「電燈も」「一こそ」の類）のやうに、その語の性質上、いつも他の語に續くものもあつて、比較的獨立するといつても隨分色々の程度があります。これらを全部一つにして獨立語とするがよいか、又は二つ又は三つに分けた方がよいかについては問題があつて、獨立語の外に接續語を立てる人もありますが、今は簡便を主として一つにしておきました。その爲、多少無理な所が生じた感がないでもありません。

【九五】 修飾語の附いた獨立語

獨立語が體言であると、それに修飾語が附く事があります。本書の例の「安易」が獨立語で「一時の」はそれに附いた連體修飾語です。次に補例を擧げておきます。（○は獨立語です）。

周到なる注意、こは事を成すに絶對に必要なり。

絶えざる努力、彼の成功は全くこれによる。

燃えさかる火、汝等はその炎の如き意氣を以て事に當らざるべからず。

蒙古の襲來、これこそ未曾有の國難なりしか。
櫻の美しさといさぎよさ、われ等の祖先も之を理想とせるなり。
鳴く蟬と鳴かぬ螢と、いづれか哀なる。
お隣の坊ちやん、お遊びにいらつしやい。（口語）
日本一の桃太郎さん、御團子一つ下さい、お伴致しませう。（口語）
東京の自動車、これには何人も驚きます。（口語）
泣き上戸の齋藤と慷慨家の佐藤、この二人には私も困つてしまひました。（口語）

〔注意〕　右の諸例の中、「鳴く蟬…」と「泣き上戸の…」（口語）との二例は對等の語が重なつた「蟬と螢」「齋藤と佐藤」が獨立語で、その各語に連體修飾語が附いて、「鳴く……螢」「泣き上戸……佐藤」全體が各獨立語となつてゐるものです（この別記の296節參照）。

第二十四章　文の成分の位置と省略

〔本章の目的〕

本章では、文中に於ける各成分の位置に就いて教へ、次いで成分の省略せられる場合がある事を知らしめるのが目的であります。この事は、文の意味を理解するに必要であります。

【九六】 文中の成分の順序

實際の文に就いて一々吟味して見ますと、各成分の並べ方は、必ずしも一定不動のものではありません。卽ち甲文では文の首にあるものが、乙文では文の終にあるといふやうな事は、決して珍しくありません（〔九七〕參照）。しかしそれは音調の關係とか、修辭上の特別な目的等から生ずる事で、成分の並べ方の順序は、原則的には大抵一定してゐるものです。

〔注意〕 文中に於ける成分の位置は、國語の違ふに從つて違ひます。漢文に於ける語の順序は、古代支那語に於けるきまりであつて、我が國で之を讀む時に返つて讀むのは、之を日本語に譯して日本語に於ける順序に從つて讀む爲で、そこにわが國語と古代支那語との間の成分の位置の違ひがあらはれてゐるのです。英語を譯す時も、亦わが國語と英語との成分の位置の違ひがわかります。

〔主語・述語の位置〕

主語と述語との順序を見ますと、主語が初に、述語が終に來るのが普通であります。この順序は、わが國語のみならず、漢文でも英語等の西洋語でも、同樣であります（疑問文などは例外ですが）。

但し、注意しなければならぬのは、國語では主語は往々文の首に來ない事がありますが（〔九七〕

參照)。述語は特別の場合の外は文の終にあると言ひ得るのであります。

〔修飾語と修飾せられる語との位置〕

修飾語と修飾せられる語との順序を見ますと、修飾語が修飾せられる語の前に來るのが普通であります。

この場合、修飾せられる語は主語であらうが述語であらうが、區別はありません。また本書の「敵は堅固なるトーチカに據れり」のやうに、修飾語(「トーチカに」)が他の修飾語(「堅固なる」)に修飾される場合にも、その順序は同樣であります。

〔二つ以上の修飾語〕

同じ語に對して二つ以上の修飾語のある場合、その修飾語間の位置の先後については、一定のきまりがないといふのが穩當です。

義貞賊を兵庫に迎へ擊つ。
義貞兵庫に賊を迎へ擊つ。

船は五時に橫濱を出帆した。(口語)
船は橫濱を五時に出帆した。(口語)

面白き珍しき話。
珍しき面白き話。

清き豐富なる水。
豐富なる清き水。

廣い大きな家。(口語)
大きな廣い家。(口語)

〔注意一〕二つ以上の修飾語間の順序に就いては、右の如く概說すべきであると思ひますが、

細かに見ますと、大體の順序の定まつてゐるものが無いでもありません。たとへば、連用修飾語が情態や時などを表はすもの（主として副詞・形容詞や副詞のやうに用ひられた體言）と、實體を表はすもの（主として體言）とである場合には、前者が後者に先立つのが普通であります。

會長はおごそかに口を開きたり。
花はひら〳〵と空中に舞ひ上る。
濫りに芝生に入るべからず。
父は今朝横濱を出帆せり。

敵は午前八時頃退却を始めたり。
村人は親切に道を教へて下さいました。（口語）
猿もたまには木から落ちる。（口語）
私共もしばらくあそこに住みました。（口語）
會員はぢき百名ぐらゐにはなりませう。（口語）

しかし、これ等とても、一定不動のものではなく、その反對の順に並ぶことがあるのは、いふまでもありません。

〔注意二〕

赤き大きなる花。

の「赤き」と「大きなる」との二つの修飾語間には、直接の關係なく、それ等は別々に「花」を修飾するものでありまして、分り易く書きますと、

赤き　大きなる花。

となります。しかし「赤く大きなる花」と言ひますと、「赤く」と「大きなる」とは、對等の關係に立つて（〔八七〕の（丙）參照）、それが一緒になつて「花」を修飾します。これを分り易く書きますと次のやうになります。

赤く　大きなる　花。

〔獨立語〕

獨立語は文の首（はじめ）に來るのが普通であります。隨つてその文が主語を省略しないものであつたら、主語の前にあるのです。

（獨）　（主）
あゝ、味方は終に敗れたるか。

（獨）　（主）
正淸、汝は東の門を固めよ。

(獨) いざ、(主) われ等も行かん。

(獨) 小田原城、(主) これは北條氏の居りしところなり。

山はさまで高きにあらず。(獨) されど (主) 道は頗る嶮峻なり。

(獨) おや、(主) 時計がとまつてゐる。(口語)

(獨) ボチ、(主) お前は今まで何處に居たんだ。(口語)

(獨) 君、例の話ね、(主) あれはうまく解決したよ。(口語)

(獨) 末の弟は、(主) これもなか〳〵變りものだ。(口語)

〔注意〕 以上〔九六〕を纏めますと、各成分の順序は次の通りになります。

修飾語 ― 獨立語

修飾語 ― 主語

修飾語 ― 述語

この位置を「正常の位置」「正序」「成分の常置」などいふ人があります。

【九七】 成分の倒置

以上述べたのが、文中に於ける成分の普通の位置ですが、成分の並べ方が、以上述べたのと違

ひますと、これを「成分の倒置」といひます。倒置は主として修辭上の必要から生ずるもので、これによつて文中の特に重要な點を知らしめ、或は微妙な感情を表はし、或は文章の單調を破る等、實際の效果は頗る大なるものであります。

さてこの倒置に就いては、特に申し添へる必要はない程、普通に行はれてゐますが、ただ獨立語と紛れ易いもの、卽ち本書の〔九四〕の終に述べた事を看過されないやうに希望します。

【九八】成分の省略

理論上から見ると、述語があれば必ず主語があるべき筈であり、述語の性質によつては、或種の連用修飾語（客語・補語など）を缺く事は出來ない筈ですが、しかしその場合の事情や、前後の關係で、各成分を一々言ひ表はさなくても意味の明かなものは、之を表はしません。そこで「成分の省略」が生じます。勿論、これは、あるべき筈のものを略したものとして取扱ふのであります。しかし實際は、普通言ひ表はすのを特別に略したのもありますが、また普通の場合でも言ひ表はさないものも少くありません。これを同じ樣に省略といふのはどうかと考へられますが、ここでは普通の說に從つておきました。

〔注意一〕　或文に於て、言ひ表はされてゐない思想をすべて省略したものと見て十分に補ふ事とすれば、いろ〳〵のものを補ひ得る場合があります。例へば、

言はぬは言ふにまさる。

は、

（何人も）（思ふ事を）言はぬは（その人）（その事を）言ふにまさる。

と補ふ事が出來ます。

私は本を忘れました。（口語）

は、

私は（いつももつて來る）本を（持つて來るのを）忘れました。

など補ふ事が出來ます。しかし、かやうに補へば限りがありません。それ故、補ふのは、最少の程度に止めなければなりません。卽ち、省略は、大抵の場合は、主語・述語及び、連用修飾語では補語に限られてゐると見てよいでせう。

〔注意二〕 成分の省略は、わが國語に限つた事ではありませんが、英語などでは、きつと言ひ表はさなければならない所を、國語では必ずしも言ひ表はさない場合が少くありません。例へば冠詞（a, the）などがその例です。その場合に、英語を標準にして、「一つの」「或」「その」「この」などが省略されたものとするのは不當です。これは、その國語に於ける慣習に隨ふべきで、一の國語の慣習によつて、他の國語を律すべきではありません。

第五篇　文の構造と文の種類

〔本篇の目的〕

第四篇においては、文の成分の種類、及びその性質・構成等に就いて述べましたから、本章では、その成分がどんなに組合つて、どんな文を構成するか等の問題を、明かにしようと思ひます。

前にも述べた通り、第二十二章以下に説いた事は、解釋の上にも、作文の上にも、頗る重要な事項でありまして、いかに複雑な文でも、すべて成分に分解する事が出來、その成分が各自の性質に從つて、主語は述語と結合し、修飾語は主語・述語等に從屬し、獨立語は他の部分に連絡するといふ風になつてゐるのですから、生徒をして不斷に注意をこの方面に向けさせて、文の中から成分を見出し、その相互の關係を明かにするやうに指導しますと、いはゆる語句の「係る所」の吟味をおろそかにして、自分勝手な解釋を施す弊に陷る事が無くなり、また作文の場合にも、文脈の正しい、整然たる文を作るやうになる筈であります。依つて講讀・作文の時間にも、常にこの心得を以て適宜指導されるやう希望します。これさへ實行されますと、文法の知識は實用の

上に效果がないなどいふ非難は、やがてなくなるだらうと思ひます。

なほ、本篇で述べる事項は、初年級用改制新文典には省略しましたので、口語と文語とを一緒にして說きました。

第二十五章　文の構造と節

〔本章の目的〕

本章は、大きく二部に分れます。第一に〔九九―一〇一〕に於ては各成分が、文を構成するに就いて如何なる地位に立つか、換言すれは、あらゆる文を通觀して、文の構成上いかなる成分が最も大切か、總べての成分は、他の成分を待たずして用ひ得るものか否か等を明かにします。

次に各成分は、常にそれだけで用ひられるものではなく、他の成分と結合し、時には多くの成分が合して、複雜な形を呈するに至る事を述べます。けれども、ここでは複雜といつても、それは單文（〔一一二〕參照）だけを例にとり、節になつてゐるものには觸れません。

第二に、〔一〇二―一一〇〕に於ては「節」に就いて述べます。前三節で文の構成に就いて說きましたが、それは、節を含まぬ文、いはゆる單文に就いてであつて、節を含むものに就いては說きませんでしたから、ここで更に一歩を進めて節に就いて述べ、文の構造に關する知識を完か

らしめようとするのです。

この「節」に關する知識を得れば、どんな文に出會つても、之を分解して、その構造を說明する事が出來るやうになります。

又、「節」は文の構造上の種類を判定する基礎になるものですから、よほど正確な知識を持たせる必要があります。しかし今まで述べた事、殊に前三節に述べた事さへしつかり會得してをれば、容易に理解させる事が出來ませう。

【九九】文の成分の種類

文の成分の種類に就いては、既に述べましたが、ここで之を繰返したのは、つぎ〳〵に述べる事項の基礎になる事である故、記憶を新にする意味からであります。卽ち是等の成分が如何やうにか結合して文を構成するものである事を、先づ思ひ出させる爲です。

勿論、ここにはあらゆる種類の成分の名を擧げましたが、文には、いつもこれだけの成分がきつとあるといふのではありません。

〔主語と述語〕

主語と述語とは、文の構成に最も大切なもので、多くの場合に、この二成分は、文を組立てる中心になるのであります。換言すれば、語又は連語が主語・述語の關係に於て結合する事が、文

が成立する爲の大切な條件となり、普通の場合は、他の成分の有無にかゝはらず、主語・述語が具はれば文であるといつてよいのであります。實際、

月が昇つた。（口語）　山高し。

のやうに、主語と述語とだけで成立つてゐる文も少くはありません。

しかし、これは理論的に考へた事であり、また實際上からいふと「普通の場合」に就いてでありまして、一々の場合、文には必ず主語・述語が具存するとは限りません。それは省略の場合などがあるからです。（〔九八〕參照。又、この別記の314節も參照）。けれども、特殊な場合を考へる前に、一般通則を定めるのが、文法組織を立てる上から云つて當然な事ですから、文と主語・述語との關係を、原則として右のやうに見るのであります。

〔獨立語〕

國防は、國民全部がこれに當らなければならない。けれども、直接には陸海軍がこれに當る。（口語）

右の文の「國防は」「けれども」のやうに、獨立語は、他の成分、卽ち主語・述語及びそれ等の修飾語に直接に附く（意味が係つて行く）ものではなく、ただ意味の上で、その文の他の部分と關係があるに過ぎないものであります。右の例で申しますと、「國防は」は、說かうとする事

柄の中、最重要な事をまづ文首に提示したもので、その下の部分全體が、「國防」に關して述べてゐるのであり、下の部分の中、二つの「これ」は「國防は」を承けてをりますが、「國防は」は直接にこれに係るのではありません。又「けれども」は、上の文の意味を承けて、これを下の文に結びつけてゐます。本書〔九九〕の第二例の「愛國心」の性質も、右の「國防は」と全く同樣であります。

獨立語は、右の如き性質の成分ですが、如何なる文にもあるものではなく、實際、獨立語の無い文も少くないことは、例を擧げるまでもない事と思ひます。

〔修飾語〕

修飾語は、それ自身單獨で用ひられる事なく、必ず他の成分、卽ち主語・述語・獨立語等に附くものであります。隨つて修飾語は、如何なる文にも必ず存するものではなく、實際修飾語のない文も少くはありません。

次に修飾語が他の修飾語に附く場合、たとへば

かなり大きな花が、大變美しく咲いた。（口語）

いさぎよく散る花は櫻なり。

の「かなり」「大變」「いさぎよく」を見ますと、これ等も「大きな」「美しく」「散る」があつて

始めて用ひられたものであつて、それ自身單獨で存するものでない事は、一般の場合と同樣であります。ただここのは、その修飾される語が「大きな」「美しく」「散る」といふ修飾語である點が、問題になるかも知れませんが、しかし修飾語が「他の成分」に附いたには相違ないのです。卽ち「他の成分」を「他の種類の成分」と解せずに、「自身（その修飾語）以外の成分」と見るべきであります。

なほ、本書には擧げませんでしたが、修飾語は又「他の成分中の一部分となる」ことがあります。それはこの別記の296節に既に述べたやうな場合で、例へば

青い花と赤い花が咲いた。（口語）

に於て「青い」は上の「花」を修飾し、「赤い」は下の「花」を修飾して、その「青い花」と「赤い花」とが合して「青い花と赤い花が」といふ一つの主語になつて居るやうものをいふのです。

〔文の構成〕

以上述べました通り、普通は、主語と述語と相俟つて文を組立てる中心となるのでありまして、或場合には之に獨立語が加はり、又それ等に一つ又は多くの修飾語が附き、その修飾語に更に又他の修飾語が附いて、非常に複雜な文が出來るのであります。

文は右の如く構成されますから、如何に複雜な文であつても、之を分解して各成分の性質を考

へて見ますと、自然とその組立は判明するはずであります。この吟味は解釋力を養ふ基礎になるものです。本書〔九九〕には、いろ〳〵の成分が結合して複雜な形になつた文を擧げましたが、その中に、修（一）、修（二）、修（三）、とあるのは修飾語（一）に修飾語（二）が附き、（二）に更に（三）が附いた事を示したものです。

なほ數例を補つておきます。

主　修(三)　修(二)　修(一)　述
お前は私よりもゑらい農學者とならねばならぬ。（口語）

修(三)　修(二)　(修一)　主　修　述
他人の惡口をいふ人は、みんなに嫌はれます。（口語）

修(二)　修(一)　獨　修　主　修(二)　修(一)　述
約束を守らないやうな人間、そんな者はわれ〳〵の仲間には居ない。（口語）

修(三)　修(二)　修(一)　主　修　述
最も有名なる畫家の繪は第三室に陳列せられたり。

修(二)　修(一)　主　修(二)　修(一)　述
勞せずして得たる富は、決して永續せざるものなり。

修(四)　修(三)　修(二)　修(一)　主　修(三)　修(二)　修(一)　述
他に誇るに足らざる事を誇るは、恥づべき事を恥ぢざるに同じ。

【一〇〇】主部・述部・獨立部

四種の成分の中、修飾語は、前に述べた通り必ず他の成分に附くもので、それ自身單獨で用ひられる事はありません。そこで主語・述語・獨立語に修飾語の附いたものを、それぞれ順に主部・述部・獨立部と稱します。

本書に「直接間接に附いた成分とを合せて……」と云ひましたのは、たとへば、

鳴かない蟬が　ゐる。（口語）　花は　美しく咲きたり。

の「鳴かない」「美しく」は、主語・述語に直接に附いたものでありますから、「鳴かない蟬が」「美しく咲きたり」は、主部・述部であることは言ふまでもありませんが、

決して鳴かない蟬が　ゐる。（口語）　花はいと美しく咲きたり。

の「決して」「いと」は、「鳴かない」「美しく」には直接に附いてゐますが、主語・述語たる「蟬」「咲きたり」に對しては、間接の關係になります。それでもそれ等を合せた「決して鳴かない蟬が」を主部とし、「いと美しく咲きたり」を述部と見るといふ意味であります。

さて文は如何に複雜なものであつても、結局

（獨立語又ハ獨立部）――主語又ハ主部――述語又ハ述部

に歸着します。（獨立語又ハ獨立部）は、必ずしも必要なものでない意味から括弧を附けました。

文の解釋及び表現に當つて、成分を右のやうに整理して考へる事は、非常に有效な事でありま

す。たとへば、複雑な古い文などに接した場合には、先づ生徒をして、「何がどうする（どんなだ、何だ）」の關係がどこで成立つてゐるかを考へて、主語・述語を判定させる事が、第一の仕事であります。

ここに注意すべきは、主語を第一に發見させて、次に述語を捜させるやうにしますと、往々主語・述語の判定を誤る事があります。それよりも第一に述語、第二に主語の順で判斷させると、誤に陷る事が少いやうであります（これは既にこの別記の265節に述べました）。

右の如く主語・述語を見出して、次に殘の成分の性質を考へさせて、それが主語・述語の何れに附屬するかを決定するのであります。獨立語又は獨立部と思はれるものがある場合には、それ等の中には連用修飾語と形の似たものもある筈故（〔九四〕）の最後の部參照）、その吟味もさせるべきです。

主部　述語
炎天下の田の草取も苦しい。（口語）

主語　述語
二百十日も無事に濟んだ。（口語）

獨立部　主語　述部
秋晴の空の柿のこずゑ、これはなか〳〵美しいものです。（口語）

主部　述語
驕るものは久しからず。

主部　述部
秀吉の軍は、疾風の如く敵地に進入せり。
主部　述部
梢にさへづるもずの鋭き聲は狹き山里に響き渡る。

【一〇一】 主語・述語を省略した文

前に主語と述語のある事は、文の構成には最も重要な條件であると申しましたが、前後の關係やその場の事情で、主語・述語が明かに推測される場合には、その中の一つを省略したり、又は述語中の修飾語だけを用ひて、主語も述語も言ひ表はさなかつたりする事があります。殊に命令の意を表はす文では、主語を表はさない場合が多く、感動の意を表はす文も、いづれかを省略することが少くありません。これ等は、形の上からいふと不完全なものですが、やはり之を一つの文と見るべきものであります。

甲「誰がさういつたのか。」乙「齋藤が。」
甲「僕はもう歸らう。」乙「僕も。」丙「僕も。」
昨日の話は。(何うなつたか)。
靜かに、(せよ)、靜かに、(せよ)。
止せ。

甲「おい、どうしたんだ。」乙「盗人を追つかけてゐる。」甲「何處にゐる。」乙「あ、追ひ越してしまつた。」〔以上、口語〕

義經「此處をばいづくといふぞ。」近藤親家「かつ浦と申候。」義經「色代な。」親家「一定かつ浦に候。」（平家、十一）

〔注意一〕　右に擧げた例のやうに、主語又は述語の何れか一つが言ひ表はされてゐないものがある外に、又主語も述語もなく、修飾語だけのものがあります。右の「靜かに、靜かに」もさうですが、また

どうぞ、こちらへ。（口語）　「あわたゞしくいづこへ。」「鎌倉へ。」

などは、この類に屬します。

〔注意二〕　右の如く省略したものとすれば、大抵のものは皆文になりますが、次の如く感動詞だけのものは、省略と說く事は出來ません。

「あなたもいらつしやいますか。」「さあ。」（口語）

「汝も去らんと欲するか。」「いな。」

この「さあ」や「いな」は、それだけで「それはまだきまりません」「然らず」といふやうな意味を表はし、終にいひ切りがあつて、一つの文と同等のものと見られます。これも、纏

まつた思想を表はし、終にいひ切りのあるものとして、文の定義に合ひますから、やはり文の一種として取扱ふべきだと思ひます。この種の文には主語・述語がありません。卽ち主語・述語といふやうに分析せず、全體を一まとめにして表はした文であると見るべきでせう。

【一〇二】 節

節はその内部の構造から見れば文と同様で、文だけの内容を具へてゐますが、文はそれだけで獨立するに反して、節はそれだけで獨立する事なく、或文の一部分として存するものであります。或文の一部分であるといふ點から見れば、連語といつてよささうですが〔一四〕〔七八〕に述べたやうに、語が結合して、まだ文を成すに至らぬものを連語としますと、その構成や内容から見て文とほゞ同樣のものである點から、特に之を節と名づけて、連語でもなく文でもないものとして取扱ふのです。

〔節の定義〕

節の定義としては、「文が獨立を失つて、他の文の一部分になつたものを節といふ」といふのが普通ですが、本書では「主語・述語を具へた、一つの文と同等なものが、他の文の一部分になつたものを節といふ」と具體的に述べました。

それは、たとへば

弟の買つた本は……。（口語）　小猫の捕へたる鼠は……。

の「弟の買つた」「小猫の捕へたる」の類をも、節とするのに異議の起らないやうにする爲です。文を專ら意味の方から考へて「買ふ」「捕ふ」の對象を言ひ表はしてない「弟の買つた」「小猫の捕へたる」の如きは、完全な文でないとする立場から見ると、之を節とするに疑義が生ずる筈です。然るに本書では、主語・述語を具へて居れば、意味の上から見て多少不完全な點があつても、之を文と同等なものと見做すのが、簡便で解し易いと考へて、右の如き定義にしたのであります。

又「文の成分が文から成る時は、之を節といふ」と說く人があります。かやうな節は、本書でいふ從屬節（〔一〇三――一〇八〕參照）だけには當てはまります。然るに本書では、文が對等の資格で結合して、一つの大きな文を組立てる場合にも、之を節と稱するので（〔一〇九〕參照）、「他の文の一部分になつたもの」としたのであります。「他の文の一部分」といふのは、「一つの文の一部分」又は「或文の一部分」といつてもよろしいのです。

〔節の構成〕

節は、その構成に於て、獨立した文とほゞ同樣で、文と同じく種々の成分から成立つてゐます（定義には、「主語・述語を具へた……」としましたが、主語・述語の外に、修飾語のある事もあ

ります)。それ故、その構成は、第四篇及び〔九九——一〇一〕で説いた事によつて説明出來ます。但し、節の述語が特別の形をとる事や、主語に特別な助詞を用ひる事などありますが、それは後に説明します。

【一〇三】主語節

主語節は、主語の用をなす節であります。たとへば

あれの正直なのは有名な話だ。(口語)　雨のやみたるは嬉し。

の文に於て、主語にあたるものは「あれの正直なのは」「雨のやみたるは」であり、しかもそれを分解して見ますと、「正直な」「やみたる」は述語であり、「あれの」「雨の」は主語であつて、主語・述語を含んでをります。故に「あれの正直なのは」「雨のやみたるは」は主語節であります。

主語節の述語は連體形になり、口語ではそれに第三種の助詞「の」を附け、更にその下にも種種の助詞を附けるのが普通でありますが、文語では助詞を附けない事があります。さうしてその節の主語には第一種助詞「の」の附く場合が多いのです。但し口語では「が」の附くことも珍しくなく、文語では全く助詞の附かない事もあります。

君がさう言つたのが、いけなかつた。(口語)

大人しい齋藤の怒つたのも、もつともな事だ。（口語）
昨夜の雨が最も激しかつたのは、十一時頃でせう。（口語）
日の長さが喜ばしきなり。
國運の斯く發展せるは、全く國民の努力による。
不肖の子あるは、全く子なきに如かず。
まして、雨の降りたる、いとわびし。

【一〇四】述語節

述語節は、述語の用をなす節であります。たとへば、

富士山は形がよい。（口語）　家康は注意周到なりき。

は、富士山、家康がどんなであるかを述べた文ですから、「形がよい」「注意周到なりき」は述語の用をなしてゐます。しかも「形が」と「よい」と、「注意」と「周到なりき」とは、主語・述語の關係にありますから、「形がよい」「注意周到なりき」は述語節であります。

述語節を、その節に於ける述語の形で分けて見ますと、

第一種　普通の文に於ける述語そのまゝのもの。（〔一〇四〕の第一・第三の例）

第二種　連體形の述語の下に指定の助動詞「だ」「です」（口語）・「なり」（文語）を附けたも

の（〔一二八〕の第二・第四の例）。又これ等の助動詞の代りに、「である」「でございます」（口語）・「にて候」（文語）などを用ひる事もあります。但し口語ではその間に「の」を加へるのが普通です。第二種の述語節の主語には、助詞「の」の附く事が少くありません。

次に補例を擧げておきます。

第一種

僕は腹がへつた。（口語）

あの男は、ふだんの心がけが立派だ。（口語）

犬は性温順なり。

松は五葉もよし。花は一重なるよし。（徒然草、一三九段）。

その演説は、理路整然たりき。

第二種

こちらは私の買つたのです。（口語）

これは太郎の欲しがるのでございます。（口語）

この説は、恐らく彼の唱へ始めたのであらう。（口語）

鳥の如く見ゆるは、飛行機の飛ぶなり。

事件の解決せるは、時の熟せるなり。
落葉ふみならすは、小鹿の通るにぞありける。

〔注意一〕　第一種の例

日本人は毛が黒い。（口語）　予は心樂しまず。

などの「毛が黒い」「心樂しまず」を述語節と見ず、之を直ちに全文の主語・述語とし、更にその上に「日本人は」及び「予は」の如き主語が重ねてあるものとして、之を「總主」「文主」など稱する人があります。卽ち、次の如くなります。

日本人は（總主）　毛が（主）　黒い（述）
予は（總主）　心（主）　樂しまず（述）

本書では特にさういふ説を用ひず、「日本人は」「予は」を主語、「毛が黒い」「心樂しまず」を述語とし、その述語は節から成立つてゐて、その述語節の述語が「黒い」「樂しまず」であり、之に對する主語が「毛が」「心」であると解します。これが最自然な解釋法だと信じます。

〔注意二〕　右の第一種の例に於ける文の主語は、その形に於て、提示する意味の獨立語に甚よく似てゐます。しかし、獨立語は、主語・述語・修飾語として説明出來ないものであつたの

ですが（〔九四〕の終參照）、この場合の「日本人は」「予は」は主語として說明出來ます。それ故、これは主語と見るべきです。

〔注意三〕第二種の述語節を本書のやうに見るのは、あまりあるまいと考へます。普通の取扱方では、たとへば、

A、あの音は電車の通るのだ。（口語）

B、この書は孔子の作れるなり。

のA例の「だ」の上の「の」を體言と同資格の語と見、B例の「作れる」の下に體言が略されてゐるとして、「電車の通る」「孔子の作れる」を、次に述べる連體修飾節とするか、又は「電車の通るの」「孔子の作れる」を、名詞節（これに就いては、この別記に後に述べます）とし、これ等のものに、助動詞「だ」「なり」の附いたものと說くでせう。かやうな取扱方は誤でなく、殊に名詞節と見るのは合理的でありますが、名詞節に「だ」「なり」の附いたものとすれば、つまり、名詞に「だ」「なり」の附いた「我々は日本人だ」「われは男なり」と同じ性質のものでありまして、本書では、かやうな「日本人だ」「男なり」の類を「日本人」と「だ」、「男」と「なり」とに分たず、之を一つの成分として、述語と見たのでありますから、「電車の通るのだ」「孔子の作れるなり」も亦、述語と同等のもので、その中に主語と述語

とを含んでゐますから、之を述語節としたのであります。「だ」「なり」は附屬する語で、單獨に用ひられる事はありませんから、上の節と一緒にして取扱つてよい筈です。（名詞節を立てる事に對する論は後に述べます）

〔注意四〕　本書には載せませんでしたが、次の如き例も、第二種の述語節に屬します。

人出の多いのは、お祭があるからです。（口語）

彼の長所は、意志の强いだけではない。（口語）

鎌倉の有名なるは、史蹟の豐富なればなり。

平氏の榮えしは、賴朝の起るまでなりき。

【一〇五】　連體修飾節

連體修飾節は、連體修飾語の用をなす節であります。たとへば

門構の立派な家が見える。（口語）　花咲く春は來れり。

の「門構の立派な」「花咲く」は、體言「家」「春」を修飾してゐ、しかもそれを分解しますと、「立派な」「咲く」が述語で、「門構の」「花」は主語であります。故に「門構の立派な」「花咲く」は連體修飾節であります。

連體修飾節に於ける述語は連體形になります。その主語には、助詞「の」の附く事が多く、口

語では「が」が附く事もあり、又文語では全く助詞の附かない場合もあります。

私共は朽木がところ〴〵に倒れてゐる山道を歩きました。（口語）

餘興がもう終らうとする時に、意外な事件が起りました。（口語）

象は鼻の長い動物です。（口語）

蟲の鳴く音に、亡き友を思ふ。

月清き一夜を、友と語りあかす。

風蕭々たる易水に、壯士永訣の情を敍す。

【一〇六】 連用修飾節

連用修飾節は、連用修飾語の用をなす節であります。たとへば

先生は折あしく御不在でした。（口語）　勇士は勢よく進軍せり。

の「折あしく」「勢よく」は、述語の「御不在でした」「進軍せり」を修飾してゐ、しかもそれを分解しますと、「あしく」「よく」が述語で、「折」「勢」は主語であります。故に「折あしく」「勢よく」は連用修飾節であります。

連用修飾節はいろ〳〵ありますが、三種に分けて説明します。

（甲）　これは、〔一〇六〕の（甲）の例のやうに、節の述語が形容詞の連用形、又は副詞その

まゝの形の場合です。これに對する主語には、助詞の附かないのが普通です。

私も心持よく聽いてゐた。（口語）

どうぞ御遠慮なく仰しやつて下さい。（口語）

彼は力なく起ち上りぬ。

その一言は、全く末頼もしく思はる。

翁は心靜かに餘生を樂しめり。

校長は音吐朗々と訓辭を與へたり。

（乙）　これは、〔一〇六〕の（乙）の例のやうに、用言の連體形の下に、第一種助詞（主に「に」「を」）を加へたものが、節の述語となる連用修飾節です。但し口語では、その際第三種助詞「の」がその間に入ります。又その主語には、第一種助詞「の」の附くのが普通ですが口語では「が」も附きます。

私共は、小犬が戯れてゐるのを見つけた。（口語）

象の鼻の長いのには、誰も驚いた。（口語）

君子は利口の邦家を覆すを惡む。

天才の怠惰なるは、凡才の勤勉なるに如かず。

（丙）　これは、〔一〇六〕の（丙）の例のやうに、用言に第二種助詞を加へたものが、節の述語となる連用修飾節です。この場合の主語の形は、普通の文と同様です。

この種の節は、接續詞のやうな意味で下の語に係つて行くものですから、或人は、之を別種のものとして取扱つてをりますが、これは、第二十二章〔八八〕の（丁）に擧げた「某は傲慢なれば、人に厭はる」以下のものに對應するものですから、やはり、普通の說に從つて、連用修飾節としてよからうと思ひます。

身分が賤しくても、心が正しい。（口語）

誰が何と云はうが、僕は斷然やり通す。（口語）

腹の皮が張れば、目の皮がたるむ。（口語）

食過ぐれば、懈怠起る。

骨はやがて朽つとも、名は永へに此の土に留らん。

谷の流も、雨降れば濁る。

〔注意〕〔八五〕で述べたやうに、連用修飾語の中から補語を區別するとすれば、連用修飾節の中に補語節と見るべきものが出來る筈で、右の（甲）及び（乙）の中に補語節とすべきものがあります。但し之を區別するのは必要でないと考へますから、唯、連用修飾節として取扱ひ

ます。

【一〇七】獨立節

獨立節は獨立語の用をなす節であります。獨立語には、感動、呼掛、提示、接續などいろいろの意味のものがありますが（第二十三章參照）、節で獨立語の用をなすのは、提示の意味のもので、その外のものはないやうです。本書の例では、初のは

齋藤の缺席したのは、

で、言はうとする事柄の題目になる事をまづ提示したのであります。これは提示する意味の獨立語にあたり、その中に「齋藤の」「缺席した」といふ主語と述語を具へてゐますから、これは獨立節です。

同じ枝をわきて木の葉のうつろふは、西こそ秋のはじめなりけれ

の例では、「同じ枝でありながら、特別に西の方の木の葉が色づくのは」と、まづ或事實を提起して、「西こそ秋のはじめなりけれ」とその理由を說明してゐるのであります。「同じ枝を……うつろふは」が、提示する意味の獨立語にあたり、中に「木の葉の」「うつろふ」といふ主語と述語がありますから、これも獨立節です。

獨立節の述語は連體形となり、その下に種々の助詞を附けるのが普通であります。但し口語で

は、その間に第三種助詞「の」が入る事があります。

齋藤があんな事を云つたのも、それも氣にかゝる。（口語）

サイレンの鳴るまで、それまでには何うしても歸らなければならない。（口語）

犬が塀にのぼるとは、これには私も驚いてしまひました。（口語）

馬に角が生えるなど、そんな事があるものか。（口語）

君の今日あるは、これ全く君の勤勉による。

我等が心に念々のほしきまゝに來り浮ぶも、心といふもののなきにやあらん（徒然草　二三五段）。

〔注意〕本書に述べたやうな「獨立節」を立てたものは、まだ無いかも知れませんが、節がいかなる文の成分をなしてゐるかを考へて節の種類を分けるとすれば、自然に立てなくてはならないものです。但し獨立節といふ名は、必ずしも珍しくありませんが、それは本書〔一〇九〕にいふ對立節をさしていひます。かやうに本書の獨立節は、世にいふ獨立節とその内容が違ひますから、誤解のないやうに、特に注意される事を希望します。

〔一〇八〕 從屬節

以上の主語節・述語節・連體修飾節・連用修飾節、及び獨立節を總稱して從屬節といひます。

卽ち從屬節は、一つの文の成分をなす節であります。換言すると、或文の主語とか、述語とか、修飾語とかが節から出來てゐると、之を從屬節と稱します。これは後にいふ對立節（〔一〇九〕參照）と共に、節の二大別を成すものであります。

次に從屬節は、文の成分をなす節ですから、成分の種類があるだけ節の種類がある譯です。卽ち主語に對する主語節、述語に對する述語節、修飾語に對する修飾節、獨立語に對する獨立節があり、また修飾語には連體修飾語と連用修飾語とありますから、修飾節にも連體修飾節と連用修飾節とあります。

〔注意〕以上の各種の從屬節は、第二十——二十三章に於ける各成分と同樣に取扱ひました。卽ち、主語・述語其他の成分が、獨立する語に附屬する語が附いて出來たものであれば、附屬する語をも共にその成分と認めましたが、主語節・述語節其他の從屬節に於ても、最後に附屬する語が附いて居れば、それをも一緒に節と認めました。

〔**從屬節の種類に就いて**〕

以上、從屬節の種類は、文の成分の種類と同じだけある事を見ました。然るに、普通の文典では名詞句・形容詞句・副詞句・動詞句の四つ、又はその動詞句を除いた三つ、又は體言節・用言節・形容詞節（又は連體節）・副詞節（又は連用節）の四つに分けたものが多いやうです。これ

は、本書に於ける分類が、文のいかなる成分になるかを標準としたものであるに對して、節(句)が、その用法上、如何なる品詞に相當するかを標準として分類したものと見られませう。この種の分類法は決して理論上間違つたものではなく、名詞句(體言節)の如きは、もし之を立てれば、その節の構造と用法とを說明するにかなり都合がよいのですが、しかし、現に行はるゝこの種の分類は、決して單純に品詞を標準としたのではありません。即ち形容詞句(又は節)といふのは、或人が之を連體節と名づけてゐるによつても知られる通り、決して國語の品詞としての形容詞にあたるものではなく、西洋語の形容詞の特質、即ち體言を修飾する性質を有するだけであります。即ち、これは文の成分としての所謂形容詞的修飾語(本書では連體修飾語)にあたるものであります。又、動詞句又は用言節は、

日本人は毛が黑い。(口語)　予は心樂しまず。

の「毛が黑い」「心樂しまず」の類をさすのですが、この節は述語として用ひられてゐます。動詞又は用言が述語として用ひられるのは常ですから、これを動詞又は用言の用をなすものと見て、動詞句又は用言節と見るのは不當ではありませんが、日本の動詞や形容詞は、連體修飾語になるのが常ですから、

毛が黑い日本人。(口語)　心樂しまざる予は……。

の「毛が黒い」「心樂しまざる」も亦動詞又は用言と同じ用法であつて、動詞句又は用言節といふべきです。しかるに、これを形容詞句（又は節）としてゐるのは、節の用法が如何なる品詞と同じであるかによつて分類する立場からは、不合理だといはなければなりません。

かやうに、品詞の用法を標準としたやうに見えるこれまでの節の分類は、實は不統一で矛盾があります。之を採用するには改訂を加へなければなりませんが、さうしても、節を含む文の構造の說明は、さほど簡便にはなりません。それよりも、文の成分の種類に照して節を分類する方が、分類としては統一があるばかりでなく、文の成分の知識を應用してすぐ會得する事が出來ますから、學習にも便利であつて、どれだけ有益であるかわかりません。これが本書の如き分類を採用した所以であります。

【一〇九】對立節

對立節は、從屬節と違つて、一つの文の或成分をなすものでなく、言はば二つ以上の文が、互に對等の資格を以て結合して、一つの大きな文を組立てる場合に、その一つ〳〵の文を對立節と稱するのであります。たとへば

風も吹く。　雨も降る。

は、意味の上から見ても形の上から云つても、共に完全な二つの文ですが、これが

風も吹くし、雨も降る。（口語）　風も吹き雨も降る。

となりますと、双方を合せたものが一つの文で、しかも前後に輕重の差も主從の關係もなく、互に對等の資格に立つてゐます。文と文とがこのやうな關係にある時は、これを對立節と稱します。右の通りでありますから、對立節は「文」と稱して差支がないやうですが、之を特に「節」とする理由に就いては、次に述べます。

〔注意〕本書の從屬節を「句」、對立節を「節」と稱する人があります。又本書の對立節を「獨立節」と稱する人のある事は、既に述べました。

〔對立節の種類〕

惡人は滅び、善人は榮える。（口語）　夏は暑く、冬は寒し。

右の各文は二つの對立節から出來てゐますが、その中、上にある「惡人は滅び」「夏は暑く」は下の對立節に連續するもので、明かに、それ自身で獨立した文を成す事の出來ないものです。下にある對立節「善人は榮える」「冬は寒し」は、その終でことばが切れ、他の節が無くても、獨立する事の出來るものであります。然るに之を文とせずに、節とするのは何故かと申しますと、なるほど「善人は榮える」「冬は寒し」は一つの獨立した文に違ひはないのですが、しかしこれが、「惡人は滅び、善人は榮える。」「夏は暑く、冬は寒し。」となつた場合には、もう獨立したも

のではなく、全體の文の一部分を成すに過ぎないからであります。文たる以上は、實際それだけで獨立してゐるものでなければなりません。

要するに、右のやうな、下にある對立節は、切離して獨立する事が出來るといふまでの事でありまして、實際に於て他の節と共に文を成してゐる以上は、やはり獨立せぬもの、卽ち節と見るのが正當であります。

猶、右の例に於ては、下にある對立節は文の終に來てゐますが、一般に對立節の中、最後にあるものは、いつも文の終にあるかといへば、必ずしもさうではありません。例へば

花咲き鳥歌ふ春にはなりぬ。

の文に於て「花咲き」「鳥歌ふ」は對立節ですが、「鳥歌ふ」は「春」に連つてゐます。かやうな場合には、獨立せぬものである事はいふまでもありません。さてかやうな場合に於ては、「花咲き」「鳥歌ふ」の二つの對立節が合して「春」を修飾し、「春」に對する連體修飾節となつてゐるのでありますが、一つ一つの節について言葉つゞきをいへば、上の「花咲き」は、下の「鳥歌ふ」といふ對立節に直接につづいてをり、下の「鳥歌ふ」は直接に「春」につゞいてゐるのであつて、上の「花咲き」は直接に「春」にはつゞかず、下の「鳥歌ふ」が上の「花咲き」を受けてさうして「春」につゞいてゐるのです。さうして形の上から見ると「鳥歌ふ」は、上に「花咲き」とい

ふ對立節があつてもなくても、同じ形で「春」につゞいて之を修飾します。

【一一〇】對立節の形

以上述べたやうに、對立節の中で最後にあるものは、文の終に來た場合には普通の獨立した文と同樣ですし、文の中に來た場合には、修飾節其他の從屬節と同樣ですから、ここに取立てていふ必要はありません。それ以外のもの、卽ち、上にあつて、他の對立節につづくものは、述語の部分が特別の形になりますので、次に五種類に分けて、說明します。

（甲）述語が動詞の場合。

本書に擧げた「兄は耕し、……」「病は口より入り、……」のやうに、動詞の連用形を用ひるのが普通であります。又、第二種の助詞「て」の附いたものも、對立節と見るべきものがあります。

日暮れて道遠し。　霜　軍營に滿ちて、秋氣淸し。

口語では、連用形も用ひますが、また終止形に第二種助詞「し」を附け、又は假定形に第二種助詞「ば」を附けて用ひる事があります。

父も笑へば（笑ふし）、兄も笑ふ。皆で大笑だつた。（口語）

築山もあれば（あるし）、泉水もある。（口語）

（乙）　述語が形容詞の場合。

口語では終止形に助詞「し」、連用形に助詞「て」を附けるのが普通であり、假定形に助詞「ば」を附けて用ひる事があります。又口語文や講演の場合には、連用形をも用ひます。文語では連用形を用ひ、又は之に「して」を附けます。

英語もむづかしいし、數學も分りにくい。（口語）

氣立が優しくて、器量がよい。（口語）

海も面白ければ、山もまた面白い。（口語）

花も美しく、葉も珍しい。（口語）

なほ口語で、連用形に「て」の附いた場合に、促音となる事はありますが、音便形（ウ音便）に「て」を附けて、「高うて」「新しうて」などいふのは、標準的な言ひ方ではありません。

山が高くつて、谷が深い。（口語）

品が新しくつて、値がやすい。（口語）

〔注意〕　本書にも擧げておきましたが、動詞・形容詞の連用形が、本書の例「兄は耕し、弟は……」「病は口より入り、禍は……」「道も遠く、夜も……」「日なたは暑く、日かげは……」の「耕し」「入り」「遠く」「暑く」のやうに、そのまゝの形で節の述語として用ひられた場

合には、之を「中止法」といふ事があります。助動詞の連用形にも、他の語に附いて此のやうに用ひられるものがあります。

兄は褒められ、弟は叱られた。（口語）

静かなること林の如く、疾きこと風の如し。

（丙）述語が第二種の形容動詞の場合。

本書に擧げた例のやうに、口語では語幹に「で」を附け、文語では語幹に「に」「にて」又は「にして」を附けます。

〔注意〕文語の場合は語幹に「に」を附けた形（「静かに」「平かに」等）は、副詞と同形ですから、之を副詞として取扱ひ、「にて」「にして」を附けたものは、副詞に「て」「して」を附けたものとして取扱ふことも出來ます。しかし、こゝのやうに形容動詞（「平かなり」等）と對照して考へる場合には、本書のやうに取扱ふ方が合理的です。

その他、本書には擧げませんでしたが、口語では、その終止形に第二種助詞「し」を附けて用ひる事があります。

海が穏かだし、それに船が大きい。（口語）

身體も丈夫だし、頭もいい。（口語）

なほ、本書の「品行方正、……」の例のやうに、文語では漢語の場合に、時として語幹そのままを用ひる事があります。

人家高大、街路井然たり。
儀容閑雅、君子の風あり。

（丁）述語が第三種形容動詞の場合。

この場合には、語幹に「として」を附けるのが常であります。

草茫々として、人跡絶えたり。
音吐朗々として、聽者皆耳を傾けたり。
煙波漂渺として、際涯なし。
風蕭々として、易水寒し。

これは又語幹のまゝ用ひられる事があります。

海漫々、風浩々たり。
湖水淼茫、落日輝く。
河流淙々、盡期なし。
眼光炯々、聲鐘の如し。

〔注意〕第三種助詞は口語には有りませんから、(丁)は文語に限ります。

(戊) 述語が體言の場合。

口語では助詞「で」、文語では「にて」「にして」を附けるのが普通であり、又體言そのまゝを用ひる事があります。又本書には擧げませんでしたが、文語では、體言に第一種助詞「に」を附けて用ひる事があります。

男の子は二人、女の子は一人だ。(口語)

會社を盛にしたのも彼、潰したのも彼だ。(口語)

船を浮ぶるも水、船を覆すも水なり。

山紫に、水明かなり。

〔總括〕

〔一〇二〕から〔一一〇〕までに述べた節の種類を、表に示すと、次の通りであります。

- 節
  - 主語節
  - 述語節
  - 對立節
    - 從屬節
      - 連體修飾節
      - 連用修飾節
    - 獨立節

第二十六章　文の種類

〔本章の目的〕

文の種類は、構造上からと、性質上からと兩方面から見て分類する事が出來ます。それで本章では最初に〔一一一――一一四〕に於て、構造上から見た種類を述べます。この分類の基礎は、前章に述べた節に在りますから、本章に入るに先だつて、節全般に亙つて、その性質及びその種類に就いての知識を確實にしておくべき事は、言ふまでもありません。

次に〔一一五〕以下に於て、文をその性質の上から見て、如何なる種類があるかを述べます。ここに性質といふのは、その文の言ひ表はす意味の事ですが、その性質上の違ひが文全體としての構成の上にもあらはれて、たとへば疑問の意を表はす文には、疑問の意の助詞が用ひられるといふやうな事がありますので、やはり文法の問題となるのであります。

又、文語には係結の法則といふのがありまして、文の言ひ切りに用ひられる活用語が、或條件の下には、特別な形をとる事になつてゐます。これは別に切離しても說く事が出來ますが、その文の性質の相違によつて、右の法則が行はれると行はれないとの相違があります。それ故、文の性質上の分類は文法上にも必要なこととなります。

【一一一】 文の構造上の分類

文を構造上から分類すると、單文・複文・重文の三種となります。以下順次に說明します。

【一一二】 單文

單文は、本書で說明した通りで、主語と之に對する述語があつて、或事柄を述べ又は說明するといふ、主語・述語の關係が、一回しか成立せぬ文です。ですから單文は節を含まぬ文であると云つても、同じ事になります。

〔單文に於ける主語と述語〕

單文は主語・述語の關係が一回だけしか成立せぬもので、たとひ主語や述語が二つ以上あらうとも、又は主語や述語が二つ以上の語で成立つてゐようとも、一方に主語があつて或事物を表はし、一方之に對する述語があつて、その主語について敍述又は說明するといふ關係が、只一回しか成立しなければ、やはり單文であります。次に例を補つて、一通り說明します。

(甲) 太郎と次郎がやつて來た。(口語)

狐や狸がゐる。(口語)

東京・大阪は大都會なり。

梅も櫻も美しい。(口語)

正成も正行も、大忠臣なり。

あ、ゐるぞ、鯉が鮒が。（口語）

右の諸例は、多くの語が重なつて主語となつたもの、及び主語がいくつか重なつたものを擧げました。「太郎と次郎が」、「狐や狸が」「東京・大阪は」は、「太郎」と「次郎」、「狐」と「狸」、「東京」と「大阪」のやうな語が對等の關係で結合して、その結合したもの（「太郎と次郎が」等）が、それ〴〵の文の主語となつてその下の述語に對してをります。次に第四例の

梅も櫻も美しい。

は、「梅も」と「櫻も」が、どちらも主語であつて、その二つの主語が重なつて、一の述語「美しい」に對してをり、第五例も同樣であります。第六例の

あ、ゐるぞ、鯉が鮒が。

は、「鯉が」「鮒が」が何れも主語で、この二つの主語が重なつて、一つの述語「ゐるぞ」に對してをります（文としては倒置があります）。

（乙）　これは新しくて珍しい。（口語）

これは新しくもあるし、珍しくもある。（口語）

われ〳〵は疲れると休息し、眠くなると寢た。（口語）

彼は詩を作り、又畫に巧みなり。

これは新しく珍し。

右の諸例は一つの主語に對して、多くの述語（又は述語部）が重なつてゐる例で、最初の例は「これは」に對して「新しくて」と「珍しい」との二つの述語があり、次の例は、「新しくもあるし」と「珍しくもある」との二つの述語があります。第三の例は、「われ〳〵は」の主語に對して、「疲れると休息し」と「眠くなると寢た」と連用修飾語を伴つた二つの述語があります。何れも、主語と述語との關係は唯一回だけしか成立しません（他の二例も同樣です）。

（丙）太郎と次郎は、學校友達で、親しい。（口語）

これもそれも、新しくて珍しい。（口語）

東京・大阪は、大都會にして、東西に對立す。

われも彼も、驚きかつ喜べり。

右の諸例は、二つの語が重なつて主語となつたもの及び主語が二つ重なつたものに對して、述語が二つ重なつてゐるものであります。かやうに、主語・述語とも二つづつありますが、主語に對して述語が敘述するといふ關係は、一回だけしかありません。

以上の諸例は皆單文と見るべきです。

〔注意〕（乙）（丙）の諸例は述語がいくつも重なつたものと見ましたが、これ等は、對等の關係でいくつもの語が重なつて、それが合して一つの述語となつたものとも見得る事は、この別記の277節に述べた通りです。どちらにしても、（乙）（丙）の諸例が單文である事は、かはりません。

なほ、これ等の主語や述語などに、いろ〳〵の修飾語の附いたものなどありますが、單文であるかどうかは、主語述語の關係が一回だけであるかどうかによつてきめる事が出來ます。

單文の、かなり長い例を、次に二つ擧げておきます。

東海の空に、四時雪を頂いて聳え立つ富士山は、古來三國一の名山として、內外國に賞讃されてゐます。（口語）

太政の入道は、先年神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島の大明神より、うつゝに賜はられたりける、銀の蛭卷したる小長刀を脇にはさみて、中門の廊にぞ出でられたる。

【一一三】複文

複文は、文の或成分が節で出來てゐる文です。換言すれば、從屬節を含む文が複文です。隨つて複文に於ては、主語述語の關係は、その節に於ける主語と述語との間と、その文に於ける主語と述語との間と、合せて二回又は二回以上成立つ筈であります。

なほ、本書〔一〇三〕から〔一〇七〕までに擧げた文は、すべて複文であります。

ここに複雜な複文の一例を擧げて、次に說明を加へておきます。

下り列車が音凄じく踏切にさしかゝると、その音に驚いた馬は、馬子の制止もそのかひなく、忽ち人通の多い町中に驅け入つてしまつた。（口語）

この文の、初から「馬は」までは主部で、「馬子の」から終までは述部であります。卽ち、この文の主語・述語は、「馬は、驅け入つてしまつた」で、その他の部分は、この兩成分を直接間接に修飾する語です。

その中、連用修飾節「下り列車が、踏切にさしかゝると」の中に、「音、凄じく」といふ連用修飾節が附き、連用修飾節「馬子の制止も、そのかひなく」の中に、述語節「かひ、なく」を含み、連用修飾語「町中に」に、連體修飾節「人通の、多い」が附き、結局この文には、五つの從屬節を含むことを知る事が出來ます。

かやうに、從屬節を含む文が複文であります。それ故、從屬節を見わける事が出來れば複文はわかる筈です。

なほ、次に一二の例を擧げておきます。

一國の音樂が、どれ程その國民性に左右せられるかといふ事は、國歌などを見ると最も明か

にわかる。（口語）

君が代の作曲は、一度外國人が手をつけたが、それは不成功に終つた。その後、宮中の雅樂師である林廣守氏が、古代の雅樂に則つて作つた曲が、今の君が代である。（口語）

桃李もの言はねど、その實熟すれば人爭うて之を得んとして近づくが如く、德ある者は自ら諸人に慕はる。

【一一四】重　文

重文は、對立節から出來てゐる文であります。對立節はきつと二つ以上ありますから、主語と述語との關係は、必ず二回以上成立つ筈です。この點で重文は複文と似てゐますが、重文には必ず對立節があり、複文には必ず從屬節があります。この點で區別されます。

重文のいろ〳〵な形は、本書の〔一一〇〕によつて知る事が出來ます。そこにある例は、すべて重文であります。

なほ、重文の主語・述語に修飾語が附き、それに又別の修飾語が附いて複雜になりますが、ここに特に例を擧げて說明する必要を認めませんから、省略しました。

〔構造上から見た文の種類〕

以上に述べた通り、文を構造上から分類しますと、次のやうになります。

文 ┌単文――節が無い文
　 ├複文――従屬節がある文
　 └重文――對立節がある文

この中、複文の或成分が對立節から成ることがあつたり、重文の或成分の中に從屬節を有することがあつたりして、複雜な文となるのであります。

〔注意〕右の如くでありますから、たとひ文の中に對立節又は從屬節を見出しても、それによつて直にその文を複文とか重文とかきめる事は出來ません。その對立節又は從屬節が、他の對立節又は從屬節の中に含まれてゐるかどうかを見なければなりません。他の節の中に含まれてゐる節は、その文の種類を決定する目あてとはなりません。

ここに複雜な複文・重文の例を二三あげておきませう。

複文

○志士は、朝威の年々に衰へて（連用修飾節）武家の日々に盛になるのを憤つた。（對立節）（口語）

○甲が失敗して（對立節）乙が成功したのは、全く平生の心がけから來た相違だ。（主語節）（口語）

○甲の進歩的にして（連體修飾節）乙の保守的なる事は、（對立節）すでに明白なり。

○富の來たること火の燥けるにつき、（述語節）水のくだれるにしたがふが如くなるべし。（對立節）（徒然草、二一七段）

重文

○風が吹くと（連用修飾節）道が惡くなるし、（對立節）雨が降るとほこりが立つ。（連用修飾節）（口語）

○貧しい者は冬の寒いのをいとひ、（連用修飾節）（對立節）富む者は夏の暑いのを嫌ふ。（連用修飾節）（口語）

○富貴は人のねがふ所にして、（連體修飾節）（對立節）貧賤は人のいとふ所なり。（連體修飾節）

○呉竹は葉ほそく（連語節）かは竹は葉ひろし。（對立節）（徒然草、二〇〇段）

○君憂ふれば臣勞し、（連用修飾節）（對立節）君辱められれば臣死す。（連用修飾節）

【一一五】文の性質上の分類

性質といふのは、文全體として見た意味のことです。ここには、豫備的にまづ四種の名目を示

したに過ぎません。その一々の性質は、勿論ここで述べる必要がありません。

ただ一言注意しておきたいのは、この分類は、前に述べました、文の構造には、少しも關係のない事です、たとへば、平敍文は單文にも複文にも重文にもあり、又單文には平敍文も疑問文も命令文もある類です。これは、分類の標準が全然異るところから生ずる結果であります。

【一一六】平敍文

平敍文は、斷定や推量の意味（共に肯定にも否定にも）を述べる文であります。

〔注意〕「春が來たら、病氣もなほるだらう」（口語）のやうな文も平敍文です。尤も、これには「春が來たら」といふ條件を含んでゐます。しかしこれは、述語に從屬する連用修飾節でありまして、文全體の性質を決定し得る力を有するものではありません。卽ちこの文は、「病氣もなほるだらう。」の述語の意味によつて、推量（肯定の）の意味を述べる平敍文と見なければなりません。この述語によつて、文の種類が決定される事が多いのです。

平敍文ではあらゆる用言や活用連語がその述語となる事が出來ます。さうしてこれ等は終止形で言ひ切りとなるのが常態ですが、文語では特別の助詞を受ける場合には連體形や已然形で文を終止する事があります。これは後の係結の法則のところで述べます。

【一一七】疑問文

疑問文は、疑問の意又は反語の意を表はす文であります。

反語といふのは、「誰が行くものか。」（口語）、「誰か知らざらん。」のやうに、疑問の形を以て、實は斷定の意を表はすものであります。故に文字に書いたものでは、その何れの意味かを判斷し得ぬ場合があります。たとへば「それは君の帽子か。」（口語）の如き類であります。これ等は前後の關係やその場の事情で判じるより外ありません。もつとも對話の場合では、發音のしかたでも區別されます。文法では、疑問・反語の何れの意味であつても、等しく疑問文として取扱ひます。

疑問文には「誰」「何」「どれ」（口語）「どこ」（口語）「どちら」（口語）「どう」（口語）「いつ」「いくら」（口語）「いづく」「いづれ」「いづち」「いかに」の如き疑問を表はす語があり、又は「か」（文語ではその他に「や」）など疑問の意味の助詞があるのが普通です。

〔注意一〕疑問の語があつても左の文の如く疑問の意味なく、單に不定の意味のみの時は疑問文ではありません。この場合には「も」（口語ではその他に「でも」）のやうな助詞があるのが普通です。

誰でも知つてゐる。（口語）

何も無い。（口語）

いづくも同じ。

〔注意二〕 口語では

あの人は歸つて來た。

のやうな平敍文と同じ文を特別の音調で（尻上りに）發音すると、疑問の意味をもつやうになります。その場合は、疑問文と見るべきです。

疑問文は、疑問の助詞「か」（文語ではその他に「や」又は「ぞ」）で言ひ切る事が多いのですが、文語では「か」「や」が文中にあつて用言又は活用連語で文を終止する事があり、その場合にその用言又は活用連語が連體形になります。この事は係結の法則のところで述べます。

【一一八】 命令文

命令文は命令や禁止の意を表はす文であります。

この「命令」の意を狹義に解してはいけません。普通には、目下に向つて或動作を要求する事を命令といひますが、しかし文法では、

君はあの松の中へ入らせ候ひて、靜かに御自害候へ。（平家、九。今井兼平が木曾義仲に言ふことば。）

のやうに、目上に向つて勸めたり希望したりする事も「命令」といひ、又

はや、日の暮れよかし。（平家、四）

あつぱれ、よからん敵の出で來よかし。（平家、九）

のやうに、或事件の生ずる事を希望するのも、「命令」といひます。かやうに、ここで命令といふのは、普通の用法よりも廣い意味である事を、注意されるやう希望します。

命令文の述語は用言又は活用連語の命令形で終るか、禁止の意の助詞「な」（口語・文語）・「な……そ」（文語）で終ります。

又、命令文には、主語を言ひ表はさないことが少くありません。これ等は、命令文の形の上の特徴であります。

人のふりを見て、わがふり直せ。（口語）

詩を作るより、田を作れ。（口語）

酒は飲んでも、酒に飲まれるな。（口語）

弱き馬をば下手に立てよ。強き馬をば上手になせ。馬の足の及ばんほどは、手綱をくれて歩ませよ。（平家、四、橋合戰）

川中にて弓引くな。敵射るとも、あひびきすな。常に鏃を傾けよ。いたう傾けて、天邊射さすな。（同上）

さな思召され候ひそ。（平家、三）

己の欲せざる所は、人に施すことなかれ。（文）

〔注意〕命令文には主語を言ひ表さないことが多いので、隨つて次の例のやうに、動詞だけ、又は動詞と助詞だけで出來た命令文も珍しくはありません。

止せ。（口語）　始めろ。（口語）　騒ぐな。（口語）　進め。な行きそ。

【一一九】感動文

感動文は感動の意を表はす文であります。

或事柄を述べても、平靜に、之を人に傳へるだけならば平敍文ですが、之と共に強い感動の情を表はすものは感動文です。

いゝお天氣ですね。（口語）

や、大變な人出だな。（口語）

全く大きな建物ですよ。（口語）

あはや、源氏の大勢の向ひたるは。

あな、心うや。わが思ひ奉るほど、人は思ひ給はざりけるよ。

ああ、はや成親卿が首の刎ねられたるな。

感動文の終には、感動の意を表はす助詞のあるのが普通であります。又感動詞があり、成分の省略や倒置のある事が多いのです。これが感動文の形の上の特徴であります。

なほ、感動詞は意識内容を分析せずに、そのまゝ綜合的に言ひ表はす語ですから、それだけで文と同様なものとなる事があります（この別記の〔一〇一〕の注意二参照）。それらは感動文と見るべきです。

次に一二例を補つておきます。

「あれは何でせうね。」「さあ。」（口語）

「そのボールを取つて下さい。」「そら。」（口語）

「や、富士山が見える。」「まあ。」（口語）

「敵は既に城中に攻め入つて候。」「あゝ。」

〔注意〕文語では、感動文が形容詞の語幹で終ることがあります。又それに感動の意を表はす助詞が附くことがあります。

あな、心憂。　　あら、たふと。

あら、心もとなや。　　あな、有難や。

【一一〇】係結の法則

このきまりは文語に限つて行はれるもので、口語には行はれません。その上、文語でも平敍文と疑問文とに限り、その他の種類の文には無いものであります。卽ち、文語の平敍文又は疑問文に於て、用言又は活用連語（卽ち活用語）が、それだけで（助詞などを伴はずに）文を終止する場合に、文中に助詞「ぞ」「なむ（なん）」「や」「か」があつて、それがその用言又は活用連語に係つてゐる時（言ひかへれば、その助詞をその用言又は活用連語が受けてゐる時）その用言又は活用連語は連體形で文を終止します。同樣に、文中に助詞「こそ」がある場合には、之を受ける用言又は活用連語は已然形で文を終止します。これを係結の法則と云ひます。

かやうな係結の法則によつて、用言や活用連語が連體形又は已然形をとつても、その役目は終止形の場合と同じ事で、只文を終止するだけであります。

奥山に紅葉ふみ分け鳴く鹿の聲聞く時ぞ秋は悲しき。

いとやさしうぞ聞えし。

時鳥なきつる方をながむれば、たゞありあけの月ぞ殘れる。

御涙ぞ先立ちける。

心あるものは、恥ぢずになむ來ける。

龍の頸の玉をえ取らざりしかばなむ、殿へもえ參らざりし。

その始を思へば、かくなむあらぬ。
いづこか王土にあらざる。
今はまた何をか申すべき。
何事か候ひつる。
かゝるべしとは、誰かは思ひ寄りし。
淀、一口へや向ふべき。また河内路へやまはるべき。
吹く風を鳴きて恨みよ鶯は、我やは花に手だに觸れたる。
若し自害をやし給ひし。
都にて山の端に見し月なれど、波より出でゝ波にこそ入れ。
弓矢取る身は、かりにも名こそ惜しう候へ。
たゞ一所にて、ともかくもならむこそ本意なれ。
冬枯のけしきこそ秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。

〔注意一〕　用言又は活用連語が、「いかが」を受けて文を終止する時も、連體形で終ります。本書にその例を擧げましたが、なほ二三例を補ひます。

この事いかが思さるる。

御行末いかがなり給ふべき。
いかがなしまゐらせし。

〔注意二〕　係結の法則は、活用語で文を終止する場合に限つて行はれる法則であります。隨つてその活用語に助詞が附いたり、他の語が附いたりする場合には、その法則は適用されません。たとへば「うき世には長らへじとぞ思へども……」は、「思ふ」が「ぞ」を受けてゐますが、「ども」に連る爲に已然形となり、又「古は、車もたげよ、火かかげよとこそいひしを……」は、「いひき」が「こそ」を受けてゐますが、「を」に連る爲に連體形となつたのであります。

〔注意三〕　「こそ」を受けて已然形で結んだものは、「ぞ」「なむ」に對するものと同じく形の上ではそこで切れたのですが、前後の意味の關係から「……けれども」「……が」と、下に續く事があります。たとへば

色こそ見えね、〔見エナイガ〕、香やは隱るゝ。
姿こそ美しけれ、〔美シイケレドモ〕、心はねぢけたり。

の如くであります。これは相反する意味が對照されるところから生ずるので、「ぞ」の場合でも、本書〔一二〇〕の最初の例、「絲なる一つ草とぞ春は見し。」は、ここで意味が切れて

しまつたのではなく、「春ハ見タガ、……」といふやうな意味を自然に含んでをります。しかしこれは前後の文の有する意味から自然に生じたもので、結びに用ひられた已然形や連體形の有する意味ではありません。

〔注意四〕「ぞ」「なむ」「こそ」を受ける用言が略される事があります。

その末今に絶えずとぞ。（承る）

みな、事の意外なるに驚けりとぞ。（いふ）

その時白龍現じて雨をくだし侍りきとなむ。（いひ傳ふる）

古き名所をも、はや呼び失ひけるにこそ。（あれ）

さやうの事に仕へ奉る人もなきにや。御いたはしうこそ。（候へ）

〔餘　論〕

以上のやうに、文をその性質上から見て四種に分類するのは、普通に行はれて居る説でありますが、實は、これで果してあらゆる文を網羅する事が出來るかどうかは、疑問であります。例へば、希望をあらはす。

行かばや。

今一度の御幸またなむ。

また見む折もがな。

のやうなものは、何處へ收むべきか疑問になります。また同じ希望をあらはすものでも、

早く家に歸りたい。（口語）

東山の花も探りたし。

のやうなものは、勿論疑問文でも命令文でも感動文でもなく、活用連語で終止してゐる點から見れば、平敍文と特徵を同じくし、文語では係結の關係も平敍文と同樣ですから、平敍文に收むべきでせうが、「行かばや」「待たなむ」「折もがな」は、助詞で終つてをりますから、その形からは平敍文でなく、係結の關係も平敍文とはちがつてゐますから、平敍文に入れるのは不適當です（さすれば、命令文か感動文かに入れなければなりませんが、どちらにしても多少の附會をまぬがれません）。

又、述語に助動詞「べし」のある文の中、

汽車に注意すべし。

の「べし」は命令の意味と說かれてゐますから、命令文に入れるべきやうですが、これは活用連語で文を終止してをりますから、その點からは、平敍文として取扱ふが適當であると思はれます。

以上の諸例は、ただ文全體の意味のみを考へては、適當な分類が得られない事を示してをります。

それでは、之をいかにすれば合理的になるかといふ問題になりますと、自然この種の分類の根本原理から考へて行かなければならない事となるのでありまして、その理論的考察から得た結果は、これまでの説と大分違つたものになります。これを直に、かやうな教科書に採用するのは穩當でないと思はれますし、これまでの説でも、あらゆる場合を説明し盡されぬにしても、相當の程度まで各種の文の特徴を明かにする事が出來ますから、從來の説に從つておいたのであります。

元來、文章法は文法上甚大切な部門であるにかゝはらず、我が國では、まだ研究の行屆かない部分が非常に多いのでありまして、文の成分の問題に於ても、節の問題に於ても、更にいかなるものを文と認めるかといふやうな問題に於ても、まだ解決されない點が少くないのであります。之に對して多少の私見があるとしても、直に教科書に用ひるのは愼むべきであると考へられますので、本書では、なるべく從來の説を用ひて、出來るだけ矛盾撞着の無いやうな取扱や説明法をとる事としました。それ故、根本的の建直しを要する所もそのまゝになつて居り、爲に、多少の無理や缺陷が生ずる事を免れなかつたのは、已むを得ない事でありました。この點は、今後學界

及び教育界の同意を得て、追々改めて行きたいとおもつてをります。

改制 新文典別記（文語篇）終

附錄

文法上許容スベキ事項（明治三十八年十二月二日文部省告示第百五十八號）

一　「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ。

二　「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ、「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

三　過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ、終止言ニ用ヰルモ妨ナシ。

例

火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎭火セザリシ。

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ、金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

四　「コトナリ」（異）ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ。

五　「ヽセサス」トイフベキ場合ニ、「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

手習サス。

周旋サス。

賣買サス。

六「、、セラル」トイフベキ場合ニ、「、、サル」ト用キル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

罪サル。

評サル。

解釋サル。

七「得シム」トイフベキ場合ニ、「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク、各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八　佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ、「暮シシ時」「過シシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陷落マデ、僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九　てにをはノ「ノ」ハ、動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例

花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

一〇　疑ノてにをはノ「ヤ」ハ、動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例

有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

一一　てにをはノ「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞、及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラルヽトモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

一二　てにをはノ「ト」ノ、動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例

月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラルヽト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ。

一三 語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ、誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ、最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例

月ト花。

宗敎ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳ヲ讀ムベシ。

一四 上ニ疑ノ語アルトキニ、下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例

誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五 てにをはノ「モ」ハ、誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ、「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ。

例

何事ノ事由アルモ（アリトモ）、議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ（タレドモ）、準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ（シカドモ）、昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ附スルモ（スルトモ　スレドモ）、之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ（クトモ　ケレドモ）、應募者ハ多カルベシ。

一六　「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

イハユル哺乳獸ナルモノ。

顏回ナルモノアリ。

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラルヽモノハ德川時代國學者ノ研究ニ基キテ專ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニノミ依リテ今日ノ普通文ヲ律センハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズコレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノナシトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ擧ゲ之ヲ許容シテ在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ依テ自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス。

動詞活用表〔第一表〕

口語

種類	四段										上一段									下一段									カ變		サ變
行名	カ	ガ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ラ	ヤ	ワ	カ	ガ	ザ	タ	ダ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ラ	ヤ	ワ
例語	聞く	騒ぐ	貸す	打つ	死ぬ	問ふ	飛ぶ	踏む	乗る	有る	着る	生きる	過ぎる	落ちる	恥ぢる	煮る	干る	見る	射る	居る	得る	来る	植ゑる	流れる	越える	染める	述べる	教へる	連れる	出でる	捨てる	交ぜる	失せる	投げる	受ける
語幹／語尾	キ	カ	サ	ウ	シ	ト	フ	ノ	ル	ア	（着）	イ	ス	オ	ヂ	（煮）	シ	（見）	（射）	（居）	（得）	（来）	ナガ	コ	ル	ソ	ル	ラン	ツラ	デ	ス	マ	ウ	ケ
未然	か	が	さ	た	な	は	ば	ま	ら	ら	き	き	ぎ	ち	ぢ	に	ひ	み	い	ゐ	え	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け
連用	き	ぎ	し	ち	に	ひ	び	み	り	り	き	き	ぎ	ち	ぢ	に	ひ	み	い	ゐ	え	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け
終止	く	ぐ	す	つ	ぬ	ふ	ぶ	む	る	る	きる	きる	ぎる	ちる	ぢる	にる	ひる	みる	いる	ゐる	える	くる	ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける
連體	く	ぐ	す	つ	ぬ	ふ	ぶ	む	る	る	きる	きる	ぎる	ちる	ぢる	にる	ひる	みる	いる	ゐる	える	くる	ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける
假定	け	げ	せ	て	ね	へ	べ	め	れ	れ	きれ	きれ	ぎれ	ちれ	ぢれ	にれ	ひれ	みれ	いれ	ゐれ	えれ	くれ	ゑれ	れれ	えれ	めれ	べれ	へれ	ねれ	でれ	てれ	ぜれ	せれ	げれ	けれ
命令	け	げ	せ	て	ね	へ	べ	め	れ	れ	きよ（ろ）	きよ（ろ）	ぎよ（ろ）	ちよ（ろ）	ぢよ（ろ）	にろ（よ）	ひよ（ろ）	みよ（ろ）	いよ（ろ）	ゐよ（ろ）	えよ（ろ）	こい	ゑよ（ろ）	れよ（ろ）	えよ（ろ）	めよ（ろ）	べよ（ろ）	へよ（ろ）	ねよ（ろ）	でよ（ろ）	てよ（ろ）	ぜよ（ろ）	せよ（ろ）	げよ（ろ）	けよ（ろ）
語幹／語尾	キ	カ	サ	ウ	シ	ト	フ	ノ	ル	ア	（着）	イ	ス	オ	ヂ	（煮）	シ	（見）	（射）	（居）	（得）	（来）	ナガ	コ	ル	ソ	ル	ラン	ツラ	デ	ス	マ	ウ	ク
未然	か	が	さ	た	な	は	ば	ま	ら	ら	き	き	ぎ	ち	ぢ	に	ひ	み	い	ゐ	え	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け
連用	き	ぎ	し	ち	に	ひ	び	み	り	り	き	き	ぎ	ち	ぢ	に	ひ	み	い	ゐ	え	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け
終止	く	ぐ	す	つ	ぬ	ふ	ぶ	む	る	る	きる	きる	ぎる	ちる	ぢる	にる	ひる	みる	いる	ゐる	える	くる	ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける
連體	く	ぐ	す	つ	ぬ	ふ	ぶ	む	る	る	きる	きる	ぎる	ちる	ぢる	にる	ひる	みる	いる	ゐる	える	くる	ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける
假定	け	げ	せ	て	ね	へ	べ	め	れ	れ	きれ	きれ	ぎれ	ちれ	ぢれ	にれ	ひれ	みれ	いれ	ゐれ	えれ	くれ	ゑれ	れれ	えれ	めれ	べれ	へれ	ねれ	でれ	てれ	ぜれ	せれ	げれ	けれ
命令	け	げ	せ	て	ね	へ	べ	め	れ	れ	きよ（ろ）	きよ（ろ）	ぎよ（ろ）	ちよ（ろ）	ぢよ（ろ）	によ（ろ）	ひよ（ろ）	みよ（ろ）	いよ（ろ）	ゐよ（ろ）	えよ（ろ）	こい	ゑよ（ろ）	れよ（ろ）	えよ（ろ）	めよ（ろ）	べよ（ろ）	へよ（ろ）	ねよ（ろ）	でよ（ろ）	てよ（ろ）	ぜよ（ろ）	せよ（ろ）	げよ（ろ）	けよ（ろ）

文語

種類	四段									上一段									下一段									カ變		サ變
行名	カ	ガ	サ	タ	ハ	バ	マ	ラ	ワ	カ	ガ	ザ	タ	ダ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	カ	ラ變	ナ變	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ラ	ヤ	ワ
例語	聞く	騒ぐ	貸す	打つ	問ふ	飛ぶ	踏む	乗る	有り	着る	生きる	過ぎる	落ちる	恥ぢる	煮る	干る	見る	射る	居る	得う	来く	植う	流る	越ゆ	染む	述ぶ	教ふ	連ぬ	出づ	捨つ	交ず	失す	投ぐ	受く
語幹／語尾	キ	カ	サ	ウ	ト	フ	ノ	ル	ア	（着）	イ	ス	オ	ヂ	（煮）	シ	（見）	（射）	（居）	（得）	（来）	ナガ	コ	ル	ソ	ル	ラン	ツラ	デ	ス	マ	ウ	ク
未然	か	が	さ	た	は	ば	ま	ら	ら	き	き	ぎ	ち	ぢ	に	ひ	み	い	ゐ	え	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け
連用	き	ぎ	し	ち	ひ	び	み	り	り	き	き	ぎ	ち	ぢ	に	ひ	み	い	ゐ	え	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け
終止	く	ぐ	す	つ	ふ	ぶ	む	る	り	きる	きる	ぎる	ちる	ぢる	にる	ひる	みる	いる	ゐる	える	くる	ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける
連體	く	ぐ	す	つ	ふ	ぶ	む	る	る	きる	きる	ぎる	ちる	ぢる	にる	ひる	みる	いる	ゐる	える	くる	ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける
已然	け	げ	せ	て	へ	べ	め	れ	れ	きれ	きれ	ぎれ	ちれ	ぢれ	にれ	ひれ	みれ	いれ	ゐれ	えれ	くれ	ゑれ	れれ	えれ	めれ	べれ	へれ	ねれ	でれ	てれ	ぜれ	せれ	げれ	けれ
命令	け	げ	せ	て	へ	べ	め	れ	れ	きよ	きよ	ぎよ	ちよ	ぢよ	によ	ひよ	みよ	いよ	ゐよ	えよ	こよ	ゑよ	れよ	えよ	めよ	べよ	へよ	ねよ	でよ	てよ	ぜよ	せよ	げよ	けよ

〔第一表〕

動詞活用表

口語

種類	四段										上一段		上一段		一段						下一段		下一段										カ變	サ變
行名	カ	ガ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ラ	バ	ワ	カ	ナ	ダ	タ	ザ	ガ	カ	ナ	バ	マ	ヤ	ラ	ア	カ	サ	ザ	タ	ダ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ	ワ	ワ
例語	聞く	騒ぐ	貸す	打つ	死ぬ	問ふ	飛ぶ	踏むる	乗るる	有るる	蹴る	煮る	恥ぢる	落ちる	案じる	過ぎる	生きる	着る	干る	見る	射る	居る	得る	植ゑる	交ぜる	失せる	捨てる	出づる	連ねる	教へる	越ゆる	染むる	述べる	流るる	受ける	投げる	来る	爲る
語幹／語尾	キ／ク	ガ／ス	サ／シ	タ／ト	ナ／ン	ハ／フ	マ／ム	ラ／ル	バ／ブ	ワ／ウ	（着）／キ	（煮）／ニ	恥／ヂ	落／チ	案／ジ	過／ギ	生／キ	（着）／キ	（干）／ヒ	（見）／ミ	（射）／イ	居／ヰ	（得）／エ	植／ウ	交／ゼ	失／セ	捨／テ	（出）／デ	連／ネ	教／ヘ	越／エ	染／メ	述／ベ	流／ナガ	受／ケ	投／ゲ	（来）／コ	（爲）／セ
未然	か	が	さ	た	な	は	ば	ま	ら	ら	け	に	ぢ	ち	じ	ぎ	き	き	ひ	み	い	ゐ	え	ゑ	ぜ	せ	て	で	ね	へ	え	め	べ	れ	げ	け	こ	し
連用	き	ぎ	し	ち	に	ひ	び	み	り	り	け	に	ぢ	ち	じ	ぎ	き	き	ひ	み	い	ゐ	え	ゑ	ぜ	せ	て	で	ね	へ	え	め	べ	れ	げ	け	き	し
終止	く	ぐ	す	つ	ぬ	ふ	ぶ	むる	るる	るる	ける	にる	ぢる	ちる	じる	ぎる	きる	きる	ひる	みる	いる	ゐる	える	ゑる	ぜる	せる	てる	でる	ねる	へる	える	める	べる	れる	げる	ける	くる	する
連體	く	ぐ	す	つ	ぬ	ふ	ぶ	むる	るる	るる	ける	にる	ぢる	ちる	じる	ぎる	きる	きる	ひる	みる	いる	ゐる	える	ゑる	ぜる	せる	てる	でる	ねる	へる	える	める	べる	れる	げる	ける	くる	する
假定	け	げ	せ	て	ね	へ	べ	め	れ	れ	けれ	にれ	ぢれ	ちれ	じれ	ぎれ	きれ	きれ	ひれ	みれ	いれ	ゐれ	えれ	ゑれ	ぜれ	せれ	てれ	でれ	ねれ	へれ	えれ	めれ	べれ	れれ	げれ	けれ	くれ	すれ
命令	け	げ	せ	て	ね	へ	べ	め	れ	れ	けよ（ろ）	によ（ろ）	ぢよ（ろ）	ちよ（ろ）	じよ（ろ）	ぎよ（ろ）	きよ（ろ）	きよ（ろ）	ひよ（ろ）	みよ（ろ）	いよ（ろ）	ゐよ（ろ）	えよ（ろ）	ゑよ（ろ）	ぜよ（ろ）	せよ（ろ）	てよ（ろ）	でよ（ろ）	ねよ（ろ）	へよ（ろ）	えよ（ろ）	めよ（ろ）	べよ（ろ）	れよ（ろ）	げよ（ろ）	けよ（ろ）	こい	しろ／せよ

文語

種類	四段									上一段		上一段		二段								下二段		下二段										カ變	サ變
行名	カ	ガ	サ	タ	ハ	バ	マ	ラ	ナ	カ	ワ	カ	ヤ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ダ	タ	ガ	カ	ア	カ	サ	ザ	タ	ダ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ	ワ	ワ
例語	聞く	騒ぐ	貸す	打つ	問ふ	飛ぶ	踏むる	乗るる	死ぬる	着る	蹴る	着る	射る	居る	射る	見る	干る	煮る	過ぎる	落ちる	恥づる	強ひる	延びる	生きる	悔いる	懲りる	得る	植うる	交ずる	失する	捨つる	出づる	連ぬる	教ふる	越ゆる	染むる	述ぶる	流るる	受くる	投ぐる	来る	爲る
語幹／語尾	キ／ク	ガ／ス	サ／シ	タ／ト	ハ／フ	バ／ブ	マ／ム	ラ／ル	ナ／ヌ	（着）／キ	（蹴）／ケ	（着）／キ	射／イ	（居）／ヰ	（射）／イ	（見）／ミ	（干）／ヒ	（煮）／ニ	過／ギ	落／チ	恥／ヂ	強／シ	延／ビ	生／キ	悔／ク	懲／コリ	得／エ	植／ウ	交／ゼ	失／セ	捨／テ	出／イヅ	連／ヌ	教／フ	越／エ	染／メ	述／ブ	流／ナガ	受／ク	投／グ	（来）／コ	（爲）／セ
未然	か	が	さ	た	は	ば	ま	ら	な	け	ら	け	ゑ	ゐ	い	み	ひ	に	ぎ	ち	ぢ	し	び	き	く	こ	え	ゑ	ぜ	せ	て	で	ぬ	へ	え	め	べ	れ	げ	け	こ	せ
連用	き	ぎ	し	ち	ひ	び	み	り	に	け	り	け	ゑ	ゐ	い	み	ひ	に	ぎ	ち	ぢ	し	び	き	く	こ	え	ゑ	ぜ	せ	て	で	ぬ	へ	え	め	べ	れ	げ	け	き	し
終止	く	ぐ	す	つ	ふ	ぶ	むる	るる	ぬる	ける	り	ける	ゑる	ゐる	いる	みる	ひる	にる	ぎる	ちる	ぢる	しる	びる	きる	くる	こる	える	ゑる	ぜる	せる	てる	でる	ぬる	へる	える	める	べる	れる	げる	ける	くる	する
連體	く	ぐ	す	つ	ふ	ぶ	むる	るる	ぬる	ける	る	ける	ゑる	ゐる	いる	みる	ひる	にる	ぎる	ちる	ぢる	しる	びる	きる	くる	こる	える	ゑる	ぜる	せる	てる	でる	ぬる	へる	える	める	べる	れる	げる	ける	くる	する
已然	け	げ	せ	て	へ	べ	め	れ	ぬれ	けれ	れ	けれ	ゑれ	ゐれ	いれ	みれ	ひれ	にれ	ぎれ	ちれ	ぢれ	しれ	びれ	きれ	くれ	これ	えれ	ゑれ	ぜれ	せれ	てれ	でれ	ぬれ	へれ	えれ	めれ	べれ	れれ	げれ	けれ	くれ	すれ
命令	け	げ	せ	て	へ	べ	め	れ	ね	けよ	れ	けよ	ゑよ	ゐよ	いよ	みよ	ひよ	によ	ぎよ	ちよ	ぢよ	しよ	びよ	きよ	くよ	こよ	えよ	ゑよ	ぜよ	せよ	てよ	でよ	ぬよ	へよ	えよ	めよ	べよ	れよ	げよ	けよ	こよ	せよ

形容詞活用表

口語	種類	例語	語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
	（ク活用）	高い	高（タカ）し		く	い	い	けれ	
	（シク活用）	新しい	新（アタラ）し						

文語	種類	例語	語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
	ク活用	高し	高（タカ）し	く	く	し	き	けれ	
	シク活用	新し	新（アタラ）し	しく	しく	し	しき	しけれ	

形容動詞活用表

口語	種類	語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
	第一種	高（タカ）し	から（ウ）	かつ（タ）				
	第一種	新（アタラ）し	から（ウ）	かつ（タ）				
	第二種	静か	だら（ウ）	だつ（タ）	だ	な	なら（バ）	
	第二種	丁寧	だら（ウ）	だつ（タ）	だ	な	なら（バ）	

文語	種類	語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
	第一種	高（タカ）し	から	かり	（かり）	（かる）	（かれ）	かれ
	第一種	新（アタラ）し	から	かり	（かり）	（かる）	（かれ）	かれ
	第二種	静か	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
	第二種	丁寧	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
	第三種	堂々	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
	第三種	判然	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

〔第三表〕

助動詞活用表

口語

種類	語	未然	連用	終止	連體	假定	命令	接續
受身	語	れる	れる	れる	れる	れれ	れよ	未然（四段） 未然（右以外）
		られる	られる	られる	られる	られれ	られよ られろ	
可能	語	れる	れる	れる	れる	れれ		受身のレル、ラレルに同じ
		られる	られる	られる	られる	られれ		
使役	語	せる	せる	せる	せる	せれ	せよ せろ	未然（四段） 未然（右以外）
		させる	させる	させる	させる	させれ	させよ させろ	
打消	語	ない		ない	ない	なけれ		未然 未然
		ぬ		ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね		
		ず		ず	ず	ざれ		
		なく		なく	なく	なけれ		
過去及び完了	過去		た	た	た	たら		連用
	完了		たら	たり	たる	たれ		

文語

種類	語	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身	語	る	れ	る	るる	るれ	れよ	未然（四段ナ變ラ變） 未然（右以外）
		らる	られ	らる	らるる	らるれ	られよ	
可能	語	る	れ	る	るる	るれ		受身のル、ラルに同じ
		らる	られ	らる	らるる	らるれ		
使役	語	す	せ	す	する	すれ	せよ	未然（四段ナ變ラ變） 未然（右以外）
		さす	させ	さす	さする	さすれ	させよ	
		しむ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ	
打消	語	ず	ず	ず	ぬ	ね		未然 未然
		ざり	ざり	ざり	ざる	ざれ		
過去及び完了	過去	き		き	し	しか		連用 連用
	完了	ぬ	に	ぬ	ぬる	ぬれ	（ね）	連用 連用
		つ	て	つ	つる	つれ	（てよ）	
		たり	たり	たり	たる	たれ	（たれ）	已然（四段） 連用
		（り）	（り）	（り）	る	（れ）	（れ）	未然（サ變） 未然
推量	終止	らし		らし	（らし）	（らし）		終止（ラ變は體）
	未然（四段）	む(ん)		む(ん)	む(ん)	め		未然 未然
	未然（右以外）	む(ん)ず		むんやろ	むんすれ			未然 未然
	終止（四段）	らむ(らん)		らむ(らん)	らめ			終止（連體）（ラ變は體）
	終止（右以外）	けむ(けん)		けむ(けん)	けめ			連用 連用
	終止（四段）	べし	べく	べし	べき	べけれ		終止（ラ變は體） 終止（ラ變は連體）
	終止（右以外）	まじ	まじく	まじ	まじき	まじけれ		未然 未然
	終止（四段）	じ	じ	（じ）	（じ）	（じ）		終止（ラ變は連體） 終止（ラ變は連體）
	終止（右以外）	まし	まし	まし	まし	ましか		未然 未然
	終止（四段）	（ませ）	（ませ）	めり	めり	めれ		終止（ラ變は體） 終止（ラ變は體）
	終止（右以外）	（めり）	（めり）					
希望	語	たし	たく	たし	たき	たけれ		連用 未然
		まほし	まほしく	まほし	まほしき	まほしまれ		
敬譲	語	る	れ	る	るる	るれ	れよ	體言、用言の連體言
		らる	られ	らる	らるる	らるれ	られよ	受身、使役の助動詞に同じ
		す	せ	す	する	すれ	せよ	體言、用言の連體言
		さす	させ	さす	さする	さすれ	させよ	用言の連體又はガ・ノ
		しむ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ	
指定	語	なり	なら	なり	なる	なれ	たれ	體言、助詞ノ體言、助詞ノ形容詞連體形
		たり	たら	たり	たる	たれ	たれ	
		ごとし	ごとく	ごとし	ごとき			

○口語の「ない」「たい」「らしい」は、第一種形容動詞と同じ活用をする事が出來る。

○文語の「べし」「まじ」「たし」「まほし」は、第一種形容動詞と同じ活用をする事が出來る。

〔第一表〕

動詞活用表

口語

種類	四段										上一段		上一段		一段						下一段		下一段										カ變	サ變
行名	カ	ガ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ラ	バ	ワ	カ	ナ	ダ	タ	ザ	ガ	カ	ナ	バ	マ	ヤ	ラ	ア	カ	サ	ザ	タ	ダ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ	ワ	ワ
例語	聞く	騒ぐ	貸す	打つ	死ぬ	問ふ	飛ぶ	踏むる	乗るる	有るる	蹴る	煮る	恥ぢる	落ちる	案じる	過ぎる	生きる	着る	干る	見る	射る	居る	得る	植ゑる	交ぜる	失せる	捨てる	出づる	連ねる	教へる	越ゆる	染むる	述べる	流るる	受ける	投げる	来る	爲る
語幹／語尾	キ／ク	ガ／ス	サ／シ	タ／ト	ナ／ン	ハ／フ	マ／ム	ラ／ル	バ／ブ	ワ／ウ	（着）／キ	（煮）／ニ	恥／ヂ	落／チ	案／ジ	過／ギ	生／キ	（着）／キ	（干）／ヒ	（見）／ミ	（射）／イ	居／ヰ	（得）／エ	植／ウ	交／ゼ	失／セ	捨／テ	（出）／デ	連／ネ	教／ヘ	越／エ	染／メ	述／ベ	流／ナガ	受／ケ	投／ゲ	（来）／コ	（爲）／セ
未然	か	が	さ	た	な	は	ば	ま	ら	ら	け	に	ぢ	ち	じ	ぎ	き	き	ひ	み	い	ゐ	え	ゑ	ぜ	せ	て	で	ね	へ	え	め	べ	れ	げ	け	こ	し
連用	き	ぎ	し	ち	に	ひ	び	み	り	り	け	に	ぢ	ち	じ	ぎ	き	き	ひ	み	い	ゐ	え	ゑ	ぜ	せ	て	で	ね	へ	え	め	べ	れ	げ	け	き	し
終止	く	ぐ	す	つ	ぬ	ふ	ぶ	むる	るる	るる	ける	にる	ぢる	ちる	じる	ぎる	きる	きる	ひる	みる	いる	ゐる	える	ゑる	ぜる	せる	てる	でる	ねる	へる	える	める	べる	れる	げる	ける	くる	する
連體	く	ぐ	す	つ	ぬ	ふ	ぶ	むる	るる	るる	ける	にる	ぢる	ちる	じる	ぎる	きる	きる	ひる	みる	いる	ゐる	える	ゑる	ぜる	せる	てる	でる	ねる	へる	える	める	べる	れる	げる	ける	くる	する
假定	け	げ	せ	て	ね	へ	べ	め	れ	れ	けれ	にれ	ぢれ	ちれ	じれ	ぎれ	きれ	きれ	ひれ	みれ	いれ	ゐれ	えれ	ゑれ	ぜれ	せれ	てれ	でれ	ねれ	へれ	えれ	めれ	べれ	れれ	げれ	けれ	くれ	すれ
命令	け	げ	せ	て	ね	へ	べ	め	れ	れ	けよ（ろ）	によ（ろ）	ぢよ（ろ）	ちよ（ろ）	じよ（ろ）	ぎよ（ろ）	きよ（ろ）	きよ（ろ）	ひよ（ろ）	みよ（ろ）	いよ（ろ）	ゐよ（ろ）	えよ（ろ）	ゑよ（ろ）	ぜよ（ろ）	せよ（ろ）	てよ（ろ）	でよ（ろ）	ねよ（ろ）	へよ（ろ）	えよ（ろ）	めよ（ろ）	べよ（ろ）	れよ（ろ）	げよ（ろ）	けよ（ろ）	こい	しろ／せよ

文語

種類	四段									上一段		上一段		二段								下二段		下二段										カ變	サ變
行名	カ	ガ	サ	タ	ハ	バ	マ	ラ	ナ	カ	ワ	カ	ヤ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ダ	タ	ガ	カ	ア	カ	サ	ザ	タ	ダ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ	ワ	ワ
例語	聞く	騒ぐ	貸す	打つ	問ふ	飛ぶ	踏むる	乗るる	死ぬる	着る	蹴る	着る	射る	居る	射る	見る	干る	煮る	過ぎる	落ちる	恥づる	強ひる	延びる	生きる	悔いる	懲りる	得る	植うる	交ずる	失する	捨つる	出づる	連ぬる	教ふる	越ゆる	染むる	述ぶる	流るる	受くる	投ぐる	来る	爲る
語幹／語尾	キ／ク	ガ／ス	サ／シ	タ／ト	ハ／フ	バ／ブ	マ／ム	ラ／ル	ナ／ヌ	（着）／キ	（蹴）／ケ	（着）／キ	射／イ	（居）／ヰ	（射）／イ	（見）／ミ	（干）／ヒ	（煮）／ニ	過／ギ	落／チ	恥／ヂ	強／シ	延／ビ	生／キ	悔／ク	懲／コリ	得／エ	植／ウ	交／ゼ	失／セ	捨／テ	出／イヅ	連／ヌ	教／フ	越／エ	染／メ	述／ブ	流／ナガ	受／ク	投／グ	（来）／コ	（爲）／セ
未然	か	が	さ	た	は	ば	ま	ら	な	け	ら	け	ゑ	ゐ	い	み	ひ	に	ぎ	ち	ぢ	し	び	き	く	こ	え	ゑ	ぜ	せ	て	で	ぬ	へ	え	め	べ	れ	げ	け	こ	せ
連用	き	ぎ	し	ち	ひ	び	み	り	に	け	り	け	ゑ	ゐ	い	み	ひ	に	ぎ	ち	ぢ	し	び	き	く	こ	え	ゑ	ぜ	せ	て	で	ぬ	へ	え	め	べ	れ	げ	け	き	し
終止	く	ぐ	す	つ	ふ	ぶ	むる	るる	ぬる	ける	り	ける	ゑる	ゐる	いる	みる	ひる	にる	ぎる	ちる	ぢる	しる	びる	きる	くる	こる	える	ゑる	ぜる	せる	てる	でる	ぬる	へる	える	める	べる	れる	げる	ける	くる	する
連體	く	ぐ	す	つ	ふ	ぶ	むる	るる	ぬる	ける	る	ける	ゑる	ゐる	いる	みる	ひる	にる	ぎる	ちる	ぢる	しる	びる	きる	くる	こる	える	ゑる	ぜる	せる	てる	でる	ぬる	へる	える	める	べる	れる	げる	ける	くる	する
已然	け	げ	せ	て	へ	べ	め	れ	ぬれ	けれ	れ	けれ	ゑれ	ゐれ	いれ	みれ	ひれ	にれ	ぎれ	ちれ	ぢれ	しれ	びれ	きれ	くれ	これ	えれ	ゑれ	ぜれ	せれ	てれ	でれ	ぬれ	へれ	えれ	めれ	べれ	れれ	げれ	けれ	くれ	すれ
命令	け	げ	せ	て	へ	べ	め	れ	ね	けよ	れ	けよ	ゑよ	ゐよ	いよ	みよ	ひよ	によ	ぎよ	ちよ	ぢよ	しよ	びよ	きよ	くよ	こよ	えよ	ゑよ	ぜよ	せよ	てよ	でよ	ぬよ	へよ	えよ	めよ	べよ	れよ	げよ	けよ	こよ	せよ

形容詞活用表

口語	種類	例語	語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
	（ク活用）	高い	高（タカ）し		く	い	い	けれ	
	（シク活用）	新しい	新（アタラ）し						

文語	種類	例語	語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
	ク活用	高し	高（タカ）し	く	く	し	き	けれ	
	シク活用	新し	新（アタラ）し	しく	しく	し	しき	しけれ	

形容動詞活用表

口語	種類	語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
	第一種	高（タカ）し	から（ウ）	かつ（タ）				
	第一種	新（アタラ）し	から（ウ）	かつ（タ）				
	第二種	静か	だら（ウ）	だつ（タ）	だ	な	なら（バ）	
	第二種	丁寧	だら（ウ）	だつ（タ）	だ	な	なら（バ）	

文語	種類	語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
	第一種	高（タカ）し	から	かり	（かり）	（かる）	（かれ）	かれ
	第一種	新（アタラ）し	から	かり	（かり）	（かる）	（かれ）	かれ
	第二種	静か	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
	第二種	丁寧	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
	第三種	堂々	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
	第三種	判然	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

〔第三表〕

助動詞活用表

口語

種類	語	未然	連用	終止	連體	假定	命令	接續
受身	語	れる	れる	れる	れる	れれ	れよ	未然（四段） 未然（右以外）
		られる	られる	られる	られる	られれ	られよ られろ	
可能	語	れる	れる	れる	れる	れれ		受身のレル、ラレルに同じ
		られる	られる	られる	られる	られれ		
使役	語	せる	せる	せる	せる	せれ	せよ せろ	未然（四段） 未然（右以外）
		させる	させる	させる	させる	させれ	させよ させろ	
打消	語	ない		ない	ない	なけれ		未然 未然
		ぬ		ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね		
		ず		ず	ず	ざれ		
		なく		なく	なく	なけれ		
過去及び完了	過去		た	た	た	たら		連用
	完了		たら	たり	たる	たれ		

文語

種類	語	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身	語	る	れ	る	るる	るれ	れよ	未然（四段ナ變ラ變） 未然（右以外）
		らる	られ	らる	らるる	らるれ	られよ	
可能	語	る	れ	る	るる	るれ		受身のル、ラルに同じ
		らる	られ	らる	らるる	らるれ		
使役	語	す	せ	す	する	すれ	せよ	未然（四段ナ變ラ變） 未然（右以外）
		さす	させ	さす	さする	さすれ	させよ	
		しむ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ	
打消	語	ず	ず	ず	ぬ	ね		未然 未然
		ざり	ざり	ざり	ざる	ざれ		
過去及び完了	過去	き		き	し	しか		連用 連用
	完了	ぬ	に	ぬ	ぬる	ぬれ	（ね）	連用 連用
		つ	て	つ	つる	つれ	（てよ）	
		たり	たり	たり	たる	たれ	（たれ）	已然（四段） 連用
		（り）	（り）	（り）	る	（れ）	（れ）	未然（サ變） 未然
推量	終止	らし		らし	（らし）	（らし）		終止（ラ變は體）
	未然（四段）	む(ん)		む(ん)	む(ん)	め		未然 未然
	未然（右以外）	む(ん)ず		むんやろ	むんすれ			未然 未然
	終止（四段）	らむ(らん)		らむ(らん)	らめ			終止（連體）（ラ變は體）
	終止（右以外）	けむ(けん)		けむ(けん)	けめ			連用 連用
	終止（四段）	べし	べく	べし	べき	べけれ		終止（ラ變は體） 終止（ラ變は連體）
	終止（右以外）	まじ	まじく	まじ	まじき	まじけれ		未然 未然
	終止（四段）	じ	じ	（じ）	（じ）	（じ）		終止（ラ變は連體） 終止（ラ變は連體）
	終止（右以外）	まし	まし	まし	まし	ましか		未然 未然
	終止（四段）	（ませ）	（ませ）	めり	めり	めれ		終止（ラ變は體） 終止（ラ變は體）
	終止（右以外）	（めり）	（めり）					
希望	語	たし	たく	たし	たき	たけれ		連用 未然
		まほし	まほしく	まほし	まほしき	まほしまれ		
敬譲	語	る	れ	る	るる	るれ	れよ	體言、用言の連體言
		らる	られ	らる	らるる	らるれ	られよ	受身、使役の助動詞に同じ
		す	せ	す	する	すれ	せよ	體言、用言の連體言
		さす	させ	さす	さする	さすれ	させよ	用言の連體又はガ・ノ
		しむ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ	
指定	語	なり	なら	なり	なる	なれ	たれ	體言、助詞ノ體言、助詞ノ形容詞連體形
		たり	たら	たり	たる	たれ	たれ	
		ごとし	ごとく	ごとし	ごとき			

○口語の「ない」「たい」「らしい」は、第一種形容動詞と同じ活用をする事が出來る。

○文語の「べし」「まじ」「たし」「まほし」は、第一種形容動詞と同じ活用をする事が出來る。

〔第四表〕

口語助動詞接續表

| 動詞に | | |

文語助動詞接續表

動詞	動詞以外に
未然形に	連用形に	終止形に	連體形に	已然形に	形容詞連體形に 體言に 助詞ノ・ガに
(受身) る(四段ナ變ラ變に) らる(右以外に)					
(可能) る(四段ナ變ラ變に) らる(右以外に)					
(使役) す(四段ナ變ラ變に) さす(右以外に) しむ					
(消) ず ざり					
過去及び完了 〔完了〕 り(サ變に)				〔完了〕 り(四段に)	
〔過去〕 き けり 〔完了〕 つ ぬ たり(音便形にも)					
(推量) む(ん) むず(んず) じ まし	(推量) けむ(けん)	(推量) らし(ラ變以外に) らむ(らん)(ラ變以外に) べし(ラ變以外に) まじ(ラ變以外に) めり(ラ變以外に)	らし(ラ變に) らむ(らん)(ラ變に) べし(ラ變に) まじ(ラ變に) めり(ラ變に)		
(希望) まほし	(希望) たし				
	(比況) ごとし				(定指) なり (定指) たり (比況) ごとし

○(敬譲)の**る、らる**は(可能)のに同じく、又(敬譲)の**す、さす、しむ**は(使役)のに同じ。

○**き**はカ變には「**こし**」「**こしか**」又は「**きし**」「**きしか**」と連る。サ變には「**しき**」「**せし**」「**せしか**」と連る。

〔第五表〕

口語助詞接續表

體言に	用言に				
	未然形に	連用形に	終止形に	連體形に	假定形に
（第一種） が の を に へ と から より で					
		（第二種） て（サ行以外の四段は音便形に） ても（同前） たり（同前） ながら（動詞に）	（第二種） と けれど（も） が のに から し ながら（形容詞に）	（第二種） のて のに	（第二種） ば
			（第三種） な	（第三種） の	

文語助詞接續表

體言に	用言に				
	未然形に	連用形に	終止形に	連體形に	已然形に
（第一種） が の を に へ と より にて				（第一種） が の を に と より にて	
	（第二種） ば て	（第二種） て（音便形にも） つつ とも（形容詞に）	（第二種） とも（動詞に）	（第二種） が に を	（第二種） ば ど ども
	（第三種） な—そ（カ變サ變に）	（第三種） な—そ（カ變サ變以外に）	（第三種） な（ラ變以外に） や	（第三種） な（ラ變に） かな（形容詞は音便形にも）	
	ばや なむ（なん）			か ぞ よ	

昭和十四年八月二十五日印刷
昭和十四年八月二十八日發行

改制新文典別記 文語篇

定價參圓五拾錢

著者 橋本進吉

發行者 合資會社 富山房
東京市神田區神保町一丁目三番地

代表者 坂本守正

印刷所 合資會社 秀英社
東京市神田區小川町二丁目十二番地

發行所 合資會社 富山房
東京市神田區神保町一丁目三番地
電話神田二一七一―二一七八番
振替貯金口座東京五〇一番

昭和十四年八月二十五日印刷
昭和十四年八月二十八日發行

改制新文典別記　文語篇

定價參圓五拾錢

著者　橋本進吉

發行者　合資會社　冨山房
東京市神田區神保町一丁目三番地

代表者　坂本守正

印刷所　合資會社　秀英社
東京市神田區小川町二丁目十二番地

發行所　合資會社　冨山房
東京市神田區神保町一丁目三番地
電話神田二一七一・二一七八番
振替貯金口座東京五〇一番